ハイスクール全裸　2

ａｎｕｒｉｔｏ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
ハイスクール全裸　２

【Ｎコード】
Ｎ９１７２ＨＥ

【作者名】
ａｎｕｒｉｔｏ

【あらすじ】
いろいろなシチュエーションで、
普通の女子高生が、校舎やあちこちでヌードを披露しちゃいます。
（男子生徒が脱がされちゃう話も混ざっています）

これまで公開してきた「ハイスクール全裸」シリーズが、
予定以上に、あまりに作品数が増え過ぎましたので、
仕切り直して、新ネタは、こちらで掲載する事にしました。
マンネリにつき、

過去の作品と類似したアイディアや設定の話も多いのですが、
その点は、温かい目で、スルーしてください。

各エピソードは1話完結であり、
全て、別の世界のお話だと考えていただければ、幸いです。
爽やかなエピソードもあれば、陰湿な内容のものもあります。
その点は、あらかじめ、ご留意ください。

「いいね」を押してもらえましたら、
そのネタと同傾向の新作も、今後、書くかもしれません。

女子たちのカレンダー

「高校生になった事だし、記念で、うちのクラスだけの特製カレンダーを作ろう！」と、クラスの女子たちが盛り上がって、言い始めた。全く、女子という生き物は、やたらとイベントが好きなのである。

彼女たちに勝手に任せておくと、やがて、うちのクラスだけの特別カレンダーとやらが完成した。そして、その制作に関わらなかったクラスメートたちも集まって、その完成品を見せてもらったのである。

そのカレンダーは、Ｂ３サイズの、なかなかの本格的な仕上がりだった。１２枚綴りで、一枚ずつにひと月分のカレンダーが振り当てられているのだ。各ページの下の部分が、その月のカレンダーになっており、上の半分以上のスペースは、主だった女子たちが写ったポスターとなっていた。それぞれのページを一人の女子が担当していて、すっかり、グラビアモデルかアイドル気取りで、嬉しそうにポーズをとって、写っているのである。

やれやれ。思った通りの、女子たちの自己満足な内容なのだ。それでも、彼女たちは、これを見て、クラスの皆も、可愛いと感想を抱いて、喜んでくれると思っているらしい。

高校の制服姿ではバラエティさに欠けると考えたのか、女子たちは、皆、普段着だったり、コスプレしたりして、カレンダーには写っていた。よそ行きのドレスをまとったり、人気アニメのヒロインに似せた服を着たりしているのだが、それでも、モデルが知ってる子だから、さほど見映えはしないのである。

しかし、カレンダーをめくっていき、２月になった時、クラスの皆は、そのページの写真には、思わず見入ってしまったのだった。

なんと、２月担当の女子はオールヌードだったのである。本当に

服をいっさい身につけずに、写真に写っていたのだ。さすがに、乳首とか陰毛などのピンポイントは、写真を加工して、上から星型やハートマークなどを貼り付けて、見えないように隠していた。でも、それ以外の乳房の膨らみや鼠蹊部などは丸出しの状態で写っていて、撮影時は、この女子が確実に裸だったのが分かるのであった。

　このカレンダーには、他にも、ビキニ姿やレオタード姿の女子とかも載っていたのだが、やはり、オールヌードのインパクトには敵わないのだ。恐らくは、発想の転換のつもりで、2月の女子だけは、逆に何も着飾らない事にしたようなのだが、それにしても、思い切ったものなのである。

　裸なのに、この2月の子は明るい笑顔で写っていたものだから、よけい照れ臭く感じさせた。それに、高校生の女子のふくよかで健康的な肉体は、猥褻と言うよりも清々しく、爽やかで、いかにも青春らしくて、とっても眩しいのだ。

　あとで制作者の女子たちに話を聞くと、この2月のポスターについては、局部をマークで隠したパターン以外にも、反対に、顔だけをスマイルマークで隠して、他の部分は全てモロ出しにして、誰の裸だか分からなくした写真も、候補としては検討されていたらしい。結局は、顔見せパターンの方が採用された訳なのだが、今思えば、顔だけ隠したパターンも見てみたかったものである。

　こうして、この女子たちのカレンダーは、クラスの記念の品として、一年間ずっと、教室の壁にと掛けられる事となった。しかし、そのうちの1ページに女子の全裸写真が掲載されているのかと思うと、何とも、普段から気になる存在となってしまったのであった。そして、問題の2月がやって来て、あのヌード写真が常時、表示されるようになると、それこそ、男子たちはソワソワしてしまい、授業にもろくに集中できなくなってしまったのである。

了

風呂屋の奇策

町の風呂屋は決断にと迫られていた。このままでは、お客激減の赤字続きで、この銭湯は確実に潰れてしまうのである。一家が路頭に迷わない為には、もう、一か八かの勝負に出て、この風呂屋の環境を大改革して、離れていった入浴客をどうにか呼び戻すしかないのだ。

かくて、風呂屋が大々アピールして、新たに取り入れたサービスと言うのが「男女混浴」なのであった。

古来、日本の入浴場と言うものは、男女混浴だったのだ。古き風習をよみがえらす事によって、従来の銭湯ファンに戻って来てもらおうとの思惑なのである。

風呂屋は、男湯と女湯の間にあった壁を取っ払った。これで、この銭湯は、四六時中、男女混浴になってしまったのである。もはや、後戻りはできないのだ。

そして、風呂屋の目論見が当たって、混浴初日は、銭湯内は、見事に人で溢れかえったのだった。こんなに入浴客が来てくれたら、まさに大成功であり、笑いが止まらないのだ。

しかし、一つ、誤算があった。お客は、中年のオヤジやムラムラしてる若い男ばかりだったのである。彼らは、女性と混浴できる事だけを期待して、お風呂に入りに来てくれたのであった。

そんな訳だから、実際には、お客はむさ苦しい男性ばかりで、女の客が一人も来ていなかったと分かると、彼らのブーイングも一気に強まったのだった。まあ、そうなるのは予測できていたとは言え、それでも、彼らの不満は収まりそうにもなかったのだ。

浴場の中は、いっぺんに、殺伐とした空気に包まれた。誰もが、ちっとも楽しそうではないのである。これでは、せっかく、今日、訪れてくれた男性客も、明日からは、もう二度と、この銭湯には足

を運んでくれないだろう。それでは、この起死回生の混浴作戦も、たった1日でおしまいなのだ。

その時、この浴場内に、新たな入浴客が入って来た。それを見て、すでにいた男性客たちは、いっせいに歓声をあげて、どよめいたのだった。新しい入浴客とは、待ち望んでいた女性の入浴者だったからである。

その現われた女性は、実は、まだ高校生だった風呂屋の一人娘だった。進退きわまった父親に必死にお願いされて、仕方なく、犠牲になってくれたのである。

風呂屋の娘は、すでに服は脱いでおり、体には大きなバスタオルだけを巻いていた。まだ未成年ではあったが、彼女の肉体は十分に大人であった。

はにかんだ様子の彼女が、ゆっくりと歩き出すと、浴場にいた男たちは、さあっと横によけて、彼女のための道を開けてくれた。まるで、モーゼが海を左右に割った時みたいなのである。

そして、風呂屋の娘は、他の男性客全員の熱い視線を浴びながら、浴槽の前までたどり着くと、そこでバスタオルを取って、ポチャンと湯ぶねに浸かったのだった。

了

もう一枚！

今日は、いじめの標的（ターゲット）だったあっ子が、学校を休んだ。すると、教室の中も、実に穏やかなものなのだった。何たって、あの不快ないじめの光景も見ないで済んだからである。

しかし、時間が経つに連れて、いじめっ子側じゃない生徒たちの間では、不穏な空気が漂い始めたのだった。

どうやら、あっ子は、このまま、登校拒否に突入して、もう学校には来ないかもしれない。だが、それで、いじめっ子グループが満足するとは考えられないのだ。なぜなら、連中は、あっ子をいじめたいのではなく、素朴にいじめ行為を楽しみたいからである。あっ子がいなくなれば、きっと、新しく、誰かが標的（ターゲット）にされるはずだ。それは、もしかすると、自分かもしれないのである。

やがて、その日の放課後がやって来た。

おとなしい女生徒だったいっ子が教室から帰ろうとすると、その机の周りをいじめっ子グループがぐるりと取り囲んだ。

「ねえ、いっ子。これから、一緒に遊ぼう」と、いじめっ子のボス女子が、ニヤニヤしながら、いっ子に話し掛けてきた。

いっ子の顔からは、いっぺんに表情が消えてしまったのだった。

恐れていた事だが、次のいじめの標的（ターゲット）には、彼女が選ばれてしまったようなのである。だからと言って、この場から走って、逃げ出す事もできない。そんな事をすれば、「付き合いの悪い奴」と言う大義名分で、やはり、いじめの標的（ターゲット）にされてしまうからである。

いっ子は、やむなく、いじめっ子たちに応じる事にしたのだった。しかし、おとなしく従って、一緒に遊んだとしても、今度は、遊んでいるフリをして、いじめられる訳なのだ。こうなってしまったら、もう、いっ子に逃げ道はないのである。

いっ子が遊びに付き合うと決まった途端、いじめっ子たちは、教

室内の机をはじにどかし始めた。教室の中央に、ステージを作って、そこで、いっ子をいたぶるつもりなのである。いじめっ子以外の生徒たちも、まだ帰らずに、教室に残っていて、そのステージを囲むように群がっていた。彼女たちも、いっ子が新しいいじめの標的（ターゲット）になった事を、きちんと確認させてもらうつもりなのである。

かわいそうに、今のいっ子には逃げ場もないし、味方もいないのだ。

ステージが整って、いっ子といじめっ子のボスだけが、そのステージの真ん中に立つ事になった。

「さあ、これから、二人でジャンケンをするんだ。負けた方が、一枚ずつ、服を脱いでいくんだよ。つまり、野球拳の簡易バージョンだ」と、いじめっ子のボスが、どんな遊びをするのかを説明した。

でも、そんなルールは、あって無いようなものなのだ。いじめっ子たちは、最初から、一方的に、いっ子だけを脱がしていくつもりなのである。後出しジャンケンなどのズルをして、確実にいっ子だけを負かすカラクリなのだ。そして、実際に、そのような展開になったのであった。

いっ子は、いじめっ子たちの卑怯や意地悪を咎める事さえできなかった。いじめっ子たちは、ずる賢く、とぼけたフリを装って、いっ子の言葉は聞こうともしないのだ。場は完全にいじめっ子に仕切られており、いっ子には逆らう事すらできなかった。

こうして、気の毒ないっ子は、ジャンケンに負けるたびに、本当に服を脱ぎ始めた。彼女には、もはや、そうするしかなかったのである。

いじめっ子は、意外にも良心的に、上靴やリボンも、服の一つとして認めてくれた。おかげで、いっ子は、最初のジャンケンでは、すぐに上着を脱がないでも済んだのだった。

いや、それは、いじめっ子の優しさなどではなかったのだ。連中は、いっ子の体から、何一つ残さず、身ぐるみを剥いでしまうつもりでいたのである。だから、上靴やリボンさえも取り上げたのだ。

いっ子の脱いだ服や小物は、その場ですぐに没収された。脱いだら、さっさと、いじめっ子の一人に取り上げられて、いっ子の見ている前で遠くの方に持ち去られてしまったのだ。

いっ子の顔に、困惑の色が広がった。だって、こんな風に取られてしまったら、脱いだ後のいっ子は、すぐには、それらを身につける事ができなくなってしまうのだ。そうやって、どんどん脱がされていくと、いっ子は、脱いだ状態のままで居続けなくてはならなくなるのである。

とうとう、いっ子は、制服やスカートも脱がないといけなくなってしまった。戸惑いつつも、彼女は成り行きに従った。クラスメート全員に見られていると言うのに、いっ子は、教室の中で、一人だけ、恥ずかしい下着姿になってしまったのである。

彼女は、今にも泣きそうな顔になっていた。やたらと足をモジモジさせていたのは、恐怖で、オシッコがしたくなってきたからなのかもしれない。

だが、こんな状況になっても、いじめっ子たちは、まだ遊びを終了してはくれなかったのである。

とうとう、いっ子は下着も全て、脱ぐ事になってしまった。脱いだブラジャーとパンティは、例によって、いじめっ子たちに持っていかれてしまう。いっ子は、今や、教室のど真ん中に、素っ裸で立っているのだ。そのブザマな姿が、すっかり、クラスの全員の見世物になっているのだが、しかし、どうしようもないのである。

いっ子は、震えながら、胸と股間だけは、両手で隠していた。時々、手がずれて、外から見えてしまった乳首は、大きく、ピンと膨らんでしまっている。裸の状態が寒くて、立っちゃったのか、怖さと緊張で興奮していたからなのかは分からない。もう恥ずかしくて、彼女の顔も、耳まで真っ赤になっているのだ。

しかし、いじめっ子のボスは、それでも、いっ子に、さらなるジャンケンの勝負を強要したのである。

いっ子は、またしても、ジャンケンに負けてしまった。だけど、

彼女は、すでに下着さえも脱いでしまっているのだ。果たして、これ以上は、何を脱げと言うのだろうか。

　すると、いじめっ子のボスは、嬉々とした表情で、いっ子の下半身へグーンと手を伸ばし、いっ子のいっぱい生えたアンダーヘアをぐいっと握って、強く引っ張ったのだった。

「じゃあ、次は、これを取っちゃうよ」と、いじめっ子のボスは笑った。

　青くなったいっ子は顔を醜く歪ませて、引きつった声を漏らしたのであった。

　こうして、新しいいじめの標的（ターゲット）は、その証しとして、服を全て脱がされただけではなく、下着（パンティ）より内側にあった陰毛も剃られてしまったのである。恥丘がツルツルになった事で、より丸裸らしくなったのだ。

　ところが、いじめっ子のボスは、なおもジャンケンを続けようとしていた。こんなんなっても、いっ子はまだヤメさせてもらえないのである。ああ、次に負けたら、一体、何を脱がされてしまうのであろう？

了

まる秘テスト大作戦！

オレは、グリフィン博士が作った秘蔵の透視薬を、ついに手に入れた。

この液状の薬品を、目薬のように自分の目に垂らせば、たちまちのうちに、何でも透視できるようになるのだ。

これさえ有れば、次回からの高校の学力テストも、何ら、怖くはないのである。カンニングのし放題だ。カバンの中にしまってある教科書を透視する事もできるし、他の生徒の回答用紙をがっちり覗く事もできるのである。もはや、何もしなくても、１００点満点間違いなしなのだ。

こうして、オレは、余裕たっぷりに、次の学力テストに臨んだのだった。

ところが、いざ本番にて、全くの想定外の事態に出くわしてしまった。

この透視薬で透かす事ができたのは、机やカバンだけではなかったのだ。何でも、透かす事ができたのである。つまり、周囲の席に座っていたクラスメートの女子たちの制服まで透けさす事ができたのであった。

その嬉しい事実に、オレは、よりによって、本番のテスト時間中に気が付いてしまった。

そうなると、もうテストどころではないのである。真っ先にクラスの女子たちのヌードを見物したくなり、その欲望を抑えられなくなってしまったのだ。

何と言っても、全クラスメートの裸をいっぺんに拝む事ができるのである。それも、椅子に座った状態という、ちょっと変わったポーズの全裸なので、ますます目が向いてしまったのだ。

この時、オレの目に見えていた景色というものを、ぜひ、あなた

も想像してみてほしい。それは、実に壮大なエロチックな光景だったのである。

こうして、オレは、テストの時間は、すっかり興奮してしまい、ずっと、女の子たちの裸を眺め続けてしまった。おかげで、テストの方も、散々の結果で終わってしまったのである。

了

大事なものの潰し方（前書き）

このエピソードは、「ハイスクール全裸」収録の「キモオタ狩り」の非公認な続きとなります。

大事なものの潰し方

その男子校生徒は、電車で街を移動中、痴漢と間違えられて、女子高生（ギャル）の集団に捕まってしまった。彼は、そのまま、女子高生たちに、人気のない裏路地へと連れて行かれて、そこで、服を全部脱がされた上に、電気アンマにかけられると言う罰を受けるハメになってしまったのだ。

女子高生たちは、非情にも、本気で、電気アンマで男子生徒のキンタマを潰してしまおうと企んでいた。しかし、男の睾丸というものは、彼女たちが考えていた以上に頑丈だったのであり、革靴で踏みつけたぐらいでは、なかなか破裂はしなかったのである。

いっこうに潰れないものだから、電気アンマをしていた女子高生は、とうとう、自分の足を相手の股間から外してしまった。とは言え、真剣（ガチ）な電気アンマで受けた苦痛は相当なものだったのであり、男子生徒はすでに息も絶え絶えになっていたのだ。彼は、もう、逃げ出す気力も失っており、地べたの上に、無防備に、裸の体を仰向けにして横たえていた。仲間の女子高生たちが、いちおう、彼の手足を押さえつけていたのだが、その必要もないほど、彼の体はグッタリとしていたのである。

「ねえ。これじゃ、埒があかないわ。誰か、潰す道具でも持ってない？」と、電気アンマをしていた女子高生が、苛立ちながら、仲間に呼びかけた。

すると、別の女子高生が、自分のカバンの中から、大きなやっとこを引っ張り出したのだった。この子は、なぜ、こんなものを持ち歩いていたのだろう？今流行りのＤＩＹ女子だったのだろうか。

「いいわ！それよ、それ！」と、最初の女子高生が、喜んで、やっとこを受け取った。

男子生徒は、その様子を、薄れていた意識で、愕然としながら眺

めていた。

「そ、そんな。や、やだ。やめて、お願い」彼は、汗まみれの情けない表情で、ようやく、そう口にした。

でも、処刑される側の言葉など、聞いてもらえるはずがないのである。

女子高生は、彼の睾丸の一つを、さっそく、やっとこの先で摘んだ。実にばっちりのサイズだった。やっとこは、まるで、おあつらえ向きに、ちょうどよく、睾丸を挟み込んだのである。クルミでも割るみたいだ。その握りごたえの方も、なんだか、ゆで卵でも押さえつけたような感触だった。

一方の男子生徒の方も、大事なキンタマを、こんな風に、やっとこなんかで摘まれてしまって、果たして、どんな気分だったのであろうか？

さて、準備が整うと、早くも、女子高生は、ぐっと、やっとこの柄を握りしめ始めたのだった。

それは、地獄の責め苦であった。疲弊しきっていた男子生徒も、思わず、悲鳴を上げそうになったが、その口を、素早く、別の女子高生が押さえつけた。こんなヒドい目に遭わされながら、彼は、泣き叫ぶ事すらも許してもらえなかったのである。

やっとこを持つ女子高生の手に、どんどん力が入っていき、やがて、その指先に、グチュッと潰れた感触が伝わってきた。とうとう、男子生徒の睾丸を潰しちゃったのである。女の子の弱い握力でも、やっとこを使えば、簡単にキンタマ潰しができるのだ。

男子生徒の方は、目を剥いて、悶絶していた。睾丸が壊れた瞬間は、きっと、今まで味わった事もなかった激痛だったのであろう。それでも、彼は、体のあちこちを、まだ、ピクピクと痙攣させていた。痛すぎて、失神もできなかったようで、この男子は、まだ意識があったのだ。

「さあ、もう一個のキンタマも潰しちゃおうか」

処刑人の女子高生が楽しそうに言ったが、それを、やっとこを貸

した女子高生が制した。
「いやよ。私のやっとこ、こんなに汚れちゃったじゃない。もう使わないで！ああ、貸さなきゃ良かった」彼女は、そう言って、自分のやっとこを強引に奪い返したのだった。
「じゃあ、もう一つのキンタマは、どうやって、潰したらいいのよ！」
「知らないわ。その辺にある石ころでも使ったらいいんじゃない？」
確かに、この裏路地の地べたには、片手で持てる、手頃な大きさの小石が、あちこちに転がっていた。
女子高生たちは、少し沈黙したあと、本当に、それらの小石を拾い始めたのだった。適当に提案された意見を、皆は本当に採用してしまったのである。しかも、せっかくだから、全員で参加する気なのである。
死に切れない男子生徒は、朦朧とした顔で、その様子を見つめていた。可哀想に、先のキンタマを潰されたダメージで、彼は、全身が痺れてしまっていて、動けそうにないのである。
「やめて、やめて」彼は、か細い声で、ようやく口にしたが、女子高生たちには聞こえていないようだった。
女子高生たちは、彼の股間のまわりに、グルリと群がった。そして、順番に、リズムよく、手に持った小石を、男子生徒の性器めがけて、振り下ろし始めたのだ。
河原にある小石とは違うので、彼女たちの使用していた石は、どれも鋭く角ばっていた。こんなものを打ちつけられたら、それだけでも十分に凶器なのである。
一回、小石をぶつけられる度に、男子生徒は押し殺したような呻きを漏らし、手足がピクンピクンと跳ね動いた。
そのうち、女子高生たちも、十分に満足したようである。彼女たちは、静かに男子生徒の側から離れたのだった。
今度こそ、男子生徒は、完全に気絶して、倒れていた。その股間の一点は、鋭角の石で叩かれ続けたものだから、皮膚も肉も切り裂

けてしまい、すっかりズタズタになっていたのである。睾丸だけではなく、ペニスもぐちゃぐちゃに叩かれてしまい、彼の性器全部が砕かれて、血まみれとなり、ミンチとなって、もはや原型をとどめてはいなかったのだった。

了

お姉ちゃん

僕には、とても素敵なお姉ちゃんがいた。

と言っても、本当に血の繋がった姉弟だったのではない。近所に住んでいた年上の女の子のことを、僕は、お姉ちゃんと呼んで、慕っていたのである。

彼女の方が、僕よりも5歳ほど年長だった。お互いに一人っ子だったものだから、物心ついた頃から、自然と、姉弟のように仲良く遊ぶようになっていったのであった。

5つも歳が離れていると、それだけでも、僕の目には、お姉ちゃんの事が、すごく大人のように見えた。実際に、お姉ちゃんは、いつだって、僕よりも少し先を行っていて、年下の僕に、ちょっとだけ大人の情報を教えてくれて、僕は、いつも彼女を尊敬の眼差しで見ていたのである。

やがて、僕たちも、かなり成長して、小さかった頃ほど、一緒には遊ばなくなっていった。二人の交流が途絶えた訳ではなかったが、それでも、少し離れた存在になっていったのである。しかし、そのような状況になっても、相変わらず、お姉ちゃんは、僕よりも、ちょっと先を行く存在だったのだ。

彼女は、僕よりも早く、学校の制服を着るようになり、少しずつ大人びていった。お姉ちゃんが、精神的にも肉体的にも、じょじょに、大人の女になっていく事に、僕もうっすらと気付いたのである。いつしか、彼女は、色気すら感じさせる美しい女学生にと変わっていた。

さて、これは、僕が中学に入りたてで、お姉ちゃんが高校生だった頃の話だ。ある日の学校の帰り、道のさなかで、僕とお姉ちゃんは、ばったりと出くわしてしまった。近所に住んでいたのだから、帰り道が一緒になる事も、たまにはあったのだ。しかし、その時は、

けっこうな雨が降っていたのである。
予報されていなかった通り雨だったので、傘を持っていなかった僕とお姉ちゃんは、二人で群れて、濡れながら、帰路を走った。すぐに雨も止むかと思って、走り続けていたのだが、なかなか収まらず、結局、僕もお姉ちゃんもずぶ濡れになってしまったのである。でも、こんな風に二人で雨の中で濡れたりすると、幼い時に同じような経験をしたのを思い出したりして、不思議と楽しくも感じられたのだった。
お姉ちゃんの家の前に、先に到着した。ここで別れるはずだったが、しかし、その時、お姉ちゃんが僕の袖を引っ張ったのである。
「まだ、降ってるわ。ちょっと、私のうちで雨宿りしていったら？」
お姉ちゃんは言った。
僕の家までは、そんなに遠かった訳ではない。
でも、髪も制服もずぶ濡れだったお姉ちゃんの姿を見ていると、なんとも、色っぽくて魅力的で、僕はもう少し、このお姉ちゃんと一緒にいたい気持ちになってきたのである。思春期が始まったばかりの少年らしい感情だった。
こうして、僕は、久しぶりに、お姉ちゃんの家にお邪魔させてもらう事にしたのだ。家の中に、彼女の家族の姿は見当たらなかった。実は、この日は、彼女の家族は全員、留守だったのである。
僕は、お姉ちゃんの部屋へと案内された。しばらくぶりに拝見した彼女の部屋は、かつての子供っぽかった飾り付けから、すっかり、大人の女性の部屋らしい内装に変わっていた。このような本物の女の子の部屋を見せてもらえて、僕も、ちょっとドキドキしてきたのである。
「だいぶ濡れちゃったから、着替えてくるね」そう言って、お姉ちゃんは、笑いながら、部屋を出ていった。
そして、少ししてから、お姉ちゃんが僕を呼ぶ声が聞こえてきた。ためらう事なく、僕は立ち上がったのだった。
お姉ちゃんは、この家のバスルームの方から、僕のことを呼んで

いた。

そこまで行くと、お姉ちゃんは、脱衣場の中で、裸で立っていたのだった。濡れた衣類を脱ぎ捨てたばかりなのである。お姉ちゃんは、別の服に着替える前に、僕を呼び寄せたのだ。

全裸の彼女は、僕の方に体の正面を向けて、股間のあたりだけを両手で隠して、つっ立っていた。僕がほんのりと想像していた通りの、大人になりたての女性の美しい裸体だった。僕は、思わず、ゴクリと息を飲んだ。

お姉ちゃんは、澄んだ綺麗な瞳で、まっすぐに、僕の方を見つめていた。

「うちのクラスの女子って、もうアレをヤっちゃった子ばかりなのよ。私も、皆に追い越されてばかりはいられないわ。ねえ、良かったら、相手をしてくれる？」お姉ちゃんは、穏やかに、僕にそう語りかけてきたのだった。

性に興味津々だった年頃の僕には、お姉ちゃんのこの素敵な誘いを断る理由などはなかったのである。

こうして、僕は中学生で、お姉ちゃんは高校二年生で、エッチを初体験したのでした。近所に年上のお姉ちゃんが住んでいれば、こんな嬉しい出来事もあるものなのです。

了

似た者同士

他に誰もいない場所で、男子学生と女学生が、正面から向き合っていた。
「お願いです。僕と付き合ってください」男子生徒の方が、真剣な態度で告白した。
「ダメよ。私、交際なんて」ためらうように、女生徒の方が返した。
「どうして？僕のことが、そんなに好みじゃないのかい？」
「違うの。私の方が、恋なんて出来る立場じゃないの」
「何を言ってるんだい」
「あなたも知ってるでしょう？私、スケ番グループに、いつも、いじめられているのよ。そんな情けない女の子が、普通に恋愛など、していられないわ」
「なんだ、そんな事。僕は気にしてないよ」
「でも・・・」
「実は、僕も、番長グループのパシリをやらされているんだ。パシリと言っても、実際には、番長のただの奴隷さ。ほら、お互い、いじめられている者同士だから、きっと、助け合う事だって出来るよ」
「だけど、私はそれだけじゃないのよ」
「まだ、何か心配があると言うのかい？」
女生徒は、顔の上を覆っていた長髪をぱあーっと払ってみせた。すると、彼女の頬には、いじめの暴力で出来たらしき、大きな切り傷があったのだった。
「こんな醜い顔じゃ、人に愛してもらう資格はないわ」
「おやおや。なーんだ、そのぐらいの事で」
男子生徒は、笑って、自分の着ていた制服をまくってみせた。そうしたら、彼の腹部が丸出しになったのだが、そこには、打ち身や打撲傷のあとが、いっぱい有ったのだった。

「僕は、毎日のように、番長たちに、暇つぶしで体じゅうを殴られている。だから、体一面、あざだらけさ。それと比べたら、君の顔の傷なんて、全然、気になったりしないよ」

「しかし、私には、まだ人に言えない秘密があるのよ」

「大丈夫。僕は、そんな事には驚かないから」

「じゃあ、あなたにだけ、こそっと見せてあげるわ」

そう言って、女生徒は、静かに服を脱ぎ始めたのだった。全裸になった。その上で、彼女は、股を広げて、自分の陰部を男子生徒の方へ晒したのだった。

「見て。私のオマンコには火傷のあとがあるのよ。こんな場所にまで、根性焼きをされちゃったの。こんなオマンコじゃ、男の人と愛し合う事もできないわ」

「なんだい。そんな事で悩んでいたのか」

男子生徒は、笑って、自分も服を脱ぎ始めた。そして、彼も素っ裸になった。彼は、その逞ましい男根を、女生徒の方へと突き出したのだった。

「僕のペニスの先を見てごらん。僕も、亀頭の表面に根性焼きのあとがあるんだ。君と同じで、こんな場所にまで、タバコの火を押し付けられちゃったのさ。お互いに、根性焼きされた性器の持ち主だったんだから、何も恥ずかしがる事はないよ」

それを見て、ようやく、女生徒は、目を潤ませて、笑顔になったのだった。

女生徒は、引き寄せられるように、裸の男子生徒の胸もとに抱かれていった。男子生徒も、裸の女生徒の事を、優しく受けとめて、抱きしめた。

「大丈夫。僕たち、きっと、うまくいくさ」男子生徒は、微笑みがら、そう囁いたのだった。

了

スター誕生

うちの高校の演劇部の今回の公演がとにかく面白いと、やたらと評判だった。特に、新しく入部した女子部員の蛙里いずみが見ものなのだと言う。

しかし、どの辺が素晴らしいのかを尋ねてみると、すでに見物していた生徒たちは、誰もはっきりとは教えてくれなかったのだった。男子はニヤニヤしているだけだし、女子は何故だか顔をしかめてみせた。要するに、又聞きなどしないで、自分の目で確かめてみろ、と言う事らしいのである。

そこで、今度、暇な時間を見つけて、演劇部の公演を観にいってみたのだ。

無料公演だったとは言え、観客席は、見物に来た人でびっしりと埋まっていた。この公演の噂は、そこまで校内中で広がっていたらしくて、のみならず、リピーターも沢山いたようなのであった。

やがて、演劇は始まった。何が凄いのかを見逃さないように、冒頭から、食い入るように拝見させてもらったのである。

だが、観ていた限りでは、そこまで優れたお芝居だったようにも思えなかったのだった。蛙里いずみがどの子なのかも、すぐに分かったのだが、彼女は確かに群を抜いて美しい女生徒ではあったものの、そんなに演技が上手かったようにも感じられなかったのである。

ところが、劇の内容が中盤まで来ると、いきなり、状況は一変した。

蛙里いずみが、話の展開に合わせて、それまで着ていた衣装をばあーっと脱いでしまったのだ。途端に、観客席の間では、待ってましたとばかりに歓声が上がった。

蛙里いずみの衣装は、前開きタイプのワンピースで、一瞬で脱げるようになっていた。そして、その内側には、彼女は、衣類を身に

つけてなかったのである。彼女は、芝居の最中に裸になってしまったのだ。

いちおう、完全なオールヌードはマズいと考えたのか、両乳房のてっぺんと股間の一角にだけは、前貼りをつけていた。しかし、そんな僅かな前貼りでは、ほとんど無いも同様だったのであり、彼女の姿はほぼ全裸としか写らなかったのである。

たとえ、先端の乳首が見えてなくても、その豊満な乳房がゆさゆさ揺れているだけでも、色っぽかった。股間の前貼りは小さすぎて、鼠蹊部もヴィーナス丘もはみ出ていて、今にも大事なものも見えてしまいそうで、ドキドキさせられた。おへその黒い窪みすらも、全裸の中にポツンとあると、なんだか、恥ずかしい部位のように見えてきた。後ろ姿は、完全に真っ裸であり、形のいいお尻が眺め放題だった。何よりも、こんな丸出しの格好をしていながら、蛙里いずみが全然照れておらず、むしろ、堂々と振舞っていたのが、ひどく好感を持てた。

それにしても、こんな劇の筋書きだったとは言え、彼女は本当に裸になる必要があったのだろうか。肉襦袢を使ったり、ビキニ着用の姿を裸だと言い張るなどの方法で、ごまかす事もできたはずだ。

いいや、リアルに裸になって、実は正解だったのかもしれない。と言うのも、彼女が裸になってからは、彼女の裸体をネタにした演出やセリフが幾つもあって、それらは、彼女が本物のヌードを見せていたからこそ、うまく観客にも伝わってくる部分もあったからである。

とにかく、彼女が裸を見せてからは、まさに彼女の独壇場であった。蛙里いずみは、顔が美形だっただけではなく、スタイルの方も抜群だったのだ。たとえ演技は二流でも、舞台の上を、所狭しと、生き生きと裸で動き回っている彼女の光景は、それだけでも美しい芸術のようであった。

観客たちも、すでに高校生なのだから、女のヌードなど、インターネットやアダルトビデオなどで、十分に見た事があったはずであ

ろう。にも関わらず、それでも、舞台劇の中と言うシチュエーションで、裸で振舞う蛙里いずみの姿は、ここだけでしか味わえない魅力や興奮などがあって、皆の目を釘付けにしてしまったのだった。

なるほど、これなら全校的な話題にもなるだろうし、リピーター客も途絶えないはずなのだ。

こうして、演劇の最中は、観客たちは、すっかり、蛙里いずみに目を奪われ続け、女性の美しいヌードと言うものをたっぷり堪能させてもらったのだった。

さて、この話には、まだ続きがある。

その悩殺ボディで、すっかり、校内中の生徒を虜にしてしまった蛙里いずみであったが、この舞台劇のことは、いつの間にか、学外でも知れ渡っていたらしく、ある時、突然に、有名な芸能プロダクションが、彼女のことをスカウトしに訪れたのだった。

蛙里いずみは、もちろん、その誘いに乗っかった。こうして、彼女は、高校生のうちから、セクシーアイドルとして業界デビューする事になり、うちの学校内だけではなく、今度は、全国のファンを魅了するヌーディスト女優として、その名を世に知らしめる事になったのだった。

了

立体テレビ

我が社の商品開発部が、画期的な新発明に成功した。

それは、３Ｄ映画システムの一種なのだが、我が社の立体映像の場合だと、観ている人と浮きだした映像が完全に重ね合わさる事もできるのである。目の錯覚ではなく、ホログラム方式を使って、映像を立体化したゆえの成果だ。

せっかく、映像に手が届くのならば、触る事も出来るようにしよう、と話が進められた。その結果、今度は、３Ｄ映像と連動した全身スーツが開発され、これを身につけている肌の部分は、３Ｄ映像を触った時の感触も味わえるようになったのだ。

原理は、それほど難しいものではない。システムのＡＩに、３Ｄ映像となる物体の大きさや触り心地などのデータが記憶してあるので、３Ｄ映像の外観を触った時、ぴったりと連動して、スーツの表面が自動的に内側へ引っ込んで、実際に接触した場合と同じ圧力を再現してくれるのである。

例えば、３Ｄ映像の花瓶に指で触れてみたとしよう。すると、連動スーツの手袋の指の部分の布地に編み込まれた特殊シートが、内側へと圧縮されて、その手袋だけで、花瓶の表面のツルツルした触感を表現してくれるのだ。

我々は、この新システムの完成に、最初は大喜びした。しかし、間もなく、この新３Ｄ方式は、あまり使い勝手が良くない事に気付いてしまったのだった。

と言うのも、一般的なフィクション映画やテレビ番組などは、多数のカット割りによって、構成されているからだ。シーンがころころと変わったしまうのである。鑑賞するだけならば、次々に変わる３Ｄ映像も楽しめるかもしれないが、触るとなると、一方的にどんどん変わってしまう対象物は、ユーザーにしてみれば、あまり扱い

やすいとは言えないのであった。
　映像で見る動物図鑑、みたいな企画であれば、我が社の３Ｄ映像システムも大いに活躍できたのであろう。一点から撮影し続けた動物をただ同じアングルで写しているだけなら、その３Ｄ映像を触ると言う趣向も、非常に適しているのだ。でも、活用法としては、そこまでなのである。映像で見る図鑑類の需要量から考えると、せっかくのこんな凄いシステムも、一般には広く浸透させそうにないのであった。量産体制の軌道に乗せられなければ、この３Ｄ映像システムも、まるで大赤字なのだ。
　それから、我々は、また連日の会議を重ねた。
　その末に、ついに、この新３Ｄ映像システムの上手な利用法が閃いたのだった。
　我々は、この触れる３Ｄ映像を、アダルト方面のメディアで採用する事にしたのである。もちろん、今までだって、３ＤやＶＲ仕様のアダルトＤＶＤは存在した。しかし、我が社の３Ｄ映像システムを用いれば、もっと臨場感のあるアダルトＤＶＤを制作できるようになったのだ。
　サンプルとして、女子高生もの（もちろん、実際は成人のＡＶ女優が主演だ）のアダルトＤＶＤでも見てみよう。我が社の３Ｄ映像システムを併用すれば、ＤＶＤ内の女子高生が、テレビの外に飛び出して、実際にその場に一緒にいるような気分で楽しむ事ができるのである。
　どうせ、アダルトＤＶＤを観る観客なんて、お目当は出演している女の子の裸だけだ。細かいカット割りとかは無くてもいいので、ずっと、主演の女の子を定点カメラで写していればいいのである。まさに、我が社の３Ｄ映像システムにふさわしい映像内容なのだ。
　３Ｄ映像になった女の子を、実寸大のホログラムで画面の外に投影すれば、文字どおり、テレビの中から、そのまま、映画の女の子が飛び出してきたような効果を得られる。しかも、我が社のシステムでは、その３Ｄ映像を触れるのだ。もう最高すぎるアダルトＤＶ

Dではなかろうか。
テレビの中から出てきたリアルな女子高生が、目の前で制服を脱いでみせてくれて、裸になれば裸になったで、そのヌードを傍でたっぷり拝ませてくれる。さらには、その肉体をじかに触ってみたり、大胆に抱きしめる事もできるのだ。あげくは、ペニスに被せた連動スーツのコンドームも利用する事で、その３Ｄ映像の女の子と擬似セックスまでプレイできちゃうのだった。
こんな斬新な素晴らしすぎるアダルトメディア製品が、果たして、今まで存在したであろうか。
かくして、我が社が作った３ＤアダルトＤＶＤは世界中で爆発的な大ヒット商品となり、我が社は莫大な利益を得る事ができたのであった。

了

ペット少女

僕は、新しく、クラスメートのエルとお付き合いをする事にした。エルは、極めておとなしい女子だった。もっと正確に表現すれば、彼女はたいへん受動的であり、自分からは、何一つ、自己主張する事のない人間だったのだ。

そのような子は、いじめの対象になりそうな感じもするのだが、うちのクラスは善良な生徒ばかりだったので、そんなワルい状態にもならなかったのである。そして、だからこそ、僕は、周囲の目を気にして、エルを避ける必要もなかったので、思い切って、彼女と付き合ってみる事にしたのだ。まあ、他にも、極端におとなしい子と言うのが、交際してみると、どのような感じなのかにも、ひどく興味は感じていたのである。

エルに交際を申し込んでみると、案の定、全く拒む事もなく、彼女はそれを承諾してくれた。エルはほとんど喋らなかったので、どんな気持ちで交際を受け入れてくれたのかも、よく分からなかったのだが、わずかに、彼女は笑みを浮かべていたので、嫌じゃなかった事だけは確信したのである。

その後の僕と彼女のやり取りも、常に、僕からの一方的なものになった。話しかけるのも、デートに誘うのも、いつも、僕からなのだ。相手は受け身の女子だったのだから、そうなるのも仕方あるまい。僕は、そのような交流になるのを十分に納得した上で、彼女との関係を深めていったのである。

二人でデートをした時などは、終始、僕がエルをリードする形になった。どこに行くのかも、次に何をするのかも、全て、僕の方で決めてやるのである。彼女は、全く逆らわずに、いつも、僕の提案に全面的に従ってくれるのであった。いちおうは、彼女にも、本当に良いのかどうかを、確認は取ってみる。すると、彼女は頷くだけ

で、嫌だとは絶対に言わなかったのだった。僕の方は、彼女の顔を覗き込む事で、その微妙な表情から、彼女の本心を伺う以外になかったのである。

ここまで受け身の女の子というのも珍しいのだ。家庭環境のせいなのだろうか。それとも、お人好しすぎて、人の意見を拒む事ができなかったのだろうか。思った通り、彼女と交際してみたら、他の女子と付き合うのとは、全く違う印象を味わえたのである。

とにかく、エルとの関係は、全て、僕の判断に委ねられてしまっているのだから、僕の方も、嫌な人間にならないように意識して努めて、彼女には、常に優しく接するようになっていった。そしたら、無味なエルも、どうやら楽しそうな反応を示しているのが、次第に、僕にも分かるようになってきて、その事が、僕にも妙に嬉しくなってきたのだった。そのうち、エルは、僕へと愛おしそうな表情を向けたり、自分から無言で僕の方に体を擦り寄せたりして、自分の気持ちを僅かながら表すようになっていったのである。

感情の薄い彼女が、確かに、僕のことを慕ってくれているのだ。僕は、一人の女の子から、間違いなく、本心で愛されているのである。なんて、素敵な感動なのだろう。

思えば、これまで、僕の付き合ってきたカノジョは、自我の強い子ばかりだった。いや、そもそも、女という生き物が、自意識の高い存在だったのかもしれない。彼女たちは、いつだって、自分から僕へと働きかけてきた。あるいは、僕へと、自分のことを喜ばすよう、分かりやすく強要してきた。そして、僕が何かをしてやると、本心からではなくても、彼女たちは、大げさに嬉しそうなフリをしてみせるのだ。こんな女性ばかりを相手にしていたら、ほんとに、こっちの方が楽しくないし、気も休まらずに、疲れてしまうのである。

しかし、エルは違った。自分から積極的じゃないからこそ、その態度は常に本心なのであり、しかも、僕の気持ちにと合わせてくれているのだ。このホッとするような心地よさは、一体、何なのであ

ろうか。

ふと、僕は、幼少期に飼っていたペットの子犬を思い出した。この子犬も、すっかり、僕をボスだと認識してくれていたらしくて、僕へと忠信を誓い、僕のことを慕いきっていた。その子犬は、常に僕に寄り添ってきて、僕の命令には忠実であり、僕が何をしても喜んだのだ。幼い頃の僕は、この子犬の事が大好きであった。

エルと接していたら、この子犬にそっくりだったのだ。そう、彼女は、理想的な、ペットのような女性だったのである。一方的に愛情を注げて、その愛情を全て受け入れてくれる存在だったのだ。

大好きなペットに対して、「このペットを恋人に出来たらいいのにな」とは、誰もが一度は思い浮かべる妄想である。ところが、エル相手だったら、この稚拙な願いを実現できたのだ。

まるで、ペットのような恋人であるエル。

僕は、次第に、異性としての彼女との距離も縮めていった。デートの最中に、エルの手を握ったり、肩に手を回したりした。エルは、いっさい、嫌がらなかった。やがて、口づけも交わした。何もかも言いなりであり、きっと、エルもそれらの行為を喜んでいたであろうと思うと、本当に、ペットを愛でているような気分なのだ。

そのうち、僕は、エルを自分の家に連れ込んで、セックスも試してみたのだった。それさえも、彼女は、全て、されるがままだったのである。ベッドの上で、僕は、逆らわないエルの服を、一枚ずつ、脱がしていった。清楚な裸体を晒したエルは、恥じらいもせず、相変わらず、無口で無感情だった。ところが、彼女の体を愛撫してあげると、それは初めての体験だったのか、彼女は素直に喜びの反応を示してくれたのだ。そして、最後に、処女だった彼女と交接もしたのである。裸の彼女は、貞操にこだわる様子もなく、まるで動物のように、淡白に、僕に膜（スキン）を破られ、中にたっぷり精液をぶち込まれて、イっちゃったのだ。

僕の方もまた、愛するペットとセックスしたのならば、きっと、こんな感じなのだと、しかと実感させてもらったのである。それは、

他の女子相手の性交では、絶対に味わえない感覚なのであった。
エルと僕の交際は、その後も、今でも続いている。そして、時々、自分のペットと寝る感覚で、僕はエルのことを抱かせてもらっていたのだった。絶対に無抵抗で、行為後は必ず喜んでくれるエルは、僕にとっては、最高に安心して、いくらでも遊び相手にできるセックスパートナーとなったのだ。
しかし、周りの気のいい友人たちは、僕たちのそんな真の関係も知らずに、僕たちの事を普通の対等カップルだと思って、暖かく見守ってくれていた訳なのである。

了

血ばしり

女暴走族（レディース）の総長（ヘッド）の彼氏の浮気が発覚した。ヘッドは裏切りを絶対に許さない女なのだ。直ちに、彼氏への制裁が決定した。こりゃあ、久しぶりに「血ばしり」を、それも男の「血ばしり」が見られるぞ、とレディースのメンツが嬉々として集まった。

逃亡に失敗した彼氏は、あっさり、レディースの溜まり場へと連れてこられた。そこには、ヘッドをはじめとするレディースの顔ぶれが、すでにズラリと揃っており、とりこの身となった彼氏は、ヘッドの面前にと突き出されたのである。

彼氏だった男は、服を脱がされ、全裸にされていた。その上で、後ろ手に縛られて、全く逆らえない状態になっていたのだ。今までヘッドの事をいっぱい喜ばせてきた彼の性器もむき出しであり、そのウワサの巨根ぶりを拝見できたものだから、レディースの他のメンバーたちもクスクスと忍び笑いを立てていた。

そして、これより、彼は、このレディース独自のリンチ「血ばしり」を受けさせられるのである。

青くなって、震え上がっていた元彼氏は、ヘッドに必死に許しを請うたが、案の定、いっさい聞き入れてはもらえなかった。もはや、ヘッドにとって、彼は過去の男なのである。

「お願いだ！チンポを切り落としたり、キンタマを潰すのだけは、やめてくれ！」

死に物狂いの彼が、つい、そんな事を口走ったものだから、周りでは、また冷笑が漏れた。

彼にとって幸いなことに、これから始まるリンチで、ペニスや睾丸を切除する予定はなかった。しかし、彼には、もっと悲愴な仕置きが待っていたのである。

レディースの下っぱが、一枚の板を持ってきた。２０センチ四方

の正方形で、厚さ2センチほどの木の板だ。硬い材質の木材で、板の中央には、直径5センチほどの丸い穴が開いていた。

下っぱは、板のその穴に、元彼氏のペニスをくぐらせたのである。板は、そのまま、彼のペニスの根元まで押し付けられたのだった。太いペニスに、穴は、隙間なく、ぴったりとハマっていた。

なんとも、滑稽な光景なのである。まるで、首枷ならぬペニス枷だ。ペニスを頭に置き換えてみると、いびつなエリザベスカラーのようにも見えた。周囲からは、再び、笑い声が聞こえてくる。

元彼氏は、実に不安そうな表情を浮かべていた。まさか、これだけでリンチが終わりな訳もあるまい。この板は、まるで断頭台のギロチン板のようだ。やはり、この板に沿って、ペニスを根元から切断してしまうのだろうか。

だが、実際のレディースの処刑は、そんな分かりやすいものではなかったのだ。

彼の方の準備が整うと、下っぱが、新たなアイテムを持ってきた。長さ１０センチはありそうな、細長い針だ。それが、小さなプラスチックケースの中に何十本も入っていて、下っぱは、ここに居るメンバ一人一人に、その針を順番に配り始めたのである。

元彼氏は、それを見て、目を見開いて、ゴクッと息を飲んだ。

「ま、まさか、それを？おい、嘘だろ。や、やだ！よしてくれ！」

彼は叫んだが、その声は、レディースたちには届いてなかった。

レディースのメンバーは、鋭い針の先を突き立てるように持つと、彼の周囲に群がってきたのだ。

まずは、一番手はヘッドだった。彼女は、いきなり、針を、彼のペニスへとブスッと突き刺したのである。力づくで、ぐいぐい押し込んでいく。柔らかいペニスを、針は、たちまち貫通してしまった。彼のペニスは、長い針によって、文字どおり、串刺しになってしまったのだ。

彼は、この有様を、愕然と、口を開いて、眺めていた。驚愕のあまり、声も出てこないようなのだ。痛み以上に、された行為へのシ

ョックが強すぎるのである。針が細かったせいか、出血も少なかったようだった。

そして、当然ながら、これ一本で済むはずもなかったのだ。ヘッドの番が終わると、このあとは、他のメンバーが、後に続いて、次々に、同じ事を彼に対して行ない始めたのである。

彼女たちは、それが男の誇りの部分だと知っていて、針をブスブスと突き立てた。包皮だろうが亀頭だろうが、構わず、突き刺した。容赦なく、反対側から外に、針の先が飛び出すまで、突き通したのである。

彼の自慢の巨根は、たちまち、ハリネズミのような外見になってしまった。

すでに、彼は、涙を垂れ流しながら、絶句していた。ここまで傷つけられてしまうと、実際の肉体的痛みより、目に見えているビジュアルの凄さの方が、精神的にダメージを与えるのである。

こうして、彼も、ようやく、この壮絶なリンチの修羅場から解放してもらえたのだ。レディースたちは、全員、先に、この場から去っていった。彼だけは、ここに放置されたままだった。手の拘束だけは外してもらえたものの、だが、果たして、この状態で、このあと、どうすればいいのであろうか。

ペニス一面に針が刺さった状況では、明らかに、板を取り外す事はできないのである。かと言って、あんなに沢山刺さっている針は、痛くて、とても自分の手では引き抜けそうにないのだった。第三者に助けを求めたいところなのだが、下半身は余計なものがくっつき過ぎていて、上手に布で隠す事が難しかったし、この情けない有様では、この場所から外へと出ていって、人前に姿を晒す事すら、はばかられたのである。

了

父娘

娘の母親（つまり、私の妻）が亡くなったのは、娘が三歳の時だった。娘は、まだまだ手のかかる年頃であり、それ以降は、父親である私は、母親がわりにもなって、娘のことを育てる事になったのだ。

これまでだって、それなりに、育児は手伝ってきたつもりではある。しかし、母親がいなくなってからは、全ての育児を一人でこなさなくてはいけなくなり、私は、あらためて、その大変さに気付かされたのだ。

娘の風呂入れも、そうした育児の一つだった。もちろん、妻がいた頃も、私が娘と一緒にお風呂に入る事はあったのだが、あくまで湯に浸からせる程度であり、きちんと娘の全身を洗う行為は、いつも、妻が娘と入った時に任せていたのである。それが、私が母親役も兼任するようになってからは、私の手で娘の体を全て洗わないといけなくなってしまったのだ。

さいわい、娘はお風呂好きだった。浴槽に入れるまでは、私もほとんど手を焼かなかった。ところが、いざ、体を洗う段になると、娘は急に甘えてきて、私に体をこする事を強く求めてきたのだった。幼いながら、他人に体を洗ってもらう気持ち良さを覚えてしまったのかもしれない。

そんな訳で、しばらくの間、毎日、入浴時に娘の体を洗う事も、私の大切な育児の一つとなったのだった。

娘が少し大きくなり、自分で体を洗えるようになってからも、この習慣は続いた。私の手があいていた時は、娘は、私へと、自分の体をこする事を、決まって、おねだりしてきたのである。娘に甘い私は、ついつい、娘に頼まれるままに、それに従ってしまったのだった。大体、週に一度は、私の手で娘の体を洗ってやるのが、ルー

ティーン化していったのである。

でも、それは、別に悪い話でもなかったのだ。こうして、私自ら、娘の体を細部までチェックできた事で、娘の異変をいち早く見つける事もできたからである。娘が知らないうちに怪我をしていたのも早々に気付けたし、病気の早期発見をしたのも一度や二度ではなかった。だから、娘の体を洗う我が家の習慣は、そのまま、やめる事もなく、ずるずると続いていったのだ。

もっとも、娘は確実に成長していた。娘が小学生になってからも、私は、週に一回は、風呂場で娘の体を洗ってあげて、娘もその事を普通に受け入れていたのだが、私の方は、娘がじょじょに女の体になっていくのを、それとなく察知してしまったのである。

娘の胸が緩やかに膨らみ始めた。恥丘には、やんわりと性毛が生えだした。体じゅうが丸みを帯び、お尻が大きくなってきた。それでも、娘は、それらの体の部位でさえ、私に洗わせたのだった。

娘は娘なりに、自分の体が変化していく事に、子供らしい不安を感じていたのかもしれない。それで、わざと、自分の体を私に洗わせて、父の私にも自分の現実を共有させて、私が動じていないのを見る事で、自分の心も落ち着かせていたのかもしれないのだ。

そうであれば、私の方も、娘の気持ちを察してあげて、今まで通り、娘の体を洗い続けてやるしかないのである。

娘の肉体の成長は、さらに続いていた。中学生になると、大人の女性としての機能も備わり始めたのだ。だいぶ大きくなった乳房は、執拗にこすりすぎると、乳首が固くなってしまう事もあった。娘の生理が始まった事に気が付いて、祝ってあげたのも、風呂場で体を洗っている最中だった。ほんのりと伸びていた脇毛を、娘は、私に剃ってくれるように頼んできた事もあった。

このように、大きくなってからも、私と娘の密接な親子関係はずっと続いたのである。

思春期になった娘が、父親を避けるようになると言う話は、前々から聞いた事があった。しかし、私たち父子の間では、そのような

過程が全く無かったのである。二人っきりの肉親という絆がそれだけ強かった、と言う事なのかもしれない。とにかく、私と娘は、いつまでも、家族仲が良く、裸で話し合える間柄なのであった。

そして、今や、娘も高校生なのである。その肉体は、すっかり成熟していたのだが、それでも、週に一度は、娘は、体の点検を私に任せてくれるのであった。それは、私にとっても、安心材料となったのである。

何よりも、娘の現状のオシャレを、じかに調べる事ができた。それによって、娘の日常の素行が分かり、不良やギャルなどに傾向してないかが分かったのである。さらに、ボーイフレンドができても、肉体関係に及ばない健全な付き合いである事も確認できた。娘は、高校生になってからも、陰部も洗わせてくれたからである。私は、週に一回、娘の処女膜の状態もチェックしてみて、きれいな体のままである事を自分の目で確かめたのだ。

いいや、それだけではない。娘も、やがては、正式に、男性に身をまかせる時も来るのであろう。その時の為にも、娘の体をお粗末にはできないのだ。むしろ、私は、娘の乳房や股間などの方を、汚れがついてないように、集中して洗うようになっていた。せっかくの美しい女体が、少しでも汚ければ、台無しだからである。包皮を剥いて、クリトリスを洗ってやった事もあった。思った通り、それ以前の娘は、クリトリスの重要性をよく知らなかったらしくて、そこには恥垢が溜まっていたのである。

このように、私は、娘の体を丹念に洗い、清潔を保つ事で、いつ、娘が男と寝る状況が訪れたとしても、恥ずかしい事にならないようにと、つとめていたのであった。これもまた、親心なのである。

了

チラリ修正アプリ

女子高生アイドルとしてデビューしたあたしは、ネットやＳＮＳを中心に活動する事で、テレビや舞台に立たなくても、たちまちのうちに、有名アイドルにのし上がった。これが、今どきの宣伝戦略というものなのだ。

所属事務所も、あたしの売り出し方を全面的に支援してくれて、あらゆる協力を惜しまなかった。あたしが自己演出したユーチューブやインスタやＴｉｋＴｏｋなどは次々にバズって、常に大ヒットを飛ばしたのである。

もっともっと新しいネット活動に着手して、我が名を広めてやろうと考えて、次にあたしが挑戦しようと思ったのが、２４時間ライブ配信だったのだが、ここで、事務所からのストップが入ったのだった。

あたしが考案したのは、本当の自分の部屋にカメラを設置して、あたしの普段のままの生活をファンの皆に見せてあげようと言うものだったのだが、「今のままじゃ、それは厳しい」とマネージャーが口を挟んできたのであった。

平凡な自然体を見せると、カリスマ性が薄れるから良くない、と言う事でもないらしい。マネージャーの話によれば、あたし個人に難があると言うのだった。

実は、普段のあたしは、大変にガサツだった。ただガサツなだけならば、普通の人っぽくて親しみやすい、と好感を抱いてもらえたりもするだろう。しかし、あたしの場合は無頓着すぎて、だらしない面が他人に見られてしまっても、全然、気にならないし、自分でも気が付かないのだった。だから、あたしの撮影現場では、私も知らないうちに、パンチラしていたり、胸チラしていたような事がザラだったのである。あたしのこれまでの活動は、生配信される事は

なく、いつも撮影後に編集されていたので、それらのパンチラや胸チラは手際よくカットされていたが、これがライブ配信、それも、私生活の本番となると、とても隠しきれないだろうと言うのであった。

下着や胸もとを見せまくって、あたしに、新しく、お下品キャラのイメージが固定してしまっても、事務所としても、あまり好ましくないのである。

それでも、新機軸として、あたしたちは、私生活ライブに着手したかった。

すると、世の中、捨てたものではなかったのである。マネージャーが、チラリ修正アプリなる最新の画期的なアプリを見つけてきてくれたのだった。

これは、文字どおり、動画上のパンチラや胸チラを、自動でチェックして、修正してくれるソフトだ。スカートの隙間からパンティが見えていたり、胸もとがハデに出すぎていたりすると、そこだけを勝手に黒丸で塗りつぶしてくれるのである。しかも、それを動画の撮影中と同時進行で、瞬時に行なってくれた。その早さが、６ミリ秒だと言うから驚きだ。これだけ早いと、どんなに動体視力が良くても、どんなに高度な録画装置を使っても、修正前の映像は確認できやしないだろう。全く、ＡＩ技術の進歩には、ただただ感心ばかりなのである。

そんな訳で、このチラリ修正アプリさえ併用すれば、ライブ配信の中で、あたしが、うっかりイケないものを見せてしまったとしても、全く恐れる事はないのだ。

かくて、あたしの私生活の２４時間ライブ配信は、ついに敢行されたのであった。

ところが、これは、とんだ大失敗で終わってしまったのである。

確かに、チラリ修正アプリは、あたしのパンチラや胸チラについては、全て、シャットアウトしてくれた。しかし、このアプリは、全身丸出しには対応してなかったのである。すっかり安心しきって

いたあたしは、ライブ配信中でも、カメラの前で、平気で下着まで着替えたり、シャワーを浴びた後に、裸のままで部屋の中をうろつき回ったりして、その様子は、何の修正もかけられる事もなく、そのまま、全国に流れてしまったのであった。

了

倦怠期

俺には、女子高生のカノジョがいた。プラトニックな関係ではない。会えば、必ずセックスするような深い仲だった。

しかし、このごろは、少し、彼女に対して冷めてきたみたいである。従来、俺は飽き性だったのだ。まだ高校生と言う事で、最初はひどく新鮮味を感じて、楽しく抱いていた彼女の体も、最近では、あまり興奮しなくなってきたのだった。

そんな訳だから、俺は、彼女と会って、二人きりになっても、次第に、セックスを迫らなくなったのだ。その事については、彼女の方も、うっすらと察し始めていたようだった。

今日もそうである。夕方、学校帰りの彼女は、俺の家にと押しかけてきたのだが、あまり乗る気じゃなかった俺は、終始、つれない態度を取っていたのだった。

一生懸命、明るく振舞っていた彼女は、やがて、おとなしくなり、寂しそうな表情になった。どうやら、俺とセックスをしたそうな雰囲気なのである。だが、俺だって、気持ちが伴わない状態では、彼女のことを十分に歓ばせてやる事はできなさそうなのだ。

「今日は疲れてるんだ。また今度な」と、俺は事務的に彼女に告げた。

とは言え、彼女も、本当の理由はほぼ分かっていたようなのだった。

「あたしの事、もう飽きちゃったの？」彼女は言った。

「そんな事ないよ」

「あなたって、浮気性だもんね。新しい女の人を抱いてみたいの？」

「だから、そんなんじゃないってば！」

「あ、そうだ！いい事を考えついたわ。ちょっと待っててね」

明るい笑顔で、急にそう叫ぶと、彼女は、俺の部屋から飛び出し

ていったのだった。
一体、どうしたのであろう。若干、俺が不安になっていると、間もなく、彼女は部屋へと戻ってきたのだった。
その彼女の姿を見て、俺はアッと驚いた。
彼女は、目元に長方形の黒いプラスチック板をつけていたのである。その板は、彼女の両目の部分だけを、ばっちり隠していた。変なサングラスと言うか、テレビ放送の中で一般人の顔を黒塗りで分からなくしているような感じなのである。
そして、それが、彼女の印象を全く違うものに変えてしまっていたのだった。目元が見えないだけで、ここまで人間の雰囲気とは変わってしまうものなのだろうか。
「どう?これで、普段のあたしと違うように見えるでしょう?どう、抱きたくなった?」彼女は、目元を隠した顔で、媚びて、笑ってみせたのだった。
その見慣れたはずの笑顔でさえもが、俺には、まるで新鮮なものに感じられたのである。
彼女は、可笑しそうに、着ていたセーラー服を脱ぎ始めた。なんだか、初めて会った女の子の脱衣を見ているようなのである。俺は、どんどん、ムラムラしてきた。
こうして、彼女が、とうとう、全ての服を脱いで、裸になってしまった時、俺も、ついに我慢できなくなってしまい、彼女に飛びかかっていったのだった。
目元を隠した事で生まれた魔力は、セックスを始めてからも継続したのである。俺は、知っている女の体を抱いて、知っているセックスの反応を体験していただけなのに、なんだか、初めて対峙する女と交わったような満足感を得る事ができたのだった。
それ以降、彼女は、俺とは、目元を黒い板で隠して、セックスするようになった。俺と彼女の交際は、今でも続いている訳なのである。

了

妹好き

オレには、年子の妹がいた。この妹が、たまらないほど可愛かったのだ。

幼い頃から、オレは妹のことが大好きだった。妹の方も、オレに完全に懐いていて、それこそ、毎日、一緒に仲良く遊んでいて、片時も離れる事がなかったのである。

二人の仲は、高校生になってからも変わりはしなかった。この愛らしい妹は、相変わらず、友達と遊ぶよりも、オレと一緒にいる生活を選んで、いつも、オレのそばでダベっていたのである。

呆れた事に、妹は、とびっきりの美少女だった。小さな頃から可愛くて、成長すると、その美しさは、ますます磨きがかかっていった。明るく、さっぱりした性格で、お転婆なところもあり、人格面でも欠点はない。頭も切れるし、スポーツもできて、まさに出来すぎた妹なのだ。それでいて、今でも、兄のオレのことを一番慕ってくれている訳なのだから、全く、こんな嬉しい話はないのである。

しかし、高校生にもなると、オレの方が、次第に、妹のことを、女としても意識し始めてしまったのだった。見た目だけでも、妹は、女らしいプロポーションになっていた事が分かった。それなのに、妹ときたら、昔と変わらず、なんの躊躇もなく、ふざけて、オレにと抱きついてくるのである。妹の胸の膨らみが当たったり、妹の股間のあたりに接触すると、オレの方が、ついドキッとしてしまうのだった。

そんな日々が続くと、オレも、なんだか、意識しまいとしていた妹への思いが押さえ切れなくなってきた。オレは、せめて、妹のヌードだけでも、見てみたくなってしまったのだ。

オレは、こっそりと、我が家のバスルームに隠しカメラを取り付けた。そして、妹がシャワーを浴びている時に、満を持して、その

様子を覗かせてもらったのである。
思った通りだった。シャワー中の妹は、当然、全裸だった訳だが、彼女の体は、まるで天使のように綺麗だったのだ。全体的にスレンダーで、胸もお尻も小さかったが、むしろ、まだ発育途上の女子高生っぽくて、愛らしかった。股間には、黒々と陰毛を生やしていて、その童顔に似合わず、確かに、今の妹は大人の女性の体なのである。
オレが妹の裸を見たのは、幼稚園以来だろうか。この１０年ほどの間に、妹は、すっかり、美しい肉体を持つ娘へと成長していたのであった。
シャワーを浴びている姿だけでは物足りなくなってきて、オレは、とうとう、妹の部屋にまで、隠しカメラを設置してしまった。そして、妹の着替えている最中の姿や、裸で眠っている姿、時には、オナニーしている光景をも、たっぷり、眺めさせてもらったのである。どんな時の妹の姿も、ひたすら可愛かった。
オレは、ついには、こんな素晴らしい妹の姿を、オレ一人で独占して拝ませてもらっているのが、勿体なく思えてきた。オレは、妹のシャワー光景や寝姿などを、次々に録画して、パソコン用の動画に変換していった。そして、それらを片っ端からネットの動画サイトにアップしたのである。
こうして、オレの可愛い妹の美しいヌードは、全世界の人々にも共有される事になったのだった。

了

オスの悩み

宇宙には異次元（パラレルワールド）なるものが存在していて、その別世界の宇宙は、あなた方の宇宙とそっくりで、そこには地球もあれば、地球人も住んでいるのだ。さらには、その別世界の地球人は、あなた方と同じ外見をしているだけではなく、社会構造や民間の風習まで、何もかもが瓜二つなのである。

ただ一つ、違う部分があるとすれば、その宇宙の地球人は、極端なメス社会なのであった。つまり、蟻とか蜂のような集団を築いていたのだ。

構成員のほとんどが女（メス）なのである。男（オス）の数は、全人口のわずか０．１パーセントにも満たない。しかし、それで、なんら問題はなかったのだ。なぜなら、一人のオスでも、毎日、一億個もの精子を作ってくれたからである。対して、メスは一個ずつしか卵子を持てなかったので、この比率でも、十分にオスの数は足りたのだった。

昔は、この世界の地球人は、一夫多妻制で、一人のオスが無数のメスと性交しまくって、オスは子作りするだけで、体力を消耗し、時間も無くなり、生涯を終えていたのだと言う。でも、現在は、体外受精の技術が発達したので、人々は出産の為に交接する必要もなくなり、オスもただの精子の製造・保管庫のような存在となって、酷使される事も無くなったのだった。

オスは、メスに混ざって、対等の生活をする事が認められるようになった。とは言え、オスは、とにかく希少だったので、メスたちからは大事にされ、普段から甘やかされて、育てられたのだった。その結果、オスたちは、すっかりナヨナヨした、弱々しい性格になってしまったのである。すなわち、この世界では、メスの方が勇ましくて、オスが女々しかったのだった。

その事が、学校でも、ちょっと特殊な問題を引き起こす事になっ

た。オスは、学校でも、以前、特別扱いで優遇されていたのだが、それが、高校生にもなって、大人になってくると、思わぬ男女間の感情の問題を発生させてしまったのだ。

性交する義務は無くなっていたとは言っても、諸個人の中には、性欲の本能はまだ残ったままだったのである。だから、年頃になると、彼女らは欲情する事を覚え、ひそかに、その感情を楽しむようになりだしたのだ。具体的には、オナニーをして遊ぶようになりだしたのだが、一部の大胆なメスは、性行為をすれば、もっと気持ち良いのではないかと考え始めた。

さて、そこで、学校に通っていたオスの出番なのである。彼らは、その行動的なメスに、無理やり、付き合わされた。そう、セックスの相手をやらされたのである。それは、オスにしか出来ない行為なのだった。そして、オスの方が、数も少なくて、圧倒的に弱かったものだから、メスの強要には逆らえなかったのだ。

もっとも、オスの方は、発情する事もできたとは言え、性欲旺盛な一部のメスほど、セックスには関心がなかったので、メスの相手をするのは、なかなかの苦痛だったのである。それこそ、昔の慣習のように、正式に裸になって、毎日、取っ替え引っ替え、別のメスと交接するとなると、性欲も体力も持続しなくなってきて、苦しくなり、このセックス遊びは、オスにとっては、ちょっとしたイジメのようにもなってきたのだった。

この生徒間で発生していた出来事は、とうとう、学校側にも露見して、大きな問題となってしまった。オスの方も、セックス疲れで、へたばっていた有様だったので、これで、教師たちが乗り出してきてくれて、生徒の無許可セックスをガッチリ取り締まってくれるようになれば、一安心なのである。

うちの高校にも一人だけ居たオスは、保健の先生のもとに呼び出された。

「セックスなんかが流行ったりして、ほんと、困ったもんだね」と、メスの保健の先生は言った。

彼女は、目の前のオスに、自分の男性器を出すように指示した。オスは従順だったので、何も考えずに、言われた通りにしたのである。

すると、保健の先生は、いきなり、鋭いハサミを取り出して、オスのペニスの先っぽを、チョキンと切ってしまったのだった。びっくりしたオスは、もの凄い悲鳴をあげた。

床には、ボトッと、オスの男性器の亀頭の部分が落ちた。こうして、亀頭だけになって、床に転がっていると、まるで、食材か、大きな虫のようである。

オスは、大泣きしながら、血まみれの股間を両手で押さえて、部屋の中を走り回っていた。あまりのショックで、とてもジッとしてなどはいられないのだ。

「応急処置をしといたよ。これで、オチンチンは勃起しなくなったし、短くなったから、メスの穴の中にも入らなくなって、セックスも出来なくなった。でも、サオは残ってるから、オシッコは今まで通りに出せるし、精子の生産にも影響はないから、何も心配はないよ」保健の先生は、すまして、そう言ったのだった。

了

私の裸

巷では、女学生がＳＮＳで猥褻な犯罪に巻き込まれてしまう事件が、しきりと騒がれていました。

ＳＮＳで知り合った男性に、女高生らが自分のヌード画像を送ってしまい、その事が、のちのち、もっと困った事件に発展してしまうと言うのですが、そのような話を聞くたびに、同じ女学生でもあった私は、いつも、被害者の女の子の方も脇が甘くて、自業自得なのではないか、と思ったものなのでした。

だって、そうじゃありませんか。

直接、あった事もない男に、自分の裸の写真をあげちゃうなんて、信じられない行為なのです。私なら、たとえ、相手が交際中の彼氏であっても、体を許すまでは、絶対に自分のヌードは見せないと思います。

だけど、こんな事を、常日頃から考えているうちに、私も、少しずつ、見知らぬ男に自分のヌード写真を渡してしまう女の子の心理というものが気になってきたのでした。

そもそも、自分の裸を男の人に見てもらえたら、楽しいのでしょうか。いや、それ以前に、自分の裸体を写真に撮ってみるのって、どんな気分なのでしょう？

私は、そんな疑問が頭から離れなくなってきて、とうとう、自分でも試してみる事にしました。

誰かに見せる訳でも、あげる訳でもないのですが、ひそかに、自分の部屋で、スマホを使って、私自身の全裸を自撮りしてみたのです。

撮影するだけでも、とってもドキドキする体験でした。そして、実際に撮れた写真を自身で拝見してみると、さらに興奮しちゃったのです。

思った以上に、私の全身ヌードは綺麗でした。ただの手前味噌だったのかもしれませんが、決して、見苦しくはなかったのです。世間に氾濫しているプロのモデルのヌード画像と比較したって、見劣りしていたとは思いませんでした。でも、自分の裸だからこそ、そこまで甘い点数で見ちゃっただけなのかもしれません。

なるほど。他の女の子たちだって、こんな高揚した気分になれるのでしたら、確かに、誰かに頼まれると、自分のヌード写真だって撮ってしまうはずなのです。私は、少しだけ、彼女たちに理解を示すようになりました。

そして、私自身も、次第に、自分のヌード撮影に、はまっていってしまったのであります。要するに、自分の裸写真を撮ったって、それを人の手にさえ渡さなければいいだけの話なのです。

こうして、私は、誰にも知らせる事もなく、ひそかに、自分のヌードを撮る事にのめり込んでいったのでした。

自分の部屋の中で、色々なポーズをとってみたり、あるいは、局部だけをアップにして、撮ってみたりしました。それらは、写真として仕上がると、いずれも、拝見した私のことを激しく時めかせてくれたのでした。

私の体が、こんな風に写っているのです。それだけでも、ゾクゾクしちゃうじゃありませんか。私はナルシストだったつもりはありませんが、それでも、自身が被写体になった写真というものには、特別な愛着を感じてしまうものなのであります。

やがて、自分の部屋の中での写真を撮り尽くした私は、家族のいない時を見計らって、自宅のあちこちの場所でも、自分のヌードを撮るようになり始めました。シャワーを浴びてる時の素っ裸の自分とか、風呂上がりに裸でリビングにいる自分とかを、隠し撮り風に写してみたのです。

それらの写真は、見事に、本物の隠し撮り画像のように見えたのであり、今までの写真以上に、私を興奮させ、歓喜させてくれたのでした。

あらゆる場所や演出で撮りまくり、今や、私の裸の写真は山のような枚数になりました。ここまで来ると、もはや、十分に満足して、もっと写真を撮影したいとも思わなくなってくるのです。

しかし、今度は、これらの素晴らしい写真を、せっかくだから、自分以外の誰かにも見せてあげたいという欲求が膨らんできたのでした。

とは言っても、私は利口な女子高生だから、そのような願望が芽生えたからと言って、安易に、どこぞかの男にと自分のヌード写真を送りつけたりはしません。代わりに、私は、ネットのアダルトサイトに、自分の裸の画像をアップする事にしたのでした。

だって、顔さえ隠してしまえば、そのヌード画像が私のものだなんて、アカの他人の男どもには分かるはずもないし、わざわざ、誰の裸なのかを調べられたりする恐れもないのです。だから、私は、安心して、自分のヌード画像を、あちこちのアダルトサイトに投稿しまくったのでした。そのヌード画像の閲覧数が増えていて、高評価の反応がついていたりすると、嬉しくなって、ますます、違う写真も公開したくなってしまうのです。

かくて、アダルトサイトに自分の裸の画像をアップするのが、私の秘密の新しい趣味となったのでした。

了

ＡＶ時代

我が国では、高校生になった少女は、必ずＡＶに出演する事、すなわち、アダルトビデオの制作に参加して、作中で何らかのエッチな配役を担当する事が義務付けられていた。

このような方針が決定するまでは、けっこう、色々な試行錯誤があったのである。

政府や学校を悩ませていた子供たちの問題の一つとして、少女たちの不純異性交際があった。彼女たちも、適当にトラブらない程度に同級生男子などと遊んでいるのであれば、ここまで深刻視もされなかったのだが、彼女たちは頻繁に妊娠やら売春などの無視できない騒動を起こしたのである。

学校側としても、女生徒たちの無知から引き起こされる暴走を食い止める為に、特に性教育に力を入れた。ＣＧのリアルな性器の映像が出てくる性教育ビデオが作られたり、実際に生徒の一人をサンプルにして、その子の外性器をいじりながら説明する性教育授業なども行なわれたのだが、それでも、完全に妊娠や性犯罪などを撲滅する事はできなかったのだった。

もはや、教育だけで、少女たちの性への誘惑を断ち切る事はできそうにはないのだ。それならば、いっその事、大人の方で、彼女たちの性生活をがっちり管理してやればいいのである。そのような発想のもとで、女子高生たちのＡＶ体験システムが採用される事になったのだった。

でも、これが、意外と、理にかなった解決策となったのである。

ＡＶの撮影と言うのは、実に素晴らしい、国家公認の性欲解放の空間なのだ。その撮影内であれば、いくらセックスしようと妊娠の危険をコントロールできるし、別の犯罪に結びつく可能性も低いのだった。

何よりも、見守った状態で、女の子たちにセックスをさせられるのがいい。彼女たちも、正しいセックスの仕方を実地で学べるだけではなく、心のうちに潜む性欲まで満たせてしまって、他の場所でセックスしようと言う気持ちが失せてしまうのだ。すなわち、妊娠や性犯罪を根本から断てて、まさに、一石二鳥であって、女の子たちにとっても良い事づくめなのである。

ＡＶ撮影に参加すれば、きちんと出演料がもらえたのも、彼女たちの希望にかなっていたようだった。報酬目的で性犯罪に走る女子高生も多かったので、このＡＶ体験システムで金儲けができるのであれば、わざわざ、危険を犯してまで、非合法な性犯罪には手を出さなくなるのである。

そして、そのような事情からも、彼女たちのＡＶ出演は、何度でも繰り返していいルールになっていたのだった。お金の欲しい女子高生は、ちょっとした小遣い稼ぎのつもりで、気軽にＡＶ撮影に参加するようになったのだ。別の場所で、危ない犯罪に手を染めるぐらいならば、この方がずっとマシなのである。

だからこそ、国の許可がおりてない裏ＡＶの制作については、ますます、厳しい取り締まりを受けるようになった。せっかくのＡＶ体験システムで、少女たちの性犯罪が制止できるようになったと言うのに、裏ＡＶにまで手を伸ばした娘たちが妊娠したり、売春までやらされていたら、意味がないからである。

そんな訳で、子供を裏ＡＶへと走らせない為にも、合法ＡＶの出演料も、相当の額が設定されたのだった。合法ＡＶに参加しただけで、少女たちに十分に満足してもらう為である。その方針はまさに正解だったのであり、裏ＡＶにまで出演するような女学生はいなくなり、犯罪に結びつきやすい裏ＡＶの駆逐にも一役かう事になったのだった。

このようにして制作されたＡＶソフトの数々は、正式に販売される事になった。国家公認の合法のＡＶソフトなのだ。国民は胸を張って、これらのソフトを堂々と購入できたので、バカ売れしたし、

国家にとっても、経済を回す、良い財源の一つとなったのである。
とにかく、「女学生」というＡＶ女優がいっぱい居たものだから、ＡＶソフトも大量に作られる事になった。ＡＶ制作会社や撮影スタッフも大忙しなのだ。彼らも、国が提案した、このＡＶ体験システムには、全く文句がなくて、そのおかげで、暴力団と裏で繋がった、犯罪めいたＡＶ制作にも、わざわざ身を委ねる必要もなくなったのである。ＡＶ業界の犯罪離れが進み、その悪いイメージも払拭されたのであって、誰にとっても良い事だらけなのだった。
ところが、僕たち男子学生だけは、ちょっと、そうでもない部分があったのである。
女生徒たちは、ＡＶ出演するようになってからも、決して、僕たち男子生徒の手が届かない存在になってしまった訳なのでもなかった。彼女たちは、相変わらず、学校では、今まで通りに、可愛い女の子として、僕たちとは仲良く接してくれたのである。
しかし、一方で、彼女たちは、皆、すでにＡＶに出ていたのだ。彼女たちが出演していたＡＶは、僕たちも簡単に観る事ができたのであった。学校では、こんなに無邪気で、明るくて、優等生に振舞っていた彼女たちが、ＡＶでは、あんなにも淫らで、悩ましく、情熱的に、ヌードや性行為を披露していて、それを僕たちもタップリ見せてもらっていたものだから、僕たち男子生徒は、何とも複雑で照れ臭い心境になって、彼女たちとの学校生活を送るようになったのである。

了

後日談（前書き）

教室にいた女子たちは、「放課後、スケ番グループが、ある女生徒にヤキを入れるらしい」と聞き、昼間っから、すっかりザワついていた。「オマンコに根性焼きする」と言うので、なおさら、皆は、赤面しながら、盛り上がっていたのである。（「青春の苦い傷あと」より）

後日談

高校の廊下を、暗いムードの女生徒が歩いていた。すると、彼女のそばに、ギャル風の女生徒たちが二人、楽しそうに、寄ってきた。「ねえ、あんたぁ。ちょっと、あたしらに付き合ってよ」ギャル女子の一人が、クスクスと笑いながら、暗い女生徒へと話しかけた。なにやら、とても可笑しそうな様子なのである。

暗い女生徒は、怯えた表情を浮かべたが、何しろ、ギャル女子たちが強引だったものだから、拒む事もできなかった。彼女は、両手をギャル女子に押さえ付けられて、ほぼ力づくで、連れて行かれてしまったのである。

三人がやって来た場所は、校舎の隅にある生徒用トイレだった。教室から遠い場所にあったので、このトイレまで用を足しに来る生徒は、それほど居なかった。実際に、この時だって、彼女たち以外に、このトイレにやって来た生徒は居なかったのだ。

ここで彼女たちが何をしだしたのかと言うと、ギャル女子たちは、いきなり、連れてきた女生徒の制服を脱がし始めたのだった。本人の承諾も得ずに、無理やり、一方的にである。女生徒の方も、嫌がりながらも、なぜか、ほとんど抵抗しなかった。

そんな訳で、彼女の制服は、あっという間に取り去られてしまったのである。それどころか、悪どいギャル女子たちは、女生徒の下着まで剥ぎ出したのだった。こうして、女生徒は、トイレの中で、全裸にされてしまったのである。こんな目に遭わされたにも関わらず、この女生徒は、まるで無気力で、最後まで、されるがままなのだった。

裸の女生徒のことを、ギャル女子たちは、トイレの床の上にと寝かせつけた。冷たいタイルの上に、女生徒の（まだ高校生らしい）ずんぐりした体が横たわった。

「ねえ。早く見せてもらおうよ」
「うん。ほら、あんた。足、広げて！」
ギャル女子たちは、笑いながら、女生徒の腰のあたりを触った。
そして、女生徒の両足を強制的に開かせて、彼女の恥ずかしい部分を、とくと拝見させてもらったのである。
「あ！やだあ。ほんとに、焼けてる！」
「わあ。こんな場所に、この痕があるなんて！みっともなーい！」
ギャル女子たちは、女生徒の性器に確かに例のモノがあるのを確認して、大笑いしたのであった。
例のモノとは、煙草でつけられた丸い火傷のことだ。
この女生徒は、つい最近、スケ番たちの制裁（リンチ）を受けたばかりだったのである。その際に、オマンコに根性焼きされちゃったらしい事が、すでに学校中の評判になっていたのだ。
それまでは元気で明るい性格だった女生徒も、このリンチのせいで、すっかり塞ぎ込み、おとなしくなってしまった。しかも、こんな恥ずかしい焼印を持っていたら、このように、皆から面白がられて、興味本位に覗かれてしまうのだ。
性器にヤキを入れられるような女子は、リンチが終わったあとでも、さらに恥辱の学校生活を送る事になるのである。

了

ワラ人形

私は一大決意を固めていた。私の彼氏を奪った、憎き恋敵のことを、今日こそ、完全に亡き者にしてやるのだ。

その為に、私は、今日は学校だって休んだのである。恋敵（かのじょ）の方は、何も知らずに、普通に高校に通っている事だろう。私は、自宅にいて、アリバイがある状態で、恋敵のことを、見事な完全犯罪で殺してやるのだ。

私は、通販で購入したワラ人形を取り出した。言わずと知れた、呪いのワラ人形だ。今の時代は、こんなものだって、簡単に手に入るのである。そして、このワラ人形こそが、恋敵を殺す為の、私の秘密の道具なのだ。

恋敵の毛髪は、彼女と親しくするフリをして、接近し、すでに入手していた。この髪の毛をワラ人形の中に混ぜれば、全ての準備は完了だ。あとは、このワラ人形を傷つければ、本物の彼女の方も同じように傷つくと言うのが、ワラ人形の効力なのである。

一般的には、ワラ人形には針や五寸釘を刺して、呪うところなのだが、私は、そんなチマチマと時間をかけて痛ぶる気はなかった。憎い恋敵のことは、一思いに殺してやるのだ。

私は、ワラ人形を大きな皿の上に置くと、次に、ライターに火をつけた。そして、その火を、迷わず、ワラ人形に当てがったのだ。乾燥したワラ人形の本体は、たちまち燃え上がり出した。私の眼の前では、恐ろしい火責めの光景が広がったのである。

ワラ人形は、瞬く間に、燃え尽きてしまった。火がおさまった頃には、皿の上には、ワラ人形の骨格に使われていた人型の細いスチール棒だけが残っていた。

恐らく、今ごろは、本物の彼女の方だって、何らかの火災に巻き込まれて、全身を炎に包まれ、骨の髄まで焼けてしまったに違いあ

るまい。ザマアミロなのだ。

ーーーーーーーーーーーーーー

同じ頃、学校では奇妙な珍事が起きていた。

授業を受けていた最中の女生徒の一人が、急に暑がりだしたかと思うと、次の瞬間、彼女の服がいきなり消えてしまったのである。その女生徒は、教室のど真ん中で、素っ裸になってしまったのだった。

了

新入生名簿

我が女学園では、春に新入生が入ってくると、我が校独自の生徒名簿を作る事が慣例となっていた。

何しろ、我が女子校は、名のある富豪や上流社会の婦女子が集まる、超一流のお嬢さま学校だったのだ。そうである以上、預かった生徒たちのセキュリティには万全を尽くし、絶対に間違いは起こせなかったのである。

我が校に入学する女生徒については、まずは、その子の完璧なプロフィールを作成する事となった。

使用する本人確認の写真は、顔写真だけではなく、全身の写真も撮らせていただいた。それも、服を着ていないオールヌードのものをである。まっすぐに立っている姿を正面から写して、いわば、その子の一番ナチュラルな状態の全身像を、学校でも把握して、共有させてもらったのだ。

その全身写真の周囲の余白部分には、その子の体のサイズや特徴などのデータも、びっしり記載させてもらった。

身長体重は当然のことながら、ＢＷＨの数値も必須項目である。さらには、体の各部位についても、一つ一つ、念入りに詳細を記した。乳房の柔らかさ、おへその形状、性毛の濃さまで、この名簿の中では、とても詳しく説明されていたのである。さしずめ、「女の子の肉体図鑑」と言った感じの掲載スタイルなのだ。

なぜ、そこまで執拗に、身体的特徴の情報を収録していたのかと言うと、何と言っても、この子たちは有名人や金持ちの娘だったので、犯罪に巻き込まれる危険性もあったからである。

凶悪犯に誘拐されたり、ある日、突然、蒸発してしまう事もあるかもしれない。そんな場合、のちに彼女らしき惨殺死体が見つかったとしても、顔とか指紋は潰されている恐れもあり、そのような時

には、この名簿と照合すれば、他の肉体の特徴から、その死体が彼女かどうかを一発で確認できる、と言う次第だったのだ。

仮に、殺された場合じゃなくても、その子が家出して、整形して逃げていたとしても、この名簿の情報は活用できた。まさか、全身整形までして、自分の存在を隠すようなマネはしないだろう、と思われたからだ。

なお、名簿の情報欄には、「処女か、非処女か」も、きちんと記入する事が義務づけられていた。もし処女だとすれば、うちの学園に在籍中に不慮にロストバージンをした時、その事で我が校に抗議をするような親御さんもいたからである。お嬢さまは、犯罪から身を守るだけではなく、貞操の面でも、とかく気を配らなくてはいけないのだ。

意外な事に、我が校入学以前に、すでに経験済みだった生徒も、決して少なくはなかったのだった。そのような子については、いつ処女喪失して、これまで何人の男と交わったのかも、きちんと自己申告させた。すると、世間知らずで正直なお嬢さまの中には、「自分の性器はユルめで、あまり殿方を喜ばせる自信がない」なんて事まで報告してくれる子もいたのだった。このような子は、名簿では、「非処女」に加えて「太平洋」とも、はっきり明記された。でも、こんなガバガバお嬢さまに限らず、非処女の生徒に関しては、分かる範囲で、「ノーマル」「名器」などの分類が、名簿内には、しっかりと表示されたのだ。

さて、これほどの完璧な名簿を作っておきながらも、実際は、我が校の生徒が犯罪やら事件などに巻き込まれた事は、まだ一度もなかった。まあ、この平和な世の中に、そう頻繁に事件が起きるはずもないのだ。

そんな訳で、この生徒名簿に関しては、もっぱら、学園の男性理事とか男の教員とかが、密かに愛蔵していたらしくて、こっそりと自分が愉しむ用途でも使っていたようなのであった。

了

あぶないアネキ

俺には、歳が7つ離れた姉さんがいた。この姉さんと言うのが、ガサツと言うか、サバサバしてると言うか、ちょっと性的にだらしない部分があったのだ。その点さえ気にしなければ、普通にイカす姉さんだったのだが。

家族だからなのか、弟の俺の前では、特に、姉さんのその態度は顕著だった。もう俺だって高校生だったと言うのに、姉さんは、俺の股間を平気で触ろうとしたし、また、風呂上がりの下着姿やおっぱい丸出しの姿で、全く気にもせずに、姉さんは、俺のそばをウロついたりもしたのだ。すでに大人の女として、オトコをいっぱい知っていた姉さんとしては、それらの行為も、さほど気にならなかったのかもしれないが。

だけど、こちらは、ちょうど思春期真っ最中の、異性を一番意識する年頃だったのだ。よって、姉さんのこんなお色気ぶりは、そそられた一方で、かなり刺激が強すぎて、俺としては、すっかり閉口していたのだった。なおかつ、姉さんときたら、そんな俺の戸惑っている反応に目ざとく気付いたようで、面白がって、よけいに俺に絡んでくる始末なのであった。

ほんと、姉弟の間に絶妙な年齢差があるのも、困りものなのだ。

ある日、俺が、自分の部屋で、テスト勉強をしていた最中の事であった。その時、俺は、たまたま、保健体育の教科書を開いていた。しかも、男女の生殖器の断面図が描かれていたページをだ。

すると、急に、姉さんが、俺の部屋へと勝手に入ってきたのだった。あの、例の風呂上がりの、やや服装がだらけた格好でだ。

「何やってるの？お勉強？」と、俺のそばに寄ってきた姉さんは、機嫌よさげに、聞いてきた。姉さんの体には、ほんのりと湯気が漂っていた。実際に、ひどくご機嫌だったようである。

だが、いつものように、俺は、姉さんの事をわざと無視して、口をきかなかったのだった。きっと、姉さんには、俺が反抗期か何かのように見えていたに違いあるまい。そんなマセた感じだった俺の事を、姉さんは、ますます可愛らしく思っていたみたいなのだ。

「あら。女の子の体のお勉強をしていたの？」保健体育の教科書を覗き込み、姉さんは笑って言った。

俺は、相変わらず、姉さんの事は無視し続けた。

「ダメねえ。こんなイラストじゃあ。ちっとも参考にならないじゃない」と、姉さんは、可笑しそうに独り言ちた。

俺は、姉さんの方には目も向けずに、ひたすらシカトを続けたのだった。

すると、机に座っている俺の背後で、姉さんが、何やらゴソゴソとやりだした。俺も、つい気になってきたのだが、でも、姉さんのペースに乗せられたくないので、懸命に、目をそらし続けたのだ。

「ほら、弟よ。こっちを見なさい」と、姉さんが、急に、後ろから俺に話しかけてきた。へんに得意げな口調で、俺を挑発するのである。

「もう、うるさいよ！姉さん！」とうとう、俺も振り返ってしまったのだ。

姉さんは、そこで、とんでもない格好をしていた。しゃがみこんで、左右に太ももを開いているのである。そして、パンティは履いていなかった。つまり、姉さんの毛むくじゃらの股間が、そのまんま、モロ出しになっていたのだ。そう、真正面にいた俺からは、姉さんのアレは、完全に丸見えだった。ああ、姉弟とは言え、なんて大胆な！

「やっぱり、実物を見た方が、ずっと勉強になるでしょう？」姉さんは、クスリと微笑み、すまして、そう言ったのだった。確かに、俺も、リアルなオマンコを見たのは初めてだったのだ。

「ぎゃあああっ」と、俺は、思わず、叫んでしまったのだった。

それ以来、俺は、教室やグラウンドなどで、うちの学校の女子が制服や体操着姿でしゃがんでいるのを見かけると、それも、その子がちょうど俺の正面にいたりしたら、この時の姉さんのふしだらな姿を思い出してしまい、そこからの連想で、その女子の裸や女性器までも想像で思い浮かべてしまって、カーッと赤面するようになってしまったのだった。

了

アンマごっこ

うちの高校の女子の間では、最近、電気アンマが流行っていました。

と言っても、本物の電化製品の電気あんま器の事ではありません。あの、相手の股間に自分の片足を突っ込んで、ガクガクと踏んづける電気アンマと言う遊びが、女子どうしの間で、やたらと盛り上がっていたのです。

いい歳して、なに下らない遊びをしてるんだよ、と呆れた人もいるかもしれませんが、実際に、流行っちゃったのだから、仕方がありません。

女子たちだけで更衣室で着替えをしていた最中に、なにげなく、誰かが別の誰かに電気アンマを仕掛けたのが、この流行のきっかけだったとも言われています。

女子たちだって、着替えの途中で、やや開放的な下着姿になっていたりすると、つい、気持ちも甘くなってしまうものなのです。きっと、最初は、仲良し同士で、悪ふざけで、電気アンマを掛け合っただけだったのかもしれませんが、それが周囲にいた女子たちの目にも、とても楽しそうなものに写ったらしくて、その結果、他の女子の間でも、電気アンマを掛け合う事が流行りだしたようなのであります。

もっぱら、このアンマごっこは、更衣室や体育館などにいた時の、体操服姿で行なわれていました。だって、スカートを履いた制服姿の時は、さすがに、電気アンマをやるのは、はしたなかったですから。うちの学校の女子たちだって、そのぐらいの良識や恥じらいは持ち合わせているのであります。

でも、だからこそ、制服以外の時は、なおさら、容赦なく、楽しそうに、電気アンマを掛け合っていたのでした。体操服を着ていた

時よりは、下着姿の時に電気アンマを掛けられる方が、より屈辱的で、皆も湧き上がったみたいです。よって、体育館にいる時以上に、更衣室とかの方が、女子たちも、電気アンマが始まるのを楽しみにしていて、男子は知らない、女子だけの破廉恥な世界が繰り広げられたのです。

さて、このアンマごっこは、あくまで「遊び」でしたので、陰湿なイジメなんかではありませんでした。特定の子や嫌われ者ばかりがアンマを掛けられていた訳なのでもなく、誰もが、平等に、いつ仕掛けられるか分からない状況だったのです。そして、事実として、元気な子や普段はしゃいでる子の方が、電気アンマのターゲットにされる事は多く、掛けられた側も、騒ぎながらも、まんざら嫌がってはいなかったのでした。言わば、電気アンマを掛けられやすい方が、皆の人気者の証しだったのであります。

そのうち、アンマの掛け方も、次第にエスカレートしていきました。最初は、掛ける人と掛けられる人だけの、一対一の電気アンマでしたが、やがては、掛ける側の協力者も現われて、掛けられる子の体や両手をしっかりと押さえ込むようになりました。着替えの最中に掛けられた子の中には、下着までイタズラで脱がされちゃって、素っ裸で掛けられた子もいました。これは、かなり恥ずかしいです。ついには、足以外のもので電気アンマする方法も開発されて、椅子の背もたれや教室の戸の端を使って、股間をグリグリされちゃう子も出てきたのでした。

全く、女子の間で、これほどまでも盛り上がっていたアンマごっこだったのでありますが、しばらく経つと、静かに、そのブームは冷めていきました。やはり、こんな下らない遊びは、そう長くは続かないものなのです。いつしか、更衣室でも体育館でも、誰も他人に電気アンマは仕掛けなくなりました。嘘のように、アンマごっこは、女子の間からは消えていったのです。

と、そのはずでしたが、中には、電気アンマされた時の股間の刺激が快感になり、ちょっと忘れられなくなった女子もいたようでし

た。そんな女子は、アンマごっこブームが過ぎ去ったあとでも、教室や更衣室に一人っきりでいる時に、こっそり、教室の戸や椅子の背もたれ等を使って、誰にも見られないように、秘密の角オナニーもしていたみたいなのでありました。

了

クリトリスって、なあに？

「なあ。聞きたい事があるんだけどよぉ」あたしの馬鹿カレが、いきなり、あたしに話し掛けてきた。
「なによ？」と、うるさげに、あたしは答えた。
「お前も、クリトリスって持ってるの？」
あたしは、思わず、体が熱くなった。
「も、持ってるわよ！なに、急に、ヘンなこと、聞いてくるのよ！」
あたしは、カレに、怒鳴るように言い返したのだった。
やっぱり、こいつは、とんだ大馬鹿野郎なのだ。
この高校生活、ずっと彼氏なしで過ごすのも寂しいので、交際を申し込んできたクラスメートのこの男子と付き合ってみる事にしたのだが、これが思った以上にハズレのカレだったのである。性格的にも立場的にも、あたしの方が上だったので、深い関係になるのは上手に避けて、あたしに都合よく操作していればいいかと考えたのだが、まさか、ここまで頭が悪かったとは！
「ああ。やっぱり、持ってたんだ。じゃあ、お願いだよ。ちょっと、俺に見せてくれよ」馬鹿カレは、なおも、そんな事を言い続けたのであった。
「いやよ。あんた、自分が、なに言ってるのか、分かってるの？」
あたしは、きっぱりと断った。
「だって、雑誌見てたら、突然、知っちゃったんだ。女はクリトリスと言うものを持ってるって。女のアソコって、穴が開いてるだけだと思ってたのにさ。そしたら、すごく気になってきて、どうしても、そのクリトリストとやらを見てみたくなっちゃったんだよ」
「バカじゃない！絶対に嫌よ！」
「なんで？頼むよ。見せてくれたら、それ以上のことは何も求めないからさ」

「うそ！そのまま、あたしに初セックスの相手もねだるつもりなんでしょ？その手には乗らないわよ！」
「違うよぉ。約束する！必ず、クリトリス見ただけで満足するからぁ！」
「もう！やだったら、嫌なの！」
しかし、二人のこのアホらしい言い合いは、結局、あたしの方が折れてしまったのだった。
もし、あたしが断固として拒み抜いたら、この馬鹿カレは、クラスの他の女子にも「クリトリスを見せてくれ」と迫りまくりかねなかったからである。そんな事になったら、今カノのあたしだって恥ずかしいのだ。
そんな訳で、その日の放課後は、この馬鹿カレを、あたしの家へと連れ込んで、あたしの部屋で、こっそりと、あたしのクリトリスを見せてやる事になったのだった。もちろん、そのあとで、カレが豹変して、あたしに襲いかかってきたとしても、あたしは、余裕で、カレをねじ伏せてやる自信もあった。
かくて、あたしの部屋に図々しく入り込んじゃったカレ相手に、あたしは、そっと、自分の下半身を披露したのだ。実は、あたしは、上付きのオマンコだった。だから、ワレメがだいぶ正面まで伸びていて、足を閉じた状態でも、クリトリスは観察する事ができたのだ。これならば、オマンコ全部をカレに見せなくても済んだのである。
あたしは、さっそく、ワレメを押し開いて、あたしのクリトリスをカレに拝ませてやった。ちっちゃな、お豆のようなクリトリスをである。包皮もめくって、見せてやったのだ。
カレは、約束を守り、おとなしく、クリトリスだけを、不思議そうに眺めていた。
「どう？これで満足した？」と、あたしはカレに聞いた。
「うん。ほんとに、こんなものが付いてたんだ。面白ーい。ねえ、触ってもいい？」
ここまで見せておいて、急に拒否する訳にもいくまい。あたしは、

クリトリスに触れる事もカレに許した。
　すると、緊張して震えていたのか、カレは絶妙な指遣いで、あたしのクリトリスを刺激してきたのだ。
　あたしは、ドキッとした。この状態で、あたしも、ちょっと興奮してきちゃったのである。
　カレは、まだしつこく、あたしのクリトリスをいじっていた。もしかすると、クリトリスが勃起しだしたのも、気付かれてしまったかもしれない。
　あたしは、すばやく、上半身の衣類も脱ぎ捨てた。あたしは、寝やすいように、裸になったのである。
「いいわ。あんた、こっちにいらっしゃい」と、あたしはカレに告げた。
「え？どうしたの？」カレはキョトンとしている。
「ほら、セックスしよう。嫌なの？」
「え、え？でも・・・」
「あたしがオーケーだって言ってるのよ。さあ、いいから、来なさいよ」
　クリトリスが感じちゃったあたしは、このままじゃ、欲情した気分がおさまらなくなってしまったのだ。
　こうして、あたしは、童貞だった馬鹿カレの初のお相手をつとめちゃったのである。

了

ヒーロースーツの噂

うちの高校では、毎年、学園祭のステージでは、戦隊ヒーローショーをやるのが伝統になっていた。

はじめの頃は、ウケ狙いのイロモノ企画のつもりだったらしいのだが、しかし、時が経ち、コスプレとかオタク文化などが広く世間に受け入れられ始めると、この戦隊ヒーローショーは、むしろ、我が校の学園祭の名物イベントの一つに加えられるようになっていったのだ。

特に、その年の戦隊ヒーローショーは、ミス学園である蛙里いずみも、このショーに出演すると言うので、なおさら盛り上がりを見せる事となった。しかも、特撮ものに理解のある蛙里いずみは、ちょい役ゲスト出演などではなく、きちんと戦隊ヒーローの一人である紅一点のピンクを演じてくれると言うのだ。あのヒーロー用の全身コスチュームも着てくれて、戦闘アクションまで披露してくれると言うのだから、これが、生徒たちの間でも大きな話題にならないはずがなかったのである。

そして、その年の学園祭は始まり、予想された通りに、今回の戦隊ヒーローショーは、これまでにない大成功をおさめたのだった。たとえ、ヒーロースーツを着て、皆には顔しか見せてなくても、本校のアイドル女生徒である蛙里いずみの人気やオーラは絶大なのだ。彼女の晴れ舞台を観る為に、客席は生徒たちで隅々まで埋まり、ステージには無数の喚声が飛び交ったのだった。

一方の蛙里いずみもまた、自分が一肌脱いだ事で、こんなにも盛大に学園祭を盛り上げる事ができて、とても満足していたようなのであった。

何もかもが良い事尽くめだったようにも思われた。

ところが、この学園祭が終わって、その熱気も冷めやらぬうちか

ら、学内では奇妙な噂が広まり出したのだった。
それが、「戦隊ヒーローのピンクを演じるにあたって、蛙里いずみは、素っ裸で、そのコスチュームのスーツの中に入っていた」と言うものだったのである。
こんな噂の最初の出どころが、果たして何だったのかは、はっきりした事は分かっていない。しかし、確かに、学園祭のその日は異例の暑さだったのであり、通気性の悪いヒーロースーツを普通に衣類の上に着たのでは、かなり熱そうだったのだ。
この蛙里いずみの噂は、本人がこっそりと友達に打ち明けた話だったのだとも言われていた。また、ショーの楽屋で、蛙里いずみだけが個室をあてがわれて、そこで一人で着替えたらしい、と言う情報も、さらに、この噂の裏付けであるかのように言い広められる事となった。しまいには、ヒーロースーツを着込んだ蛙里いずみの写真を画像解析して、その内側が全裸である事を立証しようとする生徒まで現われたのだった。
蛙里いずみ自身は、このようなヘンな噂で学校中を賑わせてしまった事に、苦笑いはしていたようだが、とうとう、自らは真相を語る事はなかったのである。
だが、こんな色っぽい噂が我が校の新たな伝説になった事により、翌年の学園祭からは、ヒーローショーに出演する男子生徒たちの間では、蛙里いずみが着た例のピンクのヒーロースーツを今年度は誰が着るかで、すっかり、取り合いをするようになってしまったのであった。

了

アブダクト

私は、同じ高校に通っていた川上先輩に恋をしていました。

しかし、川上先輩が、全校生徒の憧れの的である容姿端麗なイケメン男子生徒だったのに対して、私の方は、顔も体型もブサイクで、とても川上先輩とは釣り合わない、情けない女生徒だったのでした。

それでも、私は、川上先輩への熱い思いを諦めきれなくて、いつからか、すっかり、川上先輩のストーカーになっていました。川上先輩や他の生徒たちにも気付かれぬように、密かに、川上先輩のあとを付けまわすようになっていたのであります。

その日の放課後だって、川上先輩が、部活が終わった頃を見計らい、そのまま、帰路につく先輩のあとを、見つからぬように尾(つ)けていたのです。

真冬の遅い時間でしたので、空はもう、だいぶ暗くなっていました。ちょうど人通りの少ない路地でしたので、他に歩いている人の姿は、まるで見かけないのです。この広い空間に、川上先輩と、こっそりと尾行している私しか居ないのでした。

その時です。空が急に明るくなりました。突然、私たちの真上に、満月のように輝く円状の物体が現れたのです。もちろん、本物の月などではありません。何か分からない怪しい光球が、いきなり、上空に出現して、私や川上先輩の事を、サーチライトのように照らしたのです。

私も川上先輩も、それぞれ、呆気にとられて、空を眺めました。

で、次の瞬間には、私も先輩も、一面が光り輝いている眩しい部屋にと閉じ込められていたのでした。突っ立った状態で、動く事もできないし、声も出せません。どうやら、川上先輩も同じみたいでした。私たちは、こんな場所で、謎だらけの状況なのに、はじめて、二人っきりで向き合う事になってしまったのです。

憧れの先輩と、こんな形で、二人だけになれて、嬉しいような、とても複雑な気分なのであります。先輩の方も、ぽかんとしていたみたいでした。

すると、そこに、奇妙な謎の声が聞こえてきたのです。

「我々ハ、宇宙人ダ。君タチハ、地球(テラ)ノ研究ノ為ニ、我々ノ手デ捕獲サセテモラッタ」

あら、やだ。これって、テレビのオカルト番組とかで見かけるアブダクト（宇宙人誘拐事件）という奴なのでしょうか。きっと、私と川上先輩は、偶然、未知の宇宙人にと拐われてしまったのです。恐らく、この部屋は、彼らが乗っている円盤の中で、さっき、私と先輩が目撃した不思議な光球こそが、その円盤だったのでしょう。

謎の声は、その姿も現さず、さらに私たちに話し掛けてきました。

「心配スル事ハナイ。ｓａｍｐｌｅ　トシテ、君タチノ肉体ノ　ｄａｔａ　ヲ回収サセテモラッタラ、君タチノ事ハ、無傷ノママ、スグ解放スル。ホンノ少シ、オ付キ合イ願イタイ」

その声のあと、川上先輩は、パッと一瞬で裸になってしまったのでした。

まあ！私ったら、こんな異常な状態で、憧れの先輩のヌードを拝ませてもらったのです。先輩は、想像した通りの、素晴らしい肉体美でした。それも、股の間にあるモノまで見る事ができて、私は、すっかり顔を赤らめてしまったのです。

ところが、それで終わりではなかったのでした。次は、私の着ていた服が、瞬時に消えてしまったのです。そもそも、二人の置かれた立場は同じだったのですから、こうなるのは、当然なのであります。

でも、大好きな川上先輩の前で、裸になってしまうとは！なんて恥ずかしい話なのでしょう！しかも、私なんか、こんな醜い体をしていたのに。

ああ、そうなんです。よく考えたら、宇宙人は、私たちの事を、地球人のサンプル用に拉致したのでした。だから、このあと、私た

ちは、宇宙人の不思議な技術によって、体のデータを細部まで詳しく調べられてしまったのであります。

こうして、宇宙人の科学では、地球人のオスの標準体は川上先輩が、メスは私の体が正式に登録されたのでした。きっと、宇宙人たちは「地球人とは、オスに比べて、メスの姿はなんて醜悪なんだろう」と勘違いしてしまったに違いありません。

了

盗撮カメラ

あるところに、一人の少年がいた。彼は、思春期の真っ只中だった。だから、女の裸にも、とっても興味があったのだ。

彼は、女の人の股間が、見たくて見たくて仕方がなかった。子供だった彼には、オチンチンのない股間と言うものがどんな風なのか、うまく想像できなかったのである。それで、単に、エロい気持ちからだけではなく、科学的な好奇心からも、女性の股間を拝見したくて、居ても立っても居られなくなってしまったのだ。

エロ本やアダルトビデオに手を伸ばすには、彼の年齢はまだ幼すぎた。いや、市販のエロ本やアダルトビデオでは、大事な部分にはモザイクが入っていたので、やはり、彼を満足させる事はできなかっただろう。

かと言って、無修正の違法品を入手する事は、真面目だった少年では、かなり難しそうだった。そもそも、彼は、バカ正直にルールを守って、インターネットの１８禁サイトだって覗いた事がなかったのだ。

仮に、少年に親密な彼女（ガールフレンド）がいたとしても、その彼女（こ）に「体を見せて」と頼む事もできなかったであろう。彼がマジメ人間だった以前に、男女でそんな関係になるには、彼の歳では、ちと早すぎたのである。

そうやって、色々と思い悩んだ末に、少年は、とうとう、盗撮用の小型カメラを購入したのだった。思い切って、誰かの裸を盗み撮りして、この強い欲望を叶える事にしたのである。

たまたま、少年の自宅の近くには、女子高があった。少年は、その女子高に通うお姉さんたちの大人びた制服姿を、いつも、羨望の眼差しで眺めていたのだ。

少年は、夜中、こっそりと、その女子高へと忍び込んだ。そして、

その女子高の中の更衣室に、自分が買ってきたカメラを、見つからないように、隠して、セットしてきたのである。もちろん、自動で、何度でもシャッターが押さされるように、タイマーも掛けておいて。

もはや、立派な犯罪行為なのであるが、それでも、ようやく、少年は求めていたものを手に入れられそうなのだった。

数日後、少年は、再び、女子高へと侵入した。そして、回収したカメラには、動かした形跡やおかしな部分は何も見つからなかった。どうやら、このカメラは、誰かにバレてしまう事もなく、無事に任務を果たして、この更衣室での女子高生たちの着替え光景をたっぷり写真にと収めてくれたようなのである。

自宅に戻った少年は、さっそく、カメラの中身を確かめてみた。デジタルカメラだから、現像の手間もなく、大量の画像をすぐにチェックできるのだ。

こうして、再生した写真群には、少年が望んでいた女子高生たちのガチな裸や下着姿などがバッチリ写っていたのである。全裸の女生徒のショットだって、決して少数ではなかった。

ついに、少年は、憧れの女の股間を目にする事ができたのだろうか？

いや、次々に写真を見漁っていて、少年は、奇妙な事に気が付いたのだった。

よおく見ると、女生徒らのモロ出しの股間のあたりには、いずれも、ぼんやりとモヤがかかっていたのである。そう、モザイクだ。なんと、少年が一番見たかった部分は、全て、モザイクの奥に隠されていて、やっぱり確認する事ができなかったのである。陰毛らしき濃い黒色だけが、かろうじて、モザイクの向こうにあったのが分かったのだった。

果てして、これは、一体、どういう事だったのであろうか。

実は、現在の最新型のデジタルカメラには、盗撮防止用の機能が標準装備されていたのだ。カメラに内蔵されたＡＩが、倫理規制上、問題のあるものが写っていたら、こんな感じで、勝手にモザイクを

かけてくれるような仕組みになっていたのである。これじゃあ、女の股間など、絶対に写せるはずがないのだ。

まあ、もっと知識さえあれば、この少年も、カメラのモザイク機能を裏ワザで解除も出来たのかもしれないのだが、残念ながら、彼は、あまり機械には明るくはなかったのだった。

了

ガバガバな彼女

「ねえ。今度、セックスしようよ」と、カノジョのアイリが、さりげなく、口にした。

「やだよ」俺は、速攻で拒否したのだった。

と言うのも、アイリがガバマンだと言うのは、かなり有名な話だったからだ。その情報は、学校内でも、かなり広く知れ渡っていた。当然、俺も、知らぬはずがなかったのである。

この彼女、アイリは恋多き女子であり、俺のカノジョになる前から、すでに何人もの男子と付き合っていた訳なのだが、実は、その全員と寝ていたらしくて、どうやら、その元カレたちが、彼女の不名誉な事実を言い触らしていたようなのだった。

にも関わらず、俺がアイリと交際する事にしたのは、単純に、俺と彼女はフィーリングが合って、一緒にいるだけでも楽しかったからに過ぎない。アイリは、俺にとっては、家族みたいにホッとできる存在なのであり、だから、抱き合うような恋人関係になれなくても、全然、気にしてはいなかったのだ。

「どうしてよ?あたしって、魅力がない?」アイリは、おかしそうに、さらに俺に絡んできた。

「魅力がなきゃ、付き合ってないよ」

「だったら、エッチも試そうよ」

「でも、気が乗らないんだよ」

彼女は、自分のアソコが太平洋だと皆の評判になっていた事を知っていたのだろうか。俺は、曖昧な態度で、彼女の事をかわし続けた。しかし、彼女も、無邪気に、俺をセックスにと誘い続けたのだった。

そして、いつしか、俺は、本当に、アイリと寝なくてはいけない状況になってしまったのである。

俺は、アイリに引っ張られて、彼女の家へと連れていかれた。俺とアイリは、彼女の部屋にと閉じこもり、二人っきりになったのだ。

アイリは、さっそく、ご機嫌で、服を脱ぎ始めた。彼女は、瞬く間に、俺の前で裸になってしまったのである。アイリは、そこそこに美形だったし、そのプロポーションの方も決して平均点以下ではなかった。

「さあ、あなたも脱いで。始めましょう」アイリは、笑いながら、言った。

ここまで来たら、もう、引き下がれそうにもないのである。

俺は、自分の服を脱ぎながら、アイリの素晴らしいヌードを拝み、一方で、心の中では、彼女のアソコの事をずっと残念がっていたのだった。

こうして、俺たちは、二人とも裸になり、アイリのベッドで愛し合う事になったのである。

子供っぽく見えるけど、確かにアイリは経験豊富だったようで、俺を相手に、彼女は、手慣れた感じで、リードしてくれた。濃厚なキスを交わしたり、一通りの前戯もこなしてから、いよいよ、挿入行為となったのだ。

俺のアレは、アイリの上手なテクニックによって、十分に勃起していた。アイリのアソコの方もしっかり濡れていて、受け入れる準備は万全だった。

そして、俺は、とうとう、アイリのアソコに俺のモノを入れてみたのである。

学校で広まっていた噂は、嘘ではなかった。俺のモノは、全く苦労する事なく、あっさりとアイリの中にとハマってしまったのである。

これが、ガバガバのオマンコと言うものなのか。それにしても、まさか、ここまで手応えがなかったとは。アイリのヴァギナは、全くキツくなくて、まるで締めつけてこなかった。そもそも、穴自体が大きいらしくて、スカスカで、イチモツにそっとサランラップで

も巻いたかのような感覚なのだ。ほんと、「太平洋でごぼうを洗う」とは、よく言ったものなのである。もっとも、俺のアレは、そこまで極細だったつもりはなかったのだが。

さて、俺の方は、これほどまで困惑していたと言うのに、アイリの方は、どうも、特に支障はなかったらしくて、一人だけで気持ち良さそうに喘いでいるのであった。こんな粗器のくせに、自身は十分に感じる事ができたようで、俺のムスコのくわえ心地をめいっぱい満喫しているのだ。

しかし、そこで、俺もハッとしたのだった。なるほど、アイリのアソコは生殖行為には不向きだったかもしれないが、俺の肉棒を優しく包み込んではくれているのである。そう気付くと、彼女の膣内の肉の柔らかさや温かさ、感触などが、あらためて、俺にも、しみじみと感じ取れてきたのだった。さっさと終わらせないから、なおさら、その詳細をじっくりと実感できたのだ。

「どうしたの？動かさないの？中で出しちゃってもいいのよ」ふと、アイリが聞いてきた。

「いや。このままでいいよ。しばらく、この状態でいよう」俺は答えた。

「どうして？」

「お前と一つになった瞬間を、もっと長く噛み締めていたいから」

「ええ！やだあ！なに、言ってるのよお！」アイリが、照れながら、でも、嬉しそうに笑ったのだった。

かくて、俺とアイリは、挿入した体位のままで、そのあと、３０分近くも、戯れあったのだった。ただペッテイングするよりも、二人は、ずっと高揚できたのである。これこそ、彼女のアソコがユルユルで、俺が勃起したままでも射精しなかったからこそ出来た特殊プレイなのだ。

ヘタにすぐにイっちゃうよりも、俺とアイリは、一体化した状態での幸福な歓びを、人一倍、味わったのだった。ああ、その事で、こんなにも幸せを感じられたとは、やっぱり、俺は、アイリの事を

心から愛していたのだ。
　そして、このような事があって以降、俺はノーセックス宣言をやめて、アイリとは、彼女としか出来ない、この無射精ファックを、連日、楽しむようになったのであった。ガバマン、最高なのだ。

了

ｅｖｏｌ（エボル）

ｅｖｏｌ　は、いつだって、人間たちのそばにいる。

例えば、ここに女子高生がいて、彼女が、素敵な男性に、何か優しくしてもらったとしよう。

すると、ｅｖｏｌ　は、たちまち、その女生徒の中に飛び込んでいく。その事で、その女生徒は、何とも言えない幸せな気分になる。俗に言う「キュンとした」とか「心がときめく」と言う状態だ。

しかし、ｅｖｏｌ　の効果は、それだけでは終わらない。ワクワクした女生徒の気持ちは、ｅｖｏｌ　によって、ますます増幅されて、その状態はまだまだ持続し続けるのだ。

ハイになった心は妄想を湧かせて、あの素敵な男性ともっと仲良くなった自分の姿を、女生徒へと思い浮かばせる。あの素敵な男性と、より親しい間柄になり、さらには、お付き合いするようになり、ついには、相思相愛の深い恋人同士となって、とうとう、彼と性行為をする自分の姿まで、女生徒の心の中にと思い描かせるのだ。

その全てが、まさに　ｅｖｏｌ　がもたらした作用である。

ｅｖｏｌ　にかかれば、どんな清純な乙女だって、こんな乱れた気持ちになってしまう。

こうなったら、女生徒だって、その狂おしいほどの思いを、自分の内だけでは処理しきれなくなるのだ。ｅｖｏｌ　は、もっともっと、その女生徒を熱い心にと駆り立てる。

そして、女生徒は、理性で自分を制御しきれなくなり、肉体的にも、淫らな事をしだすのだ。

ｅｖｏｌ　は、彼女の生身の体も十分に熱くしていた。この肉体のうずきを静めるには、もはや、相手（パートナー）がいなかろうと、自分一人の手で満足させてやるしかないのだ。

ｅｖｏｌ　に流されるがままに、女生徒は、服を脱ぎ、裸になり、

自分で自分の体を愛撫する。どんどん　ｅｖｏｌ　が大きくなるものだから、女生徒の方も、とっても気持ち良くなっていく。彼女は、やる事が大胆になって、ｅｖｏｌ　を満たす為に、しまいには、自分の処女性をも自らの手で辱め出す。

ついには、膨れ上がりすぎた　ｅｖｏｌ　が、ぱーんと弾け散った。女生徒が、もっとも幸福な気分に浸れる瞬間だ。同時に、ｅｖｏｌ　が去ってしまったものだから、彼女の興奮していた心も急速に冷めていくのである。

あれほど激情していた彼女は、すっかり、元の状態に戻ってしまう。彼女の中から　ｅｖｏｌ　は居なくなったのだ。あんなに感情が高まっていた事もケロッと忘れて、彼女は、普段の慎ましい女の子にと帰っていくのである。

だけど、また、素敵な男性に心を揺さぶられるような事でもあれば、ｅｖｏｌ　は再び彼女の元へと舞い戻り、その心の中を淫靡な世界で満たすのだ。

ちなみに、中世ヨーロッパの夢魔（ｎｉｇｈｔｍａｒｅ）と同じで、ｅｖｏｌ　にも性別があった。雄の　ｅｖｏｌ　は女性に取り憑いて、雌の　ｅｖｏｌ　は男性にと取り憑くのだ。もっとも、昔と比べると、最近の　ｅｖｏｌ　は、だいぶ雌の方が弱くなってしまったようである。だから、現在では草食系男子が多いのだ。

了

お漏らし

ある大きな高校での出来事です。

その日は、真冬でも特に寒かった一日でした。短い休み時間には、トイレの前にも、沢山の生徒が並びました。たとえ暖房のついた教室で授業を受けていても、生徒たちは、そこまで体が冷えちゃったのです。

と、女子トイレの方で、思わぬ、どよめきが起きました。

見ると、トイレに並んでいた女生徒の一人が、我慢しきれずに、漏らしてしまっていたのです。その子は、放心した表情で震えて、その足もとには小さな水たまりがありました。

それに気が付いて、トイレに並んでいた他の生徒たちも騒いでいるのです。これらの生徒たちも、こんなハプニングを目の当たりにして、すっかり動揺しているのであります。

でも、何と言っても、漏らしちゃった当の女生徒が一番うろたえていたのでした。

彼女は、周囲のざわめきに耳を塞ぎ、半泣きの状態で走り出しました。とにかく、針のむしろのような、この場所からは、ひとまず退散したいのです。

彼女は、オロオロと、廊下を走り続けました。すれ違う生徒たちが、怪訝そうに、彼女の方を眺めていましたが、その視線さえもが、彼女にとっては、たまらない苦痛なのです。

最終的に彼女が逃げ込んだ場所は、保健室でした。やっぱり、困った事があった時は、保健室に行くのが、もっとも安心するのです。

たまたま、その時、保健室に養護教諭はおらず、他に訪れている生徒もいませんでしたが、でも、女生徒にとっては構いませんでした。避難場所として使えれば、それだけで十分なのです。

気持ちが落ち着いてきた女生徒は、濡れていたスカートと下着を

脱ぎました。そして、脱いだ衣類を軽く水洗いしてから、そのへんに干すと、下半身が裸のままで、しばらく、保健室の中でくつろがせてもらったのです。

チャイムが鳴り、次の授業が始まりましたが、その女生徒は、この時間は欠席する事にしました。そのまま、温かい保健室の中で、休ませてもらったのです。

授業が終わる頃には、女生徒もだいぶ平静を取り戻し、濡れていた衣類の方もすっかり乾いていました。彼女は、使えるようになったスカート類を再び身につけると、ようやく、授業に戻る事にしたのです。

しかし、自分の教室に入ってみると、彼女は愕然としました。何やら、黒板にイタズラ書きが描かれているのです。

それは、この女生徒の事をからかったものでした。

粗雑なマンガ絵で、彼女の似顔絵の全身像が描かれていて、それもオールヌードで、しかも、股間のあたりからはオシッコがジャアーッと下へ垂れ流れているような描写が描き込まれていたのです。

これを目にして、女生徒の顔は、カーッと真っ赤になってしまったのでした。

高校生にもなって、お漏らしするような生徒は、こんな目にあってしまうものなのです。

了

データ社会

僕は、君たちよりも１０年ほど未来の世界で生きている。

僕のこの時代では、君たちの世の中よりも、ずっと、情報のデジタル化が進んでいるのだ。ありとあらゆるものがデータ化され、さらには、それらの情報を諸個人が自由に使えるようになっていた。もちろん、そのような状態を危険視する声もあったのだが、実際にそのような環境になると、あまりにも便利で、たちまち、人類は、このような社会にドップリ浸かってしまったのだ。

朝起きると、人々は、真っ先に、データ眼鏡（スコープ）を着用するのが習慣となっていた。これを掛けていないと、情報を十分に活用できないからだ。当然、僕も、起床したら、すぐにデータ眼鏡を手に取る訳である。

データ眼鏡は、一見、サングラスのような形をしていた。しかし、その正体は、レンズの部分が精巧なスクリーンで、インターネットで取り寄せた情報を、これを掛けている者にだけ見せてくれる仕掛けになっているのだ。つまり、その場の状況に合わせた情報を、この眼鏡は、常に着用者に提供してくれたのである。

そして、全ての人間が、このデータ眼鏡を利用していたものだから、逆に、この眼鏡を使っていないと、他の人の情報処理のスピードに追いつけないような有様にもなっていたのだ。

データ眼鏡を掛けていると、この眼鏡は、見たもの、聞いたものの情報を瞬時に教えてくれた。例えば、朝食を食べる為に、テーブルについたとしよう。すると、目に写った朝食用の料理の細かい情報が、すぐさま、データ眼鏡のスクリーンにも映し出されて、必要以上の知識まで入手する事ができるのだ。

眼鏡の内側に、いちいち、そんなデータが表示される事を、君たちはうっとおしいと思うかもしれないが、慣れている僕たちは、す

でに適応してしまって、当たり前のように使いこなしていた。と言うか、一度、データ眼鏡のある生活に馴染んでしまうと、むしろ、便利すぎて、とても止められなくなってしまうのだ。まさに、データ眼鏡は、生活していく為の重要な要になったのである。

こうして、データ眼鏡は、朝食以外のものでも、何から何まで、接触したものの情報を伝えてくれた。だから、いかなる事態に遭遇しようと、データ眼鏡の指示に従えば、常に安心して、やり過ごす事ができたのだ。データ眼鏡は、ただ情報を与えてくれるだけではなく、時には、次に自分がすべき行動や対応まで丁寧に教えてくれたのである。自分で判断するよりも、データ眼鏡の提案の方が、いつだって正しかったのだ。

家の外に出て、他人と出会った時などに、このデータ眼鏡の指図は、特に重宝した。データ眼鏡は、相手の今の状態まで、詳しく伝えてくれたのである。データ眼鏡は、常時、インターネットで繋がっている事によって、諸個人の現状の情報まで、正確に把握しきっていたのだ。

その事によって、人間同士での余計な腹の読み合いもしなくて済むようになり、よって、皆が本心だけで話し合えるようになった。さらに、データ眼鏡が、良き対応法まで指示してくれるものだから、それに沿って行動すれば、お互いが嫌な気持ちや好ましくない結果になる事もない。それどころか、悪い考えを持った人間との遭遇は事前に回避する事もできたので、安易に犯罪に巻き込まれる心配すらも無くなったのだ。

さて、道を歩いている最中、僕は、同じ学校（スクール）に通っているマーヤと会った。彼女は、僕にとって、いわばカノジョに当たる存在だ。データ眼鏡の情報提供によって、二人は自分の詳細についてを交換しあい、結果として、相性がバッチリだったので、安心して交際する事にしたのである。もちろん、上手に付き合う為の段取りでさえ、データ眼鏡の方が手際よく進めてくれた。

本日、顔を合わせたマーヤは、いつになく、機嫌が良かったのだ

った。どうやら、性欲の方もかなり数値が高いのだ。データ眼鏡は、そんな情報まで知っていて、僕にも教えてくれたのだった。

これなら、今日は、彼女とセックスも出来そうなのである。そして、僕がそんな事を考えていた事は、さっさとデータ眼鏡が見抜き、マーヤの方にも教えてしまっていたのだった。

二人の意志は一致した。僕たちは、さっそく、今日はセックスをする事にしたのである。無用な駆け引きや回りくどい手続きなどは、データ眼鏡のおかげで、いっさい必要ないのだ。恋人同士は、自分の心に正直になって、いくらでも、自由に愛し合う事ができるのである。

僕たちは、性愛行為ができる施設へと立ち寄った。そこで、個室とベッドを借りて、たっぷりとセックスを楽しませてもらったのだ。

服を脱ぎ、裸になって、セックスをしている最中でさえも、僕たちはデータ眼鏡を外さなかった。

データ眼鏡は、セックスの手順すらも、細かく手ほどきしてくれたのである。データ眼鏡には、マーヤの肉体の数値、すなわち、身長とか体重とかＢＷＨだけが表示されたのではない。彼女の体のどの辺が、今、刺激を求めているのかとか、女性器（ヴァギナ）がどれだけ熱くなっているのか、までもが提示されたのだ。きっと、マーヤの方も、僕がどのくらい興奮していて、勃起の程度が十分かどうか、などが読み取れていたのだろう。

データ眼鏡によって、射精すると一番気持ちいい瞬間や、中出ししても妊娠しない確率までもが分かった。その通りに行動すれば、もっとも満足できるセックスも実行できるのだ。

僕たちの時代は、性の快感だって、全て、データ眼鏡の指示に任せておけばいいのである。

了

コンプレックス　ＰＡＲＴ２

私は、自分のおっぱいに、強いコンプレックスを抱いていました。まだ小さかった頃は、まるで気にもしていなかったのです。近所の同世代の子供たちと一緒に、裸になって、笑って、庭を駆け回ったりもしたものなのでした。

しかし、小学校を卒業するあたりの、思春期が始まった時期から、私は、なんとなく、自分の乳房が、他の女子と比べて、やや異なっている事に気が付いたのです。

私の乳房の乳輪は、やたらと大きかったのでした。小さな乳首の周りに、円を描いて、ぐるりと、かなり大きく広がっているのです。直径は、５センチ以上はあったでしょうか。色も濃かったものだから、乳房のてっぺんに、なんだか、褐色の丸い絆創膏でも貼っているようにも見えたのでした。

乳房が膨らんできたからこそ、そのような特徴が、より浮き彫りになって、目立ってきたのでありましょう。

学校の着替えの時間などで、私は、他の女子たちは、私ほど乳輪がでかくない事を知りました。皆、乳輪は全然小さくて、綺麗なピンク色をしているのです。そして、その上に、可愛い乳首がちょこんと付いていました。醜い、潰れたような乳輪の持ち主は、どうやら、私だけみたいなのでした。

いつからか、私は、恥ずかしくて、同性の前でも、自分の乳房は隠すようになりました。友人たちは優しかったので、私が頑なにおっぱいを見せないようにしていても、特に何も言いはしませんでした。貧乳をごまかす為にパットを挟んでいた、程度の事に思われていたのかもしれません。でも、おかげで、長い間、私の秘密は、安心して、他人には隠し通せたのです。

だけど、高校に進学したあたりから、少し雲行きが怪しくなって

きました。私に、同級生の彼氏ができたからです。私も、その彼氏のことは、心から愛していました。しかし、彼氏の方は、次第に、私の体も求めるようになってきたのであります。

私だって、ほんとは、早く、彼に自分の全てを捧げたかったのです。だけど、彼に、あのイビツな乳輪を見られて、失望されるのが、すごく怖かったのでした。

それでも、しばらく悩んだ後で、ようやく、私にも決心がつきました。彼に軽蔑されるのも覚悟の上で、私は、彼の前で素肌を晒す事を決めたのです。

私と彼は、抱き合う前提のもとで、お互いに、自分の服を脱ぎ合いました。ところがです。

「わあ。ママのおっぱいみたいだ」私の乳房を見て、彼氏は、嬉しそうに、そう叫んだのでした。

彼は、実はマザコンだったのです。私の特徴的な乳房は、どうやら、彼には、年季の入った母親のおっぱいのように写ったらしいのでした。ほんとは、まだ誰にも触らせた事のない清楚な乳房だったのに。

こうして、私の心配は取り越し苦労で終わりました。このあと、私たちは、どちらも、十分に満足のできるセックスを楽しんだのでした。

了

コンプレックス　ＰＡＲＴ２（後書き）

追記

彼は、前戯の中でも、私の乳首をしゃぶる行為を特に好みました。私の方も、大きな乳輪のザラザラした表面を軽く指先でなぞられると、どうも、そこが性感帯だったらしくて、ブルッと震えちゃうほど感じてしまったのでした。

人間市場

２０ＸＸ年、地球は、瞬く間に、食人種族（サイクロプス）によって占領されてしまった。それまで、地球の覇者だった人類は、いきなり、支配階級から食われる側にと転落してしまったのである。サイクロプスは、地球内でもアンバランスに個体数の多かった人類を、食料にして間引きしてしまう方針を採択したのだ。

もはや、人類には、尊厳も誇りもなかった。サイクロプスの管理下に置かれた全人類は、ただ食べられるだけの家畜の扱いを受けるようになったのである。

サイクロプスの居住区域ならば、どこでも、人間の肉や臓物が、当たり前のように、食用にされていた。当然ながら、食料品売り場にも、加工された人肉が大量に並んだ。

そして、食材市場に行けば、生きた人間だって、そのまま買う事が出来たのであった。食材市場（そこ）では、まだ無傷の体の人間が、意識もある状態で売られていたのである。

彼らは、市場の陳列台の上に、ズラリと並べて、置かれていた。当然ながら、服などは着せられていない。しかし、様々なポーズは取らされているのだ。少しでも美味そうに見せかける為である。我々人類だって、食品には、購買欲をそそるように、色々と形を与えたり、デコレーションしていたではないか。

ある者は、胸を張って、直立で立っていた。また、ある者は、多数の光るアクセサリーで身につけて、体をしなやかに曲げて、媚びていたのであった。そうやって、商品である自分が、少しでも魅力的に映るように、アピールを強いられたのだ。

彼ら食用人間は、サイクロプスに圧倒されて、すっかり骨抜きにされてしまい、意識はあっても、すでに逆らう意志や逃げ出す気力もなくなっていた。いずれは誰かに買われて、食べられてしまう時

が来るのを、この陳列台の上で、何もせずに、おとなしく待っていたのである。全く、なんて、哀れな有様なのであろう。

さて、来店していたサイクロプスの一人が、ついに、この陳列台の人間の一つに目をつけた。それは、若いメスの個体だった。まだ人類が自由に生きていた頃は、女子高生だった人間である。

彼女は即購入され、自分の新しい持ち主のサイクロプスに連れられて、この食材市場から出ていった。と言っても、状況が変わっても、相変わらず、彼女は従順なままなのである。どうせ、抵抗しても、こんな素裸の丸腰状態では、絶対にサイクロプスには勝てるはずもないし、ただ自分の寿命を早く縮めてしまうだけなのだ。

彼女は、サイクロプスが経営する会社らしき建物へと連れてこられた。その中へと強引に入れさせられ、しばらく通路を渡った末に、彼女は、豪勢な扉の前にと到着したのである。

どうやら、その扉の奥にあるのは、このサイクロプスの会社の所有者が住んでいる部屋らしかった。

「あとは、君一人で行きなさい。そこに、私たちのリーダーが待っている」彼女を連れてきたサイクロプスが、ヘタクソな地球人語で、彼女に伝えた。

彼女は、おどおどしながら、言われた通りに、目の前のドアを開いた。そして、一人で、その中へ入っていったのである。

人間の文化でも、生きた動物をそのまま食べてしまう活き造り料理があったものだ。その点については、サイクロプスだって、さして変わりはしなかったのである。果たして、彼女は、この会社の所有者の食の好みで、このあと、いきなり、生きながら食べられでもするのだろうか。

「おお。来てくれたね。待ってたよ。さあ、安心して。ここでは、リラックスしていいんだよ」

意外にも、彼女を出迎えたのは、人間の優しい声だった。この部屋の中にいたのは、サイクロプスなどではなく、一人の人間の男性だったのである。

「この会社は、サイクロプスに気付かれぬように、ひそかに、僕たちが乗っ取った。いずれは、僕たちの勢力をもっと拡大して、地球の支配権をサイクロプスから人類へと奪い返してやるつもりだ。その為には、僕たちの仲間をどんどん増やしていく必要があるんだよ。無気力な食用人間になりきっていない人間たちをね。君には、僕のパートナーとなって、そんな子供をいっぱい産んでほしい。どうだい、協力してくれるよね？」その頼もしげな男性は、会ったばかりの彼女に、爽やかに、そう告げたのだった。

彼女も、パッと笑顔になったのだった。

了

女子寮の管理人さん

俺は、ある有名な女学園の生徒寮の管理人をやっている。

女の子ばかりの女子寮なんて、同性が管理人を務めた方が良さそうな気もするが、実は、この女子寮は、寮の管理以外の仕事もあったので、俺のようなゴツい男の方が適任だったのだ。

その寮の管理以外の仕事と言うのが、寮で暮らしている女生徒たちを、学業の邪魔となる性の誘惑から守る事だったのである。

男の管理人のお前が一番危険なのではないか、とツッコまれそうだが、俺は、女の実物には全く興味のない異常性愛者だったので、なんら、問題なかったのだ。学園長も、俺のその性癖を知っていたからこそ、俺を抜擢してくれたのである。

しかし、町をうろつく若い男どもは違うのだ。連中は、隙あれば、うちの女子寮の生徒たちを狙って、甘い誘いの手を伸ばしてくるのである。彼らが、まんまと、うちの女子寮の子をたらしこんで、この女子寮内にまでズカズカと入り込んでこようとした時に、俺が大いに活躍する事となったのだった。

俺は、管理室の監視カメラによって、女子寮の中の全てを見張っていて、その何もかもを掌握しているのだ。俺に見つからずに、部外者が女子寮に踏み込む事などは不可能なのである。

寮生が、こっそり、男を寮内に連れ込もうとすれば、その前には、たちまち、俺が立ちふさがった。巨漢でコワモテの俺を目にすると、ほぼ全てのナンパ男どもは、それだけでビビって、すぐに逃げ出してしまったのだった。こうやって、俺は、常に、寮の入居生徒たちを、悪い男どもから守り続けたのだ。

ただし、かわいい寮生たちをイケナイ欲望に誘惑するのは、生きた男ばかりとも限らなかった。

俺は、寮生の住んでいる各部屋にもカメラを取り付けていて、そ

の行動を逐一監視していたのだが、彼女たち自身が、度々、良からぬものを購入して、自分の部屋に持ち込んだりしていたのだ。

エロ雑誌とかアダルトビデオぐらいならば、まだ可愛い方だったのだが、オナニー用の大人のオモチャを持っている子も、決して少なくはなかった。そう、ディルドとか電動バイブなどを、彼女たちは、こっそりと手に入れて、自分の部屋に隠し置いていたのだ。

そんな女の子たちは、夜になって、自分の部屋に閉じこもると、人知れず、激しい自慰行為に明け暮れていたのだった。処女膜もズボズボ破ってしまって、一晩中、性の快楽に耽っているのだ。こんな事では、学業の方にだって、明らかに疎(おろそ)かになってしまうのである。

だからこそ、俺は、昼が来て、寮生たちが学校の方へと行き、寮内が空っぽになると、合鍵を使って、それぞれの生徒たちの部屋を回り、持ち物点検を行なわせてもらったのだった。監視カメラのおかげで、すでに誰が何を隠し持っているかは、みんな分かっていたので、実に簡単な作業なのだ。

大人のオモチャはもちろん、少しでもイヤラシイ物品は、全て、回収した。そして、作業が終わると、何事もなかったように、部屋は元どおりに閉めておいたのである。

その夜、部屋に戻ってきた寮生たちは、いきなり、エッチな私物が無くなってしまったものだから、さぞビックリした事だろう。しかし、モノがモノだけに、人には話せないので、その件で盗難騒ぎになるような事もなかったのである。彼女たちは、諦めて、いかがわしい遊びをやめるしかなかったのだ。

俺はと言えば、こんな任務に、大変やりがいを感じていたのだった。前にも書いたが、俺は、生身の女には、まるで興味がないのだ。醜男だから、寮の女の子の方から色目を使われる事もなかった。

でも、俺は、女の実物には関心はなかったが、スクリーン越しに見る女のエロい姿には、ものすごく興奮する性格(タチ)だったのだ。だから、監視カメラで見物する寮生たちのあられもない姿こそ、俺にと

っては最高のご褒美だったのである。
部屋にカメラがあるとも知らない彼女たちは、様々な大胆な姿を、俺に披露してくれた。裸で部屋の中を歩き回ったり、シャワーを浴びたり、トイレで排泄したり、時には、前述したようなオナニー光景も見せてくれたのだった。それこそが、俺には、何物にも変えられない報酬であり、彼女たちの姿を見ながら、監視カメラの前で、俺は気持ち良くセンズリもやらせてもらったのである。
彼女たちから没収したディルドや大人のオモチャのたぐいも、全部、管理室の中に保存していた。俺は、覗き以外にも、フェチの嗜好もあったのだ。女の子たちのアソコをくぐったバイブやディルドなのかと思うと、これらをイジるのもまた、ひどく、俺を欲情させたのだった。これらの道具を舐めたりすると、間接的に、女の子のアソコに触れた気分にもなれたのである。
もっとも、俺としては、そこまでの行為で満足だったのであり、それ以上の事まで求めて、本物の女子を襲いたいという気持ちにはならないのであった。学園長も、俺の事を正確に分かってくれていたのであり、この任務を完全に俺に任せ切っていたので、解任されるような事も絶対にないのである。
俺にとって、この女子寮の管理人こそは、まさに天職なのだ。

了

就活

「もしもし。こないだ、面接に来てくれた女学生さんですね？」と言う電話が、いきなり掛かってきた時は、私も思わず慌ててしまったのだった。

私は、もうすぐ高校を卒業する身なのであった。進学はせず、就職する予定だった。だから、すでに、地元のいくつかの会社にも面接を受けに行っていたのだ。

すると、冒頭のような電話が、突然、私のもとに掛かってきたのだった。採用の結果だけならば、まずは手紙で教えてくれそうなものである。わざわざ、電話で連絡を取ってくるとは、きっと、よほど大事な用件なのだ。

「我が社では、あなたの事を採用する方向で話を進めているのだけれど、一つだけ、気にかかる点があったのよ」と、電話の向こうの声は、会話を続けた。

「それは、一体、何ですか？」私が尋ねる。

「面接では、あなたは、今はお付き合いしている男の子はいない、と言ってたわよね。それって、まだ処女って事なのかしら？」

「は、はい。そう言う事になります」

「じゃあ、オナニーとかもした事がないの？」

「は、はあ。まあ」

全く、答えづらい事を聞いてくるのである。

「それだと、ちょっと困るのよ」と、相手はとんでもない事を言ってきたのだった。

「なぜですか」私は聞いた。

「社会人になってから、性愛の歓びを知った女の子の中には、その甘美な快感に衝撃を受けて、すっかり夢中になってしまい、それっきり、仕事に手がつかなくなってしまう子もいるのよ。うちとして

はね、それだけは、ちょっと避けたいところなの」
「だったら、どうすればいいのですか」
「これから、うちに来てもらえる？今のうちに、女の歓びを教えてあげるわ」
私は、少し躊躇したが、でも、その会社は私の第一志望だった。だから、よくよく考えた末に、相手の提案に応じたのだ。
私は、その会社の本社を訪ねた。そこでは、いずれは私の上司となる女性社員たちが待っていた。
「よく来てくれたわね。こっちに来て」
彼女たちは、私を会社の奥にある小さな部屋へと案内してくれた。そこは、窓のない、殺風景な、隠し部屋のような個室だった。
「それじゃ、さっそく服を脱いでくれる？もちろん、下着も全部よ」
私は、言われるがままに裸になった。そして、ソファの上に、足を開いて、座らされたのである。
私の周りには、女性社員たちが群がった。中でも、女上司は、音を立てて動く電動バイブを構えているのだ。
「安心して。すぐに済むわ。私たちも、この儀式を経てから、入社したのよ」女上司は優しい声で言った。
他の女性社員たちが、いっせいに、私の体を愛撫し始めた。なるほど、確かに、性技とは、この世のものとは思えぬ快感なのだ。
「ごめんなさいね。本当は、男性社員に手伝わせた方が良かったのかもしれないけど、でも、その結果、恋愛感情が芽生えてしまったら、それはそれで、面倒でしょう？」彼女たちが、申し訳なさそうに、説明した。
最後に、女上司が、メインの電動バイブを、私の陰部へと、ゆっくりと挿入したのだった。これも、体がシビれるほどの快感だったのである。私は、そのまま、初めての絶頂にと達した。
こうして、私は、処女の喪失とエクスタシーをいっぺんに経験したのだった。
その後、私は、この会社にと無事に就職した。今では、何事もな

く、元気に、脇目も振らずに働いているのである。

了

写真コンテスト

カレが、私に「写真のモデルになってほしい」と持ちかけてきました。それも、ヌードを撮りたいと言うのです。

私の高校では、近々、写真コンテストが開かれる予定でした。私のカレは、特に写真好きだった訳でもなかったのですが、突如、このコンテストに参加すると言いだしたのです。

コンテストは、誰でも参加可能でした。なおかつ、かなり規制のゆるいコンテストだったのです。だから、カレも、急に、大好きな私のことを写して、皆にも見せびらかしたくなったのでしょう。

私は、カレの前では、すでに何度も裸を見せていました。でも、それを他の人にも晒すとなると、ちょっと話が違ってくるのです。

私が嫌がると、カレは、今度は「大丈夫。悪いようにはしないから」と言ってきました。

そう、この写真コンテストは、応募作品の制作方法は、何でもアリだったのです。原型の写真の状態で出品する必要はありません。あとから、加工したり、ＣＧの画像を付け足しても良かったのです。

それならば、私の裸の写真だって、きっと、カレは、人前で見られても恥ずかしくないものにと、上手に作り直してくれる事でしょう。私の体をベースにして、全く別ものの、芸術作品の美しい裸婦像みたいなものにだって仕上げてくれるかもしれません。

こうして、私は、ようやく、カレの写真のモデルになる事を承諾したのでした。私は、カレに、自分の生まれたままの姿を撮らせてあげたのです。

それから、数ヶ月が経ちました。例の写真コンテストは無事に開催され、その結果も発表されました。

すると、なんと、カレが写した私の写真は、優秀賞に選ばれてしまったのでした。

授賞式の時に、その入賞した写真を初めて見せてもらって、私は、さらに驚く事になりました。

その写真は、何の加工もされていなかったのです。私のそのままの裸が写っていたのでした。カレは、撮影した写真に、胸や股間へのモザイク処理すら加えていなかったのです。だから、お世辞にもスタイルがいいとは言えない、私の稚拙な体型のヌードが、全部、見えていたのであります。

私は、すっかり、狼狽してしまいました。今にも顔から火が出そうなのです。

それなのに、審査員や一般の生徒たちは、カレの写真を絶賛してくれているのでした。へんにデフォルメしておらず、リアルな女子高生の裸体っぽいところが良い、と評価しているのです。どうやら、彼らは、何もかも丸出しの私のヌードを、ＣＧで上から描き直したものだと思っているようなのでした。それで、私の本物の裸とも認知しておらず、違法画像だとも見なされなかったみたいなのです。

皆からベタ誉めされて、カレはとても得意げな様子でした。まさに、カレの作戦勝ちです。

私は、真相を明かす事もできず、実にもどかしい気持ちになってしまったのでした。

了

汚れた食材

あたしは、シャワーを浴びていた。それが、出荷前の規則なのだ。

あたしは、食人種族（サイクロプス）の食い物となる食用人間なのである。

いつ頃だったか、地球星は、サイクロプスの侵略を受けて、あっと言う間に征服されてしまった。これまでは地球の弱肉強食の頂点にいた人類は、その座をサイクロプスに明け渡してしまったのだ。代わりに、全ての地球人は、サイクロプスに一括管理されて、その食料にされてしまったのである。

あたしは、まだ地球人がこの星の支配者だった頃のことを知らない。サイクロプスが侵攻して来たのは、それほど昔の話だったのだ。もし地球人が自分の社会を持っていた時代だったならば、今の年齢のあたしは、ちょうど、女子高生と呼ばれる存在になっていたのだと言う。

でも、現実のあたしには、そんな話は夢物語に過ぎない。実際のあたしは、生まれた時から、食料センターの家畜部屋で飼われていて、沢山の同胞とともに、食材として出荷される日を待っていたのだ。

その時、つまり、あたしの出荷日は、突然、訪れた。あたしは、その日も、他の選抜メンバーとともに、訳も分からぬまま、シャワーを浴びせられたのである。

ところが、そのあと、あたしだけは、注文先へと搬送されなかったのだった。体を洗ったあとの最後の点検で引っかかってしまったからである。あたしは、シャワーを浴びた直後に生理が始まってしまったのだ。

サイクロプスたちは、やたらと、食料の清潔さを気にしていた。生理中のあたしは、不良品のレッテルを貼られて、土壇場で、不採用になってしまったのである。あたしは、今まで住んでいた家畜部

屋へと戻された。しかし、一緒にシャワーを浴びた仲間は、二度と、その姿を見せる事はなかった。彼女たちは無事に出荷されて、サイクロプスたちのご馳走になってしまったのである。

この件があった事で、あたしは、食料にされずに、しつこく生き長らえる方法に、気が付いたのだった。

つまり、毎回、シャワーのあとの点検で引っかかってしまえばいいのだ。そう、体が汚れていればいいのである。そしたら、返品となり、いったん家畜部屋に戻されてしまうのである。

何度も返品になったら、今度は欠陥品のレッテルを貼られて、廃棄処分される恐れもあったかもしれないが、幸い、あたしはまだ若かった。若い食用人間は、肉が柔らかくて、高価で売れるようで、簡単には廃品扱いされずに、しばらく、様子を見てもらえるみたいなのだ。

さて、体を汚すと言っても、いつも、都合よく生理になれる訳でもない。かと言って、涙を流したり、脱糞する程度の汚れでは、不採用にはならないらしいのだ。月経のような、もっと体の内にもこびり付いたような、特殊な汚れ方じゃないと、ダメみたいなのである。

そこで、あたしが閃いたのが、愛液なのだった。実は、あたしは、性欲がかなり強い方だったのである。少し触っただけでも、オマンコから大量の愛液を噴き出す事ができた。あたしは、そうやって、シャワーを浴びたあと、すぐにオナニーをして、股間を愛液まみれにしちゃったのである。

この方法は大成功だった。性器がビチョビチョだったあたしは、毎回、最後の点検で引っかかってしまったのだ。

これには、点検したサイクロプスも、さぞ困った事だろう。愛液が漏れてる食用人間では、とても出荷する事ができないのだ。かと言って、連中も、愛液が出るのは、人間のメスの生理現象だと知っているので、うまく制御しきれないのである。そして、廃品処理にして、さっさと捨ててしまうには、あたしは、まだまだ若くて、あ

まりにも勿体ないのだ。
　こうして、あたしは、繰り返し繰り返し、出荷されるのを回避したのだった。もちろん、こんなのは、しょせん、その場凌ぎだった事は分かっている。いずれは、しびれを切らした飼い主によって、あたしも、強引に出荷されてしまうか、あるいは、廃棄処分されてしまうのであろう。しかし、そうであっても、今のあたしは、とにかく、どんな手を使ってでも、少しでも生き延びたかったのだ。
　やがて、とうとう、あたしの策略も通用しない時がやって来た。その日も、あたしは、いつものように、シャワーを浴びたあとに、自慰をして、アソコをグチョグチョにしていた。ところが、この時ばかりは、点検者も、あたしが濡れているのを見て、逆に満足していたみたいなのだった。
　どうやら、食用人間が愛液を出していても、構わずに購入してくれる出荷先が見つかったみたいなのだ。
　これは、完全に絶望的だった。もはや打つ手はないのである。あたしは、青ざめて、全てを諦めて、おとなしく、出荷されたのだった。
　だが、あたしには、意外な運命が待っていたのである。
　あたしを購入した、あたしの新たな主人となるサイクロプスは、あたしを殺したりはしなかった。あたしの肉を食べるつもりはなかったのである。代わりに、家畜部屋に閉じ込めたあたしに、好きなだけ、オナニーをやらせてくれたのだった。
　サイクロプスにも、それぞれ、食の好みがある。あたしの主人は、地球人のメスの愛液を好んで舐めていたのだった。あたしは、乳とか卵みたいに、愛液をいっぱい生産する家畜として、このサイクロプスに買ってもらえたのだ。
　あたしは、またしても、命拾いしたのである。少なくとも、愛液を出し続ける限りは、食肉にされてしまう事もなさそうなのだった。
　そんな訳で、あたしは、今でも、この主人にと飼われているのである。

了

人格分裂

私は、同級生の彼氏のＤＶで悩んでいました。彼は、やたらと気まぐれで、急に不機嫌になったかと思ったら、いきなり私にと暴力を振るってくるのでした。おかげで、私は生傷が絶えません。彼と一緒にいる時は、私は、いつも、彼の豹変に怯えていました。

そんな彼氏なんかとは別れてしまえばいいのに、と皆さんはおっしゃるかもしれませんが、彼だって、優しい時は、私にも、とても優しくしてくれるのです。私には、どうしても、彼を切り捨てる事ができず、結局、ダラダラと恋人関係を続けていたのでした。

ある日、彼氏の暴力があまりにもキツすぎたものだから、私は、思い切って、学校の理科の先生に相談してみる事にしました。決して大胆な事とかを考えていたのではなく、理科の先生ならば、気性の荒い人をリラックスさせる方法でも知っているのではないかと思ったのです。

すると、先生は、化学的手段を試してみよう、と言い出して、怪しい薬品を私に渡してくれたのでした。

なんでも、その薬は、人間の心を分解してしまい、良い心だけを残して、悪い心は取り除いてしまえると言うのです。この薬を彼氏にこっそり飲ませてごらん、と先生は勧めるのでした。私は、なんだか不安も感じたのでしたが、先生の説明はよく理解できなかったし、深く考えないで、言われた通りにしてみたのです。

その晩、彼と出会った私は、彼のコーヒーカップの中に、そっと、この薬を溶かして混ぜました。彼は、そうとも知らずに、まんまと、その薬入りのコーヒーを飲んでしまったのです。

それから、少し経った時でした。

「あっ」と、一瞬、私は驚きました。

目の前にいた彼氏の姿が、突然、二つに分身したように見えたの

です。それは、ほんとに、わずかな間の出来事でした。彼の姿はすぐ元に戻ってしまいました。今考えたら、このひと時こそ、彼の心が二つに分かれてしまった瞬間だったのでしょう。

それからは、理科の先生が言っていた通り、確かに、彼は、ずっと、私にも優しい、穏やかで、素敵な男性にと変わってくれたのでした。だけど、悪い心の方が、完全に消えてしまった訳でもなかったのであります。

ほとんどの時間帯は、彼は善良な人間でしたが、私と一緒に寝ていた時の、ほんの短い時間だけ、彼は、以前の乱暴な性格にと戻りました。それも、悪い心が全て凝縮してしまって、今までよりも、もっと凶暴で、残酷な人格にとなってしまったのです。

これじゃあ、まるで、小説のジキルとハイドなのであります。

でも、私は、その状態に、やがて、満足するようになったのでした。なぜなら、裸で性行為を楽しんでいた最中に、急に彼の暴力を受けると、次第に、私の方もマゾっ気にと目覚めてしまったからです。手加減しない暴力を振るう彼のプレイは、Mとなった私にとっては、いまや、とてつもない歓びにと感じられるようになったのでした。

とにかく、全ては、結果オーライなのであります。

了

孤独

私が女学生の頃、私のクラスには、いじめられっ子がいました。クラスの皆は、その子に色々な呵責や嫌がらせをして、いつも楽しんでいたのです。その子は、全く抵抗しませんでしたし、多分、逆らったところで、皆のいじめを食い止める事もできなかったのでしょう。

その子は、教室の中で、よく服を脱がされていました。着替えの時間でもないのに、その子だけ、制服を剥がされてしまったのです。下着も取られてしまいます。彼女は、広い教室の真ん中で、一人だけ全裸になってしまい、泣いて震えていました。

他のクラスの皆は、そんな惨めな彼女の姿を横目で眺めながら、内心では、軽い優越感に浸っていたのでした。やっぱり、一人だけ裸、と言うビジュアルは、それだけでも、インパクト大なのです。その子の事を、思いっきり見下せて、マウントをとって、皆が気持ち良くなれるのでした。

クラス内の暗黙の了解として、いじめられていた子を助けるような人は現われません。これは、一人だけを犠牲にして、皆が満足を得られる、楽しい遊びなのです。わざわざ、その一人を救う為に、皆の楽しみを奪おうなどとは、誰も考えなかったのでした。

それから、１０年近くが経ち、私は、ひょんな経緯から、ヌードモデルの仕事についていました。

実は、私は、小さな頃から、肌の綺麗さやスタイルの良さを褒められており、それを生かした職業をする事を、周囲から勧められていたのです。あまりにも、皆が強く推してくれるものだから、とうとう、私も、自分の裸を見せる決心がついたのであります。

でも、この決断は間違っていませんでした。ヌードモデルとして、私は成功したのです。

基本的に、モデル業ですから、ＡＶの仕事みたいに、セックスなどの猥褻な行為まではしません。あくまで、私は、自分の美しい裸体だけを素材として提供するのであります。私の完璧なボディでしたら、それだけでも十分に価値があったのです。

私は、雑誌用のヌードグラビアとかにも参加しました。有名な画家の裸婦像のモデルになった事もあります。世界的カメラマンに裸を写してもらって、賞を取った事だってありました。

のちに、私は、自分のヌードが使われた、それらの雑誌とか芸術品などを拝見させてもらいます。しかし、その時だけは、心に少し陰りを感じたりもしたのでした。

大真面目な大衆誌があります。それには、私一人が、ヌードで、グラビア掲載されているのです。もちろん、とっても美しいグラビアですが、でも、そのページだけが、何となく違和感が漂っています。他のページに載っているコンテンツは、いっさい、女の裸とは関係ないものばかりだったからです。

展示場に、私のヌードをモデルにした写真や絵画が飾られます。それらは、どれも最高級の美の芸術品です。だけど、ヌード作品はそれ一枚だけで、周りにある他の作品は、ごく普通の人物像や風景ばかりなのでした。私のヌード作品だけが、異質で、へんに皆の目を引いてしまうのであります。

こんな時、私は、ふと、学生時代の例のいじめられっ子の事を思い出してしまうのでした。もちろん、私は、いじめられて、裸になっているのではありません。それどころか、私の方こそ、皆に羨ましがられるような、美の頂点のはずなのです。

それなのに、この言い知れぬ孤立感は、一体、何なのでしょう。私は、自分のヌード作品を見るたびに、この不安な気持ちに襲われるのでした。

そして、あのクラスでいじめられていた子も、きっと、こんな心境だったのだろうかと、今さらになって、深い同情と反省の気持ちにと、苛まれたのであります。

了

アイドル気取り

蛙里いずみは、確かに、可愛い女の子だった。うちのクラスで一番の美人生徒だったと言い切れたであろう。いや、それどころか、彼女に惚れている男子生徒のファンは、学内に山ほど居たのだ。

その人気ぶりを、いずみ自身もしっかりと認識していたらしい。だからこそ、彼女は、在学中はどの男子生徒とも付き合わない事を宣言していたのだった。この女ときたら、自分のことを、すっかり、どこぞかの清純派の有名人スターと勘違いしているのである。

もっとも、彼女に交際中のボーイフレンドがいなかったのは事実らしかった。そのへんは、きちんと律儀に公約を守っていたみたいなのである。

ただし、彼女は、代わりに、大勢の自分のファン向けて、お披露目ショーなんてサービスをしていたのだった。これは、自分の美しい姿を、ファンの男子生徒たちへと、惜しみなく見せてあげよう、と言うイベントなのだ。

要するに、彼女が、皆の前で、思いっきり媚を売ったようなポーズを、いろいろと見せてくれる、と言うだけの話なのであった。この女は、全く、アイドル気取りもいいところなのだ。

しかし、それでも、いずみがお披露目ショーを開催する時は、その場には多数の男子生徒が集まったのだった。こうなってくると、男子の方も、とことんアホだとしか言いようがない。たかが、自分の高校内の美少女相手に、そこまで入れ込むものであろうか。しかも、全員が、お金を払ってでも、このお披露目ショーには参加したいみたいな勢いだったのだ。

一方のいずみも、これほどまでに男子たちから愛されたら、さぞ嬉しくて、その虚栄心も満たされた事であろう。もちろん、こんな彼女のことを良く思っていない女生徒も少なからず居た訳なのだが、

しかし、いずみの方は、そんな連中の反感など、どこ吹く風なのであった。そうじゃなきゃ、自惚れの極地であるお披露目ショーなど出来るはずもないのである。

さて、私の知り合いに、グリフィン博士と言う科学者がいた。私は、彼から発明品の透視薬を借りると、それを自分の目に垂らしてみたのだった。これは、見るもの全ての中身を透視してしまえると言う画期的な薬なのである。

私は、その透視薬をつけた状態で、蛙里いずみのお披露目ショーを拝見してみたのだった。

すると、期待した通りの結果になったのである。ステージにいた蛙里いずみは、私の目には、何一つ服を身につけていない、素っ裸の姿で見えたのだ。

もちろん、いずみの方は、私のこんな秘密には気付いていない。だから、いつものように、ステージ上では、様々な気取ったポーズを取ってみせて、ニコニコ笑って、観客の皆へと愛想を振りまいているのだ。それが、私にだけは、完全なヌードで見えていたのである。かっこつけたポーズを作りながら、それで裸なものだから、ますます、恥ずかしいのだ。いずみの奴は、私に対してだけは、ストリップショーをしているような状態なのである。

他の観客どもは、いつも通りのお披露目ショーで盛り上がっていた中、私だけは、ただ一人、蛙里いずみのあられもないヌードをたっぷりと眺めさせてもらったのだった。

了

見返り

ミキは、うちのクラスでも特に綺麗な女子だった。物静かで、いつも落ち着いたムードだったのも、クールで、実に大人っぽいのだ。スクールカーストでは、当然、1軍にあたる生徒であり、3軍の僕なんかには、とうてい近づく事もできない存在だったのである。

ところが、このミキが、残念な事に、見かけの格好良さとは違って、学力だけはサッパリなのであった。高校に入学してから、いつも及第点スレスレで、なんとか乗り越えていたらしい。しかし、授業の方は難しくなる一方で、そろそろ、彼女の実力だけでは、うまく切り抜けられなくなってきたみたいなのだ。

遊び仲間の取り巻きの女子やガリ勉の優等生にでも、勉強を教わればよかったのであろうが、彼女には、1軍の美少女としてのプライドがあって、下手(したて)に出て、人にすがる事ができないようなのだった。そんな時、彼女は、ひょっこりと、僕へと「勉強を見てくれ」と言い出したのである。

この彼女の態度には、僕の方も驚いた。でも、彼女にしてみれば、僕に勉強を教わるのではなく、下っぱの生徒の僕に自分の勉強の手伝いをさせる、と言うスタンスだったらしい。そして、そのような見方は、彼女だけではなく、クラスの他の連中も同じだったらしくて、僕とミキが接近しても、誰も気にはしなかったのだった。

こんなミキの行動は傲慢ではあったが、僕としても、彼女と近づける、またとない機会だったし、ついつい、彼女の上から命令を引き受けちゃったのである。

それから、テスト前になると、僕とミキの二人っきりの勉強会が行なわれるようになった。休み時間や放課後などに、教室で、僕が彼女にざっと試験範囲の勉強内容を教えてあげるのだ。前述したように、僕は雇われ家庭教師のような扱いだったので、僕とミキが二

人だけで話し合っているのを見かけても、注目するようなクラスメートは一人もいなかった。

そして、僕の教え方がうまかったのか、それとも、意外と彼女の頭が良かったからなのか、僕が個人教授するようになってから、ミキは、順調にテストの方もクリアできるようになったのである。

とは言え、学年が進むほど、授業だって、どんどんレベルアップしていくのだ。ついには、短い休み時間や放課後だけでは、僕は授業内容の全てをミキにと教えきれなくなってきた。

彼女は、とうとう、僕のことを、自分の家へと招き入れて、僕たちは、彼女の部屋で徹底的に試験勉強にと取り組むようになったのだった。その甲斐あって、彼女も、どうやら、十分に学ぶ事ができたみたいなのだ。

夜も遅くなり、僕も彼女の家から帰ろうとした時だった。ミキは、急に、僕のことを引き止めた。

「待って。今まで、いっぱい、勉強を教えてくれて、ありがとう。おかげで、私のメンツも保てたわ。そろそろ、私の方も、何か、お返しをしなくちゃね。ねえ、君って、どうせカノジョもいないだろうし、男女の交際だって経験した事がないんでしょう?私が、その高校生らしい青春を与えてあげるのは、どうかしら?君は私に高校生相応の学力を補完してくれたし、私は君に高校生ならではの大人の恋愛を教えてあげるわ。これって、お互いの得意な分野の、ぴったりの交換となるんじゃない?」彼女は、優しい瞳で、そう言った。

そのあと、彼女は、僕の目の前で、ためらう事もなく、自分の服を脱いでしまったのだった。僕は、ミキの一糸まとわぬ姿を見せてもらえたのだ。美しいミキのヌードなのだから、それは半端ないほどの神々しさなのである。

恐らく、この最高級の裸体をモノにできたのは、うちの高校の中でも、1軍の特にトップクラスの男子だけだったのであろう。そんな上玉を好きにさせてもらえるなんて、さすがに僕も最初は戸惑ったのだが、よくよく考えれば、これは、ただの見返りに過ぎないの

である。彼女の方だって、そのように認めているのだから、僕の方が、かたくなに遠慮してしまう必要もないはずなのだ。

かくて、僕は、思い切って、ミキの事を抱かせてもらったのだった。実際、彼女は嫌がる様子もなく、本物の交際相手のように、僕に全てを任せてくれたのである。ああ、普通の高校生と言うのは、勉強ばかりしている訳でもなく、こんな行為だって楽しんでいるものなのだ。そうやって、高校生活の青春は成り立っているのである。

こうして、僕は、ミキを相手に、高校生のうちに、無事に童貞も卒業したのだった。

それからも、僕は、テスト前が来るたびに、ミキには勉強を教えていた。彼女の家まで家庭教師をしに行く時は、勉強後にこっそりとセックスをするのは恒例のパターンとなった。二人がこんな行為を繰り返していたと言うのに、周囲の連中には、ついに最後まで知られずじまいだったのである。

僕は、ミキのおかげで、かわいい女子とイチャつく青春と言うものも、たっぷりと高校時代の素敵な思い出として残す事ができたのであった。

了

ＡＶ女優のカノジョ

俺の高校の頃のカノジョだったアイリが、ＡＶ女優になったと言う話を、どこからとなく耳にした。

アイリとは高校卒業の時に別れていたので、今さら彼女が何にしようと、俺がとやかく言う話でもなかったのだが、それでも気にはなったので、彼女が出ていると言うアダルトビデオとかヌード雑誌などを片っ端から買い集めてみたのである。

確かに、そこに写っていたのは、俺の高校時代の元カノのアイリなのだった。

顔の方は昔から大した事はなかったのだが、そのグラマラスな肉体の方は相変わらず健全みたいなのである。ビデオやグラビアなどに写っている彼女のヌードを見ているうちに、俺も、高校時代に、この体でさんざん遊んだ事を思い出して、ついニンマリしてきたのだった。

彼女のヌードに添えられたインタビューや解説などを読んでみて、俺はますます嬉しくなってきた。アイリの悩ましいダイナマイトボディやセックステクニックについて、どれも絶賛の嵐なのだ。このＡＶ女優の相手をできた男は幸せ者だ、とまで書かれていた。

これらの感想には全く嘘偽りはなく、その事は元カレだった俺が保証するのである。

アイリは、確かに、最高のセックスフレンドだった。その彼女のことを、高校の頃は、俺がずっと独り占めにしていたのである。こうして思い出してみただけでも、あの頃の甘美な感触が心のうちにと蘇って来るのだ。

そして、現在は、そんな彼女のことを、別の沢山の男性が抱いているのであった。彼らは、今ごろになって、アイリの素晴らしさを知って、賞賛しているのである。俺は、彼らが賛美する、ずうっと

以前からアイリの魅力を分かっていたのであり、彼らなんかよりも、はるかにアイリの理解者なのだと思うと、とても得意げな気持ちにもなってくるのだ。

ただし、この度、アイリがＡＶ女優になった事で、その正式な過去の経歴を目にして、俺も初めて知った事があった。彼女のプロフィールによると、彼女のロストバージンは中３の冬となっていたのだ。俺が彼女と付き合い始めたのは、高校生になってからだった。俺は彼女の最初の男のつもりだったし、アイリの方もそんな風に振る舞っていたはずなのだが、さては、まんまと騙されたか。

了

女子のオモチャ

高校に進学すると、皆、積極的になって、男女間の恋愛や性愛とかも大いに解禁されるのだ。

と、そのように考えたいところなのだが、実際には、相変わらず、異性と付き合う事のできない冴えない生徒がいっぱい居るのであった。そんな連中は、そんな奴同士で同性だけで群がって、勝手に恋の妄想を膨らまして、盛り上がったりもしているものなのだ。

校庭の片隅で、やはり、そんなモテない女子たちが集まって、楽しく恋バナで沸いていた。どの子も、確かにモテなさそうな、顔にも性格にも難のある女子ばかりなのである。それでも、彼女たち自体は、大人の恋やエッチな事に興味津々であり、想像だけで興奮しまくっていたのだ。早く、男と言うものを知りたくて、仕方がない雰囲気だったのである。

そんな時、彼女たちのそばを、一人の男生徒が通りがかった。こちらも、いかにもモテなさそうな、ダサい、みすぼらしい男子なのである。女子たちは、ふと、その男子に声をかけた。ちょっと企んだ事があるようなのだ。

この男子も、お人よしだったものだから、疑いもせず、すんなり、女子たちの方へ寄っていった。すると、女子たちは、この男子のことを、他に誰もいない校舎の裏へと連れていってしまったのである。

その場所で、女子たちは、面白半分に、この男子の服を脱がし始めた。軟弱な男子だったから、女子たちにいっぺんに襲い掛かってこられると、まるで太刀打ちできないのである。男子は、あっという間に、着ていた服を全て剥がされてしまった。

女子たちの方も、こんな事をしちゃうほど、男の体への関心がマックスになっていたのである。

「ねえ。これ、たった今まで履かれていた男のパンツだよ」

「ふふ。履いていた温もりが、まだ残ってるじゃない」
「正面にはオチンチンを出す穴が、本当についてるんだね」
「やだあ。このパンツ、少し黄ばんでる～」
パンツを触っただけでも、この有様なのである。当然、男の人の本体の方には、もっと興味があるのだ。
その服を脱がされたばかりの本体はと言えば、真っ裸で、泣きそうになりながら、懸命に、股間の部分だけは両手で隠していたのだった。
「パンツ、返して。もう！男性器（ここ）は、本当に好きな女の子にしか見せたらダメなものなんだよぉ」と、彼は小さな声で訴えていた。
しかし、女子たちは容赦はしないのだ。
「何よ！あたしたちの事は好きじゃないの？」
彼女たちは、憤怒しながら、股間から男子の手を引き離してしまった。男子の性器は、思いっきり丸出しになってしまったのだ。あれほど、愛する女の子にしか見せないと言っていたのに。
いくら軟弱男子だとは言っても、もう高校生なのだから、性器も立派に成熟しているのである。女子たちの方も、生の大人の男性器など、初めて拝見したものだから、すっかりガン見しちゃったのだ。
ふと、女子の一人が、この男子の足が震えているのに気が付いた。
「あんた。もしかして、オシッコがしたいの？」
オシッコとは関係なく、いきなり、こんな状況に晒されたら、誰だって、ビビって、震えちゃうものなのだ。いや、怖くて、本当にオシッコをチビりそうにもなるのである。
「あ、そうだ。あんた、オシッコをするところを、あたしたちにも見せてよ」と、女子たちは、嬉々としながら、新たな難題を男子へと吹っ掛けてきた。
しかし、この男生徒にしても、人前でオシッコなんか見せたくないのだ。ましてや、トイレ以外の場所で、それも学校の敷地内で、オシッコを垂れ流すなんて、人として恥なのである。
男子がモゴモゴと拒んでいると、今度は、女子の一人が、ペット

ボトルいっぱいの水道水を汲んで、持ってきた。男子の体を皆で羽交い締めにすると、そのペットボトルの水を強引に男子に飲ませ始めたのだ。

もとより震えていた状態で、肌寒い裸で、その上で、こんなに水をガブ飲みさせられたら、芯から体が冷え切ってしまい、本気でオシッコがしたくなってきちゃうのである。

哀れにも、本当にやばい状態になってきた男子は、内股になり、慌ててオチンチンを両手で握った。必死に漏らさないように押さえているのだ。

しかし、それに勘づいた女子たちが許してくれるはずもなかった。

「せっかくだから、立ちションするところを見せてよ」

女子たちは、ガクガク震えている男子を無理やり立たせて、手も股間の前からどかせてしまったのだった。こんな事されちゃって、もはや我慢の方も限界である。

男子のオチンチンがピンと伸び、その先端からは、透明の温かい液体が、弧を描いて、飛び出した。

あああ。この男子ったら、ただの同級生の女子の前で、マジで放尿しちゃった！

男にとっては日常生活の一コマであっても、女子たちにとっては、オチンチンの先からオシッコが出るなんて、生では初めて見た光景なのだ。彼女たちは感心して、ツバを飲んで、すっかり見入ってしまったのだった。

全く、ふざけた勢いだったとは言え、学校の中で、こんな変態じみたやり取りをしちゃった事は、恥ずかしくて、加害者の女子たちも被害者の男子も、誰にも話せそうにはないのである。

これ以来、この軟弱男子ときたら、たびたび、この女子たちに拉致されるようになってしまい、その都度、服を脱がされて、オチンチンを露出させられて、色々と調べられて、男の性器の仕組みを、何から何まで、この女子たちにと見学されてしまったのだった。この男子いわく「子作りする為の、男の大切な液」すらも、センズリ

で強引に放出させられて、無造作な扱いを受け、女子たちの好奇心を満たす為に使われてしまったのだ。

　このように事前に予習しておいたものだから、このモテない女子たちは、のちに、ようやく男と付き合うようになった時、いきなりカレの男性器を見ても、全く動じずに済んだのであった。

　一方の軟弱男子は、童貞のうちから、きれいな体をとことん汚されてしまって、その後、果たして、きちんと女の人と交際ができたかは、定かではない。

了

温泉幽霊

私には、他人には無い特殊な才能があった。それは、霊の姿を見る事が出来たのである。だから、私は、心霊スポットや事故物件などには、絶対に近寄らないようにしていた。

私が、ある寂れた温泉旅館に連泊した時の話である。その旅館は、確かに不人気だったようで、私以外には、まるで宿泊客がいなかった。

と、私がその旅館の廊下を歩いていると、ふと、冬用のセーラー服のかわいい女の子とすれ違った。見た目は、高校生っぽい。彼女は、連れはおらず、ニコニコしながら、私の横を通り過ぎていったのだった。

はて、制服のままで、こんな温泉地に泊まりに来ているとは、とても変わっているのである。しかし、ここは何もない旅館だったし、こんな若い子も宿泊しているのなら、多少は楽しみもできたのだ。

だが、この後がいけなかった。

私が、湯に浸かろうと思って、大浴場の方に出向くと、なんと、時間を同じくして、その子も大浴場の脱衣場へと現われたのだ。もちろん、この大浴場は混浴ではない。ここは男湯の方だったにも関わらず、彼女も入って来ちゃったのである。

私は、焦って、彼女に注意しかけたが、彼女の方は、全く、私のことは眼中にないようだった。彼女は、少しも気にしないで、自分のセーラー服を脱ぎ始めてしまったのである。

私は、自分もここにいる事を何度もアピールしてみたが、無駄だった。その女の子は、さばさばした態度で、あっさり、服を脱いでしまったのだ。下着まで、全部である。思った通り、彼女のセーラー服の中からは、十分に大人と言える女体が出てきた。すっぽんぽんになった彼女は、相変わらず、私のことは無視して、楽しそうに、

浴場の方に向かってしまったのである。
私も、急いで、浴場へと移動した。そこでは、案の定、彼女が、気持ち良さそうに、湯ぶねにと浸かっていたのだった。しかし、彼女以外にも、何人かの先客がいた。当然だが、それらの入浴客は全員、男である。だけど、彼らは、その裸の少女の存在を、ちっとも注目していないのであった。
これで、私も、ようやく真相が分かってきたのである。
この少女は、多分、幽霊なのだ。どのようなタイプの霊なのかは知らない。でも、だから、他の人は気付かなくても、私にだけは見えていたのだ。異常なほどに存在感のある幽霊だったものだから、私も、はじめは、これが霊だとは見抜けなかったのである。
いちおう、この旅館で過去に事故や事件などが無かった事は、十分に調べてきたつもりだ。では、この子は、なぜ、この旅館に居ついているのであろうか?見たところは、彼女からは、危ない霊気とかは放出されてはいなかった。どちらかと言えば、非常に明るくて、守護霊や座敷わらしに近い空気をまとっているのである。
そのように判断すると、私も、だいぶ安心してきたのだった。この少女の霊が人に危害を加えない事だけは、間違いなさそうだったからである。
とは言え、裸の女の子だったのは確かなのであり、彼女がとても大胆だったのには、私も少し閉口させられたのだった。何たって、彼女は、浴場の中を平気で歩き回っていたのだ。豊満な全身をポンと丸出しにしたままで、彼女は、湯ぶねの中をうろついたり、洗い場で体をゆすいだりしているのである。
若い女のピチピチした肉体を、浴場で堂々と眺められるなんて、男の夢かもしれないが、それ以上に、やはり、私には刺激が強すぎた。私は、きっと、真っ赤になっていただろうと思うのだが、でも、他の男の入浴客には、私がのぼせたようにしか見えていなかったかもしれない。
そのあと、風呂場から上がっても、私は、旅館内の施設のあちこ

ちで、この幽霊娘と出くわしたのだった。ある時は、彼女はゲームセンターで遊んでいたし、また別の時間は、彼女はカラオケバーで熱唱していた。現世の物体とどう絡んでいたのかは不明だが、とにかく、彼女は、この旅館の各所に出没して、楽しそうに、戯れていたのだ。

最後には、びっくりした事に、彼女は、私の泊まっている部屋へとやって来たのだった。どうやら、彼女も、私の部屋が宿泊場所だったみたいなのである。幽霊との同室なのだ。

依然として、私と彼女は、お互いの事が見えないかのように、干渉し合わなかった。全く、奇妙な相席者なのである。同じ部屋にいながら、それぞれが別々の行動をバラバラにとっているのだ。

ただし、少なくても、僕の方は彼女の存在を分かっていたし、不快な印象も持っていなかった。怨霊ではなさそうだから、次第に、彼女と一緒にいられるのが、愉快で、心地よくも感じられてきたのである。

やがて、彼女は、僕よりも先に布団についてしまったのだった。いや、寝たのではなかった。彼女ときたら、気分が乗ってきたのか、布団の上で、服をはだけて、オナニーをやり始めたのである。

幽霊のオナニーなんて前代未聞だ。しかも、愛らしい女子高生の幽霊なのである。もう、それだけで、私は、完全に、彼女から目をそらせなくなってしまったのだった。

彼女は、布団を下に敷いて、真っ裸で、激しく悶えていた。文字通り、この世のものとは思えないお色気なのだ。素晴らしい官能の光景なのである。しかも、彼女はこちらに気付いていないのだから、私は、四方から、さまざまなアングルで、彼女の悩ましい姿をたっぷりと見物させてもらったのだった。

霊と交われば、精気を吸い取られるとも言われているが、私の今回のケースは、一方的に彼女の様子を拝見しているだけだ。悪い霊じゃなさそうだし、恐らくは、私の身がヘンな影響を受ける事もあるまい。

そのうち、彼女は、謎の性的玩具（オモチャ）まで出現させて、それを使って遊び始めると、ついには絶頂に達して、そのまま、失神してしまったのだった。

動かなくなった彼女の姿は、消える事もなく、ずっと、布団の上に残り続けていた。私は、恐る恐る、彼女の体に手を伸ばしてみたが、やっぱり幽霊だったようで、その肌に触れる事はできず、空気みたいに、私の手は彼女の体の中にまで通過してしまったのだった。

そんな次第だったものだから、このあとは、私も、彼女の布団の中にお邪魔させてもらって、美しい全裸の彼女と添い寝して、本当に互いの体を重ね合わせて、仲良く、休ませてもらったのである。なんて恐ろしい事をしているのだ、と思われるかもしれないが、安らかな寝顔の彼女を見ていると、どうしても、そうしたくなってしまったのだ。

翌朝は、幽霊の彼女の方が起きるのは早くて、私が目覚めた時には、彼女はすでに居なかった。でも、消滅した訳ではなくて、旅館内を探せば、案の定、彼女は館内のどこかここかでウロついていたのだった。

こうして、私が、この宿に泊まっていた期間は、この少女の霊も、ずっと消える事はなかったのだ。つまり、彼女は、しっかり、この旅館にと住みついていたようなのである。

だから、私は、その後は、時々、この温泉旅館にと遊びに来るようになった。彼女と会いたかったからだ。そして、彼女は決して存在しなくなる事はなく、もはや、当たり前のように、毎回、この旅館に現われて、私の旅のお相手をしてくれたのだった。

了

女嫌い

高校生になると、周りにいた同級生どもが、急に色気づきだした。男子も女子も、顔を合わせれば、異性の話ばかりをしているのだ。あの子が可愛いとか、あの先輩と付き合ってみたいとか、そんな会話ばかりをしていやがった。そして、最後は、いつだって、スケベな行為をする願望へと辿り着いてしまうのである。

俺には、連中の気持ちが、とんと分からないのだった。

別に、俺は、優等生ぶって、すましていた訳ではない。また、異性よりも同性に興味があったと言う話でもないのだ。根本的に、俺は、女の肉体と言うものが醜く思えたのである。

だって、そうではないか。皆は、綺麗だの美しいだのと騒いでいるが、どんな美人であろうと、その体や肌は生きていて、常に新陳代謝を繰り返しているのだ。つまり、その肌の表面には、いつだって、汗とか垢とかが発生し続けていて、汚らしく、こびり付いているのである。その事を思い出してしまうと、とてもじゃないけど、いかに美しい顔の女の子を見ても、それが本当に清潔（きれい）だとは感じられなくなってしまうのだった。

全裸にして、性器とかの話をしだすと、もっとタチが悪い。男どもは、女の性器を特に見たがっているようだが、性器なんて、動物の体の中で、もっとも汚れた部分なのだ。なんと言っても、排泄をする器官なのである。ここを汚いと言わないで、何が汚らわしいと言うのか。こんな部分を拝見したり、それどころか、自分の体と擦り合わせるだなんて、もう、考えただけでゾッとしてしまうのだ。

と、ここまで読んで分かったかもしれないが、正直な話をすると、俺は、自分の体だって十分に不潔だと思っていたのだった。でも、仕方ないから、この体で暮らしているのであり、その事を普段はあまり思い浮かべないようにもしていたのであった。

要するに、俺は、極端な潔癖症だったのだ。そもそも、動物の持つ「肉体」と言う構造や組織が好きになれなかったのである。ああ、いっその事、ツルツルしたボディのロボットやアンドロイドとして生まれてこれたのならば、俺は、どれだけ幸せだったであろう。

まあ、こんな事ばかりを考えていたものだから、当然、俺のそばには誰も近付いてこなくなったし、俺の方も、誰も近寄らせなかったのだった。学校内では、俺は完全に孤立していたが、もともと、俺もそれを望んでいたので、別に辛いとも思っていなかったのだ。

そんな矢先、俺はFと言う男生徒と知り合った。Fは、隣クラスの生徒だった。彼もまた、現実の女の子なんて興味がないと言う、変わった男子だったのである。

彼の女子嫌いは、俺のそれとも、少し違うようだった。Fの場合は、マンガやアニメの女の子が好き過ぎて、リアルな女性は愛せないと言うパターンだったようなのだ。

それでも、俺とFが会話をしだすと、驚くほど、意見が一致した。二人の口からは、とりとめもなく、生の女の子に対する嫌悪や悪口が飛び出したのだ。女性の外見だけではなく、内面的な性格や態度への非難の話題でも盛り上がった。我々は、すっかり意気投合したのである。

それ以降、俺とFは一番の親友となった。俺たちは、いつだって一緒にいて、いつも女の悪口を言い合って、楽しい時間を過ごしたのである。Fの方は、アニメや絵などの二次元の少女については賞賛していたので、そこだけは俺の見解と食い違ったのだが、それでも、その点だけ目をつぶれば、彼は実に素敵な友人なのであった。

ところが、ある日、突然、Fが「カノジョができた」と言い出した。これは、意外すぎる、あまりにも信じらない裏切り行為なのだ。

俺は、もちろん怒って、Fをさんざん責め立てた。「リアルの女の子なんて汚いと言ってたのは、ウソだったのかよ！」と文句を言ってやった。

すると、Fはこう返してきたのだった。

「現実の女が汚いと思っているのは、今でも同じだけど、でも、好きになった女の子は別だよ」

俺はFの事をいつまでもヤジり続けたが、Fの方は、嘲笑いながら、俺の前から去っていったのだった。

了

おちょぼ口

マンションの下の方の階も、まんざら悪くはないのだ。なぜなら、近所の、同じ程度の高さの民家の中が覗き放題だったからである。

特に、僕が住んでいたマンションは、デザインに凝ったものだから、壁が全て鏡張りになっていた。つまり、マンション内の部屋からは外が見えても、外部からは、そこに窓がある事すら分からなかったのである。

それゆえ、うちのマンションの周辺の民家はすっかり油断していて、ろくにカーテンも閉めていなかった家も多く、僕の方からは、それらの家の内側をたっぷり観察できたのだった。

僕は、僕の部屋のちょうど正面にある二階建ての一軒家が、中でも、特に気に入っていた。その家には、女学生が住んでいて、いつも、カーテンが開きっぱなしの二階でたむろしていたのが、丸見えだったからである。

その子は、やたらと口が小さい美少女だった。それなのに、すぐ近くから覗かれていたのも知らなかったからなのか、とっても大胆なのだ。彼女は、窓のそばで、平気で、着替えをしたり、全裸になっていた。いや、その家は、そもそもが窓がでかかったので、否が応でも、部屋の奥の方まで見えてしまったのだ。

僕は、自分の部屋に居ながら、若い女学生の初々しい裸体を、存分に拝ませてもらえたのである。

絶えず、彼女のことを見物し続けていると、そのうち、着替えやヌード以上のものも拝見できるようになった。

彼女は、一人きりでいる時、こっそりとオナニーもしていたのである。それが、不用心なものだから、彼女は、カーテンも閉めずに、大っぴらに僕へも披露してくれたのだ。

美しい少女のリアルなオナニーなんて、ぞくぞくする見世物なの

である。

彼女は、実はワルい子で、だいぶ太い性具（ディルド）まで所持していた。そして、そのディルドを、あの小さな口で、一生懸命に、しゃぶっていたのだ。ディルドの方が不釣り合いに大きすぎる為か、それを小さな口で頬張る光景は、なんとも言えなくエロかったのだった。

彼女は、上の口だけではなく、股間にあった下の口の方も小さかったらしい。彼女の自慰行為もクライマックスを迎えて、ディルドを下の口へと突っ込んだ後、体の外に抜き出すと、挿入口がキツかったのを無理して押し込んだからなのか、そのディルドは血まみれになっていたのであった。

了

またまた写真コンテスト

「ねえねえ！いずみ、あたしの写真のモデルになってよ！いずみが被写体だったら、絶対に入賞できるからさあ！」と、親友のカコに必死に頼まれたものだから、私は、つい、その申し出を受けてしまったのだった。

カコは、私を写真に撮って、学校で開催している写真コンテストに応募したい、と言ってきたのである。ただし、彼女は、普通に写すのではなく、私のヌードの撮影を希望したのだ。

「大丈夫！このコンテスト、過去にも、女生徒のヌード写真が入賞した事があったのよ。だから、芸術扱いなら、ヌードでも可能なのよ。いずみの裸だったら、めちゃくちゃカッコいいから、十分に芸術的写真になるわよ！」と、カコは保証するのであった。

よって、私も、彼女の言葉を全面的に信じる事にしたのである。

ほんとの事を言うと、私も、自分の裸には、相当な自信があったので、ヌード写真のモデルになる点に関しては、全く抵抗はなかった。もし、これで、マジで、私の裸の写真がコンテストで賞を取るようならば、ますます、私の美貌を、この学校の皆にと知らしめる事ができると言うものなのだ。

かくて、カコと私によるコンテスト出品作品の制作が始まったのだった。カメラマンのカコは大親友の女生徒であったし、私は、躊躇する事なく、彼女の前で全裸になった。そして、彼女の手で、私は、オールヌードの写真をいっぱい撮ってもらって、ついに、そのうちの一枚をコンテストに提出する事が決まったのである。

コンテストで集まった作品は、正式に審査される前に、学内の広場にと展示されて、一般生徒も見物が可能となった。私も、カコに連れられて、楽しみにして、自分の写真を見に行ったのである。

ところが、展示されていた私の写真を見て、驚いたのだった。

確かに、そこに飾られていたのは、私のベストの全裸写真であった。写した時には、私の体の隅々まで堂々と晒して、女体の美をいっさい秘密にせずに披露していたのだ。

しかし、実際にコンテストに出品となった写真には、私の体のうち、股間の位置にだけ、わざとらしく、ピンクのハートマークが付け加えられていた。つまり、ヘアやワレメだけは、しっかりと隠してしまっていたのだ。他の部分の肌は、全て、そのままの状態で露出していたのに。

「ねえねえ、カコ！これは、どう言う事よ！」当然、私はカコに文句を言った。

「ごめーん、いずみ。今回からは、完全なヌード写真は禁止になっちゃったのよ。加工して、マズイ部分だけ見えなくすれば、出品できると教えられたから、アソコだけはスタンプで隠しちゃって、それで、やっと、許可してもらえたのよ。でも、お蔵入りにはならなかったんだからさ、許してね」

「あ、あのねえ。じゃあ、それならさ、おっぱいだって隠してよ！アソコは隠してるのに、乳首は丸見えだなんて、それこそ、逆に、やらしいエログラビアみたいじゃない！」

私は、カンカンに怒ったのであるが、だが、もはや、あとの祭りなのであった。

そして、コンテストの方も、結局は、全く入選しなかったのだった。

了

リボンの魔力

その日、理沙は、髪をリボンで結んで、登校してきた。その姿を見て、彼氏である僕も、思わず見とれてしまったのだった。

そう。彼女の印象が、普段とまるで違ったのである。

そのリボンは、大きくて、かなりハデめのものだった。正面から眺めても、後頭部に結ったリボンが、はっきりと見えた。その為、ひどく大げさで、なんだか、テレビドラマに出てくるお嬢様のヘアスタイルみたいなのだ。そんな非現実的なインパクトゆえか、どうも、理沙自身も、美少女みたく感じられたようなのであった。

そもそもの理沙は、もっと平凡な顔立ちの女子だったのである。それが、このリボンをつけただけで、落ち着いた、大人っぽい雰囲気まで漂わせてしまったのだ。

彼女の変化には、僕だけではなく、学校の皆も、すぐに気がついた。男子たちは、理沙の綺麗さにざわつくし、女子たちも、理沙のことをヒソヒソと影で噂しあった。先生がたも、当然、理沙のイメチェンには目を奪われていたが、わざわざ注意する者はいなかった。うちの高校は、服装や髪型については、あまり厳しくなかったからである。

こうして、その日の授業が終わり、放課後となった。彼氏である僕は、美しい理沙と連れ立って、二人で帰宅する事になったのである。

これまでにない緊張する帰り道となった。理沙とは、すっかり馴染んでしまって、一緒にいても少しも気にならない存在になっていたはずなのに、こんな風に彼女の見た目が変わっただけで、思いっきり意識してしまったのだ。

特に、あらためて、理沙の事を、女として見てしまったのだった。お互い、真面目な優等生同士のお付き合いのつもりだったけど、今

の美人の理沙だと、僕もムラムラして、なにやら、彼女の制服の内側まで、気に掛かってきたのである。

「そのリボン、綺麗だね。どうしたの？」

「駅前のデパートで見つけたの。だけど、全然、安物よ。まだ、いっぱい置いてあったわ」

「でも、よく似合うよ」

「ありがとう」

さりげなく、理沙と会話を試みたが、やはり、ぎこちないのである。どうやら、彼女の方も、ドキドキしているようなのだった。自分を着飾って、自信を持った事で、きっと、彼女も、やや大胆な気持ちになっているのだ。

もはや、どちらも、これ以上は我慢しきれないみたいであった。

僕たちは、目についたラブホテルへと、急いで、飛び込んだ。そして、そのまま、あてがわれた部屋で、裸になって、欲望のままに愛し合ったのである。

僕も理沙も、非行とは全く無縁の生徒だった。それなのに、二人は、初めてのセックスを体験して、その快楽にと溺れたのである。リボンをした状態のままだったから、なおさら、理沙のことが極上の女に見えたのだった。

全ての行為を終えた後、くつろいだ理沙は、リボンをほどいた。すると、リボンのない彼女は、いきなり、かつての彼女に戻ってしまったのであった。ごくごく月並みの、冴えない女子である。これだと、僕は、あれほどの抱いてみたい衝動は覚えなかったであろう。

今さらながら、僕は、理沙と強引に寝てしまった事を後悔したのだった。そして、そう感じていたのは、どうやら、理沙もだったようなのである。

翌日、学校に行ってみると、多くの女生徒たちが、理沙と同じリボンを髪に結わえていた。恐らくは、彼女たちも、駅前のデパートでこのリボンを見つけたのだ。きっと、この子たちも、理沙みたいになりたいと思ったのであろう。

今日の放課後は、あちこちで、生徒たちによる愛の享楽が繰り広げられるのかもしれない。

了

盗撮トイレ

うちの高校は、いまだに和式トイレを奨励していて、全校舎で採用していました。しかし、その事が、トイレでの隠し撮りを余計やり易いものにしていたのでした。

なんたって、洋式のトイレよりも、和式の便器の方が、腰の周辺を隠す遮蔽物がないのです。だから、その近くに、ひそかにカメラなどを設置されたら、股間の大事な部分だって写し放題なのでした。

こうして、悪どい男子たちのイタズラで、多数の女生徒が恥ずかしい写真や動画を撮られてしまったのです。真横から写した構図で、股からオシッコが流線状に飛び出ているのが、はっきりと見える動画がありました。または、正面から撮った写真で、オシッコが出ている最中のオマンコまで、くっきりと写されていたものもありました。それらが、男子たちの保管の甘さのせいで、全校規模で流出したものだから、なおさら、女子としては、たまったものではないのです。

女子たちは、男子に復讐する事を決めました。

今度は、彼女たちが、男子トイレの中へと、隠しカメラを設置してやったのです。と言っても、オシッコ用の朝顔型トイレでは、うまくカメラを忍ばせる場所がありませんでしたので、やっぱり、女子同様に、大便用の金隠し付き便器の正面にと、カメラを仕掛けたのでした。

もっとも、オシッコと違って、ほとんどの生徒が、学校での排便は避けているでしょうから、男子用の大便用便器で待っていたところで、果たして、本当に盗撮は成功するのでしょうか。

しかし、後日、女子たちが、その男子トイレの隠しカメラを回収してみますと、そこには、バッチリと、男生徒の一人が、便器の前にしゃがんで、オシッコをしている動画が写っていたのでした。た

またまですが、大便用便器で小便をする男生徒もいたのです。しかも、その映像は、女子たちの想像していた放尿の光景とも異なっていたものだから、彼女たちに衝撃を与えたのでした。

被写体の男子が、制服のズボンとパンツをおろして、便器の前でしゃがむまでは、予想範囲内です。そこで、その男子の性器が、カメラと向き合って、まるまる写ってしまったのですが、その形が、女子たちのイメージしていたものと違っていたのでした。幼児の皮かぶりチンポでも、大人のズルむけたチンポでもありません。この男子のチンポは、その中間だったのです。すなわち、包茎だったのであります。

もしかしたら、この男生徒は、他の男子に包茎を知られるのが恥ずかしかったから、わざわざ、個室のトイレの中に入って、こっそりと一人で排尿していたのでしょうか。

とにかく、隠しカメラには、その男子のブラブラした大きな金玉袋と縮んだ包茎のペニスが、大きく写っていました。子供の男性器のようでもあり、それでも、陰毛はモシャモシャと生えているものだから、そのアンバランスさは、男の性器の知識がある女子にも、不思議に感じられたのでした。

包茎の包皮は、幼児の皮かぶり以上に、がっちりと、その内側の亀頭を覆い尽くしていました。先端も塞がれてしまっていて、表面が完全に皮膚だけなのです。まるで、この男子のペニスがまだ使われていない証し、そう、ピュアな童貞を思わせたのでした。

それだけに、この包皮を突き破って、内側からオシッコが出てきた瞬間は、男バージョンの破瓜のようで、見ていた女子たちも、思わずゾクッとしてしまったのであります。

彼のオシッコは、勢いよく、便器向けて流れ続けました。彼のチンポに、妙な思い入れを抱いてしまったせいか、女子たちには、そのオシッコがそんな汚いものには見えませんでした。小気味よくオシッコを出すうちに、元気になってきたらしく、彼のチンポがじょじょに勃ち始め、ピクピク動いていたのも、女子たちを興奮させた

のです。さらに、勃起とともに、包皮の先っちょが剥けてきて、亀頭の正面だけが露出しだしたのも、いわゆるチラリズムとなって、女子たちの心をいっそうゾクゾクさせたのでした。

オシッコを出し終えた後も、まだ見せ場がありました。最後に、この男子は、性器についたオシッコのしずくを切り始めたのですが、その為に、自分のチンポを手で握ったのです。

普通のずる剥けチンポなら、軽くチンポを振るだけで水切りはおしまいだったのでしょうが、この男子の場合は包皮がありました。彼は、チンポのしずくを落とす為に、包皮をめくったり、伸ばしたりして、丹念に絞ったのでした。その様子は、うっすらと自慰行為（センズリ）をも彷彿させたのです。

この時、女子たちも、この男子が、ただの包茎でなかった事を知りました。この男生徒は、正確には仮性包茎だったのです。だから、その気になれば、全然、包皮をはがす事もできたのでした。実際、そうやって、今、オシッコのしずくを切っているのです。

彼は、包皮を大きく引っ張って、亀頭を奥まで露出もさせました。全く、正常な形の亀頭なのです。でも、彼の亀頭を見て、つい照れちゃった女子もいました。今まで、ずっと隠していただけに、男の子の一番恥ずかしいものを見ちゃったような気分になってしまったのです。

こうして、一度は亀頭をずる剥けさせたものの、おしまいは、やっぱり、亀頭の全てを包皮の中へとしまいこんでしまって、彼の一連の放尿作業も終わったのでした。

この動画は、さっそく、全校の女子たちの間でばら撒かれる事となり、センセーションを起こしました。

すでに男子とセックスしていて、確かに、ペニスをよく理解している女子もいたのですが、たいがいは、ずる剥けた勃起状態のペニスでしたので、彼女たちの目にも、包茎のチンポは新鮮なものに写ったのでした。何よりも、先にも言いましたように、皮かぶりのチンポは、いかにも清楚な童貞のイメージがあって、多くの女子に、

ロマンチックな憧れを抱かせてしまったのであります。
ピンポイントで股間しか写っていないので、この包茎の男子が、何学年の誰なのかは分かりませんでした。
しかし、いつからか、女子の間では、この謎の男子の事は「包茎の君」と呼ばれて、広く慕われるようになり、かく言う私も、自分の家では、このオシッコ動画を眺めながら、自分も裸になり、気持ちよくオナニーしていたのでありました。

了

体毛フェチ

月子は、うちのクラスの女子の一人だった。体格もガッシリしていて、さばけた性格だった彼女は、スポーツ女子という感じでもなく、また、ヤンキー娘だったのでもなく、あえて言うなら、野性的と言う表現が一番しっくりいく女生徒なのであった。

僕が彼女のことを意識し始めたのは、ふとした出来事がきっかけだった。

休み時間に、教室の中で、彼女が、たまたま、伸びをしていたのだ。ごくごく当たり前の、普通にどこでも見かける光景である。しかし、彼女のシャツは少し短めだったらしく、上半身を伸ばした事で、彼女は、腹部のあたりの肌が露出してしまったのだ。

それだけならば、女子高生の爽やかなお色気だとも言えたであろう。だが、僕は、偶然にも目撃してしまったのだ。彼女の腹部に、濃い体毛が生えていたのを。それは、スカート側の、下腹部の方からはみ出していた。

狙って眺めていた訳ではないのだが、僕は、ものすごい衝撃を受けてしまったのだった。

恐らく、僕が見たのは、月子のアンダーヘアなのだ。こんな日常の空間で、同級生の女子の陰毛など目にしちゃったら、そりゃあ、健全な男子生徒としては、動揺もしてしまうのである。

年頃の女子は、もっとムダ毛とかを気にして、性毛も切り整えているとも聞いたが、大らかな月子は、全くムダ毛処理などしていなかったのかもしれない。そもそもが、月子は毛深い方だった。下着からはみ出すほど、下の毛を生やしていたとしても、なんら不思議な話ではないのである。

だが、こんな事があって以来、僕は、女の人のアンダーヘアが気になるようになり、何よりも、月子にひどく心を奪われてしまった

のだった。男の本能なのか、女性の毛を、ひたすら見たくて仕方なくなったのである。オッパイよりもお尻よりも、体毛と言う要素（アイテム）に敏感になった。中でも、あの月子のものならば、彼女のあちこちの毛を、普段の生活の一コマでも、頻繁に観察できそうな感じがしたのだ。

きっと、ガサツな月子の事だから、脇毛だって剃っていないかもしれない。乳輪とかにも、太い産毛が生えていそうだ。妄想していたら、僕はどんどん興奮して、居ても立っても居られなくなってしまったのだった。

ついには、僕は、親しい女子に仲介してもらって、これまでは疎遠だった月子の事を、正式に紹介してもらう事にしたのであった。つまり、月子にプロポーズしちゃったのである。

これが、意外と簡単に事が進んだのだった。サラリとした性格の月子は、あっさり、僕のことを受け入れてくれたのである。こうして、僕と月子は、めでたく、カップルとなったのだ。

これからは、僕も、堂々と月子のそばに居られるのである。彼女の体毛も間近で見物できるのだ。

彼女の顔を眺めているだけでも、僕はドキドキしてしまった。しかし、どうせだったら、彼女の体の方に生えている毛を拝見したいのだ。果たして、女の子って、どんな部分に、いっぱい毛が生えているのであろう。

そして、僕のそんな願望も、すぐに叶えられる事になったのだった。人懐っこくて、警戒心のない彼女とは、さっさと距離が縮まってしまったのである。僕たちは、早くも性行為をする関係になってしまったのだ。

月子は、学校帰りの夕暮れ時に、家族が留守中だという自宅へと、僕を連れ込んだ。彼女の方は、もう、僕とセックスする気満々だし、僕の方も、逆らわずに、その思惑を受け入れたのである。

彼女の部屋で、とうとう、二人で愛し合う事になった。彼女は、服を脱ぎ、いよいよ、僕の前で全裸になってしまったのである。こ

れで、彼女の毛の全てを確認できるのだ。
ところが、そこで僕はある事に気が付いたのだった。
彼女が、思った以上に毛深いのである。いや、明らかに、普段より全体的に体毛が濃くなっているのだ。
「さあ、今夜は満月よ。あたしも、本気を出すわ。野獣に戻って、朝まで遊び狂いましょう！」月子が、毛だらけの顔で、嬉々としながら、笑った。
ああ、そうか！この子は、実は狼少女だったのだ。だから、元から体毛が濃くて、やたらと野性らしさが魅惑的だったのである。そして、狼人間は満月の夜に本性を現わすと言う。
その時、月子は、声を出したのではなく、高らかに吠えた。

了

ないしょの撮影

亮生くんは、クラスの悪ガキたちに頼まれて、自分のオチンチンを、彼らに撮影させてやる事になった。

と言っても、亮生くんはイジメられていた訳ではない。悪ガキの方から、トレーディングカードのレアカードをあげるから、と誘ってきたのだ。撮影は、その交換条件だったのである。亮生くんにとって、悪ガキが提示したレアカードは、喉から手が出るほど欲しかったカードだった。このカードが入手できるのだったら、性器を人に見せる事だって、躊躇しないのである。つまり、亮生くんは、相当なオタク高校生だったのだ。

その日の放課後、亮生くんは、さっそく、悪ガキの一人の家へとお邪魔した。そこで、自分のオチンチンを連中に見せた後、報酬としてレアカードを戴くのである。

悪ガキの部屋の中に、全員で閉じこもると、すぐさま、撮影会は始まった。悪ガキの一人は、バッチリとビデオカメラを構えている。その正面で、亮生くんも、スラックスのファスナーを下げて、その内側から、自分のペニスを外に出したのだ。約束では「オチンチン」だけなので、陰嚢まで出さなくても良いはずだった。亮生くんだって、喜んで撮影させる訳じゃないので、出す部分は少ない方がいいのだ。

しかし、披露されたオチンチンを見て、悪ガキたちは、なぜか、ニヤニヤしていたのだった。

亮生くんはよく分かってなかったようだが、実は、彼のペニスは包茎だったのである。いわゆる、仮装包茎だ。今だって、彼のオチンチンには、先端まで包皮が被っていた。

「見せるだけじゃダメだ。ちょっと勃たせてみろよ」と、悪ガキが注文した。

確かに、亮生くんの今のオチンチンは、リラックスして、先の方が下に垂れていたのである。

そこで、悪ガキの一人が、かなり大きいサイズのポスターを持ってきた。そのポスターには、セクシーアイドルが裸で写っていたのだ。おっぱいもお尻も、超デカサイズの可愛い子ちゃんだった。そのグラマラスな肉体を、大きなポスターで拝見させてもらうと、これまた、すごいド迫力なのである。

亮生くんも、決して、不能やホモだった訳じゃないのだ。だから、こんな過激なお色気グラビアをいきなり見せられてしまうと、動揺して、オチンチンが固くなってきたのだった。

それを眺めて、悪ガキたちは、面白そうに、笑ったのである。

「ほら、その調子だよ。さあ、手で持って！手でこすって、もっと勃たせろよ」

悪ガキに言われて、亮生くんはその通りにした。彼は、自分のサオを手で握って、その手をモタモタと前後に動かしたのである。

女の裸を見た興奮と、手で摩られた刺激で、亮生くんのペニスは、ますます、太く、大きくなった。包皮よりも中身の方が伸びて、皮がめくれ始めた。包皮の下にあった亀頭が露出しだしたのである。その亀頭は、すでに赤く充血して、膨らんでいた。

「いいぞ、いいぞ。ほれ、もっと皮を引っ張ってみろよ。自分でチンポの先を出してごらん」

悪ガキたちは、そんな事を指示しながら、亮生くんの男根の変化を、ガッチリとビデオに撮り続けていた。

亮生くんも、命じられるままに、包皮を全部めくってみせたり、あるいは、再び亀頭を包皮の中に潜らせてしまったり、そんな出したり入れたりを繰り返してみせたのだった。レアカードが貰えるなら、このぐらいの事は、平気でサービスしちゃうのである。

「亮生。お前、オナニーって、やった事あるのか？」

「い、いや」

「じゃあ、今、ヌクのも覚えさせてやるよ」

亮生くんは嘘をついていなかった。高校生にもなって、彼は、まだ自慰も射精も経験した事がなかったのである。全く、オタク男子のピュアさ、恐るべしなのだ。

悪ガキの一人が、新たなアイテムを持ってきた。それが、なんと、女性用のパンティなのである。

「これ、買ってきた新品とかじゃないぜ。学校の更衣室に入って、盗んできたんだ。うちの学校の女子の誰かが履いていた、本物の生パンティだ」悪ガキが、笑って、言った。

そう聞かされると、確かに、そのパンティは、どこか、履き古された感じがするのである。

「ほら、亮生。触ってもいいぜ。まだ湿っているだろ。これが、女子が履いていたものだと想像したら、すごいドキドキしてこないか？」

悪ガキの言う通りであった。女子の生パンティは、亮生くんの心をさらに高揚させたのである。

亮生くんは、そのパンティを指でさするだけでなく、悪ガキの提案で、自分のペニスにも押し当ててみた。このパンティ越しに、見知らぬ女子と性器を触れ合わせちゃって、これって、間接ファックなのだ。さらに、このパンティの内側に自分のペニスを包んで、シコシコやってみたりもした。面白がった悪ガキたちは、ついには、このパンティの両サイド部分を切り離してしまい、平面の布状にして、パンティの内側の布をよく拝めるようにしてしまった。

セクシーアイドルの裸のグラビアを眺めながら、リアルな女子の生パンティの感触を味わう。

こんな事を続けていたら、さすがに、子供のような亮生くんも、自然とイキそうになってくるのだ。

「ああ。やばい！オシッコが出そう！」と、亮生くんは、いきなり叫んだ。未経験者の彼には、それが、射精の前兆だったと分からなかったのである。

「お。いいぞ！出しちゃえ、そこで！」と、悪ガキが笑う。

「でも、部屋を汚しちゃうよ」
「じゃあ、この上に出したらいい」
悪ガキは、切り開いてしまったパンティを、内側の面を上にして、亮生くんの手前に置いた。
次の瞬間、これ以上は抑えきれなくて、亮生くんは吐精してしまったのだった。亮生くんにとって、初のオナニー射精である。
亮生くんのペニスの先から出た精液は、勢いよく、パンティにかかった。濃厚な白濁色の液が、パンティの表面に、一直線に伸びて、ベットリと降りかかったのである。それは、一度だけでは終わらなかった。溜まっていた亮生くんは、そんな精液の真っ直ぐな線を、さらに、何本か、パンティの上に描いてしまったのである。
仮装包茎の童貞高校生が初めてのオナニーをして、それも、どっかの知らない女子の盗んだパンティの上にたっぷりと精液を出しちゃって、その一部始終を、亮生くんは、がっつりと、ビデオに撮られてしまったのだ。
悪ガキたちは、拍手喝采して、ウケていた。
でも、亮生くんも、イった快感で、しばらく、ボッとしていたのであった。彼もまた、ちょっとだけ大人になれたと言えるのであろう。
ともあれ、これで交換条件の撮影も終了したのだ。亮生くんは、ようやく、欲しかったレアカードを貰って、ホクホクして、自分ちにと帰っていったのである。
それにしても、悪ガキたちは、希少なレアカードを手放して、なぜ、こんな動画を撮ったりしたのだろう?
実は、うちの高校では、最近、女子の間では、なぜか、包茎男子に人気が集中していたのだった。彼女たちは、やたらと、包茎のペニスを見たがっていたのだ。
その事に悪ガキたちは目をつけた。彼らは、亮生くんが仮装包茎だった事を、着替えの時にチラリと見て、何となく知っていた。そこで、彼らは、亮生くんの包茎を余す事なく撮影する事を思いつい

たのである。
　この亮生くんの包茎動画を女子たちに配れば、彼女たちは、さぞ喜んでくれるであろう。本物の女子たちに感謝されて、しかも、彼女たちとお近づきできるのならば、その方が、悪ガキたちにしてみれば、レアカードなんかよりも、はるかに価値がある話なのだ。しかし・・・。
「こんな包茎チンポよりも、オレの剥けてるデカチンの方が、絶対にイカしてるのになぁ」悪ガキは、悔しげにボヤいたのだった。

了

マンジルさん

うちのクラスには、美人で、明るくて、元気で、他人にも優しく気遣いのできる、素敵な女子がいた。しかし、彼女は、なぜか、クラスの皆からは「マン汁」というアダ名で呼ばれていたのだった。

最初、僕は、この「マン汁」と言う言葉が何の事なのか、全く知らなかった。それだけに、ひょっこり、その意味が分かった時は、ビックリしてしまったのであった。こんなに善良な女子に、このような猥褻なアダ名がついている事が、ちょっと信じられなかったからだ。

同時に、このアダ名がついた経緯を想像すると、ひどくドキドキもしてきたのだった。

彼女は、友達と会話をしている最中に、うっかり口を滑らせて、「マン汁」とでも言ってしまったのであろうか。あるいは、実際に、彼女が愛液を出していたのを、誰かに見られてしまった可能性もある。その場合は、パンティが濡れているのを目撃されちゃっただけなのかもしれないし、ひょっとしたら、何らかの状況で、裸でいた時、アソコから愛液が垂れていたのが、思いっきりバレてしまった、と言うパターンも考えられそうだ。

とにかく、どんな理由だったにせよ、爽やかな美少女だった彼女に、マン汁なんてものは、あまりにもミスマッチだったのであり、この組み合わせに、僕は激しく動揺させられたのだった。

クラスメートたちは、親しい女友達だけではなく、ヤンチャな男子たちすらも、彼女のことを、平気で「マン汁」と呼んでいた。かわいい女子の事を、よく、こんなヒドいニックネームで呼べるものだとも思ったのだが、どうも、連中の間では、このアダ名がすっかり定着しきっていたらしくて、すでに、何とも感じてないみたいなのであった。

そして、実は、このネームで呼ばれている当の本人も、だいぶ前から、この状態には慣れきってしまったらしくて、全然、気にしてはいなかったのだった。彼女は、「マン汁」と連呼されても、気さくに返事をし、ちっとも嫌な顔もせずに、いつもの明るい笑顔を浮かべていたのだ。

つまりは、この「マン汁」と言う単語も、もはや、本来の意味を失ってしまい、彼女を指す愛称として、ごく普通に使われるようになってしまっていた訳なのであった。

マン汁さんは、今日も、皆からは、このアダ名で呼ばれまくって、でも、その事には何も気にかける様子もなく、楽しく、高校生活を送っているのである。

了

眠り姫

その日、僕たち仲良し三人組は、連れ立って、近所の寂れた公園で遊んでいた。他に来園者を見かけなかったものだから、普段よりもハメを外して、だいぶフザけた気分にもなっていたのだ。

すると、歩き回っていた僕たちは、たまたま、ベンチで寝ている人物を発見したのであった。

それは、高校のクラスメートのQ子ちゃんだった。Q子ちゃんときたら、こんな野外の公共の場所で、呑気に昼寝などしていたのだ。

彼女は、私服姿で、ベンチの上に、仰向けに横たわって、眠っていた。うっすらと寝息が聞こえてくるので、確かにグッスリと寝込んでいたようなのだ。この公園に気晴らしに来て、つい睡魔に襲われてしまったのだろうか。

僕は、Q子ちゃんが、友達相手に「私は低血圧で、眠るとなかなか起きられない」みたいな事を話していたのを思い出した。つまりは、彼女は、今、そのような状態なのである。

それとは関係なく、僕たちは、なんとなく、Q子ちゃんの姿を見入ってしまったのだった。

今の彼女が、不思議と可愛く見えたからである。そもそも、Q子ちゃんは、クラスの中でも、そんなに目立つ女子ではなかった。おとなしくて、人見知りで、むしろブスな印象も抱いていた。それなのに、今の眠っているQ子ちゃんは、何やら、とても愛らしいのである。

そこで、僕たちは気付いたのだった。今の彼女は、目をつぶっていたから、美人に見えたのだ。彼女の顔が醜く感じられたのは、その原因のほとんどが、その目つきの悪さのせいだった。だから、目を閉じた今の彼女は、欠点が消えて、僕たちにも好ましく写ったようなのだった。

こんな可愛いQ子ちゃんを見ていると、僕たちは、次第に、眺めているだけでは、満足できなくなってきた。まさかのQ子ちゃんの素敵な一面を知ってしまったものだから、なおさら、僕たちの本能は激しく掻き立てられてしまったのだ。

「ねえ。Q子ちゃんの服、脱がしてみようよ。どうせ、ぐっすり眠り込んでいるんだから、起きやしないよ」と、誰かが言った。

それはイケナイ行為だとは内心では思ったものの、その提案に反対する奴はいなかった。僕たちは、交際相手もいないダサ男子三人組だったし、こんな機会でもなければ、女の裸なんて見る事は出来なさそうだったのだ。

幸い、周りには、他に人は居なかった。Q子ちゃんも、低血圧で、簡単には起きそうにもない。その上で、Q子ちゃんは、正面にボタンがついたワンピースを着ていた。よって、ほとんど彼女の体を動かさずに、服は脱がせそうだったのである。こんな好機は、二度とありそうにないのだ。

かくて、僕たちは、寝ているクラスメートの女子の服を、ドキドキしながら、本当に、脱がしだしたのだった。こんな大胆な事をしても、相変わらず、Q子ちゃんは目覚めなかった。

ワンピースの正面についたボタンを順に外していって、最後に、その上衣を左右に開くと、Q子ちゃんは、すっかり下着姿になってしまったのである。おとなしいQ子ちゃんらしく、学生向けの健全なデザインの下着を身につけていた。パンティは白で、ブラジャーは花柄模様なのだ。

それだけではなく、むき出しになった彼女の白い肌も、とても眩しかったのだった。低血圧と言ってる割には、彼女の体型はぽっしゃりしていて、肉づきも良かったのだ。その健康な爽やかさが、ますます、僕たちの心を舞い上がらせたのである。

「この下着も外してみようよ」仲間の一人が言った。

さすがに、それはイタズラが過ぎる気もしたが、やはり、誰も手を引っ込めなかった。

Q子ちゃんのブラは、フロントホックだったものだから、彼女の体を動かす必要もなく、そのブラも容易に外せたのだ。ブラジャーが左右に分かれると、その下からは、ふくよかな体型に見合った大きな乳房が現われた。地味で目立たない女子が隠していた、意外な秘密である。

こうしてオッパイを見せてもらっただけでも、僕は、真面目な生徒だったQ子ちゃんに対して、とても申し訳ない気になったのだけれども、しかし、他の仲間は、それだけでは納得していなかった。彼は、とうとう、Q子ちゃんのパンティにも手を伸ばしたのだ。そして、彼は、パンティの両サイドを持つと、ズルズルと、足の方へと下げていったのである。

とうとう、Q子ちゃんの股間も丸出しになってしまった。オッパイ以上に、人には見せられない、女の子の一番恥ずかしい部分だ。僕たちは、クラスの女子のそれを拝ませてもらったのである。

おとなしいQ子ちゃんは、オシャレに関心がなかったのか、ほとんど下腹部の手入れをしていないようだった。性毛も、自然な状態のままで、いっぱい生やしているのだ。でも、その方が生々しくて、僕たちは興奮しちゃったのだった。女の人の下の毛って、こんな風に生えているものなのだ。

で、さらに、このモジャモジャな毛の奥には、まだ処女であろう性器も隠れているはずなのである。

もう、このへんで終わらせるべきだったのだろうが、逆に、歯止めがきかなくなってしまった仲間もいたのであった。彼は、とうとう、たまらずに、裸のQ子ちゃんの上に飛び乗ってしまった。なんと、乗りかかった船で、Q子ちゃん相手にセックスも試すつもりみたいなのだ。

今度こそ、それだけはヤメさせるべきだったのだろうが、よく見ると、もう一人の仲間は、Q子ちゃんのデカパイをグイグイと揉み出していた。もはや、皆、発情しまくって、欲望を抑えきれなくなっていたのである。

そして、ここまで、ハデに触りまくると、さすがに、深い眠りについていたQ子ちゃんも、ついに起きてしまったのだった。

彼女は、あのヤブにらみの目を開いた。目覚めたばかりで、何が起きているのか、よく分かっていないみたいである。ただし、トンデモナイ事をされているのだけは理解したらしくて、彼女の顔には怯えた表情が浮かんだ。

Q子ちゃんは、悲鳴を上げようとしたが、そこで、僕が、彼女の口を、手のひらで力強く塞いでしまったのだった。他の仲間も、彼女の手足をガッチリと押さえ込んでいる。そばには人影もないし、彼女には、万が一でも、この状況から逃げ出せる見込みはないのだ。

ケダモノと化した僕たちは、そのまま、Q子ちゃんの体を、三人がかりで犯し続けたのだった。

これまで、初体験の相手はカッコいい女子がいいと思っていたのだけれど、こうしてみると、ダサいQ子ちゃんでも、全然イケちゃうのである。Q子ちゃんだって、高校生のうちに無事にバージンを卒業できたのだから、実は、まんざらでもなかったに違いあるまい。

了

持ち物検査

うちの女学園では、頻繁に、抜き打ちの持ち物検査が行なわれていた。その為、生徒たちも、まるで気を抜く事ができないのだ。

とにかく、うちの学校の持ち物検査は徹底していたのだった。カバンや机の中を調べる程度では済まない。制服の内側に隠してあるモノまでチェックされるのだが、その方法として、全裸になる事も義務化されていたのだ。

うちの学校が、これほどまでも持ち物検査が厳密になったのは、最近起きた生徒による不審物の持ち込み事件が原因だった。その生徒は、なんと、学校にコッソリと覚醒剤を持ってきていたのである。持ち物検査で、そんなモノが見つかったものだから、そりゃあ、先生の方だって、そうとうビックリした事であろう。

この一件については、実は、ひそかに闇に葬られてしまった。覚醒剤の所持など、決して許される話ではないが、もし、この出来事が外部に知れ渡れば、学校自体のイメージも傷がつくし、そこで、学校としては、この問題については、内々で処理してしまったのだ。そして、代わりに、こんな事件を二度と起こさない為にも、持ち物検査ばかりが、やたらと厳しくなってしまったのである。

だから、持ち物検査の際、生徒が裸になると言っても、そんな形式的な作業では終わらないのだ。先生たちは、全裸になった生徒の、さらに肉体までもを丹念に調べあげたのである。

と言うのも、知能犯の生徒ならば、もっと先生を出し抜くような隠し方だって、しかねなかったからだ。先生たちは、それほどまで、また不祥事が起きてしまうのを恐れていたのである。

例えば、近年では、体型を変える為の「人工の皮膚」なんてアイテムも売っていた。これは、肌の上に貼り付ける擬似の皮膚で、これを被せる事によって、体の特定の部分を、太く、たくましく見せ

る事ができるのだ。女性の場合ならば、胸やお尻も大きく見せられる訳である。しかし、この道具こそがクセモノなのであり、使い方によっては、本物の皮膚と擬似の皮膚の間に、モノを隠しておく事もできたのだ。

だから、持ち物検査の時は、先生たちは、生徒がこの擬似皮膚を使っていないかも、徹底的に調べたのだった。実際に生徒の胸とか脇腹とかお尻などを触ってみて、それが擬似皮膚じゃないかを確認するのだ。昨今の擬似皮膚は、そこまで精巧なので、目視だけでは分からなかったのである。

こうして、体の表面を全てチェックしても、まだ持ち物検査は終わらない。仕上げは、体の内側まで調べられてしまうのであった。事実として、本気でモノを隠したい人間は、体内にまでモノを詰め込んでいるものなのだ。

ただし、時間と経費がかかるので、うちの学校では、レントゲンまで使う事はなかった。代わりに、原始的に、体にある穴を押し開いて、その入り口周辺を丁寧に調べるのだ。女性の場合だと、肛門だけでは済まないで、膣の方まで確認される事になった。非処女の子ならば、膣にだって、モノを入れかねないからだ。場合によっては、使用中のタンポンでさえ、外にと引っ張り出されて、不審点がないかどうかを調べたりもした。

このように、うちの高校の持ち物検査は、まさに鉄壁だったのであり、確かに、この検査方法が採用されてからは、二度と、問題のあるモノが学校に持ち込まれた事はなかったのであった。

そして、本日もまた、この持ち物検査が、どこかのクラスにて、出し抜けで、実施される予定なのである。

了

暴力ＳＥＸ

スケ番たちが、他校の生意気な女子をリンチしていると言うので、ちょっと見物してみる事にした。

スケ番たちの溜まり場に行くと、すでにリンチは始まっており、相手の女生徒は、裸にひん剥かれて、床にと転がされていたのだった。もう、だいぶリンチの方は進んでいたらしくて、その女生徒は、体じゅうに生傷を作って、すっかりバテてしまっていた。口には自分の履いていたパンティを押し込まれていて、声が出ないように、猿ぐつわにされているのだ。

この子のブザマな姿を見ていると、俺も、少しムラムラしてきたのだった。

「なあ。こいつとセックスしても構わないかな」オレは、スケ番に訊いてみた。

「おお、いいよ。やっちゃえ、やっちゃえ」スケ番は、快く、俺に答えてくれたのだった。

そこで、俺も、お言葉に甘えて、そのリンチされている女生徒と交わる事にしたのだ。

その女生徒は、まだ意識はあったようだが、過酷な暴行を受けたせいで、もはや精根が尽き果てていたらしくて、俺が自分の体を押し付けても、まるで手向かおうとはしなかった。実に、やりやすいのだ。

俺は、さっそく、彼女のオマンコへと自分のモノを突っ込んでみた。こんなラクにセックスができるとは思わなかったのである。女子のリンチに参加すれば、こんな特典もあるのだ。

この際、相手が誰であろうと構わない。この子、ややユルかったようなのだが、それでも、いちいち不平はこぼさないのである。何たって、タダでやれるのだから。

しかし、そこで、ふと、ある事に気がついたのだった。この子が、時々、絶妙な加減で、俺のアレを締めてくれたのである。それが、何とも言えぬ気持ちよさで、なかなかのテクニシャンなのだ。

はて。この女子は、実はかなりのアバズレで、セックス相手としては一級品だったのだろうか。

いや、そうではなかった。

スケ番たちは、俺がセックスをしている最中ですら、この女に対して、新たな呵責を加えていたのだ。腹を殴ったりとか、タバコの火を押し付けたりしていたのである。そして、そんな暴行を受けるたびに、この女子は身を引きつらせて、同時に膣もピクンと締まったみたいなのであった。

なるほど、こう言うカラクリだったのか。女ってヤツは、こんな風に刺激してやれば、自然と具合が良くなるものなのだ。

俺も、調子に乗って、彼女の首をグイグイと締めてみたのだった。すると、俺が手に力を込めるほど、彼女のアソコの締りの方もキツくなっていったのである。

俺は、ついつい、手に力が入っていった。ほんとに彼女を絞め殺してしまいそうな寸前に、俺も最高の快感を得る事ができて、気持ちよくイってしまったのであった。彼女の方も、セックスの快楽によってではなく、断末魔の苦しみによって、悶絶していた。

さて、それからなのである。俺は、すっかり、この暴行プレイにとハマってしまったのだった。以後、俺は、女と性交（カノジョ）する時は、相手のことを殴ったり、首を締めたりして、挿入行為をするようになったのである。

了

巡り合わせ

彼と彼女は、高校に入学した時に、はじめて出会った。しかし、その時から、すでに、お互いが気になる存在となったのである。だから、間もなく、二人は、何となく、接近し始めた。そして、ほとんど迷う事もなく、意気投合して、親しくなり、付き合い出したのだ。

高校生になったばかりなのに、あまりに早いカップル誕生だったものだから、周りの生徒たちは冗談まじりに冷やかしたが、彼と彼女にとっては、そんな部外者の声は気にもならなかった。だって、二人は本気で相手のことが好きだったのだから。

どんどん仲良くなっていく二人は、早々に、肉体関係のある間柄へと進んでいった。でも、真剣に愛し合っている二人ならば、そうなるのも必然なのだ。

ある日、彼のほうが彼女のことを、自分のうちへと誘って、そこで初めての性行為を経験したのだった。

二人は、互いに、相手の裸体を見て、この世で一番美しいヌードだと思った。それから、抱き合って、その肉体をとことんまで堪能した。最後は、いよいよ、交接である。コンドームなどは使わなかった。二人は、自然のままに、相手の何もかもを受け入れたかったからだ。

こうして、二人は、全てにおいて、一つとなったのである。本当に好きな者どうしが出会えたからこその幸せな一体化だったとも言えよう。

でも、実を言うと、きれいに結ばれていたのは、彼と彼女だけではなかったのだ。

二人の体内の奥深くでは、彼の精子と彼女の卵子も、素敵な接触を果たしていたのである。そもそも、精子と卵子にも相性というも

のがあるのだ。つまり、持ち主の気付いていないところで、精子と卵子も、自分にふさわしい相手を探し求めているものだったのである。

この彼と彼女の場合は、そんな訳で、精子と卵子の方も、ピッタリと望んでいた相手と巡り会えていたのだった。かくて、彼女の子宮の中では、これらは、幸せな受精を実現して、新たな生命の状態になっていたのである。

あるいは、彼と彼女が惹かれ合っていたのですら、実は、これら精子と卵子の愛の意志に導かれたゆえの成り行きだったのかもしれない。しょせんは、人間本体なんてのは、精子と卵子を入れておく為の器に過ぎないものなのだから。

了

体験入部

部活動の女子の着替えを覗いていた一人の男子生徒が、現行犯で捕まってしまった。

女子たちの怒りは、並大抵ではないのだ。その部活というのが、たまたま体操部で、レオタードに着替える為に全裸になっていたところを覗かれてしまった女子部員もいたものだから、尚更なのである。

その覗き魔の男子は、体操部員たちが揃っている体育館の方へと連れていかれた。周りをグルリと女子たちに囲まれてしまうと、たとえ男子でも、とても抵抗できそうにないのだ。

「お願いだ。許してよぉ」と、その男子は、情けない声で、女子部員たちに謝った。

だが、目を尖らせた女子たちは、全く許してくれそうな気配はなかったのである。

すると、体操部の部長が、一歩、前へと進み出た。

「それなら、あなた、今日は、うちの部に、体験入部した事にしましょうか。だったら、更衣室を覗いていても、おかしい話ではなくなるわ」彼女は言った。

この提案を受け入れる事で、罰せられなくても済む事になり、男生徒もホッとしたのだった。しかし、実は、部長が意地悪い笑みを浮かべていた事に、この男子は全く気付いていなかったのだ。

さっそく、この覗き男子の体操部への一日入部が始まる事になった。

部のマネージャーが、部室より、スペアのレオタードを持ってきた。男生徒に対して、このレオタードを着れ、というのである。まあ、体験入部するならば、部の専用ユニフォームに着替えるも、当然のことなのだ。

男生徒は、止むを得ず、そのレオタードを着てみたのだった。だけど、そのレオタードは女子用だったのだ。男の彼が装着したら、全然小さくて、ピチピチだったのである。

なんともチンチクリンなのだ。その見っともない格好で、男生徒は、照れながら、他の体操部員の前に姿を現わしたのだった。

この男子の情けない姿を眺めて、女子たちはクスクスと笑っていた。男子にしてみれば、これは、なかなかの恥ずかしい戒めになったのである。

この日は、この体育館は、女子の体操部しか使っていなかった。顧問の先生も、顔を出しには来ないのである。女子部員たちによる男生徒への制裁は、この密室の中で、のびのびと続けられたのだ。

さて、男子のレオタード姿で、何が格好悪いと言っても、股間のあたりが思いっきりモッコリしていたのが、特に目立っていた。女子用のレオタードだったものだから、股間の膨らみは、ますます強調されたのだ。

「やだあ。あんた、何よ、この見苦しい部分は！」女子たちは、それぞれ、男子の股間を見て、バカにして、せせら笑った。

男生徒にしてみれば、顔が真っ赤になるほどの屈辱なのだが、それでも、体験入部をしちゃった立場上は、嫌がる事も言い返す事もできないのである。彼は、女子たちの嘲笑を、じっとしたままで、ずっと堪えたのだった。

すると、女子たちは、もっともっと調子に乗り出した。

無抵抗の男生徒の股間を、イタズラ半分に、ツンツンしたのだ。それも、手では触りたくないものだから、足を高く上げて、その先でチョイチョイ突いてくるのである。柔軟な体を持った体操部ならではのフザケ方だ。

無理やりレオタードを着せられて、その上、モッコリしちゃった股間をからかわれるなんて、これ以上の侮辱はないとも言えよう。しかも、女子たちはけっこう強めに突っついてきたものだから、男生徒は、時々、ウッと痛がりもしたのだった。そのうち、エスカレ

ートして、ガチで蹴っ飛ばしてくる女子も現われた。着替えを覗いた罰とは言え、男子の股間は、集中的にボコボコにいじめられまくったのだ。

さすがに、ちょっと腫れてきちゃったのか、男生徒も、モジモジしながら、股間をさすっていた。

とうとう、部長が、平均台も引っ張り出してきた。

「さあ、体験部員さん。この平均台に挑戦してみなさい」

男生徒は、おっかなびっくり、平均台に上がった。こんなもの、やった事がないので、彼は、小さく震えているのだ。さらに、彼は、両手を頭の上に伸ばした格好で、この平均台を渡る事も強要されたのである。

男子は、恐る恐る、ちょっとずつ平均台の上を移動した。

「もう、何やってんのよ！遅い、遅い！」ふざけた女子部員たちが、ガタガタと平均台を揺らした。

と、足を滑らした男子は、そのまんま、平均台に股を挟んだ状態で、落ちてしまった。

平均台に、モッコリした股間を直撃させて、男生徒は、押しつぶしたような悲鳴をあげたのだった。全体重をかけて、股間を圧迫しちゃったので、そりゃあ、想像を絶する痛さだったのであろう。きっと、これまで女子たちに蹴られた時とも比べられないほどの激痛だったのに違いあるまい。

男生徒は、床へと転げ落ちると、両手で股間を押さえて、白目をむきながら、卒倒してしまった。

「あら、この程度で、もう終わり？何よ、つまんないの。ねえ、皆、こんな奴、ほっといて、自分たちの練習を再開しましょうか」冷めた口調で部長が言った。

そして、失神した男生徒のことは、本当に、稽古場の隅の方に放置したままで、他の女子部員たちは速やかに自分たちの練習にと戻ったのだった。

了

隣のオナニー

し烈な受験戦争を勝ち抜いて、ついに僕は志望していた高校に受かりました。

中学時代の三年間は、この目標を達成する為に、僕は、あらゆる欲求を絶っていましたので、こうしてホッとしますと、気が緩んで、一気に、それらへ対する熱い思いが噴き出てしまったのでした。

で、その中でも、特に強かったのが、性への欲望だったのです。

中学生の頃は、僕は、勉強に集中する為に、現実（リアル）で女子とは付き合わなかっただけではなく、自身の心の中に渦巻く情欲そのものを押さえつけていました。だから、異性に関心はあっても、あえて、その気持ち自体を完全に抑圧していたのです。

それだけに、受験が終わった途端、僕は、これまで意識しないようにしてきたエッチな心を、洗いざらい開放してしまったのでした。憧れていた性への興味を全て解禁したのです。

かくて、僕は、初めて、エロ本とかアダルトビデオなどを拝見しました。実写の女の裸をたっぷりと見物して、これまで僕にとっては未知だった世界を十分に味わって、人なみに興奮させてもらったのです。勉強一本やりの僕だって、裏では、男の本能もきちんと育っていたのであります。

それから、もう一つ、僕が、異性のヌードと同じぐらい、気になっていたものが、実はオナニーなのでした。中学の時に、すでに、僕は、なんとなく、自慰（オナニー）という行為がある事を理解していました。自分のオチンチンが、たまに立ってしまう事にも気付いていたのです。だけど、あえて、勉強の妨げになるからと、オナニーを実践してみる事だけは控えていたのであります。

入試テストが終わり、高校入学が確定した事で、僕は、ようやく、その禁止（タブー）を解きました。僕は、入学のお祝いも込めて、はじめて、

センズリを試してみたのです。そして、僕は、その行為をすると、いかに幸福な気分になれるかを、身をもって認識したのでした。

それからの僕は、すっかり、オナニーの虜になってしまいました。毎日のように、オナニーをして、爽やかな快感をむさぼったのです。それは、僕にとって、一番幸せな時間となりました。

でも、やがて、僕は、他の人たちも自分と同じなのかが、気に掛かってきたのでした。特に、自分と同世代の学生たちのオナニー事情が気になり始めたのであります。そう、彼らだって、僕と同様の受験生だったのです。と言う事は、彼らもまた、僕みたいに、中学の頃は、こんな楽しいオナニーは我慢し続けて、高校生になってから、初めてオナニーに触れたのでしょうか。なんだか、そのへんの実情が知りたくなったのです。

そうしているうちに、僕は、女性もオナニーする事を、情報として入手したのでした。という事は、高校でクラスが一緒だった女生徒たちも、きっと、オナニーしている事になります。なんか、その事をあらためて意識すると、ひどく体が熱くなってきたのでした。

だって、今までは、まるで気に留めてこなかった彼女たちが、本当は、どこかで、オナニーしているかもしれないのです。それを想像しただけでも、彼女たちへの印象が変わってしまい、とても不潔でイヤラシイ存在に感じられてきたのでありました。

僕のオナニーに対する関心は深まるばかりでした。いろんな文献や資料を漁ってみて、女性は、オナニーする際に、裸になって、道具も使う事を知りました。その道具というのも、お金のない女学生の場合は、キュウリや人参などの野菜を使うと言うのです！

大胆な女子（こ）は、男とヤらずに、オナニーで自分の処女膜（バージン）を破ったりもします。つまり、アソコにキュウリを突っ込んじゃうのです。ああ！大事な初体験の相手がキュウリの女子もいるだなんて！

また、自慰をする場所だって、自分の部屋でひそかに行なうとは限らず、人目を盗んで、学校の教室や部室などでオナっちゃう女生徒もいるらしいです。その方がスリルがあって、本人も発情できる

と言うのであります。さらには、女子同士のイジメで、オナニーをやらせる事だってある、とも耳にしました。

とまあ、このような情報が次々に入ってきますと、周囲にいるクラスメートの女子たちが、全て、これらに当てはまっていそうな気もしてきたのでした。可愛い女子とか、いじめられていた女子とかは、特に気になりました。何だか、彼女たちがオナニーしている姿が、勝手に、妄想で、頭に思い浮かんできちゃうのです。

このように、僕は、いつからか、普通に彼女ら（クラスメート）と同席しているだけでも、欲情してきて、ひどくドキドキするようになってしまったのでありました。

そして、こんな事ばっかりを考えて、授業にも身が入らなかったものだから、高校での僕の成績はガタ落ちとなり、当然ながら、いっぺんに悪くなってしまったのでした。

了

ちょん切り魔

うちの市内を脅かしていた猟奇事件が、ようやく解決した。

それは連続通り魔事件だった。その事件の加害者は、夜道を歩いていた女性をいきなり襲って、その服をハサミで切り裂いていたのだ。そして、恐ろしい事に、仕上げは、被害者の女性の乳首も、ちょん切っていたのである。

しかし、こんな惨劇は二度と起こりはしない。なぜなら、この事件の犯人だった変質者も、今は存在しないからである。そう、現行犯で捕まりそうになった犯人は、その場で、ナイフを自身の首にと突き刺して、自害してしまったのだから。

そんな訳で、あたしも、安心して、夜遅くに、帰宅できるようになったのだった。その日も、だいぶ更けた時間帯に、ようやく学校を出て、自宅むけて、一人で歩いていたのである。

そして、他に通行人も車も見かけないような寂しい道を通りかかった時だった。

あたしは、ふと、目の前の道路に、おかしなものが有るのを発見した。

それは、ハサミだった。どこの家庭にもある、普通の金属製の裁ちバサミだ。それが、なぜか、空中にポカンと浮かんでいたのである。まるで、あたしの進路を遮るかのように。

最初、あたしは訳が分からなかった。手品（トリック）だとしても、ハサミなんかを、こんな道路に浮かばせてみせる理由が思いつかないのだ。一体、どのような事情があると言うのだろうか。

やがて、浮遊していたハサミは、ゆっくりと、あたしの方へと刃先を向けた。さらに、そのまま、優雅な動きで、あたし目がけて、飛びかかってきたのだ。

あたしはギョッとしたが、完全に逃げ遅れてしまった。

ハサミは、鋭く、あたしの着ていた制服にと突き刺さってきたのだ。そして、鮮やかなお手並みで、あたしの服を切り破いていったのだった。

これって、一体？

あたしは動揺した。だが、自由に飛行できるハサミ相手では、ろくに立ち向かえもしないのだ。しかも、周囲には助けてくれそうな人影もなかった。

あたしは、走って逃げようとしたが、ハサミの動きの方が、ずっと早いのだ。逃げるあたしは、追い掛けられながら、続けざまに服を切られていった。

たちまち、あたしの服はズタズタになってしまった。制服も下着もだ。切り裂かれた服は、あたしの体の上から外れていき、いつしか、あたしは、半裸の状態に、いや、すぐに、素っ裸にされてしまった。

なのに、謎のハサミは、まだ、あたしへの攻撃を止めないのである。

もしかして、これは？・・・自殺した猟奇犯人の怨霊なのでは？犯人は、世を恨み、死に切れなくて、ハサミに取り憑いて、現世に蘇ったのだ。ハサミの妖怪となり、今、あたしは、そいつに襲われているのである。

となると、ハサミは、お次は、仕上げにかかってくるはずだ。そう、案の定、ハサミは、裸になったあたしの胸の方にと向かってきたのだった。

「やだ、やだ！」

あたしは、必死になって、あたしの乳房にくっつこうとするハサミを払いのけようとした。

でも、お化けのハサミは、確実に、あたしの乳首を挟む形で、ポジションを定め始めたのである。

あたしは、ハサミを叩き落とすのではなく、自分の方が動いて、逃げようとした。しかし、それも無理だった。ハサミは、あたしの

動作にピッタリと合わせてしまい、完全に、あたしの乳首を両刃で挟んだ位置から離れないのだ。この刃を閉じられたら、きっと、あたしの乳首は切り離されてしまうだろう。

あたしは、死に物狂いで抵抗した。ハサミを力づくで引き離そうとしたり、自分の方が体をメチャクチャに動かして、ハサミをズラそうともしたのだ。

でも、駄目だったのである。ハサミは、的確に、あたしの乳首を挟む定位置で固定されていて、全くズレそうにもなかったのだ。

なんて恐怖！このままじゃヤバいと分かっていながらも、どうする事もできないのだ！ハサミの刃は、ゆっくりと、着実に、乳首のそばに近づいている。なのに、あたしの乳首ときたら、興奮してしまったのか、恥ずかしい事に、ピンと立っちゃったりして！

錯乱するあたしが見ている前で、ハサミの刃はどんどん閉じていく。

了

アバター授業

全世界を震撼させた新型コロナによるパンデミックは、わが国でも、学校でのオンライン授業を急速に促進させるキッカケとなった。そして、モニターを使った遠隔授業のシステムは進化していく一方であり、さらに革新的な技術が開発される事になったのだ。

その日は、新しいタイプのオンライン授業の実験日であった。

この実験の為に、某学校の教室が実際に使用されて、そこでは教師役の研究員も待機していたのだ。

教室の中にいたのは、彼一人だけだった。生徒役の被験者は誰もいないのである。教師の正面には、ただ、無人の生徒の席だけがズラリと並んでいるのだ。

いよいよ、実験が始まった。

すると、誰もいなかったはずの生徒たちの机に不思議なことが起こったのだった。

椅子が置かれていた位置に、黒いモヤがかかったのである。そのモヤは、すぐに鮮明な形にと変わっていった。

そこには、いつの間にか、生徒たちが腰かけていたのである。机のうち、最前列の１０席ほどが、生徒の姿で埋まってしまったのだ。皆、ニコニコしていて、確かに、本物の生きた人間の高校生だった。彼らは、きちんと学校の制服も身につけているのである。

もちろん、これは幻なんかではない。かと言って、瞬時にワープして、実物が出現したのでもないのだ。これぞ、新しいタイプのモニター映像なのである。最先端の３Ｄ映像なのだ。生徒たちは、自宅から、自分の姿をカメラで写して、この教室へと送り込んでいたのだった。

この大成功に、教師役の研究員も、大満足しているのである。満面の笑みを浮かべたのだ。

この技術を使えば、生徒たちが実際に登校してこなくても、先生一人が教室にいるだけで、まるで、全員が揃って、教室で授業を行なっているような気分になれるであろう。味気ないモニター同士を繋いだオンライン授業よりも、ダンゼン、授業をしている雰囲気を味わえると言うものなのだ。

生徒たちの制服だって、ほんとは、きちんと着ていたのではなかった。これも、この３Ｄ映像のオプションの一つであり、人間の映像の上に別の映像を重ねて、リアルに制服を着ているように見せかけていただけなのだ。よって、現実の生徒たちは、面倒臭い制服などには着替えておらず、恐らくは、自宅で、リラックスした私服姿で居たに違いないのであった。

言うまでもなく、この着せ替えシステムは、この３Ｄ映像が様々な場で利用されるようになった場合、職場でも家庭でも応用できるのだ。つまり、自分の３Ｄ映像を遠くの人に見せるだけではなく、服装にも気を使わなくて済むようになるのである。この点だけでも、皆に喜ばれる便利な新機能だったとも言えただろう。

教師役の研究員は、実験の成功に浮かれながら、ゆったりと、教室の中を歩き回ってみた。

でも、すると、いきなり、思わぬ失敗点を発見してしまったのだった。

確かに、正面から眺めれば、生徒たちは、がっちりと制服を着こなしていた。しかし、ほんの少し位置がズレて、真横や背後から観察すると、擬似の制服は完全に消えてしまったのだった。しょせん、偽りの映像なので、正面にしか表示されていなかったのである。

だから、それ以外の方角から観察すると、３Ｄ映像の生徒たちは、制服なしの状態になってしまったのだった。いや、今現在の私服を着た姿で写っていたのであれば、まだいい。どう言う加減で、ヘンに精密さに凝ってしまったのか、そこには、人間のみが３Ｄ化されて、写っていたのだった。つまり、皆、全裸だったのだ。

可哀想に、この実験に参加した生徒たちは、この事実に、まだ少

しも気付いていないのである。彼らの誰もが、普段通りに、明るく、堂々と、裸で椅子に掛けていた。男生徒だけではなく、女生徒もだ。彼らは、ピチピチした眩しい裸を、すっかり、教師役の研究員に晒していたのであった。

全く、新しい技術なんてものは、なかなか、すぐには完成しないものなのだ。

了

ペドフィリア

正直に白状しよう。僕は、女の子でしか興奮する事ができないのだ。

女の子と言っても、広義的な「若い娘」という意味合いではない。本当に、１０歳ぐらいの年齢の少女にしか欲情できないのである。

女性の膨らんだオッパイやくびれたウエストなどを見ても、ちっとも色っぽいとは思えない。それよりも、平らな胸やずん胴の方が、はるかに僕の心をワクワクさせてくれるのだ。

もっとも、そんなガチの幼女と性的交渉などを持ったら、たとえ、相手の同意があろうと、犯罪となってしまう。さすがに、ロリコンの僕でも、そこまでの危険を犯す意志はないのだ。

そこで、僕が考えたのは、本物の幼女の代わりに、幼女に近い体型の成人女性と付き合おうと言うアイディアであった。成人女性ならば、セックスしようが、問題はあるまい。それも、若ければ若いほど良いのだ。よって、僕は、より身体が未熟である高校三年の女学生に目をつけたのだった。

そして、色々と探し回った結果、ついに、あらゆる点で、僕の理想どおりの女子高生を見つけ出したのだ。

僕は、すぐに彼女へと交際を申し込んだ。彼女の方も、自分がモテた事に驚いていたようだった。彼女は彼女で、あまりに幼すぎる見た目のせいで、これまで男に好かれた事がなかったのである。

こうして、僕とその幼女のような女子高生は、晴れて、付き合うようになったのだった。

彼女は、全く、ベストの人材だった。背丈は１５０センチ以下。完全な童顔。声の方も、かなり甲高い。もちろん、露骨な幼女体型の持ち主なのだ。その上で、まだ１０代だったものだから、肌もまだまだ若々しくて、子供っぽい服さえ着せてしまえば、まさに小学

生にしか見えなかったのだった。

こんな彼女と、僕は、度々、デートをした。もちろん、彼女には、できる限り、幼く見えるような私服を着せてだ。恐らく、僕と彼女のデート現場を目にした第三者たちには、僕たち二人の姿は、ただの親子にしか見えなかった事であろう。

こうして、僕は彼女との仲を深めていった。やがては、彼女の心もガッチリと掴んで、ようやく、肉体関係を結べる段階にまで漕ぎ着けたのである。

僕は、彼女を、自分の一人暮らしのアパートにと招待した。彼女の方も、すっかり、僕に抱かれる決意を固めていたのである。

そして、ついに、その時が来たのだった。

彼女は、僕の目の前で、嫌がる事もなく、服を脱ぎ始めたのだ。まずは、ブラウスを取って、下着姿になった。

着衣した状態でも十分に分かっていたものの、裸になれば、彼女の幼女体型ぶりが、よりハッキリと確認できたのである。胸なんて本当にペチャンコで、ブラジャーなんて全く必要ない。丸太のような胴体も見事なのだ。

彼女は、恥じらいながらも、下着も外し出した。

ブラジャーの内から現われたのは、前述したような、男の子のようなオッパイだった。彼女にしてみれば、それはコンプレックスだったのかもしれないが、僕にしてみれば、最高に理想の乳房なのである。胸の上に、ちょこんと乳首だけが飛び出ていたのが、あまりにも可愛すぎるのだ。

最後に、彼女は、パンティをずり下ろし始めた。そこには、小ぶりなお尻や未熟な性器などがあるに違いない。とうとう、それを拝めるものだから、僕もゴクリと息を飲んだのだった。

ところが、そこで、僕は、予定外のものを目にしてしまったのである。

性毛だ。彼女の恥丘には、ワサワサと陰毛が生えていたのであった。でも、彼女も実際は１８歳なのだから、性毛を生やしていたと

しても、決して不思議な話ではなかったのである。
僕は、複雑な心境になってしまった。
彼女の裸体は、あらゆる点において、確かに、幼女そっくりなのだ。それなのに、唯一、股間には、子供らしくない性毛がいっぱい生えているのである。他が完璧な幼女だっただけに、その大人の部分が、ひどく違和感いっぱいに目立ったのだった。
いっその事、そんな性毛なんて、剃っちゃえば良かったのかもしれない。しかし、それには、彼女の許可が必要である。本来、自分の幼い容姿を嫌っていた彼女が、陰毛を全て剃るなど、とても了解するとは思えないのだ。
そんな訳で、僕は、性毛のある状態の彼女と愛し合うようになったのだった。幼女のようなルックスなのに、性毛だけ生やしている彼女を抱くのは、なんとも不思議な感覚なのだ。本物の幼女を相手にするのとも、立派に成熟した成人女性を抱くのとも、そうとう印象が違うのである。
しかし、それでも、この状態に慣れてくると、むしろ、この「性毛がある幼女」と言うシチュエーションの特殊性が、逆に楽しく思えてきて、唯一無二の彼女をよけい愛せたのも事実なのであった。

了

便器生徒

オレは、子分どもを引き連れて、クラスメートの男子の一人をリンチにかけた。

別に、その男子に恨みがあった訳ではない。実は、何でも言いなりになる奴隷が欲しかったのだ。

すると、オレたちの手で、服をひん剥かれて、全身に暴行を受けたその男生徒は、あっさり、オレに全面服従を誓ったのだった。全てが望んだ通りなのである。

オレは、さっそく、この奴隷男子で楽しんでみる事にした。

裸のままの彼を、膝立ちさせると、その状態で絶対に動かないように命令したのだ。すでに過度な暴力を受けたばかりで、疲れ果てていた彼は、楯突く気力もなかったようだった。彼は、言われた通りに、オレの前で、膝立ちの格好で佇み続けたのだ。

オレは、嬉々として、自分のスラックスのファスナーを下ろした。そして、自分のイチモツを、スラックスの外に引っ張り出したのである。このあと、オレは、このイチモツを、目の前の奴隷男子にくわえさせたのだった。そう、こいつにフェラチオをやらせたのだ。膝立ちだと、彼の口は、ちょうど、イチモツをくわえやすい位置なのである。

彼も、いきなり、こんな事をやらされて、かなり動揺していたようだった。しかし、絶対に中止はしない。オレたちは、彼の体をガッシリと押さえつけて、オレのイチモツを強引に彼に頬張らせ続けたのである。

まさか、男のモノなんかをしゃぶらされて、この奴隷野郎も、かなり嫌そうな様子だった。彼の口が、ものすごく必死に、オレのイチモツを拒んでいるのが、その感触から、よく伝わってきたのだ。

でも、オレだって、決して止めたりはしないのである。実は、前

から、フェラチオを経験してみたいと思っていたからだ。ただし、女子に頼んでみて、笑われたら恥ずかしかったので、こんな強行手段にと出てみたのであった。

そして、思った通り、口腔でペニスを刺激されるのは、想像以上の快感だったのだ。奴隷野郎の拒絶した感じが、むしろ、気持ちいい舐め回しにもなったのである。とうとう、オレは、この奴隷の口の中で射精してしまったのだった。全く、自分の手でシコシコするよりも、ずっと爽快にヌケるのである。

口の中がオレの精液で溢れてしまった奴隷野郎は、よく見ると、ボロボロと涙を流していた。ショックで、少し意識が飛んでいた風にも見える。こいつだって、そもそもは、男の方が好きだった訳でもないのだ。それなのに、男のモノを舐めさせられるなんて、そうとうな気持ち悪さで、屈辱だったのであろう。

さらに、よく観察すると、裸の奴隷野郎のペニスからも、白い液体が流れ出ていたのだった。やれやれ、オレのペニスをしゃぶった事への動揺が強すぎて、体が勝手に興奮して、こいつ自身も、無意識に吐精してしまったらいい。

「おい。何を出してやがるんだよ。てめえは、こんなもの、もう二度と出さなくていいんだよ」

オレは、ドスをきかせて怒鳴ると、奴隷野郎の陰嚢（キンタマブクロ）を掴んで、ギュッと握り潰してやったのだった。

こうして、フェラチオのプレイに目覚めたオレは、毎日のように、この奴隷男子にオレのペニスをくわえさせて、フェラチオと口内射精を楽しむようになったのである。

奴隷男子の方は、すっかり絶望してしまったようで、辛そうな顔は見せても、いっさい逆らわなくなった。いつだって、自分の口にオレのペニスを受け入れてくれたのだ。ただし、精神状態がおかしくなってきたのか、彼の目も反応も、普段から、どんどん虚ろになっていったようにも感じられた。

ある日、いつものように、彼にフェラチオをやらせていた時の話

だった。ふと、オレは尿意をもよおしてきた。そこで、オレは、面白半分に、彼の口の中に放尿してみたのだ。

またしても、異質な液体が口内に注ぎ込まれたものだから、彼も最初はビックリしていたようだった。だが、オレは、彼に口を離す事を許さず、さらに、大量に出たオレのオシッコを、そのまま、彼に飲ませてしまったのである。

これは、なかなか、面白い遊び方だと思えた。そこで、オレは、子分たちにも、奴隷野郎の口の中にオシッコを流し込むように指示したのである。子分たちも、楽しそうに、言われた通りにしてくれた。つまり、奴隷野郎は、何人もの男のオシッコを飲まされるハメになってしまったのである。吐き出す事はオレが許可しなかったので、彼は、他人の尿を飲まざるを得なかった。それも、大量に。人間としては、まさに最低の扱われ方なのである。

あとで、彼の様子を観察してみると、何やら、スラックスの股間のあたりが、ビッショリ濡れていたようだった。こいつときたら、小便の飲み過ぎで、自分も小便を漏らしてしまったらしい。飲んだ小便が、さらに小便になって出ちゃったとは、まさに大笑いなのだ。

さて、この遊び方がとても気に入ったものだから、それからは、オレは、フェラチオだけではなく、奴隷野郎に小便も飲ませて、楽しむようになったのだった。授業の合間の休み時間に、子分と一緒に、彼のそばへと群がる。そして、彼に、皆の分のオシッコを飲ませたのだ。これで、オレたちは、小便をしたくなるたびに、いちいち、トイレまで行かなくても済むようになった訳である。

男相手に、フェラチオをやらせたり、小便を飲ませてみても、こんなにも楽しいのだ。もし、女子に同じ事をやらせてみたら、果たして、どれだけ興奮を得られるものだろうか。

実は、今のオレは、女子の奴隷も育成する事を、本気で考えている最中なのである。

了

春を売るクラスメート

もうすぐ、高校も卒業だ。それなのに、僕は、恋人（カノジョ）もいないし、初体験もまだなのである。

これでは、社会に出たあと、皆から笑われてしまいそうなので、思い切って、僕は、お金さえ出せば寝てくれると言う女生徒に相談してみる事にしたのだった。うちのクラスには、そんな女子がいたのである。

普段はほとんど会話もした事のなかった彼女に、この話を持ちかけてみると、すぐに話がまとまった。お金を払えば、彼女は、僕と寝てくれる事になったのである。

待ちきれなくて、僕は、その日のうちに、彼女の家に訪れた。彼女の家には、他に家族の姿はなかった。彼女は、一人っ子だったし、両親も共働きで、夜遅くまで戻ってこなかったからだ。昼間の彼女んちは、彼女の好きなように使えたのである。

はっきり言って、彼女は、美人ではなかったが、ブスという程でもなかった。僕の好みのタイプからも、だいぶ離れていたのだが、でも、この際、寝てくれる以上は、好き嫌いは言えないのだ。

さっそく、僕たちは、彼女の部屋の中で、性行為を体験する事になった。

自分のベッドに座った彼女が、さばけた調子で、服を脱いでいく。あっという間に、彼女は、上半身裸になってしまった。思った以上に胸は小さめなのである。

僕のガッカリした気持ちが顔に出てしまっていたのか、彼女が僕に話しかけてきた。

「何よ？微乳だったのが、不満？でも、ちゃんとした女の子のオッパイよ。触ってみれば、それがよく分かるわ」

彼女は、僕に、自分の胸に手を当てる事を勧めてきた。僕は、そ

の言葉に従ってみた。

確かに、彼女の胸は、小さくても、絶妙に柔らかくて、気持ちのいい肌触りなのである。筋肉質の男の胸とは全然違うのだ。

僕が感心していたのが、彼女にも伝わったのか、彼女はニヤリと笑った。

「ねえ。オッパイを揉むのは、別料金なのかい？」僕は訊いた。

「本番行為の前に、多少の前戯は必要だろうし、そのぐらいは無料にしてあげるわ。だけど、口へのキスは料金追加ね。あと、フェラチオや手コキもしてほしいんだったら、それも別料金をいただくわ」

僕は、ひとまずは、挿入行為以外はやめておく事にした。とにかく、真っ先に、童貞だけでも捨てておきたかったのである。

そうと決まると、彼女は、すぐに他の衣類も脱ぎ始めた。僕も、寝やすいように、自分の服を脱いでいった。

そして、僕たちは、彼女のベッドの上で、ついに抱き合ったのである。

僕にとっては、何もかもが初めての体験だった。女の子の体って、抱きしめてみると、こんな感触なのである。何から何まで、僕には新鮮に感じられたのだった。勢いで、つい、キスとかフェラチオとかも試したくなってはきたのだが、そのへんは商売だったし、彼女はとても冷静であり、僕の誘いには絶対に乗ってこなかったのである。

やがて、僕の体の方も、十分に準備が整ったので、いよいよ入れてみる事になったのだ。体位は普通の正常位だった。それでも、彼女が上手にリードしてくれたものだから、僕は容易にハメる事ができたのである。さすが、彼女は商売としてヤり慣れていたらしく、手際がいいのだ。

彼女のアソコは、想像とは違って、かなりユルかった。もしかしたら、彼女個人が特にお粗末だったのかもしれない。または、ヤりすぎて、ユルくなってしまったと言う事も考えられるだろう。でも、初心者だった僕にとっては、このぐらいユルユルな方が、むしろ、

ヤりやすかったのだ。
彼女に導かれて、とうとう、僕はイってしまった。見事、童貞とお別れする事ができたのだ。
僕は、中出ししてしまう前に、急いで、自分のモノを彼女の中から引っ張り出した。中出しした場合は、別料金を取られる事になっていたからである。
「ありがとう。気持ちよかったよ」僕は、彼女に礼を言った。
彼女は、何とも思っていないのか、ケロッとした表情をしていた。きっと、知らない相手とセックスするのにも慣れてしまい、すでに何の感情も抱いていなかったのであろう。
僕は、料金の千円札を一枚、彼女へと差し出した。
それを受け取った瞬間だけ、彼女は、とっても嬉しそうな笑みを浮かべたのだった。

了

根性焼きエクスタシー

A子は、高校生の頃は、学校を牛耳るスケ番らによって、定期的に暴行(ヤキ)を入れられていた。

別に、彼女が、スケ番に楯突いていたとか、ツッパっていたとか、そう言った事情があったのでもない。A子は、あくまで、見せしめのパフォーマンスとして、スケ番たちにリンチされていたのだ。

彼女の通っていた三流高校は、完全に不良やスケ番たちの天下だった。彼らは、上納金として、頻繁に、一般生徒からカツアゲをしていたのである。効果的に、スムーズに、皆にお金を出させる為には、恐怖支配するのに限るのだ。一般生徒たちに、常に恐れを抱かせ続ける目的で、スケ番は、見せしめシステムを採用していたのであった。

この見せしめ要員は、A子だけではなく、他にも何人か居た。彼らは、スケ番たちに特に睨まれていた生徒だった訳でもなく、ほんとは、誰でも良かったのである。実際、A子は、不良とは縁遠い、ごく平凡な一般生徒だった。それなのに、スケ番に何となく見せしめにと選ばれて、それからは地獄の学校生活を強いられてしまったのである。

見せしめ生徒たちは、時々、スケ番たちに強制的に呼び出されて、彼女らの溜まり場で、リンチされた。理由なんて、何でもいい。とにかく、無理やり、屁理屈のような理由をつけられて、必ずヤキを入れられたのである。

ヤキと言うぐらいだから、その制裁の内容は、根性焼きだった。それぞれの見せしめ生徒が、どの子も、体の同じ部位にばかり、いつも、根性焼きをされたのである。

ある生徒は、腕だけに根性焼きを受けさせられた。その子の両腕は、見るも無残に、丸い火傷の痕だらけになってしまった。また、

別の生徒は、ミルク焼きの刑に処された。ミルク、すなわち、乳のことで、彼女は、乳首やオッパイに集中して、根性焼きをされたのだ。

そして、A子は、これらの中でも、もっとも過酷な、オマンコへの根性焼きを担当させられたのだった。

場所が場所なだけに、A子は、リンチを受ける前は、常に全裸にされてしまう。それから、むき出しになった女性器へと、真っ赤に燃えたタバコの先を押し付けられたのだ。

普通に腕や腹にされる根性焼きだって、十分に熱いのである。それが、女の大切な部分に受けたとなると、そりゃあ、並みの衝撃ではないのだ。しかも、リンチが終わった後も、オマンコには、ガッチリと火傷の痕が出来てしまって、精神的ショックもヒドいのであった。

A子がより気の毒だったのは、この根性焼きのリンチが、一回限りのものではなかった点である。彼女は、その後も、見せしめとして、繰り返し繰り返し、女性器への根性焼きを体験させられたのだ。

一人の見せしめ生徒には、体の同じ部位にしか根性焼きをしない、と言うのが、スケ番たちの決め事だった。だから、A子は、ずっと、一番辛いオマンコへの根性焼きを受けさせられるハメになってしまった。A子の方は、たまたま選ばれてしまっただけなのに、それで、もっとも酷い仕打ちを受け続けたのである。で、スケ番たちにしてみれば、そんな事は知ったこっちゃないのだ。見せしめ生徒は、もともと、誰だって構わなかったのだから。

可愛そうなA子は、スケ番の呼び出しを受けるたびに、この究極の苦しみを味わった。

リンチ自体も辛いけど、オマンコの根性焼きの痕が、ずっと消えないのも、年頃の女子にしてみれば、とっても悲しいのだ。少しでも火傷の跡が治りかけた時に、再びスケ番に呼び出されてしまう。そして、癒え始めていた火傷の位置に、寸部違わず、また焼印を押されてしまうのだ。これじゃ、いつまで経っても、根性焼きの痕は

消えっこないのである。いや、それどころか、何度も焼かれる事で、悪化して、どうやら、火傷の痕がより鮮明に刻まれていったようにも見えたのだ。

もっとも、根性焼きの行為そのものだって、十分に苦行なのであった。スケ番に呼び出されたら、絶対に根性焼きされると分かっていたものだから、ますますキツいのである。一度の根性焼きが終わったとしても、すぐに、次に根性焼きされる日のことも思い浮かんでしまい、その不安で、A子は、いっときも心が休まらなかったのだった。

敏感な性器部への焼きゴテは、本当に、言葉では表せないほどの痛さなのであった。何度受けても、この激痛には慣れそうにないのだ。それを知ってか知らずか、スケ番は、より入念に根性焼きするようになっていった。A子がもっと熱がるように、グイグイとタバコを強く押し付けて、そのリンチの時間もじょじょに長くしていったのである。

手足をガッシリと押さえつけられていたものだから、哀れ、A子は、大きく暴れられない代わりに、体じゅうを小刻みに痙攣させて、泣いて、身悶えしたのだった。これは、なかなかの見ものの拷問なのだ。

アソコを焼かれている最中に、A子が、思わず、オシッコをチビってしまったり、愛液がにじみ出てしまうような事もあった。根性焼きされている部分の都合上、A子は、それらの失態も、包み隠さず、処刑人のスケ番らに見られて、大いに笑われてしまったのである。

この責め苦があまりにもシンドすぎて、とうとう、根性焼きの途中で、A子は失神した事もあったのだった。激痛がピークに達した瞬間、A子の意識が飛んでしまったのだ。この時は、スケ番たちも、A子が感じちゃって、イっちゃったものだと誤解して、バカ受けしていたのであった。暴行によって気絶するなんて、初めての体験だったらしく、A子自身もビックリしていたようだった。

こうして、A子は、結局、高校を卒業するまで、スケ番たちのオモチャにされて、見せしめとして、オマンコへの根性焼きを受けさせられたのである。もし、スケ番に逆らうような別の生徒でも居れば、この見せしめの役は、その子へと交代する事もあったのかもしれないが、この高校には、そんな勇気のある一般生徒は、とうとう、一人として現われなかった。よって、A子は、見せしめ生徒を、最後まで全うする事になったのである。

こんな不幸な学生時代を過ごしてから、もう10年以上が経つ。今では、A子も立派な社会人なのだ。スケ番や不良たちとの関係も無事に切れて、現在の彼女は、平和な日々を送っていた。

と言っても、オマンコにできた根性焼きの丸い痕は、いまだに消えてはいない。ちょっと恥ずかしくて、こんな陰部は、とても人には見せられないのである。そんな訳で、A子は、まだ独身だったし、彼氏だって居なかった。

実は、彼女は、自分のこの不名誉な傷跡を、時々、じっと見入ってしまう事があった。この火傷は、もう、一生治らないのかもしれない。だが、一方で、この根性焼きリンチを受けていた日々のことが、彼女には、ヘンに懐かしくも感じられたのである。

確かに、当時は、明らかに地獄の毎日だった。それなのに、あの時の痛みや屈辱などを思い出すと、今ごろになって、A子は、ひどく興奮してきてしまったのである。

性的な恥ずかしさや肉体の激痛は、本当は、とっても甘い蜜のような快感だったのではなかろうか。中でも、アソコへの根性焼きで失神（エクスタシー）しちゃった事は、実にみっともない経験であったはずなのに、今では、むしろ、得意げに皆にひけらかしたくもなるのだ。

こんな時、彼女は、火傷の痕を指先でいじりながら、ひそかに、耽美なオナニーにと浸ったのだった。

了

私だけ見えない

ある時から、私には、自分の着ている服が見えなくなってしまいました。それは、未知の異常現象だったのか、それとも、呪いか何かが原因だったのかは分かりません。とにかく、私の目では、自分の衣服が視認できなくなってしまったのです。

着てさえいなければ、その服は見えるのです。しかし、ひとたび、私が、それらの衣類に手足を通してみると、突然、その服は消えてしまうのでした。まるで、裸の王様になった気分なのです。

消えてしまうのは、上着だけではなく、下着も同様でした。だから、私は、がっちりと服を着込んでいても、完全な素裸になってしまったのであります。

目には見えなくても、なんとなく、服を着ているような感触や温もりは感じ取れるのです。よって、それらの触覚を頼りに、私は見えない服を脱衣する事もできたのでした。そうやって、今度は、勘で服を脱いでみますと、私の体から外れた途端、それらの衣類は、再び、私にも見えるようになったのでありました。

これは、本当に困った事態です。もちろん、この現象が最初に起き出した頃は、私も、この異常を親や家族にも訴えてみました。ところが、両親たちは、笑って、まるで私の話を信じてくれないのでした。

どうやら、服が見えていないのは私だけであり、家族や他の人たちには、私の着ている衣服は見えていたようなのであります。つまり、私だけがヘンだったのです。それって、あまりにも奇怪な異変なのです。だから、私がいくら熱心に説明してみても、第三者には少しも信じてもらえなかったのでした。

そんな訳で、私は、とうとう、この奇妙な現象を皆にも分かってもらう事を諦めてしまいました。全く、私の頭が狂ったのだとすら

も、思ってもらえないのです。でも、まあ、「服だけが見えなくなる異常」なんて、確かに、普通だったら、誰も思い浮かんだりはしないのでしょう。

こうして、私にとっては、自分だけが服の見えない奇妙な生活が始まったのでした。

私は、朝、目がさめると、とにかく、服を着てみます。着衣した途端、消えてしまうので、本当に服を着たのかどうかも判断できないのですが、とりあえず、着てみるしかないのです。そして、一見、ごく普通の女学生の一日となるのでした。

私は、自分には服が見えない状態で、朝の家庭の団らんに参加します。それから、外出して、高校へと向かいます。そのあと、学校に着くと、何事もないように授業も受けて、そのまま、平凡な学校生活を送るのです。

ただし、私自身の感覚では、それらの行為をしている最中は、ずっと裸でした。道を歩いている時も、教室の中にいても、私はずっとオールヌードなのでした。なのに、周囲にいる人々には、私がごく当たり前に服を身につけているように見えているらしいのでした。

なんだか、とっても不思議な世界にと迷い込んでしまった感覚なのです。

どこに居たって、周りの人々はきちんと服を着ているのに、私だけが常に真っ裸です。少なくとも、私自身には、そのように感じるのです。周りの皆は意識していなくても、私だけは、その事がひどく気になってしまうので、人知れず、私は、心の中で、恥ずかしかったり、ドキドキしまくっていたのでありました。

特に、最近では、教室の中で授業を受けている時が、他のクラスメートたちがマトモな制服姿なのに、私一人だけが全裸で机に座っているのが、なんとも羞恥プレイを受けているみたいであり、不安や疎外感以上に、エッチな気分にとさせられて、体じゅうがカーッと熱く火照ったのでした。

了

バター〇〇

高校生になったあたしは、親元を離れて、念願のアパートでの一人暮らしを始める事になりました。

そうなのです。今日からは、あたしは、家族がそばにいない一人っきりの生活なのです。何をするのにも、両親の目を気にしなくて良くて、自分だけの秘密だって持ちまくれるのです。

何よりも、あたしが嬉しかったのは、思う存分にオナニーができる事でした。実家にいた頃は、自分の部屋がなかったものだから、あたしは、どこかに閉じこもって、こっそり一人遊びに耽る事もできなかったのです。

ああ！オナニーをするのって、なんて気持ちが良いのでしょう。アパートの自分の部屋で、全裸になって、布団の上に寝っ転がり、もくもくと自分の体を愛撫しながら、あたしは、つくづく、そう思ったのでした。

お金さえあれば、大人のオモチャなんかも手に入れて、もっともっと、気持ち良くなれるに違いありません。いえ、高価な大人のオモチャじゃなくても、せめて、ペットの犬でも飼う事ができれば、その犬をバター犬に仕込んで、オナニーの道具にする事もできたのではないのでしょうか。あいにくながら、あたしの借りたアパートはペット禁止だったのですが。

そんな事を考えながら、あたしは、いつしか眠りについていました。オナって、昇天した後の、そのまま直行の熟睡であります。あたしは、全裸で、だらしなく、体を大きく広げた状態で眠っていたのでした。

ふと、真夜中に、あたしは、いきなり目を覚ましました。電気は消していたので、部屋の中は真っ暗です。しかし、そんな中で、あたしは、自分の無防備な体のうち、アソコの部分に、奇妙な感触が

あるのに気付いたのでした。
???
やだ。あたしのアソコの表面で、何かが動いているのです。それは、あたしの二つの小陰唇（ビラビラ）の間にまで、潜り込んでいたようなのです。
それが何だったのかは、あたしは、すぐに分かりました。
ゴキブリです。ぐっすり寝込んでいた間に、ゴキブリが現われて、図々しくも、あたしのアソコの中にまで入ってきたらしいのです。あたしのアパートは、家賃が安かった代わりに、こんな不潔なボロ住宅だったのでした。
それにしても、なぜ、ゴキブリが？もしかすると、あたしの出した愛液の匂いに惹かれて、ついつい、ゴキブリも、あたしのアソコにまで忍び込んでしまったのかもしれません。
ここで、普通だったら、こんな気持ち悪い出来事は、すぐにでも拒絶するところだったのでしょう。アソコにハマっていたゴキブリを、急いで剥ぎ取るのが、マトモな対応だったのだと思います。
ところが、あたしは、ゴキブリにアソコの上を這われて、不覚にも、ゾクゾクッときちゃったのであります。
もしや、これってイケるのでは？と、あたしは考えました。
そこで、次の日の夜は、あたしは、わざと自分のアソコにべったりとバターを塗って、無防備の状態にして、ゴキブリが出てくるのを待ってみたのです。
すると、案の定でした。
アソコのバターの匂いに惹かれて、部屋の隙間に隠れていたゴキブリたちが、ゾロゾロと姿を現わしたのです。連中は、一直線に、あたしのアソコを目指して、進んできました。あたしは、連中の行進を邪魔せずに、じっと動かずにいて、連中のされるがままになってみたのです。
その結果、あたしのアソコには、沢山のゴキブリがたかったのでした。真っ黒なゴキブリが、女の子の体の恥ずかしい部分で、押し

合いへし合いして、這い回っているのです。
なんてグロテスクな話だ、と思った人もいるかもしれません。いえいえ、これが、意外にも、絶世のプレイだったのであります。大量のゴキブリが、バラバラに、それぞれの形で、あたしのアソコを刺激してくれるのです。それは、きっと、バター犬なんかは比ではないであろう、凄まじい快楽でした。
はしたないんですけど、あたしったら、ゴキブリなんかにアソコをかじられながら、べっちゃりと濡らしてしまい、最後には、とってもステキな気分でイっちゃいました。これまででも一番のオナニーでの絶頂です。
こうして、それ以降は、あたしは、このバターゴキに、すっかり、ハマってしまったのでした。

了

恋人マッチングシステム

現代の若者たちは、繊細であり、心が傷つきやすく、それゆえに、生身の異性とろくに仲良くなる事もできないのだ。その挙句、普通に交際をする若い男女の数が激減して、その事が若年層の結婚率を引き下げ、ついては、出産率の低下や少子高齢化も招いているのである。

そこで、我が校では、独自の恋人マッチングシステムを開発・採用して、生徒たちの男女交際を大いに推奨する事にしたのだった。

いわば、巷に溢れている出会い系マッチングアプリの我が校専用版である。このシステムを使えるのは、我が校の在校生だけだ。そして、生徒全員がシステムにと登録されている。つまり、外部の大人たちの入り込む危険もなく、我が校内の生徒だけで、健全に、交際相手を選べる訳だ。学校側としても、生徒たちの恋愛を、安心して見守れる次第なのである。

このマッチングシステムの特徴としては、学校自体が得ている生徒の情報が、データのベースにと使われている点が挙げられよう。すなわち、生徒自身が、自分の情報を都合よく書き換えられないのだ。それゆえに、イタズラやデタラメで、間違った情報が流布して、トラブルが起きる事もないのだ。かくて、生徒たちは、正しい情報のみに導かれて、自分に最適なパートナーを選び出す事ができるのである。

最初、このシステムが導入された時は、果たして、生徒たちがシステムをきちんと活用してくれるか心配もしたのだが、それは全くの取り越し苦労であった。

実際にこのシステムの運用が始まると、じょじょに生徒たちの間で広まり出し、あっという間に、誰もが当たり前のように使用してくれたのだった。

このシステムで、自分に合うと言う相手を見つけても、必ずしも、無理して、その相手と付き合う必要もない。気に入らない相手ならば、その判定結果をスルーしてもいいのだ。しかも、そのように相手を拒否したところで、その事が相手にバレてしまう事もないのである。相手の心をリアルで傷つける恐れも、相手に申し訳ない気持ち（良心の呵責）で悩まされる心配もないのだ。

逆に、判定結果の相手が気に入れば、このマッチングシステムを口実にして、その相手に積極的にアタックする事もできるのである。のみならず、そもそも、このマッチングシステムでは、はじめっから、相性や気の合う生徒同士を組み合わすように出来ていたので、片方がもう片方にプロポーズすれば、ほぼ間違いなく、二人は納得して、結ばれるようにもなっていたのだった。

何となく、他人とのナマの触れ合いを避けるように見えていた若者たちではあったが、ちょっと後ろ盾のひと押しさえあれば、そうでも無かったのだ。この恋人マッチングシステムを利用してみた生徒たちは、次々にカップルになっていった。たちまち、校内は男女のカップルだらけになったのだ。そうなのである。皆、内心では、リア充の恋を謳歌したいと考えていたのだ。

もっとも、我が校の思惑とは、一つだけ、計算違いだった部分もあった。

直接的に異性と交わりたい人間なんて、しょせんは、生々しい性的な要素も意識しているものなのだ。つまり、恋人マッチングシステムに積極的にすがる生徒ほど、実は、異性の性に興味のある奴ばかりだったのである。

よって、このマッチングシステムでカップルになった男女たちは、大抵は、付き合ってすぐに、お互いの裸の見せ合いっこをしたり、セックスなどの行為に走ってしまったのだった。

我が校の恋人マッチングシステムは、結果的に、生徒たちの性行為を助長するセフレマッチングシステムにと成り下がってしまった次第なのである。

了

ちょろいＪＫ

その日、オレは、街中で、丁度いいターゲットを探して、いろいろと歩き回っていた。

すると、大きなゲームセンターの中で、ついにピッタリのＪＫ（女子高生）を発見したのだった。

その子は、一人で、ゲーム機の前に座って、楽しそうに遊んでいた。制服姿だったので、多分、放課後に道草を食っていた最中だったのだろう。ブスではないものの、利口そうにも見えず、コギャルじゃないかと思われた。

「ねえ、君、君。俺、今、ビデオを撮ってるんだけど、ちょっと被写体（デル）（モ）になってみない？」

オレは、さっそく、その子に声を掛けてみた。

最初は不安そうな表情を浮かべた彼女であったが、オレがピン札を何枚かチラつかせてみせると、すぐに態度を変えて、あっさりと承諾してくれたのだった。

「そのまま、遊んでていいよ。俺は、君の自然に振舞う姿を写したいんだ」と、オレは指示を出した。

彼女は、言われた通りにしてくれたのだった。ゲーム機の前で座ったまま、これまでと同じように、無邪気に、遊び続けたのだ。オレは、そんな彼女の姿を正面からカメラで写しまくったのである。

「いいよ、いいよ。あ、そうだ。もう少し、足を開いてみてくれないかな」

彼女の制服のスカートは、かなり短めだった。今の状態だって、スカートの中が見えそうだったのに、大股を開かせると、それこそ、下着（パンツ）ががっつりと丸見えになってしまったのである。

だが、彼女は、あえて、そのような格好を拝ませてくれたようなのだった。ぱっちりとパンチラを撮られてしまった事は、彼女もは

っきりと気付いたはずだ。しかし、ピン札の魅力には逆らえなかったようで、彼女は、つい、オレの言いなりになってくれたみたいなのである。

どうやら、この子は、うまく使えそうな感じなのだ。

「うん、うん。良かったよ。君のことを、もっと沢山、写してみたいな。実は、この近くに、気軽に借りられるスタジオがあるんだ。モデル料ははずむからさ、そこで、君のかっこいいビキニ姿も撮らせてもらえないかな」

オレは、彼女に持ちかけてみた。

ちょっと戸惑った様子の彼女ではあったが、やはり、追加の報酬の魅力には勝てなかったらしい。彼女は、間もなく、オーケーしてくれたのだった。パンチラも見せちゃったんだし、半裸（ビキニ）だって見せても構わないかなと考えてくれたようだ。

そんな訳で、オレたちは、すぐに、近くにあるスタジオに向かったのだった。そこは、オレがご贔屓にしている、なじみのスタジオなのだ。ヌード撮影とかも可能な、かなりヤバいスタジオなのである。

ただし、スタジオ入りしたオレは、はじめは、約束どおり、彼女のビキニ姿しか撮らなかったのだった。ビキニなどの衣装は、全て、スタジオの方で貸し出してくれる。それらを彼女に着せて、二人っきりのガランとしたスタジオの中で、彼女のまともなビキニ姿だけを撮らせてもらったのだ。

もっとも、彼女の方も、けっこう乗ってきたようだった。本物のモデル気分になってきたらしく、調子に乗って、自らもポーズを取りだしたのだ。熱い照明で照らされる中、彼女は、積極的に、自分のプロポーションを披露し始めたのだった。

この女子高生は、これまでビキニを着た事はあったのだろうか。小さなビキニは申し訳程度にわずかな部分を覆っただけで、それ以外の肌は全て露出していて、若い女体は、ひどく恥じらいでいたようにも見えた。

オレも、そんな彼女の照れ臭げな肉体をひたすら大げさに褒めながら、ガンガン写しまくったのだ。撮影は、まさに、熱気を帯びたものになったのである。

照明の強い光を浴びて、いっぱい動き回っていた彼女の体の表面には、いつしか、玉のような汗が何本も流れていた。ようやくオレが撮影をやめた時には、彼女は、半裸だったにも関わらず、すっかり汗だくになっていたのである。体の一面が自分の汗で濡れた少女の裸身は、テカテカと光っていて、思った以上に官能的だった。

「ご苦労さま。そのままじゃ、気持ち悪いだろう？このスタジオには、風呂とシャワーもついている。汗をきれいに拭いてから、帰ったらいいよ」オレは、彼女に勧めてみた。

同じ事を考えていたのか、彼女は、意外とすんなりと、オレの提案を受け入れてくれたのだった。

彼女は、無防備にも、このスタジオのバスルームで、シャワーを浴び始めた。

オレは、耳をそばだてて、彼女が、間違いなく、ビキニも取って、湯に浸っていると確信すると、大胆に、そのバスルームへと、カメラを持って、乗り込んでいったのである。

まさに素裸でシャワーを浴びていた彼女は、当然ながら、驚いたようだった。しかし、こんないかがわしい撮影に付き合っておいて、こんな目に合わないと油断している方がオカシイのだ。いや、ほんとは、彼女も、こんな展開になるのを、少なからず予感していたのかもしれない。

「あ、そのまま、そのまま！ねえ。お風呂に入っている姿も撮らせてくれよ。さらに、ギャラは奮発するからさ。大丈夫。乳首やヘアまでは写さないから」オレは、あくまで爽やかに、彼女にお願いした。

彼女は、ためらい、考え込んだ末に、この撮影も許可してくれたのだった。やれやれ、女の子と言うのは、お金の話をされると、どこまでも弱いようなのだ。

けっこう広めだったバスルーム（それもそのはずだ。このバスルームも、実は撮影向けの部屋だったのだから）の中に、オレもお邪魔させてもらって、彼女の入浴姿の撮影が始まった。

さて、肝心な部分はＮＧにして写さない、と言う条件ではあったのだが、撮影が進むうちに、その話もどんどんアヤフヤになっていったのだった。しょせん、全裸の状態で、体の一部を隠し通そうとするのが無理な話なのだ。彼女が後ろを向いた時に、丸出しのお尻を写しちゃったあたりから、やや事情が変わり出し、やがて、彼女の方も、風呂場の熱にのぼせて、気持ちが大きくなってきたのか、オッパイも股間もろくに隠そうとしなくなっていったのだった。

そう、これこそが、オレの狙いだったのである。パンチラを撮られて、半裸のビキニ姿も写された娘は、じょじょに、ヌードを見せる事への抵抗も取っ払われていった。ついには、お金をいっぱい貰えるなら、何もかも披露しても良いかな、と言う心境になったようなのである。

だから、オレも、あえて、そのへんにはハッキリとは触れずに、何事もなかったかのように、もくもくと撮影を続けさせてもらったのだった。

彼女は、カメラで写されているのも気にせずに、きっと、自分ちの風呂にでも入っている時のようなノリで、体をこすったり、シャワーを浴びたりしてくれた。もちろん、彼女の乳房も陰部も、今や、全てがモロ見えなのだ。青春の真っ只中の１０代の少女の裸は、ピチピチしていて、成熟途上でもあり、大人とも違う青い色気をプンプンとさせていたのであった。

オレは、彼女の持つエロスを、もっと引き出してみたくなってきた。

そこで、オレは、風呂上がりの彼女に、今度は、電動バイブを渡してみて、一人でオナっている姿も写させてほしいと掛け合ってみたのである。

すでに裸をたっぷりと晒してしまった彼女は、どうやら、怖いも

のが無くなってきたらしくて、この要求もすんなりと引き受けてくれたのだった。もはや、この子の方でも、とことん、オレに付き合ってくれる気になったようなのだ。

そんな訳で、同じスタジオにて、オレは、そのまま、彼女のオナニーも撮影させてもらったのだった。スタジオの床に、簡単に布団を敷くと、その上に裸で寝そべった彼女は、さっそく、一人遊びを開始した。

高校生のオナニーだから、うわべを撫でる程度の可愛らしいものかと思いきや、とんでもないのだ。バカ正直な彼女は、頑張って、本気のオナニーをやり出したのであった。小道具のバイブを最大限に使おうとして、それを自分のアソコへとグイグイ押し込みだしたのである。彼女は処女ではなかった。ついには、大きなバイブは奥の方まで潜ってしまい、彼女は、その状態で悶えまくり、愛液もボトボトと垂らして、最後はしっかりとイっちゃったのである。

お金に釣られたとは言え、もう、サービスし過ぎなのだ。現役の女子高生が、大人用のバイブを、そっくり全部、アソコの中へと入れちゃったりして、まさか、そこまで体を張ってくれるとは思わなかった。いや、それとも、女学生らにとっては、すでに、この程度は当たり前だったのだろうか。

このまま強気に頼めば、もしかすると、この子は、セックスだって、やらせてくれたのかもしれない。だが、さすがに、それはヤメておいたのだった。オレは彼女をナンパしたのではなく、あくまでモデルとして雇っただけなのだ。それ以上の行為まで手をつけてしまうと、やはり、それは完全な詐欺なのである。

こうして、全ての撮影を終えたオレは、満足して、彼女のことも、スタジオから帰したのだった。もちろん、これらの撮影に見合った、けっこうな額のモデル料を支払ってである。よって、彼女の方も、今日の撮影のことは、決して後悔はしていなかったであろう。

全く、シロウトの女子高生を引っ掛けて、エッチなビデオを作るのなんて、実にたやすいものなのだ。

了

いじめられっ子の屈辱

A子さんは、自分の教室（クラス）では、いじめられていました。それも、暴力的な不良女子たちにです。だから、いじめの内容も、シカトや中傷といった生易しいものではなく、殴られたり、カツアゲされたり、とても乱暴なものだったのです。

おとなしいA子さんは、どんなにいじめられても、まるで逆らいませんでした。その結果、不良女子のいじめの方も、どんどん、エスカレートしていったのです。

A子さんは、不良女子たちに、トイレや校舎裏などに連れていかれて、誰にも見られていない場所で、暴力を受けました。やがて、叩く蹴るだけでは済まなくなり、A子さんは、制服も脱がされるようになっていったのです。下着も剥がされました。いじめっ子の前で、A子さんは全裸にされてしまったのです。

こうして、A子さんへの性的いじめも始まるようになりました。いじめっ子たちは、A子さんの体をいじって、弄びました。やはり、特に、乳房や性器などが集中的に触られたのです。

当然、オマンコの穴も、容赦なく、見られてしまったのでした。いじめっ子は、平気で、A子さんのオマンコにも指を突っ込みました。お構いなしで、穴の中に、何本も指を入れたのです。

「あはは。こいつ。いくらでも、指が入るぜ」

「やだ。こいつのマンコ、やけに柔らかくねえ?」

「ほんとだ。こりゃあ、ユルユルだよ」

「見ろよ。指と指を開いたら、こんなに大きく、穴が広がったぜ」

あんまり、しつこく、中で指を動かされたものだから、とうとう、A子さんのオマンコは、ジュクジュクと湿ってきてしまいました。

このように、奥まで調べ尽くされてしまったA子さんの体については、いじめっ子たちによって、すぐに、クラス内でも言い広めら

れたのでした。もちろん、彼女のオマンコの事も、皆に知れ渡りました。

A子さんは、いじめられていたばかりに、クラスの全員に、ガバガバだった事がバレてしまったのでありました。

了

マンコ石

私には、同学年のセフレの男友達がいた。

いや、一時は本当に彼と交際していた事もあったのだ。しかし、彼がとんでもない変態だったと分かったので、恋人としての仲は解消してしまったのである。もっとも、彼と遊ぶと、いろいろと変わったプレイが経験できたものだから、あっちの関係だけは、そのまま、続ける事にしたのだった。と言うのも、白状すると、実は、私は、けっこうなドMだったからだ。

ある日、私の方から彼の家に訪れて、こっそりとペッティングを楽しんでいた時のことである。

お互いに裸になって抱き合っていた最中（さなか）、彼が、急に、新たなプレイを閃いたらしくて、その話を私に持ちかけてきた。

「なによ。今度は、何をするつもり？」と、私。

彼は、ニヤニヤしながら、外から拾ってきた小石を指につまんで、私へと見せてくれた。

「なあ、これ（小石）を、お前のアソコに入れてみようよ」と、彼は言うのであった。

「ええ？いやよぉ」

私は、口では拒んだものの、ほんとは、まんざらでもなかったのだった。彼の思いつく事は、決してハズレはなかったからだ。

よって、すぐに、私は、自分のオマンコに小石を詰めてみる事になったのである。

彼は、嬉々として、私のアソコに、ゴツゴツした小石を押し入れた。一つだけではなく、調子に乗って、二つも三つもつっ込んだ。彼の大きくなったペニスだって挿入した事があるのだから、この程度の小石なんて、軽く入っちゃうのである。

石をアソコに入れてみた感じは、やはり、ペニスや玩具（バイブ）とも、だ

いぶ違うのであった。ザラザラして、固くて、そして、いつまでも冷たいのだ。はじめて味わう感触なのである。まさに、異物質どうしでの未知の接触とでも言えそうなのなのだ。

その上で、こんなものをアソコへ入れてしまった事への罪悪感とか、万が一、石が取り出せなくなった時の心配とかで、私は、ひどくドキドキしてきたのだった。

「おいおい。お前、もしかして、石で感じちゃってるのかぁ？」彼が笑った。

「そ、そんな事ないわよ」私は、ムキになって、言い返した。

「だったら、もうしばらく、このまま入れとけよ」

そして、彼は、今度は、石の詰まった私のアソコを、記念とばかりに、パシャパシャと、スマホのカメラで写し出したのだった。

「やあねぇ。何、撮ってるのよ」私は、彼に文句を言った。

「いいじゃねえか。うまく撮れてるぜ」

彼は、写した画像を、私に見せてくれた。オマンコのドアップ写真であり、これが私だと分かるものは何も写ってはいなかった。だが、オマンコからは詰め込まれた小石の一部が飛び出していて、バカな遊びをしている事は、一目瞭然なのだった。

なんて恥ずかしい状態のオマンコなのだろう。地面に落ちてるようなツマラナイ小石なんかをアソコに入れたりして、人間としてのプライドのかけらも無いのだ。まさに、下の下の女である。しかし、それが実は自分なのかと思うと、私は、体じゅうが打ち震えてきたのだった。

やはり、彼の考えるプレイは、いつだって、クレージーで、最高なのだ。

この石詰めプレイは、彼もなかなか気に入ったらしく、それからの私たちは、しばらくの間、いっしょに寝るたびに、このプレイを試してみたのだった。彼は、いつも、新しい小石を仕入れてきてくれて、私は、毎回毎回、違う感触や興奮に浸る事ができたのである。

さて、しばらく経ってからの事であった。ある日、教室で、友人

が私に話しかけてきた。
「ねえ。あなたって、まだ、アイツと付き合っているの？」と、彼女は私に聞いてきたのだった。
アイツとは、例の変態の彼のことだ。
「い、いえ」私は嘘をついた。彼とセフレである事は、皆に内緒にしていたからである。
「良かったぁ。あんなヤツとは、別れて正解だったわよ。アイツね、最近、またヘンな事を始めたらしいのよ」安心して、友人がペラペラと喋り始めた。
「ヘンな事って？」
「商売よ。話によるとね、アイツさ、自分の彼女のアソコに小石を突っ込んで、それを他の男子に売っているらしいのよ。石を入れてみせた状態のアソコの写真もあるから、全部、本物みたいだわ。だからね、男子たちも、その石を喜んで買っていくそうなのよ。一個千円の値段でも売れているらしいって。全く、呆れた話よね。こんな商売を考えついたアイツもアイツだけど、アソコに石を入れたりするような女の気も知れないわ」
友人が不快そうに話しているのを聞きながら、私は、あらためて、彼とは完全に別れようと心に誓ったのだった。

了

タンポン検査

うちの高校では、女生徒はタンポンを使用する事が義務化されていた。

なぜ、このような校則ができたのかと言うと、そもそも、我が校では、だいぶ前から、女生徒たちの軽率な妊娠が問題となっていたからだ。

できれば、女生徒たちの性行為そのものを禁止したいところだったのだが、そこは、彼女たちも、学校や親の目を盗んで、結局は、まんまと男と密会して、遊んでしまうのである。

だったら、性行為をするのはやむを得ないものにして、代わりに、妊娠しちゃった場合は、すぐに発見できるようにと、このタンポン校則が採用されたのだった。

タンポンの着用だけが、ただ、義務づけられたのではない。女生徒たちは、もし生理が始まったら、その事を学校や教師にきちんと報告する事も命じられたのだった。万が一、妊娠したら、その女子は生理が止まってしまうので、そこから、すぐに妊娠が見抜けると言う寸法なのだ。

もちろん、口頭だけでは、ウソの報告をする女子もいるであろう。だから、生理中の女子は、その事を告げるだけではなく、本当に生理があるのかを、目視でも確認される事になったのだった。

この生理に該当した女子は、その日の帰りのホームルームで、教室の前へと出ていかなければいけない。そして、他の生徒たちが見届け人となる中で、本当に生理かどうかを調べられるのだ。

この検査の時は、彼女たちは、全裸になる事も強要された。そうしなければ、彼女たちに、すり替えや隠蔽工作をされる恐れもあったからである。さらに、タンポンじゃなくちゃいけなかったのも、ナプキンだと、ニセの経血をつけたものを、簡単に捏造される可能

性があったからだ。その点、タンポンならば、それも、まだアソコに入った状態の使用中のタンポンだったら、まず誤魔化しは利かなかったのである。

　このタンポン検査を受けさせられる女生徒は、裸のまま、他の生徒たちの方へと、お尻をつき出して、しゃがみ込む事が指示された。すると、彼女のお尻からは、タンポンの紐が飛び出ているのが、他の生徒たちからは、くっきりと確認できたのだ。

　仕上げに、そのクラスの担任教師が、そのタンポンの紐を引っ張ってみせる。検査されている女生徒は、クラスメイト全員に、生理用品を交換する過程をくまなく見られちゃう訳なのであった。

　これで、抜きたてのタンポンが、無事に真っ赤に染まっていたら、その子はセーフである。彼女は、めでたく、この検査をクリアした事になるのだ。

　このように、うちの高校では、全ての女生徒が、このタンポン検査を受けさせられていたのだった。

　もちろん、こんな恥ずかしい検査に、不服を感じる女生徒も、決して居なかった訳ではなかった。だが、このタンポン検査を始めてから、見事なほどに、妊娠するような不埒な女子はいなくなったし、また、学校が公式に生理の周期を調べてくれる事で、体調の悪い生徒も、その症状を、いち早く発見してもらえて、適切なアドバイスを受けられるようになったのだった。

　結局は、生徒側にもメリットがあったものだから、このタンポン検査は、今でも続けられているのである。

了

ボルダリング部のカノジョ

僕の恋人（カノジョ）は、ボルダリング部のキャプテンだった。しかも、地区の大会でも多くの優秀な記録を残している、学内でも有名な選手なのだ。

そんな彼女と僕が、床を共にするほどの仲だったと言うのは、僕と彼女しか知らない秘密だった。二人の関係は、学校では、まさに、一番のシークレットだったのである。

僕は、ちょくちょく、彼女の競技している姿を拝見していた。それは、本当に素晴らしい勇姿だったのだ。

体の小さな彼女は、まるで猿のように器用に、競技用の壁を登ってみせた。他の競争相手は、誰も彼女には敵わないのである。僕は、こんな素敵な彼女のことを、心の中で、ひそかに誇らしく思ったものなのだった。

だが、彼女の魅力はそれだけはなかった。彼女は、服を脱いだあとも、最高の女性だったのだ。

彼女は、決して、とびっきりの美人とかではなかったが、それでも、体つきの方は抜群だった。それこそが、ボルダリングをやっていたゆえの賜物だったのである。

彼女は、小柄ではあったが、全体に均等して筋肉がついていた。それも、程よい量の筋肉なのだ。アスリートは、競技に用いる部位の肉や骨ばかりが発達しがちなのだが、彼女の場合、ボルダリングは全ての筋肉を用いる為に、筋肉のつき方も全身に分散していたのであった。その上で、ボディビルダーみたいに、過度の筋肉質だった訳でもないのだ。

なおかつ、彼女は、たくましい筋肉を持っていながら、体が非常に柔らかかった。これも、ボルダリングの選手ゆえの特色なのである。ボルダリングは、いびつな形で、手足を四方に広げて、離れ離

れの岩にそれぞれの手足の先を引っ掛ける必要があったので、自然と、体のあちこちが柔軟になって、手足を長く伸ばせたようなのだった。

そして、そんな完璧な女性の肉体を、僕は、裸の状態で、見せてもらえたのである。のみならず、その体を、じかに触ったり、抱き合う事もできたのだ。ああ、なんて役得であったと言えるだろう。

だが、そんな肉体美以上に、僕が彼女の体の中で一番気に入っていた部分とは、実は、指や手先なのであった。

遠目に見れば、彼女の体型（ルックス）は、完全なる美しさのようだったかもしれないが、実際には、接近して観察すると、あちこちに難点があった。中でも、指先は、その最たる部分なのだった。彼女は、過酷な岩の壁をいっぱい登りすぎた結果、指の表面がボロボロになっていたのである。

彼女の指の皮は擦り減り、固くなり、ザラザラしていた。彼女の可愛い見た目からは信じられないほどの、荒っぽい肌触りだったのだ。女性らしい滑らかさが無く、力仕事をしている男の指よりもゴツゴツしていた。

彼女自身も、自分がそんな指の持ち主である事を、ひどく気にしていたのであった。

でも、僕は、素直な感想として、彼女のそんな指の方が好きなのだった。

まず、他の女性とは感触が全然違う点が、なんとも言えない新鮮さを感じさせた。さらには、そのザラザラした触れ具合が不思議な刺激となって、ある種、独特な興奮をもたらせてくれたのだ。

だから、僕は、彼女の指で僕の体を撫でてもらう行為が、大変に好きだった。彼女本人は嫌っていようと、僕の方では、彼女の指を愛し、彼女の指で愛でてもらえる事を、何よりも喜んだのだ。彼女の指のザラザラした感触を、自分の肌で感じ取っているだけでも、僕の心は激しく高揚して、まさしく、彼女と触れ合っているのだと実感させられて、それだけで至福感に包まれたのである。

よく考えると、彼女のこの細い指は、壁の表面の小さなデコボコを、この指だけで掴み、しかも、彼女の全身全体重を支えられるほどの握力も持っていたのであった。

もし、彼女が、この握力を、競技中ではなく、僕の体を愛撫している最中に発揮したならば、どうなるのであろう。信じられないほどの握りしめやつねりとなるかもしれない。もし、陰嚢に刺激を加えている途中に、いきなり、この握力を発動させられたら、キンタマなど簡単にグチャリと潰されてしまうのでは?

僕は、よく考えたら、なんて恐ろしい女性の指に、自分の体をゆだねていたのだろうか!

とまあ、そんな事を思いついてからは、僕は、彼女の指に自身の体を愛されている時は、中でも、手コキをしてもらっている時などは、愛する彼女に性器を握り潰されるかもしれない緊張でゾクゾクしながら、より激しく燃えるようになったのだった。

了

ボルダリング部のカノジョ（後書き）

注・本エピソードは、ボルダリングに対する、多分にヒネくれた印象が、盛り込まれています。

過保護

あるところに、両親と娘の三人家族がいた。

父親は会社勤めのサラリーマン、母親は専業主婦、娘は女子高生だった。三人は仲睦まじく、ごくごく平凡な普通の家庭であった。

しかし、いつの日からか、娘が、親に対して、妙にヨソヨソしい態度を取り始めた。一緒にいても、あまり口を聞こうとしないし、何かを隠しているような様子で、すぐに自分の部屋に閉じ篭もってしまうのである。

反抗期だろうか。この年頃の子供だったら、反抗期になっても、決して不思議な話ではないのである。

でも、だとしても、親としては、そうであっても、娘のことがヒドく心配で仕方がないのである。

母親は、ある時、娘がいつものように自分の部屋に引き下がって、外へ出てこなくなってしまうと、こっそり、娘の部屋を覗いてみる事にした。

母親は、そーっと静かに、娘の部屋のドアを開いてみた。だが、娘は何かに夢中になっていたらしく、すぐには母親には気が付かなかったのだった。

娘は、ベッドの上に寝そべっていた。それも、裸でである。掛布はかけておらず、眠っていたのではなかった。彼女は、自分の胸や陰部を触りながら、やたらと体をくねらせていた。気持ち良さそうな甘い声も出しているのだ。つまりは、彼女は、オナニーをしていたのである。

恐らく、最近、この一人遊びを覚えたのであろう。それで、この事を両親にも話せなくて、彼女は、こっそりと秘密でオナっていたようなのだった。

娘のベッドの上には、人参とか胡瓜も、もぎたての生の状態で置

かれていた。どうやら、この子ときたら、ただ体を撫で回していただけではなくて、アソコへ物を突っ込む事まで、覚えてしまっていたらしいのだ。

「あら。いけませんわ！」

とうとう、見過ごせなくなった母親が、慌てて、部屋へと入ってきた。

娘の方も、オナニーの現場を見つかっちゃった上に、母がものすごい剣幕で飛び込んできたものだから、驚いているのである。

困った娘は、気まずそうな表情で、謝りかけた。

ところが、母親の考えていた事は違ったのであった。

「あなた！こんなモノをアソコに入れたりしたら、汚いでしょう？大事なところが病気にでもなったら、どうするんですか？ちょっと待ってなさいね」

そう言って、母親は、せかせかと、娘の部屋から出ていった。それから、彼女は、すぐに、バイブとディルドとローターを購入すると、それを持って、娘の部屋に戻ってきたのだった。

「今度から、遊ぶ時は、これを使いなさい。きちんとした商品だから、野菜なんかを使うよりも、ずっと安心で、気持ち良くなれますわよ。遊び終えた後は、いつも消毒して、清潔に使う事も忘れないようにね」母親は言った。

こうして、娘は、それからは、母がくれた道具でオナニーをするようになったのだった。

了

ヒゲオヤジ

うちのクラスには、コロちゃんと言う女子がいた。ちっちゃくて、コロッとした体型で、おとなしかったコロちゃんは、クラスの皆が気になる存在で、可愛がられていた。

断っておくが、彼女はいじめられていたのではない。本当に、皆から可愛がられていたのである。例えるならば、コロちゃんには、ペットや小動物のような雰囲気があったのだ。それで、皆は、ついつい、コロちゃんにちょっかいをかけて、触ったり、反応を見たりして、そんな彼女の一挙一動に癒されたのだった。

ところで、ある時から、クラスの女子たちが、なぜか、コロちゃんのことを「ヒゲオヤジ」と呼び始めた。

全く、奇妙な渾名（ニックネーム）なのである。こんな可愛いコロちゃんが、なぜ、ヒゲオヤジなのだろうか？

不思議に思った僕は、その事を女子の一人に訊いてみた。すると、その女子は、笑いながら、理由を教えてあげるから、今日の放課後、女子更衣室においで、と僕に告げたのだった。

僕は言われた通りにした。その日の帰りのホームルームが終わると、すぐに女子の更衣室に向かったのである。

そこでは、すでに、コロちゃんを囲んで、クラスの数人の女子が待っていた。

更衣室（ここ）では、コロちゃんは、服まで脱がされて、女子たちにもっと可愛がられていたのだった。

素っ裸になったコロちゃんは、色白で、小さくて、太って、まん丸だったものだから、ますます愛玩動物っぽく見えて、いつも以上に可愛かったのだ。

「さあ、コロちゃん。今日は、この男子にも、キミの可愛いヒゲオヤジを見せてあげようね」と、女子の一人が、含み笑い浮かべなが

ら、言った。

そのあと、彼女たちは、全員で協力して、オロオロしていたコロちゃんを、幼児にオシッコをさせるような格好で持ち上げたのである。無抵抗なコロちゃんは、相変わらず、皆のされるがままだった。

コロちゃんの正面は、僕の方に向けられていた。この状態で、両足を左右に押し開かれると、コロちゃんの股間が、僕にも丸見えになってしまうのだ。

そこで、僕も、あっと思った。

僕にも、全ての事情が分かったのだった。コロちゃんったら、これほど可愛い女の子だったくせに、こんな場所が、確かにヒゲオヤジだったのである。

そうなのだ。この子は、見た目の子供っぽさとは裏腹に、お股にはたっぷり大人の毛を生やしちゃって、それがオマンコの周りをグルリと囲んでいたものだから、その有様は、まさにヒゲ面の口にそっくりなのだった。

僕は、とても良く納得した上で、こんなオチャメなコロちゃんに、ますますホッコリとさせられて、癒されちゃったのであった。

了

オナ友の会

ある女子高生の家に、友人の女子が二人ほど、集まっていた。彼女たちは、部屋へと閉じ篭って、何やら、良からぬ事をやっているのである。

そっと部屋の中を覗かせてもらうと、彼女たちは、丸く車座を作って、床にと座り込み、お互いに向き合っていた。そして、なぜか、全員が裸だったのである。

彼女たちは、愉快そうに、自分の胸や股間をいじっていた。どうやら、この子たちは、オナニーをしていたようなのだ。つまり、オナニーの見せっこをしていたのである。

なんて恥ずかしい事をしているのだ、と思われた方もいるかもしれないが、彼女たちは、そうは考えていなかったらしい。ほんとの仲良し同士だからこそ、オナニーする姿だって、楽しく、見せ合えたみたいなのであった。

それだけではない。こうやって、互いのオナニーを共有する事で、自慰行為をする事への罪悪感だって薄まるだろうし、他人のオナニーを観察する事によって、それを自分のオナニーにも取り入れてみて、もっと気持ちよくなる方法だって学べるのだ。

「ねえ。見て、見て！」彼女たちの一人が言った。

その子は、細いサインペンを手にしていた。彼女は、そのサインペンのお尻の方を、自分の穴（アソコ）へと押し込んでいるのだ。

「ほら。こうやって、中に入れてみたら、もっと気持ちいいのよ」

「ええ？大丈夫？痛くない？」別の一人が聞いた。

「もちろんよ。タンポンより細いんだもの。このぐらい、処女膜をくぐって、余裕で奥まで入るわ」

サインペンをアソコに入れてみせた女子は、顔を火照らせて、ハアハアと喘いだのだった。ほんとに、気持ち良さそうなのである。

他の二人の女子も、その様子を羨ましそうに眺めていて、自分たちも、今にも真似しそうな雰囲気なのだ。

と、最初の女子は、もっと快感を貪るべく、アソコに突っ込んだサインペンを、より力を込めて、グイグイと動かした。ついつい、サインペンも、もっと中まで潜ってしまうのである。その時だった。

「あ」その女子は、気の抜けた声を出した。

よく見ると、サインペンを刺した彼女のアソコからは、血がしたたり出ているのだ。やれやれ、この子ったら、勢いづき過ぎて、とうとう、処女膜を破ってしまったのであった。

「えへへ。やっちゃったあ」と、その女子は、照れながら、舌を出した。

「バカねえ。調子に乗るからよ」友人の一人が、呆れた様子で、たしなめた。

「平気、平気、このぐらい。それよりも、これからは、もっと太いものだって入れられるわよね」失敗しちゃった女子は、しょげてる感じでもなく、ケロッとした態度で、そんな事を言うのであった。

こうして、女子高生のバージンが、また一つ、男の手によらず、サインペンなんかで喪失してしまったのだった。

了

おいしい恋人

君には恋人がいるだろうか？

僕にも、こないだまで、カノジョがいた。しかし、僕は、最近、この「恋人」という存在に疑問を抱くようになってしまったのだ。

僕のカノジョだった子は、女子高生だった。と言っても、彼女の正確な素性は知らない。彼女とは、ＳＮＳで知り合った、あくまで行きずりの遊び程度の仲だったからである。

ただし、遊びながらも、肉体の方はかなり深いところまで関係が進んでいた。彼女の方も、体が目当てで、僕に積極的に近づいてきたように見えた節があったのである。今どきの女子高生というのは、皆、彼女みたいな感じだったのだろうか。真面目な学生のようで、実は、内心ではエッチな事に興味津々なのだ。だから、あと腐れがなさそうな相手に対しては、つい大胆な行動だって取ってしまうのである。

少なくても、僕は、彼女の好色ぶりについては、そのように理解する事にしていたのであった。

もっとも、彼女をセフレと呼ぶには、多少の誤りがあった。彼女は、セックスそのものは好まなかったからである。むしろ、彼女は、僕相手に、セックスの前座のペッティングばかりを楽しみたがったのだ。

よって、僕も、彼女の希望を聞き入れ、いっしょに寝る時は、いつも、ペッティングにばかり、時間を割いたのだった。僕としても、些細な好みの違いから、彼女と仲違いしたくなかったからである。

実際、ベッドインした時の彼女のペッティングのテクニックは、本番（セックス）行為以上の快楽を、僕にもたらしてくれた。だったら、あまり本番をやらせてくれなくても、不平は言うべきではないのである。

彼女は、ペッティングの中でも、特に、舐める行為を得意として

いた。彼女の舌の使い方は抜群であり、フェラチオだけではなく、全てにおいて、僕を快感へと誘(いざな)ってくれたのだ。

ベッドの上に裸で寝そべった僕の体を、同じく裸になった彼女が、満遍なく舐め回してくれる。彼女の舌は、それ自体も性器であるかのように、柔らかくて、優しくて、絶妙に気持ちが良かった。性感帯以外の場所だって、彼女に舐められると、僕は、とろけるような気分にされてしまうのだった。そんな訳だから、これがフェラチオとなると、それこそ、セックスをも超えるエクスタシーだって、もたらしてくれたのである。

そして、彼女の方も、どうやら、この舐めるプレイが、何よりも気に入っていたようなのだった。こちらから仕掛けなくたって、一方的に僕の体を舐めているだけでも、彼女は十分に満足していたらしいのだ。そう言う事だから、僕と彼女が会った時は、いつしか、彼女が僕を舐めるプレイばかりを行なうようになっていたのであった。

彼女と付き合うようになってから、もう数カ月が経とうとしていた。僕たちは、相変わらず、会うとすぐにホテルに行く、と言う関係のままだった。お互い、そのような仲でも納得していたし、それで楽しかったので、無理にそれ以上に距離を縮めたいとも思わなかったのだ。僕たちは、現状で十分に幸せだった訳である。

その日もまた、僕と彼女は、街の外れの安いラブホテルにしけ込んでいた。いつものように、ベッドの上で、ペッティングをして楽しんでいたのである。この時だって、彼女の舐めるプレイは絶好調で、僕は、最初から、ぼっとした夢心地にと浸らせてもらっていたのだ。

その時だった。突如、僕たちの居た部屋の入り口のドアが開いた。僕たちはギョッとした。入ってきたのは、制服を着た警察官たちだったのである。

手入れであろうか？いや、ラブホテル自体は、合法のはずだ。しかし、いちおう、彼女は未成年であった。彼女とセックスした事が

バレれば、やはり、マズイのである。ここは、しらばっくれて、彼女が高校生だったのを知らなかったフリをするべきか。僕は、短い時間で、とっさに、それだけの事を思い巡らせたのであった。

だが、次の瞬間、いきなり、信じられない事が起こった。

警察官は、すぐに拳銃を手にしたかと思うと、躊躇なく、僕のカノジョだけを撃ってしまったのだ。

抵抗する余裕もなかった。あっさりと、彼女は射殺されて、血を流して、ベッドの上に伏してしまったのである。即死みたいだった。

僕も、これには呆気に取られてしまったのだ。何が何だか、さっぱり分からなかった。よって、彼女が死んだ事への悲しみも、続けて自分も殺されるのではないかと言う恐怖も、すぐには湧いてこなかったのである。

唖然としていた僕のそばに、彼女を撃ち殺した警官が寄って来た。

「大丈夫ですか？良かった。まだ被害には会ってなかったようですね」と、警官は言った。

「あの。どう言う事なのですか？」僕は尋ねた。

「この女は、食人種（サイクロプス）だったのですよ。我々が駆けつけるのが遅ければ、あなたは無残にも喰べられているところでした」警官は、そう言うのであった。

サイクロプスたちは、普通の人間を装って、都会のど真ん中にだって、平気で潜んでいた。僕のカノジョもまた、そんなサイクロプスの一人だったと言うのである。警察では、別の情報筋から、彼女がサイクロプスであった事を嗅ぎつけていたのだ。そして、今、ようやく準備が整ったので、警察も乗り出して、彼女のことを駆除したのだった。

あるいは、僕以外にも、彼女と交際していて、すでに喰われてしまった男性もいたのかもしれない。

そのような真相が分かると、確かに、彼女がサイクロプスらしい怪しい点はあったのである。

彼女は、やたらと、僕の体を舐めるのが好きだった。これだって、

そのような性的プレイに興じていたのではなくて、実際には、僕のことを食べ物のつもりで味見していただけだったのだ。

そう言えば、彼女は、僕の体を舐めながら、いつも、「ああ、素敵よ！もう、あなたの事を食べちゃいたい」と、喜びの声を漏らしていた。僕は、それをタダの比喩表現だとばかり思っていたのだが、ほんとは、彼女は本気で僕の体を食べたがっていたのである。

特に、僕のペニスや陰嚢をしゃぶっている時の彼女の熱心さは異常だった。きっと、彼女には、僕の性器が、それほど美味しそうなご馳走に見えていたのであろう。もしかしたら、彼女に自分の性器をあずけていた最中、いきなりガブリと食い千切られる事だってあったのかもしれないと想像すると、今さらになって、僕はゾッとしてくるのだ。

了

愛液ちゃんと精液くん

クラスの女子のAさんはいじめられっ子でしたが、いじめていた女子たちが不良生徒だったものだから、かなり手酷いいじめられ方をしていました。彼女は、皆の前で、裸にされ、その状態でオナニーをやらされていたのです。

かわいそうなAさんは、イクまで、このオナニーショーをやめさせてもらえませんでした。イったフリでは、簡単にバレてしまいます。だから、Aさんも、真剣にオナニーをして、本気で感じちゃうしかなかったのでした。

本当に感じてきちゃうと、肉体にも変化が起きてきます。指でさすっていたAさんのオマンコは、リアルに濡れてきてしまったのでした。

その様子を、いじめっ子たちは、さらに面白がります。いじめっ子の一人は、チョコスティックを持ってきて、それをAさんのオマンコの穴に突っ込んで、余計にフザケたりしたのでした。

とうとう、Aさんはイってしまいました。Aさんのアソコに入っていたチョコスティックも引き抜いてみると、チョコも半溶けで、しかも、表面がネットリした液で覆われてしまっているのです。

いじめっ子たちは、この卑猥なチョコスティックの使い道を考えました。Aさん自身に食べさせてみてもいいのですが、イマイチ、面白みに欠けるのです。

そんな時、彼女たちは、男子のいじめっ子たちと遭遇しました。女子のいじめっ子たちは、はたと閃いて、この男子のいじめっ子たちに、この愛液付きチョコスティックを渡してみたのです。

さて、この男子のいじめっ子たちにいじめられていたのが、同じクラスのBくんでした。いじめっ子たちは、このBくんのところへ、例のチョコスティックを持ってきたのです。

いじめっ子たちは、Bくんに、このチョコスティックを食べるように命令しました。半分溶けていて、しかも、謎の液体もかかっている、見るからに怪しいチョコスティックなのです。でも、Bくんには、いっさい拒絶する権利がなかったのでした。

こうして、Bくんは、何も知らないまま、このチョコスティックを食べちゃったのです。やっぱり、変な味がしました。そして、まんまとAさんの愛液を飲んじゃったBくんを見ながら、いじめっ子たちは大笑いしたのでした。

ところで、このBくんもまた、いじめっ子たちの前で、よくセンズリをやらされていました。きちんとヌクまでやらされるのです。おかげで、Bくんは、週に何回も射精しなくちゃいけないのでした。男子のいじめの方が、荒っぽくて、手加減がないのです。

かくて、Bくんは、校内のあちこちでスペルマを撒き散らしていたのですが、そのうち、いじめっ子たちも、射精させるだけでは飽きてきました。

いじめっ子は、どこかから、トーストを持ってきたのです。そして、今回は、Bくんに、このトーストの上に射精させたのでした。世にも気色の悪いスペルマかけトーストの出来上がりです。でも、いじめっ子たちには大受けしたのでした。

さて、こんなトーストを作ってはみたものの、次は、その処分に困りました。Bくん自身に食べさせてもいいのですが、どうせなら、他の誰かに食べさせてみたいものです。

そこで、今度は、男子のいじめっ子たちが女子のいじめっ子に声をかけたのでした。すると、例のスペルマつきトーストは、女子の手に渡ったのでした。いじめっ子の女子は、そのトーストを、まっすぐ、Aさんの元へ持っていきました。言うまでもなく、彼女にこれを食べさせる気なのです。

Aさんは、実は、これまで、本物の精液を見た事がありませんでした。だから、トーストに塗られていたペーストがスペルマだとも気付かなかったのです。そんな訳で、彼女も、何も分からないまま、

この怪しいトーストを食べちゃったのでした。この白濁色の液体が何なのかを、終始、気に掛けながらも。

　このような事があってから、いじめっ子たちは、たびたび、お互いが手に入れた愛液と精液を交換するようになりました。そして、それらを食べ物に塗りつけて、それぞれがいじめている子に食べさせて、楽しんだのです。

　うちのクラスの男女のいじめられっ子は、交際していた訳でもないし、当然、一緒に寝た事もなかったのですが、それなのに、二人とも、相手のイヤラシイ液だけは食べた事があると言う、奇妙な青春を過ごしたのでした。

了

すてきな特待生

僕は、今日から、この高校へと転校してきた。ところが、生まれつきの方向オンチだった僕は、広い校舎の中に入るなり、いきなり迷ってしまったのだった。

僕が廊下でウロウロしていると、ひょっこり、背後から声を掛けられた。かわいい女の声だ。

「あなた。もしかして、転校生?」

僕が振り返ると、そこには、声に見合った素晴らしい美少女が立っていたのだった。

「どうして分かったの?」僕は彼女に聞いた。

「だって、もう春からだいぶ経つのに、まだ校舎で迷う人なんて、転校生ぐらいなものでしょう?」彼女は、鈴を転がすような声で、愛らしく笑ったのだった。

全く、この子は、圧倒的すぎる美少女なのである。丸顔で、大きな目、端正な顔の作り、きれいな黒髪、それに、ややふくよかだった体型すらも、パーフェクトなまでに僕好みなのだ。

「ひょっとして、2年C組の転校生?」と、今度は、彼女の方から質問してきた。

「そうだけど」

「やっぱり!今日、うちのクラスに転校生が来るって、先生から聞いてたんだ。じゃあ、あなたの世話係は、私が担当する事になるわ。これから、まずは職員室に行くんでしょう?なら、私が連れてってあげるわ。私の名前は、カンナ。よろしくね」

実に幸先の良いスタートなのである。僕は、こんな素敵な美少女と、のっけから知り合いになれたのだ。

このあと、僕たちは、いっしょに並んで歩いて、職員室へと向かったのだった。その道中、カンナは、絶やさずに僕に話し掛けてき

てくれた。おかげで、僕も、転校してきたばかりの不安な気持ちが、かなり和らいだのだ。

もう、このカンナという子は、美人なだけではなく、明るいし、サバサバしてるし、気遣いもできるし、話も面白くて、文句のつけようのない生徒なのである。この先、この子ともっと親密になれたのならば、この学校での生活は、どれだけ楽しいものになるであろうか。

やがて、僕たちは、職員室の前にたどり着いた。

「さあ、ここが職員室よ。私も、これから着替えなくちゃいけないから、ここでいったん、別れようね。また後で会いましょう」カンナは言った。

そう言えば、よく見ると、彼女は私服姿なのだった。何かの理由があって、学校に制服を置きっ放しにしていたのかもしれない。

とにかく、この場所で、ひとまず、僕と彼女は別れた。彼女の行き先を目で追ってみたが、どうやら、彼女の着替え室というのは、職員室の真横にあるのだ。彼女は、その部屋の中へ消えていったのである。

そして、僕の方も、職員室に入って、担任の先生のもとに向かったのだった。先生と、今朝のホームルームでの僕の紹介の打ち合わせをすると、僕は、とりあえず、もう一度、職員室の外へ出て、そこで待たされる事になった。

僕は、その場で立ち止まって、カンナの入っていった着替え室の方をずっと気にしていたのだった。多分、この短い時間ならば、彼女の方はまだ着替え終わっていないだろうと思われたからだ。

すると、間もなくして、彼女が着替え室の中から出てきたのだった。しかし、その姿を見て、僕は仰天するほどビックリしてしまったのである。

なぜなら、カンナは、何も服を着ておらず、オールヌードだったからだ。かろうじて、上靴だけ履いているのである。だが、それ以外は、まさに、一糸まとわぬ姿なのだった。

「あら。あなたも、今、職員室での打ち合わせが終わったのね」僕の姿を見つけたカンナが、こちらに寄ってきて、笑顔で話し掛けてきた。

「え、そうだけど・・・それよりも、カンナさん、どうしたの、その格好は?」僕は、顔を真っ赤にして、逆に尋ね返した。

いやはや、これほどの美少女のヌードが正面からズンと迫ってくると、目のやり場に困っちゃうのである。あの美しい顔より下の部分を見たかったのも事実だが、でも、あまりに眩しすぎるのである。彼女は、白い肌と、健康そうな肉体の持ち主で、膨らんだ乳房も、黒々と生えた恥毛も、隠そうとせず、おおっぴらに晒していたのだった。

「ああ、これ?えっとね、実はさ、私、この高校の特待生なのよ」カンナも、ちょっと頬を赤らめて、答えた。

「特待生?なにそれ、どう言う事?」

「私さ、ほんとは、頭もあんまり良くないし、スポーツが得意な訳でもないし、うちの方も貧乏なんだ。だからさ、特待生になる事を条件に、この高校に入れてもらったのよ。で、特待生の条件の一つと言うのが、学校の中では裸になる事だったの」

なんて、おかしなルールなのだろうか。そんな特待生って聞いた事がないのである。

「でも、私、全然、嫌なんかじゃないのよ。だって、この特待生さえ立派に務めれば、成績が悪くても、赤点や落第の心配はないし、卒業後の進路だって保証してもらえて、安泰なんだもの。あと、クラス内の雑用全般も、特待生の仕事ね。だから、転校生のあなたの世話役も私なのよ」カンナは、まるで屈託なく、さっぱりと、そう語るのであった。「って事で、これから、よろしくね」

そのあと、彼女は、愛くるしく、ペコッと頭を下げたのだった。やっぱり、この子は抜群に可愛いのだ。

にしても、この子ともっと仲良くなりたいのは山々なのだが、ほんと、どこまで彼女のことを見ていいのやらで悩んでしまうのであ

る。今だって見せすぎには違いないのだが、さらに、向かい合って椅子にでも座ろうものなら、彼女の股間の内側だって、ばっちりと見えてしまうかもしれない。美少女のアソコだなんて、想像するだけでも、恐れ多すぎるのだ。

だが、そこまで見られてしまうのだって覚悟の上で、カンナは特待生になったのであろう。やっぱり、この子って、ただ可愛いだけではなく、肝も据わっていて、全てが最高なのだ。

何はともあれ、こうして、僕とカンナの、新たな学校生活が始まったのだった。

了

軟弱男子の青春（前書き）

本作は「女子のオモチャ」の別バージョンです。

軟弱男子の青春

軟弱男子が、高校に入学して早々、クラスメイトの女子三人に拉致されてしまった。彼は、その女生徒らによって、人気のない校舎裏へと連れていかれたのである。

そして、校舎裏に着いて、周囲に人がいなくなった途端、女生徒たちは軟弱男子にと襲いかかったのだった。

「やめてぇ、やめてよぉ！」

軟弱男子は慌てて抗ったが、なにせ、彼は非力だったものだから、女子一人にも腕力では勝てなかったのである。彼は、たちまち、服を最後の一枚まで引っ剥がされてしまった。

「ひどいよぉ。なんで、こんな事するのぉ？」全裸になった軟弱男子は、股間だけを懸命に両手で隠して、泣き声で訴えた。この男ときたら、いやはや、女の子以上にナヨナヨしているのだ。

ここで、女子たちの方も、ようやく、彼をここに連れてきた理由を明かしたのである。

「ねえ、あんたのオチンチン、見せてくれない？あたしたちさ、まだホンモノを見た事がないんだ」

やれやれ、とんだイケナイ女子たちなのだ。しかも、彼女たちには、ぜんぜん悪びれた様子もなく、ニコニコしながら、そんな事を言っているのだった。

「いやだ、いやだあ」と、軟弱男子は必死にもがいたが、先も書いたように、彼の力では全く女子たちには太刀打ちできなかったのである。

彼は、三人の女子に手足を押さえられ、あっという間に、地面の上に、大の字の格好で寝かされてしまった。当然、股間を覆っていた手も広げられてしまったので、彼の男性器はモロ出しになってしまったのだ。

この男子(こ)ったら、まだ入学して間もないのに、ろくに口も聞いた事のなかったクラスの女子たちに、いきなり、男のシンボルを見られちゃったのである！こんな情けない男子のくせに、陰毛もいっぱい生やしていて、立派な大人の性器なのだ。

「だめえ、見ないで！男性器(これ)は、好きになった女の子にしか見せたくないの！」軟弱男子は泣き叫んだ。と言っても、実際には、彼には、まだ、そんな深い恋仲の相手などは居なかったのだが。

すると、そこにいた女子たちは、笑って、こう言い返したのだった。

「それなら、あたしたちが、実際のところは、彼女たちは、まるで美人でもなかったし、性格もかなり粗雑なのだった。軟弱男子の方だって、これまで、この女子たちの事は、恋の対象としても、女としても、少しも意識していなかったのである。

それでも、話は勝手に進んでしまった。軟弱男子は一方的に女子たちに論破されて、オチンチンをいじられても良い事になったしまったのだ。

女子たちの方も、初めて見た男の性器に興味津々なのである。こんな手荒いイタズラをする割には、彼女たちは意外とウブで、本当に、これまで、まともに大人のペニスを見た事がなかったのだ。

「へえ。オチンチンって、こんなブヨブヨしてるんだ」

「わあ。皮の袋の中に、ほんとに丸い玉が二つ入ってるよ」

女子たちは、軟弱男子の股間を、遠慮なく、ベタベタと触りまくった。しかし、何たって、初めての経験だったものだから、力加減も分からないのである。なおかつ、彼女たちは、もとから荒っぽい性格だったから堪らない。

「うわあ。痛い、痛い！そんなに強く握ったら、タマが潰れちゃうよ！ひいいぃ！ちょっと引っ張り過ぎ！チンポの皮が破れちゃう！

ねえ、もっと優しくして！」軟弱男子は、泣いて訴えた。
　可哀想に、彼の男性器は、すっかり乱暴に弄ばれてしまったのだった。
　ただし、乱暴でも、刺激を受けていたのは事実だ。こんな風に、いじられているうちに、彼の男根は、次第に膨らみ始めたのだった。彼自身も、不本意ながら、興奮してきちゃったのか、体が熱くなってきたのである。彼は、顔を火照らせて、ハアハアと喘いでいた。
　この彼の肉体の変化には、女子たちも驚いたようだった。粗チンだと思っていた彼のペニスが、ピンと立って、みるみる大きくなりだした。それどころか、ペニスの先端を覆っていた表皮がめくれてきて、亀頭が露出しだしたのだ。男のチンチンについて雑な知識しか持っていなかった彼女たちにとって、これは衝撃的な発見だった。
「見て。この子のオチンチン、化けだしたよ」
「え、え？内側のお肉が外に出ても、大丈夫なの？はみ出たまま、元に戻らなくなるんじゃ？」
「やだあ。あたしたち、こいつのオチンチン、壊しちゃったかしら？」
「いや、違うよ。皮が剥けたのは先の方だけだよ。この内側のまん丸いのが、本物の先っちょなんだ」
「なに、これ？赤くて、表面もツルツルだよ。これがオチンチンの真の姿だったの？」
「そうか、分かったぞ。こすったら、こんな風に変わるんだよ。なるほどね」
　女子たちも、すっかり感心して、とても勉強になった様子なのである。彼女たちは、軟弱男子のオチンチンのさらなる変貌を期待して、なおも、彼のオチンチンをゴシゴシと力を入れて、しごき続けたのだった。
「ねえ？君自身は、なんで、オチンチンが立つのか、理由を知ってるの？」軟弱男子のオチンチンをこすっていた女子が、まるで悪意もなく、にこやかに、軟弱男子に尋ねた。

実は、軟弱男子の方は、すでにオナニーを体験済みなのだった。だから、今のままではマズい状態になる事にも、いち早く気付いていたのである。

「ああぁ。それ以上、しごかないで。アレが出ちゃう。これだけは、愛した女子に最初に見せて、その子にだけ捧げたいの！」

この軟弱男子、けっこう誠実な考え方をしていたようなのだった。しかし、紅潮した顔で、発情して、甘えた声で言ったのでは、まるで説得力がないのである。

とうとう、彼は、思いっきり吐精してしまったのだった。彼の精液を初めて拝んだ相手は、ぜんぜん好きでもなかった、この三人の女子となってしまったのである。でも、この時は、彼だって、かなり気持ち良さそうに、大量の精液を勢いよく飛ばしていたのだ。

そして、この新しい展開には、女子たちも、あらためてビックリしたようなのだった。

「なに、なに？この子、オシッコ漏らしちゃったの？」

「いや、これ、オシッコじゃないよ。だって、白いもん。もっと違う体液だ」

「ええ？ヤバくない？出たらイケナイものだったんじゃないの？」

「まさか。これ、本で読んだ事があるよ。精液ってヤツじゃない？」

「ほう、なるほどね。これが精液か。貴重なもの、見せてもらったね」

射精したのを、こんな風に大真面目に感心されたら、むしろ、よけい照れ臭いのである。しかも、興味深げな彼女たちは、軟弱男子の精液を汚がるどころか、平気で触ったり、舐めたりしていたのだった。軟弱男子は、好きになった女性にだけ差し出そうとしていた大事な子種を、すっかり、ただのクラスメイトの女子に、ぞんざいに扱われてしまっているのである。きっと、男のプライドもズタズタだった事であろう。

こうして、男の体の仕組みを何もかも調べられて、軟弱男子は、やっと彼女たちから解放してもらえたのだった。三人の女子は、笑

いながら、「また見せてね」とだけ捨てゼリフを残して、去っていった。

全く、男にしてみれば、これは、あまりにも屈辱的でカッコ悪い体験なのだ。軟弱男子としても、こんな事をされたと言うのは、とても先生にも友人にも話せそうにはなく、このまま秘密にするしかなかったのである。

また、あの三人の女子たちは、万が一の脅しに使う為だったのか、彼の性器を小まめに写真にと撮っていた。それを考えると、やはり、この出来事については、黙っていた方が賢明そうなのだった。

いや、本当にそうなのだろうか。実は、あの写真は、口封じ目的ではなく、彼女たちが自分らの観賞用に撮っていただけだったのかもしれない。つまり、彼女たちは、男の体を見たくなる度に、今でも、その写真を眺めていたのかもしれないのである。あの女子たちに、軟弱男子は、今なお、自分の裸や性器を見られ続けているのだ。そして、そう考えると、軟弱男子の方も、恥じらいで、つい興奮してしまい、思わずオナっちゃったのだった。

彼は、ひそかに、あの女子たちに、また拉致される事を期待するようになっていた。確かに、彼の好みとしては、彼女たちは全くタイプではなかった。それどころか、今でも、一番苦手に思える感じの女子たちだ。だけど、あの子たちも女だと言う点は間違いないのである。

あの屈辱の体験の時、彼は彼女たちに体を触られまくった。特に、性器を女の子に握られるのは初めての事であった。実質上、手コキもしてもらえたのだ。その感触は、素直に白状すれば、明らかに、自分でセンズリするよりもドキドキしたのである。

それだけではない。内気だった軟弱男子にとって、女子と接近する事自体が、ひどく稀な体験であった。顔や性格は置いておくとして、間近で見た女子の体というのは、かなりハッとさせられるものだったのだ。制服の胸部の膨らみや、スカートの奥にさりげなく見えていたパンチラなど、ピュアだった男子にしてみれば、それだけ

でも、十分に扇情できる要素なのだった。オチンチンをいじられながら、一方で、そんな事も意識していた訳なのだから、そりゃあ、射精するまで気持ちが高揚してしまったのも無理もないのだ。

軟弱男子は、今にまた、あの女子たちに呼び出されると、ぼんやりと信じていた。だって、自分ばかりが裸を見られたままで終わったのでは、あまりに面白くないのである。彼だって、女の裸を見てみたいのだ。そう、彼女たちの男の体への欲求がまた高まれば、今度はセックスも試したいと考え出すのではなかろうか。もし、そうなれば、彼女たちは、再び軟弱男子に声を掛けるに違いない。彼に、自分とセックスするように求めてくると考えられるのだ。その時は、彼の方だって、彼女たちの裸を見る事ができるであろう。なるほど、彼女たちは、軟弱男子の好みではないし、正式なカノジョにする気にもなれなかったが、それでも、セックスできるならば、相手にしてもいいだろう、と軟弱男子は心の中で思ったのだった。

しかし、そのような機会は、結局、訪れはしなかった。あの三人の女子は、その後、いつの間にか、それぞれが彼氏を作っていたからである。本物の彼氏がいる以上は、もう、男性器を見せてもらう為だけの存在も不要なのだ。かくして、彼女たちが、軟弱男子に接触してくる事も二度となかったのである。彼の体を隅々まで拝見するような事をしておきながら、教室にいる時の彼女たちは、彼に対して、いっさい見向きもしなくなったのだった。

代わりに、軟弱男子は、その後まもなく、先輩の不良男子たちに目をつけられた。おっかない彼らに完全にカモにされた軟弱男子は、カツアゲされたり、パシリをやらされただけではなく、時には、不良たちを楽しませる余興として、彼らの前でズボンを下ろされ、大事な男性器をむき出しにされた。その上で、金玉を握り潰されそうになったり、仮装包茎の皮を破れそうなほど引っ張られたり、それどころか、センズリする事すらも強要されて、好きな女子に捧げるつもりだった精液を、さんざん、不良たちの前で放出する事にもなったのだった。

ただでさえパッとしなかった軟弱男子が、こんな風に、不良たちの情けないオモチャにされたのでは、それこそ、ますますカノジョなども作れるはずもないのだ。彼の高校生活は、時めくような恋愛やセックスとも無縁のまま、ただ自分ばっかりが性器やスペルマを他人に見られて、過ぎ去ったのだった。

了

新入部員の災難

ここは、美術室だ。今日は、我が校の美術部の定例の活動が行われているのである。

部員は、いずれも、未来の芸術家を夢見る、熱心な生徒ばかりだった。彼らは、この美術部の活動に、本当に真剣に取り組んでいたのである。

さて、本日の課題は、全員で、ロダンの「考える人」の写生をしてみよう、と言うものだった。ただし、この学校には、「考える人」のブロンズ像の模造品（ダミー）は置いていなかった。かと言って、写真を見ながら写生するのも、味気なさすぎるのである。そこで、部員の一人にモデルになってもらって、その子に「考える人」の格好をしてもらい、皆で写生しよう、と言う話になったのだった。

モデル役には、入部したばかりの一年生の女子が選ばれた。どうせ、実物（オリジナル）を写生しないんだったら、女版「考える人」にしても面白いんじゃないか、と言う提案が採用されたのである。

このモデルの女生徒は、さっそく、「考える人」になるべく、準備を開始した。椅子を用意して、そこにと座るのだが、その前に、まず、服を脱ぎ始めたのだ。そもそも、「考える人」は裸なのである。だったら、「考える人」役のモデルも、よりリアルに、裸になるのが当然なのだ。そして、勇気あるモデル役の女生徒も、美術部の活動に我が身を捧げていたので、ためらわずに、裸になりだしたのだった。それは、同席していた顧問の先生も承諾のもとでの行為であった。

モデルの生徒は、とうとう、全裸になってしまった。一年生なので、まだまだ胸もお尻も小さくて、女性の体としては貧弱なのだ。でも、彼女は、美術部の役に立つ事を心から喜んでおり、皆に裸を見られるのを、ちっとも恥ずかしがってはいなかったのだった。

それから、彼女は椅子にと座った。彼女が、「考える人」のポーズになった事で、いよいよ、写生会は始まったのである。にしても、女の「考える人」を写実すると言うのも、けっこうユニークな趣向なのだ。男と女の区別を明白にする為、モデルの子をきちんとヌードにしたのも正解だったのである。

ところが、しばらくしてから、ちょっとした不具合が発生したのだった。写生中の生徒たちを見回っていた顧問が、いきなり、頓狂な声をあげたのだ。

「ちょっと、君！その黒い表現は、何なの？『考える人』は、そんな部分は黒くなってないでしょう？」と、顧問は、一人の生徒の絵を見ながら、そのように指摘したのだった。

「でも、このモデルは、その部分が黒いんです」注意された生徒は、戸惑いながら、答えた。

言われてみれば、確かに、モデルの子のその部分は、うっすらと黒くなっていたのだった。その部分とは、股間の事である。彼女は、けっこう濃いめに性毛を生やしていたのだった。あくまで、モデルを忠実に描写するならば、この性毛だって、描かない訳にはいかないのである。

「ううむ。困りましたね。『考える人』に下の毛があったりしたら、印象が大きく変わってしまうし」顧問は、うろたえながら、呟いた。

「そうだ！こうしましょう！」

何かを閃いた顧問は、スタスタと、モデルの子のそばに寄っていった。その手には、キラリと光る細工カッターが握られていた。

「君、その毛を少し剃っちゃいましょう。要は、写生する側にさえ見えなければいいのです。よろしいですよね？部の大事な活動の為なんですからね」

そのように説得されたら、モデルの子も拒否はできないのだ。彼女は、内心は弱っていたかもしれないが、結局は、顧問の命令をおとなしく受け入れたのである。

顧問は、すばやく、モデルの子の性毛の一部を剃ってしまった。

モデルの子のデルタ地帯は、毛のある部分が狭まり、そこは、つるんとした肌が露わとなったのだ。

「先生。黒い部分が見えなくなりました！」と、先ほどの生徒が、嬉しそうに、顧問に報告した。

顧問の方も、このように上手い対処をした事で、実に得意げなのだ。

しかし、その時、モデルの子をグルリと囲んでいた他の写生中の生徒たちも、次々に、声を上げだしたのだった。「先生、僕の方からは、まだ黒いものが見えます！」「私の方からもです！」

だったら、顧問としても、皆の要求にも答えてやるしかないのである。

顧問は、再び、モデルの子のそばに寄っていった。そして、それぞれの生徒の指示を受けながら、またまた、モデルの子の性毛を剃り始めたのである。彼女の性毛は、四方から見えちゃっていたので、こうなったら、片っ端から、剃り除いていくしかないのだ。

そんな事を続けていくうちに、気が付くと、モデルの子の沢山あった性毛は、あらかた無くなってしまったのだった。彼女のデルタ地帯は、すっかり無毛（パイパン）になっちゃったのである。これでは、恥ずかしくて、当分は、事情を知らない人たちの前では、下半身を見せられないだろう。やれやれ、この一年生の女子ときたら、美術部に入って、一体、何をやっているのやら。

まあ、ともあれ、これで、写生中に、股間部に黒いものが見えてしまう問題の方は解決したのである。かくて、美術部の写生会の方も、無事に再開したのであった。

了

制服処女の悶え

うちの近所の小道を、一人で下校している女子高生がいた。その道はいつだって人気がなく、彼女は常に独りぼっちだったのだ。そこで、俺は、この道で彼女を襲う計画を立てたのである。

この日も、いつものように、その女高生が小道を歩いていた。俺は、反対側から歩いていって、さりげなく、彼女とすれ違った。その刹那に、俺は彼女へと飛びかかったのだ。

俺が屈強な男性だったのに対して、彼女はか弱い女の子だった。彼女を拉致して、誘拐するのは、実に容易い作業であった。しかも、いきなりの出来事に、彼女はビックリして、体が強張ってしまったらしく、ほとんど抵抗もしなかったのだ。彼女は、喉が震えて、大きい声も出せなくなっていたようだった。

俺は、彼女のことを、近くの公園の草むらの中へと連れ込んだ。この公園もまた、今時分はまるで人がおらず、悪い事をするのには絶好の場所だったのだ。

俺は、地面に押し付けた女子高生の上にと馬乗りになった。

「わ、私、まだ処女なの。セックスはだめ。勘弁して」彼女は泣き声で俺に訴えかけてきた。

相手は、高校生だ。確かにそれは事実だったのであろう。だが、そんな事を言われると、俺の欲情した心は、逆に、もっと燃え上がってしまったのだ。

俺は、力づくで、彼女の制服を脱がしていった。現役の女子高生のセーラー服を剥ぎ取るなんて、まるでＡＶにでも出演しているような感覚なのである。ますます興奮してくるのだ。

そして、彼女の方は、まるで非力なのだった。恐怖で、すっかり力が抜けてしまったらしくて、いっこうに手向かってはこなかったのである。

とうとう、俺は、彼女を下着姿にしてしまった。健全な女生徒らしい、純白で清潔な下着なのだ。

「ダメ。これ以上は、お母さんや友達にも見せた事がないの」

彼女は涙目で訴えたが、俺は容赦はしなかった。俺は、強引に、彼女のブラジャーもパンティも奪い取ってしまったのだ。こうして、彼女は、ついにオールヌードとなってしまったのである。

１０代の娘の体は、俺が考えていた以上に、爽やかだった。全身の肌がスベスベで、白くて、清らかなのだ。胸も腰も剥き出しだと言うのに、それらの部位すらも猥褻に見えないほどだった。体の全てが、健全な女学生なのである。これが、つまりは、真っ直ぐに普通の青春を生きている女高生ならではの裸なのだろうか。

「お願い。本当に挿(い)れないで。卒業する前は、きれいな体のままで居たいの」彼女が、また、俺にと泣きついてきた。

そこで、ハタと思った俺は、すぐに自分のイチモツを引っ張り出すのはヤメて、まずは、彼女の両足首を掴んだのだった。そのまま、俺は、彼女の両足を持ち上げた。

彼女の方も、俺がこれから何をするのか、かなり怯えていたようだ。

彼女の両足の先を持って、その間に立った俺の前には、バッチリと彼女の陰部が見えていた。俺は、その彼女の陰部むけて、自分の右足を突き出したのである。

大事なところを踏まれた彼女は、思わず「うぐっ」と呻いた。

そう、俺は、彼女に電気アンマをかけてやったのである。女の身で、それも、未成年で、電気アンマをかけられるとは、彼女としても、さぞ衝撃の体験だった事であろう。

俺の右足は、がっちりと彼女の女性器(ヴァギナ)を踏みつけていた。その足の裏には、彼女の女性器(ヴァギナ)の柔らかい感触が、じかに伝わってくるのだ。こうして、彼女のまだ処女(バージン)の女性器(ヴァギナ)は、よりによって、足で踏まれると言う形で、はじめて男に触れちゃったのだった。

「いやあ、やめてー」彼女は、うろたえ叫んだ。

「なあ、処女のねーちゃん。どうだい、感じるかい？ご希望どおり、処女のままで、気持ち良くしてあげるよ」

「そ、そんなあ。なんて、なんて」

彼女は、必死で拒むような言葉をわめき続けていたが、俺の足で踏まれた彼女の女性器（アソコ）は、確実に、感じていたようなのだ。俺の足の裏から感じとれる、女性器のデコボコした表面は、生温かく、ピクピクしていて、ぬめっていた。こうやって踏んづけ続けていると、そのワレメの奥にまで、ついつい、俺の足の先も潜り込みそうになった。

この情けない状況で、彼女は、顔を真っ赤にして、しきりに喘いでいた。俺にギュッと抱えられた彼女の両足も、小刻みに震えていたようである。電気アンマがかなり効いていて、足もアソコもすっかりシビれていたみたいなのだ。全く、他人には絶対に見せられないようなザマなのである。

俺は、いったん、電気アンマを終わらす事にした。この女子高生も、ようやく、俺の責め苦から助かったのである。しかし、彼女の体は完全に疲労してしまい、地面に倒れたまま、すぐには立ち上がれないようだった。

俺は、再び、彼女の足もとに近づいた。そして、今度は、彼女の股間部へと、俺の右手を伸ばしたのである。俺の指先には、丸い、小さなものが触れた。この女子高生のクリトリスである。さんざん、電気アンマで刺激されたものだから、発情して、すでに勃起していたのだ。

「ひっ」と、女子高生が小さな悲鳴を漏らした。

「安心しろ。穴に挿（い）れたりはしないよ。先に、これを試してみるよ」

俺は言った。

その直後、俺は、彼女のクリトリスをグリグリと集中的にいじり回したのだった。敏感なクリトリスは、たちまち、膨らんでいった。清純な処女であろうと、クリトリスの感度は、ヤリマン女となんら変わりはしないのだ。

倒れたままの女子高生の顔が紅潮し、鼻息が荒くなった。もしかすると、クリトリスの気持ち良さを知ったのは、今が初めてだったのかもしれない。いやはや、この子は、どこまで、純情で無知なのだ。

俺は、テクニックを駆使して、もっと激しく、彼女のクリトリスを責め立ててやった。彼女ときたら、理性では拒絶していても、体がこの快感から離れられなくなってしまったらしく、モジモジしながらも、俺の指からは逃げようとしなかったのだ。だから、俺も、彼女をとことん悦ばせてやる事にしたのである。

このままでは、この女子高生は、きっと、クリトリスだけでイってしまうであろう。彼女にとっては、初の絶頂の体験となる訳だ。清純だった彼女も、ようやく、一人前の女になれるのである。

男とセックスしなくても、十分にエクスタシーに浸れるのだと知ったら、この子は、今後は、すっかり、オナニーの虜になっちゃうかもしれない。

了

放課後のお仕置き

うちのクラスには、スケ番とその二人の側近が在籍していた。これは、まだ番長とかスケ番とかが全盛期だった頃のお話だ。だから、高校のクラスに普通にスケ番とか番長がいても、決してオカしくもなかったのである。

スケ番たちは、学校だけはきちんと卒業しておきたかったのか、最低出席日数を落とさないように、けっこう、こまめに授業に出ていた。だが、同じクラスだった一般生徒たちにしてみれば、彼女たちが教室にいると、それだけで怖かったので、あまり彼女たちには授業に来てほしくなかったのである。

ある日の放課後、そのスケ番が、いきなりブチ切れた。帰りのホームルームが終わって、すぐの事である。よって、その現場には、ほぼクラスメイトの全員が立ち会ってしまったのだ。

スケ番は、どうやら、パシリに使っていたA子さんに対して激怒したみたいなのだった。このA子さんと言うのも、実際には、スケ番の仲間などではない。教室にいる時だけスケ番たちに使役されていた一般生徒だったのである。教室内には、スケ番たちの正式な子分たちが立ち入れなかった為、気の毒にも、A子さんが、教室内でのスケ番たちの雑用を、全て、無理やり任されていたのだった。A子さんに拒絶権はなかったし、学校や他のクラスメイトもスケ番に歯向かえなかったので、誰もA子さんを助けようとはしなかったのである。

で、この時は、たまたま、スケ番の虫の居所が悪かったのか、A子さんが何かのヘマをしてしまったのか、いつになく激しくスケ番が怒ってしまったようなのだった。

スケ番は「いっぺん、お仕置きしてやるしかない！」と怒鳴っていた。まだ他の生徒がいるのにも関わらず、どうやら、この教室内

で、スケ番によるA子さんへの折檻が始まるみたいなのだ。こんな事には誰だって関わりたくはないところなのだが、だからって、今、教室を出て行く事もできなかった。そんな事をすれば、先生に知らせに行ったと疑われてしまうからだ。誰だって、余計な真似をして、スケ番に睨まれたくないのである。よって、他の生徒たちは、やむなく、スケ番のやる事を、遠巻きに眺め続けているしかなかったのだった。

スケ番と二人の側近は、A子さんの体を力づくで押さえつけると、いきなり、彼女の服を剥ぎ始めた。それが、スケ番式の私刑（リンチ）のスタンダードなのだ。A子さんは、たちまち、制服も下着も脱がされてしまった。彼女は、他の生徒も見ている前で、全裸にされちゃったのだ。何もかもが丸出しなのである。A子さんは、スラリと背も高く、そこそこに胸も大きくて、まだ高校生だったにしては、なかなか成熟した体つきだった。

さて、これでお仕置きも済んだ訳ではないのだ。実際は、これからが本番なのである。

このあと、A子さんは、素っ裸のまま、机の上に正座させられたり、黒板の前に立たされたり、あるいは、床の上に押しつけられたりして、その場その場に合わせた形の暴行を受けさせられたのだった。

ただ殴ったり、蹴ったりしただけではない。スケ番たちは、A子さんの体の恥ずかしい部位への乱暴も、いっさいの妥協をしなかったのである。乳房を鷲掴みにして捻り上げたり、股間目がけて上履きの先を蹴り入れたり、お尻にタバコの火を押し付けたり。A子さんの、白くて、スベスベだった肌は、見る見るうちに、アザや火傷の跡だらけになっていった。陰毛をドテ焼きした時などは、教室中に、焼けたクサい臭いも広がってしまったのである。

恐らく、スケ番たちは、他校のスケ番たちとの抗争では、こんな暴力を、当たり前のように、相手のスケ番へと行なっていたのだろう。それが、今、まさかの教室の中でも展開されているのだ。

「おい。これで、もう許してもらえるとは思うなよ」そうドヤしつけながら、いったん呵責の手を休めたスケ番は、隠毛が根元まで焼けてしまったA子さんの股間の周辺を、ハンカチで拭ってやった。そのハンカチは、隠毛の燃えカスを払っただけではなく、べったりと赤い血でも染まってしまった。それは、傷ついた膣（ヴァギナ）から出た血だったのである。

最後に、スケ番は、ケジメとして、A子さんの乳首を切り落とそうとした。つまり、ヤクザが指を詰めるようなものだ。だが、ここで、ようやく、スケ番も、相手がただの一般生徒（カタギ）だった事を思い出して、その制裁だけは踏みとどまってくれたのだった。A子さんは、ギリギリで、乳首を喪失する危機だけは免れたのだ。

これで、ひとまずは、スケ番たちのお仕置きも終わったのである。スケ番たちは、床に倒れていたA子さんを放置して、自分たちだけが、さっさと教室から出ていってしまったのだった。

こうして、ようやく、他の生徒たちも、A子さんを助ける事ができたのである。良心ある生徒たちが数人、倒れたA子さんのそばへ走り寄った。彼らは、すぐに、傷だらけのA子さんを保健室へと連れていったのである。

全く、文字どおりの恐怖の時間帯であった。クラスの生徒たちは、このように、スケ番たちの裏の実態を知る事となり、その恐ろしさを再認識したのだ。

いや、実は、クラスの男子生徒たちにとっては、今回の一件は、スケ番たちの脅威よりも、教室内で、クラスメイトの女子の裸を見ちゃった事の方が、はるかに衝撃を受けていたのであった。しかも、その一般人の女生徒が、スケ番の私刑（リンチ）で、SMさながらに、体の恥ずかしい部分も責め立てられていたのだ。そんなのを見せられて、まだ純情だった高校生の男子が、トラウマにならないはずが無いのである。そんな訳で、このスケ番のお仕置き事件があった後は、この場に居合わせた男子たちの中には、このスケ番リンチの様子を思い起こしながら興奮して、オナニーしていた奴も、けっこう居たの

であった。

了

学業不振

うちのクラスには、美人だし、性格も申し分のない女子がいた。彼女は、体も大きくて、クラスの皆からも慕われていて、実にこの上なかったのだ。しかし、彼女は、なぜか、肝心の学業の方がイマイチなのだった。決して頭の悪い子ではなかったはずなのだが。また、運動神経も鈍い方ではなかったと思われるのに、彼女は、スポーツもあまり得意ではなかったのである。

どうやら、彼女は、ちょっと集中力に欠けていたようなのであった。なぜだか、彼女は、他の子と比べても、だいぶ注意力が散漫だったのだ。それで、勉強にせよ、スポーツにせよ、今ひとつ、十分な実力を発揮できなかったらしいのである。素質はある子だっただけに、ひどく残念な話なのだ。

担任の先生も、この件については、とても頭を悩ませていたようなのであった。

ある日のホームルームの話である。その最中に、突如として、担任の先生は、この女生徒へと、教室の前に出るように呼びかけた。女生徒は、言われるがままに、席を立ち、黒板の前にと立った。

すると、次に、先生は、女生徒へ、そこでジャンプしてみるように指図したのだった。全く、おかしな命令なのだ。しかし、戸惑いつつも、女生徒は、言われた通りに従ったのだった。

女生徒が、他のクラスメイトも見ている前で、ピョンピョン跳ねてみせる。一見、ごくごく普通の光景なのだ。それを眺めていたクラスメイトたちも、そのように思っていた。ところが、担任の先生だけは、そうではなかったみたいなのである。

続いて、先生は、女生徒へ、服を脱ぐように指示したのだった。ホームルーム中だと言うのにである。

当然、女生徒は狼狽した。だが、担任の先生は、この命令を引っ

込めてはくれなかったのだ。この先生は、教育熱心で、かなり厳しかった。このクラスでは、この先生の意見は絶対であり、生徒は誰も逆らってはいけない空気になっていたのである。

よって、イヤイヤながらも、女生徒は、本当に制服を脱いでしまったのだった。彼女は、教室の中で、下着姿になってしまったのだ。なんて恥ずかしい教育指導なのであろう。

ところが、それだけでは済まなかったのである。

「ブラジャーも外しなさい」と、先生は言った。

なんと、この先生は、女生徒へと、それ以上のことを要求したのだ。

女生徒は、躊躇したまま、涙目で先生を見つめたが、先生は指示を撤回しそうにはなかった。なので、女生徒は、仕方なく、オロオロと、下着も取ってしまったのである。

クラスメイトたちは、思わず、女生徒の胸元を見入ってしまった。と言うのも、この女生徒は、かなりの巨乳だったからだ。制服越しや、ブラジャー越しでも、それとなく分かったのだが、こうして、じかに拝見すると、さらに物凄いボリュームなのである。彼女の胸だけが、まるで、グーンと３Ｄ映画で飛び出していたかのようだった。

そして、先生は、この状態で、女生徒に、再び跳んでみるように指示したのであった。

女生徒は、半泣きで、その命令を実行した。彼女は、黒板の前で、裸で、ピョンピョン、上へと跳んだ。彼女の大きな胸がユッサユッサと揺れた。女の人のオッパイって、でかいと、こんなにも揺れ動くものなのである。この女生徒は、まだ高校生だと言うのに、ちょっと立派なものを持ち過ぎなのだ。

さて、この様子を見て、担任の先生は、ようやく、納得した表情を浮かべたのだった。

「君。胸のあたりがキツくありませんか」と、先生は女生徒に尋ねた。

「あ。それは、その・・・」女生徒は、照れて、顔を赤らめた。
「正直に言いなさい。本当は重たいと感じているのでしょう?」
女生徒は、問い詰められて、素直に頷いたのだった。
「それだけ大きかったら、ブラジャーをしていても、あまり効果がないでしょう?重いし、すぐ揺れるんじゃありませんか?肩だって凝りやすいのでしょう?」
女生徒は、うなだれたまま、何度もコクリと頷いた。全て、担任の先生の図星だったようなのである。
「君が、何事にも集中しきれなかったのは、全部、その胸のせいです。胸が揺れるのが気になって、いつも、心が乱れてしまったのでしょう。その胸を何とかしませんとね。だけど、市販のブラジャーでは、十分に締め付ける事ができなさそうですね。あ、そうだ、晒を使いなさい。晒で、その胸を巻くのです。そうしたら、揺れなくなり、君も、もっと勉強や運動にも集中できるようになるでしょう」
つまり、先生は、この事を示唆したくて、この女生徒にこんな事をやらせたのだった。決して、意地悪やセクハラなどではなかったのだ。
その後、女生徒は、担任の先生の助言どおりに、胸には晒を巻いて、学校に来るようになった。すると、彼女の成績は、めきめきと良くなっていったのだった。先生の意見は、何もかも正しかったのである。
確かに、あのホームルームでの実験は若干のやり過ぎだったかもしれない。でも、結局は、こうして、結果オーライだったのだから、特に騒ぎ立てる事もないのである。

了

やったぜ、ボディペインティング部

うちの高校には、ボディペインティング部を立ち上げようとして、張り切っていた女子がいた。彼女のことは、仮に、Fと呼ぶ事にしよう。

Fは、ボディペインティング部の開設に向けて、学校の先生たちにも、熱心に、この部の趣旨を説明して、アピールしたのだが、それなのに、まるで相手にされなかったのだった。

何しろ、頭の古い教師たちには、ボディペインティングの意義が分からないのだ。裸になって、体に絵の具を塗りたくるなんて、意味不明だし、汚いし、イヤらしくて、あまりに野蛮すぎる。そんな活動をして、どんなメリットがあるのかも理解できない。だが、それ以前の話として、現時点では、ボディペインティング部の参加希望者は、F一人しか居なかったのだった。

そんな訳で、ボディペインティング部の発足は、ずっと棚上げされた状態だったのだが、どうやら、Fは決して諦めてもいなかったようなのである。

その年の体育祭の日がやって来た。この日は、生徒も教師もグラウンドへと飛び出して、晴れた青空の下、様々な競技で競いあって、大いに盛り上がったのだ。

ところがである。競技が進むにつれて、なぜか、観戦している生徒たちの間では、怪しいどよめきが起き始めた。どうやら、競技に出ている生徒の中に、何だか不審な点を見つけたようなのである。

その問題の生徒とは、Fだった。どうも、Fの外見がおかしい事に、何人もの生徒が気付きだしたのだ。

一見、Fは、普通の体操服姿だった。白いTシャツを着て、ブルマを履いている。しかし、そのシャツとブルマが、何となくイビツに見えたのである。

目を凝らして、じっと観察する事で、その違和感の原因が、ようやくハッキリしたのだった。

Fは、体操服もブルマもつけていなかったのだ。彼女のシャツとブルマは、ただ、肌の上に描いただけのものだったのである。つまり、今の彼女は、真っ裸だったのだ。すなわち、ボディペインティングしていたのである。

よおく眺めれば、Fのシャツとブルマは、ピッチピチにFの体に密着していた。裸体にじかに描いた衣服だったのだから、当たり前だ。さらに、近くでじっくりと観察すれば、Fの乳首がちょこんと盛り上がっていたのも、お腹にヘソの窪みがあったのも、ブルマが陰毛で毛羽立っていたのも、全て、ハッキリと確認できたのだが、何しろ、見事に描かれたボディペインティングだったものだから、その事を事前に教えてもらっていなければ、これらの服が絵だったとは、誰もすぐには気付けなかったのだった。

やがて、ほとんどの生徒が、このFの事実を悟る事となった。もちろん、教師たちもだ。しかし、ここまで体育祭が進んでしまうと、今さら、Fのことを引っ込める事もできなくなってきたのだった。

何たって、ボディペインティングしていた生徒を、そのまま、体育祭に参加させていた事が、学外でも噂になってしまうと、それこそ我が校の恥なのである。だったら、この際、最後まで、この事実は知らなかった事にして、生徒たちにも絶対に口外しないように口止めした方が、はるかに利口な対応なのだ。とまあ、教師たちは、そのように考えをまとめたのだった。

こうして、ボディペインティングをなかなか認めてもらえなかったFは、体育祭のさなかで、その活動を堂々と実践してみせる事で、見事に、先生たちに一矢報いたのである。

体育祭の全ての競技が終了し、閉会式も終わりに近づいた時、グラウンドに集合していた生徒たちの間から、突如、盛大な拍手が湧き上がった。それは、自分の信念をしっかりと貫いたFへと送られたものなのであった。

了

恐怖の入学式

うちの高校は、スケ番に牛耳られていた。生徒も先生たちも、誰も、スケ番たちに歯向かう事はできない。この学校は、完全に、スケ番の支配下にあったのだ。

我が校では、一般の生徒たちは、全員、スケ番の一派の奴隷のようなものだった。彼女たちに上納金を支払い、彼女たちの命令には問答無用で従うのが、当たり前となっていた。一般生徒たちは、そこまで、徹底的に、スケ番たちに洗脳されて、飼い慣らされていたのである。

スケ番グループによる、一般生徒たちの教育は、新入生にとっては、入学式の日から、いきなり始まる事となった。本来の入学式、いわゆる、表の入学式が終わると、入学したての一年生たちは、今度は、スケ番たちが主催する裏の入学式にと参加させられる事になる。例外は一人も認められない。全員が、必ず、この裏の入学式の洗礼を受けさせられたのだ。

新入生たちは、あらためて、全員ひとまとめにして、体育館の方へと連れてこられる。彼女たちは、体育館の中に入ると、その中に完全に閉じ込められてしまい、いよいよ、スケ番の入学儀礼が始まるのだ。

新入生たちは、スケ番たちによって、服を脱ぐ事を命令された。もちろん、新入生の皆はこの時点で戸惑う訳なのだが、モタモタしていると、すかざす、スケ番の子分たちの暴力をお見舞いされたのだった。

その事によって、ダラダラしていた新入生たちの態度も、瞬時に変わってしまう。彼女らは、慌てて、スケ番に従うようになってしまうのだ。皆は、急いで、服を脱ぎ出す。たちまち、体育館の中は、裸の新入生だらけになってしまうのである。スケ番たちは、下着一

枚つけている事も許さなかった。だから、この段階で、全ての新入生は全裸になってしまったのだ。

しかし、これでスケ番の入学儀式が終わったのではなかった。ここからが始まりだったのである。

続いて、スケ番たちは、裸の新入生たちに、ブリッジをするように命じた。仰向けの状態で、手足と頭を支柱にして、体を持ち上げてみろ、と言うのである。新入生全員に対しての命令だ。誰一人、免除はしてもらえないのである。こんなポーズは、やった事のなかった生徒も多かった事であろう。しかも、全裸で、こんな格好をしろと言うのだ。ますます、新入生たちは、ためらったに違いない。

だが、彼女たちは、やるしかなかったのである。暴力を恐れた子から、次々に、ブリッジを開始した。それを見て、残った生徒も、ぞくぞくとブリッジをやりだしたのだ。間もなく、体育館内は、ブリッジをしている新入生で埋め尽くされたのだった。

にしても、それは圧巻の光景だったのだ。ブリッジをしている女子の全員が、素っ裸なのである。それも、ブリッジしている事で、股間もオッパイも大っぴらにさらけていたのだった。あまりにも恥ずかしい仕打ちとも言えるが、それでも、この大人数でやっている事により、多少の羞恥は和らいでいたようなのでもあった。

こうして、ブリッジをやらされて、全くの無防備の状態で、スケ番たちの監視下に置かれる事で、新入生たちの反抗心はますます薄れていく事になる。スケ番たちは、この状況で、新入生たちへ、自分らへの忠誠を徹底的に叩き込んだのである。

少しでも不誠実な態度をとる新入生に対しては、すぐにスケ番たちの制裁が加えられた。この入学儀礼の場において用いられた暴力は、殴る蹴るよりも、主に、ドテ焼きだった。すなわち、スケ番たちは、不真面目な新入生には、そのアンダーヘアへと煙草の火を押し付けたのである。ブリッジしていたら、その子のデルタ地帯はちょうど上を向いていたので、まさに、灰皿がわりにし放題だったのだ。

このようにして、あちこちで、大事な毛を焼かれる新入生が続出した。自身がやられなくても、その現場をそばで目にしただけでも十分に怖いのだ。新入生たちの間には、次第に、泣き声が広がり出した。彼女たちは、この恐怖の状況に耐えきれなくなってしまったのである。泣くだけじゃなくて、ブリッジしたまま、オシッコを漏らしてしまうような子も少なくなかったようだった。

スケ番たちの裏入学式は、えんえんと、一時間近く、行なわれた。そのあと、ようやく、この秘密の集会も解散となり、新入生たちも解放されたのである。その時には、すでに、かなりの人数の子が、下の毛を焼かれてしまっていたようだった。だが、それこそが、スケ番の奴隷にされた刻印でもあったのだ。

こんな恐ろしい体験をしちゃったら、確かに、スケ番たちに逆らわなくもなるのである。かくて、この高校でのスケ番たちの支配は、さらに何年間も続く事となったのだ。

了

図書室のまぼろし

僕は、自分の高校の図書室が好きだった。本の虫だったからではない。人付き合いが苦手な僕にとって、図書室は、校内で、もっとも落ち着ける場所だったのだ。この図書室には、それほど生徒が寄り付かなかったのである。何でもネットやスマホで調べられる今の時代、いちいち、本を読みに来るような奴もいないのだ。

そのように閑散としていたにも関わらず、うちの高校の図書室は、かなり広くて、立派だった。多数の本棚が立ち並び、様々なジャンルの本が揃っていた。ほとんど生徒が利用していないのが勿体ないぐらいなのである。しかし、まあ、それが、今どきの図書室の悲しい現実でもあったのだ。

とにかく、そんな訳で、図書室は、ますます、僕の素敵な秘密基地と化していたのだった。いちおう、図書室の入り口に図書委員は座っていたものの、彼らは、その席からは、まるで動こうとせず、置物のような存在であった。よって、図書室の奥に入っていくほど、この部屋は、なおさら、僕だけの空間となったのだった。

昼休みは、だいたい、僕は、この図書室に入り浸っていた。周りにあるのは、本棚につまった大量の蔵書だけだ。僕は、ここで、一人だけの時間をゆったりと過ごす事ができたのである。

その日の昼休みもまた、僕は、そのつもりで、図書室にお邪魔していた。本に目を向けるのでもなく、僕は、すぐに、部屋の奥の方へと向かう。たちまち、僕は、本棚の迷路の中で、一人っきりになれるのだ。そのまま、のんびりと、リラックスした孤独を楽しむのである。

そのはずであった。ところが、その日は、本棚に囲まれた状態で、僕は、見知らぬ物音を聞いたのだった。か細い声だ。どうやら、僕以外の人間も、誰か、この図書室に訪れていたらしいのである。

できれば、その人物とは会いたくない、と僕は思った。だから、僕の方は音をひそめた。そして、耳をすまして、相手の様子だけを探ったのである。その人物の方には、近づかないようにする為だ。

それは、女のうめき声だった。小声で喘いでいたようにも聞こえた。とにかく、普段は聞かないようなタイプの声なのだ。腹でも痛くて、苦しんでいたのだろうか。その人物には接触しないつもりではあったのだが、僕は、ちょっと興味が湧き始めたのだった。もし、その子が不意の病気ででも困っていたのであれば、僕としても、彼女を介抱してやる義務があるのだ。

僕は、相変わらず、自分は音を立てないようにして、こっそりと、謎のうめき声の方に近づいていった。やがて、僕は、声を出していた人物を発見したのだった。

本棚に並んだ沢山の本の隙間からソッと覗くと、その本棚の向こう側のスペースに、一人の女生徒が寝そべっていた。ただ寝っ転がっていたのではない。彼女は、裸なのだ。制服も下着も、自分の周辺に、クシャクシャの状態で脱ぎ捨てていた。その子は、図書室の冷たい床の上に、じかに肌をつけて、横になっていたのである。

僕は、思わず、息を飲んだ。とても、声を掛けられるような状況ではなかった。むしろ、僕が彼女を見つけた事は、絶対に彼女に知られる訳にはいかなかった。

だって、彼女は、こんな場所で、全裸になっていただけではなく、オナニーもしていたのだから。そう、彼女は、今、人には言えないような、恥ずかしい行為にと没頭していたのである。

彼女には、この人気のない図書室は、隠れてオナニーをするには、絶好の場所に思えたのであろう。彼女は、自分で、胸や股間を揉みながら、滑らかに体をくねらせて、悶えていた。発情しているらしく、しかめた顔は真っ赤になっている。僕の方も、女の自慰行為なんて、生では、はじめて見ちゃったのだ。

それにしても、この女子は何者なのだろう?僕と同学年だろうか。それとも、先輩なのか、下級生なのか、それすらも分からなかった。

はっきりしているのは、うちの高校には、図書室でこんなハレンチな行為をする女子がいたと言う事実だけである。もしかすると、彼女は、図書室なんかで隠れてエッチな行為をする事で、その後ろめたさで、より強い興奮を味わおうとしていたのかもしれない。

彼女は、自分の事に夢中で、僕に覗かれていた事には、まるで気付いていないようだった。僕としても、このまま、彼女がイク瞬間まで見物していたいとは思った。しかし、時計を見ると、昼休みはもうすぐ終了なのだった。

彼女の方は、時間も忘れていたのか、いっこうにオナニーをヤメる気配はない。一方の小心者の僕は、次の授業に遅刻する勇気は、どうしても持てなかった。僕は、ギリギリまで待って、最後は、未練がましい思いを何とか振り切って、この場を離れたのだった。僕は、図書室を出て、何事もなかったように、次の授業に出席したのである。

翌日の昼休みも、僕は、もちろん、図書室へと足を向けた。すぐに、あの女子がオナニーしていた場所へと向かったのだ。が、当たり前の話ながら、そこには、すでに彼女の姿はなかった。彼女がいた気配も、いっさい残ってはいなかった。でも、確かに、僕は、ここで彼女がオナニーしていたのを目にしたのである。

それからも、僕は、昼休みは、必ず、図書室に通うようにしていた。もしかすると、また、あの女生徒のオナニー現場を目撃できるかもしれないからだ。その事ばかりを、ずっと気に留めながら、今でも僕は図書室通いを続けているのだが、でも、あれからは、まるで、彼女の姿すらも見かける事はなかったのである。

了

お尻狂い

その１

学校での日中、僕は、うっかり間違えて、女子の更衣室の戸を開いてしまいました。

すると、更衣室の中では、ちょうど、一人の女生徒が着替えている最中だったのです。その子は服を脱いだばかりでした。彼女は素っ裸だったのです。彼女は、入り口の戸の方に、背を向けていました。僕には、彼女の裸の後ろ姿がバッチリ見えてしまったのです。

僕は、当然、慌てました。「ごめんなさい！」と一言あやまると、その女生徒が振り向く前に、僕は、速攻で戸を閉めて、更衣室の前から逃げ出したのでした。

それにしても、彼女が後ろを向いていたのは、不幸中の幸いだったと言えます。僕は、彼女のオッパイやお股の毛までは見なかったのです。ぎりぎり覗き扱いされないセーフのラインだったのではないのでしょうか。

と、最初は、そのように思っていました。しかし、正面の裸は見なかったとは言っても、背中だって、女の子の裸には違いないのです。僕の目には、彼女の裸の後ろ姿は、しっかりと焼き付いていたのでした。

中でも、お尻が特に気になりました。そもそも、後ろ姿でも、お尻だけは、普段から見てはいけない部位なのです。それが女性であるならば、なおさらの事です。つまり、僕は、うちの学校の女子のそれを、思いっきり拝見しちゃったのでした。

そして、そんな事を真剣に考え出したら、それからは、僕の瞼の裏には、彼女のお尻ばかりが浮かび上がるようになってしまったのです。まざまざと思い出す事ができます。１０代の女子の、ピチピチしたお尻です。それは、健康的で、清楚そのもののお尻だったは

ずなのに、僕にとっては、たまらなくエッチなものに感じられてしまったのでした。僕ときたら、顔も知らない女子のお尻で、そこまでゾクゾクしちゃったのです。

そんな次第で、それから暫くの間は、僕は、照れて赤くなった顔がなかなか元には戻らなかったのでした。

その2

詳しい経緯については説明しないが、オレは、クラスの女子の中の一人の家に、隠しカメラを設置する事に成功した。それも、彼女の家の風呂場の脱衣室に取り付けたのである。これで、彼女の服を脱ぐ姿やヌードなどを、存分に覗けるのだ。

隠しカメラが写した光景は、まっすぐ、オレの部屋に送られるようになっていた。オレは、リアルタイムで、その女子の裸を鑑賞できる事になったのだ。

ところが、実際に盗撮を始めてみると、とんでもない失敗をやらかした事に気が付いたのだった。

カメラを設置した位置が、あまり良い場所ではなかったのである。その女子は、入浴する時は、いつも、隠しカメラの方には、背中を向けて、服を脱いでいたのだった。全裸になると、彼女は、そのまま振り返りもせずに、バスタオルを体に巻いて、まっすぐ浴室に向かってしまう。浴室から出てきたら出てきたで、彼女はやっぱり最初はバスタオルを巻いた状態なのである。まずは、彼女は、カメラの方に背中を向けて、それからバスタオルを外して、服を着始めるのだ。要するに、この隠しカメラでは、彼女の後ろ姿の裸しか写す事が出来なかったのであった。

せっかく苦労して設置した隠しカメラにも関わらず、オレは、この女子の乳房もアンダーヘアも見る事が出来ないのだ。なんたるミスであろう。こんなんで、盗撮と言えるのだろうか。

しかしである。それでも、慣れてくると、彼女の後ろ姿の裸だけでも、案外、それなりに楽しめるようになってきたのだった。

何たって、彼女のお尻だけは、たっぷり眺め放題だったのが良かった。と言うか、後ろ姿の裸しか見物できなければ、必然的に、目はお尻にばかり向いてしまうのである。

だけど、お尻を侮るなかれ。お尻ばっかりを、ずっと観察していると、これはこれで、けっこう色々な表情があって、味わい深いものなのだ。

この女子ときたら、なかなか大きなお尻をしていた。丸くて、むっちりと膨らんだお尻は、すでに大人顔負けの色っぽさなのである。このお尻が、状況によって、ポヨンと揺れたり、ピクンと動いたり、プルンと震えたりした。それが、よおく眺めているうちに、だんだん分かってきたのだ。女のお尻って、思っていた以上に、躍動的で、エロいものだったのである。

こうして、オレは、すっかり、彼女のお尻のファンになってしまったのだった。もはや、オッパイや性器（オマンコ）を見る事が出来なくても、さほど残念ではないのだ。このお尻を眺めているだけでも、オレは、十分に欲情して、何発でもヌケるようになったのである。

そして、オレは、学校生活でも、この女子のことを、お尻中心に見つめるようになったのだった。

そもそも、制服や体操服を着ていても、この子のお尻がデカかった事は、はっきりと認識できたのだ。多くの男子が、彼女の制服越しに見えるお尻にムラムラしていたのだが、それが、オレだけは、服越しでも、彼女の生のお尻まで思い浮かべる事ができて、一人でニヤついたのだった。

さらには、彼女が椅子や自転車のサドルなどに座っているのを目撃すると、オレは、ひどく妬ましい気持ちにもなったのだ。これらの上に彼女のお尻が乗っかっていたのかと思うと、とても羨ましくて、オレも、つい、後から、これらの椅子やサドルに触ってみて、彼女のお尻と間接タッチをしたくなったのだった。

その3

痴漢の男が、夜道を歩いていた女子高生に襲い掛かった。その痴漢は、女子高生を拉致すると、そのまま誘拐してしまったのである。

女子高生は、近くにあった廃屋へと連れていかれた。その廃屋は無人だったし、彼女がここに連行された事も、誰にも知られていなかった。こうして、女子高生は、痴漢のされるがままになってしまったのだ。

彼女は、手足を縛られて、猿轡を咬まされて、いっさい抵抗できない状態になっていた。その姿で、廃屋の床の上に、うつ伏せに転がされたのである。

痴漢の男が、この身動きできない女子高生のそばに迫ってきた。女子高生の方も、こうなったら、レイプされる事だって覚悟したのである。

痴漢の男は、女子高生のスカートに手をかけた。そのあと、彼は、下着ごと、女子高生のスカートをずり下げたのである。完全に脱がしたりはしなかった。太もものあたりで、スカートを下ろすのはヤメたのだ。よって、女子高生は、可愛らしいお尻だけが丸出しになってしまったのである。

それから、痴漢の男は、ニヤニヤしながら、その女子高生のお尻を弄び始めたのだった。二つのお尻の膨らみを鷲掴みにして揉んだり、軽くペチペチと叩いたり、または、お尻に顔を擦り付けて、ペロペロと舐めたり、あるいは、肛門（アナル）に指の先を突っ込んでみたり。

つまりは、この痴漢の男は、極度のお尻マニアだったのである。

こうして、ストレートに犯される事もなく、ただひたすら、お尻ばかりをイタズラされて、女子高生の方も、なんともヘンな気分になってきたのだった。

そうやって、１０分以上も、痴漢は女子高生のお尻を堪能し続けた。

やがて、彼は、女子高生のお尻の割れ目に指を這わせると、ついに、その指先を股間の方へ移動させたのだった。いよいよ、彼も、きちんと、女子高生のことを犯す気になったのだろうか。

女子高生も、声の出せない状態で、ゴクリと息を飲んだ。
痴漢の指は、女子高生の陰部（ヴァギナ）にとたどり着いた。それから、その指は、ねちっこく、その部分を撫で回し始めたのだ。さんざん、お尻から刺激されていたものだから、彼女の女性器は、すでに濡れてしまっていた。それを十分に確認すると、痴漢は、満足げに、いったん、指を引っ込めたのだった。
女子高生が心配そうに見つめている前で、痴漢は、新たな道具として、電動バイブを取り出した。スイッチを入れたバイブは、鈍い音を立てて、動き出したのだ。
そのあと、痴漢は、自分のモノで女子高生を犯すのではなく、このバイブを彼女の膣（ヴァギナ）にと押し込んだのだった。この男は、あくまでお尻専門だったのだ。
太いバイブは、ぐいぐいと、女子高生の体を内側から責め抜いた。女子高生の腰は、たちまち、快感でシビれていったのである。この子は、道具（バイブ）なんかで、一人で気持ち良くさせられて、その恥ずかしい姿を痴漢の見世物にされてしまったのだ。
性器部（ヴァギナ）がバイブの刺激でもがく事で、お尻もまた、小刻みに震えていた。
痴漢は、女子高生の膣（アソコ）が今にもイキそうになっていたのよりも、このお尻の反応の方を、はるかに楽しそうに見物していたのであった。

了

異次元の子作り対策

その日も、俺は、自分の部屋に一人閉じこもって、アダルトＤＶＤを観ながら、こっそりとシコシコやっていた。

テレビの画面では、セーラー服を着て、女子高生のフリをしたＡＶ女優が、やたらとブリっ子をしている。かと思えば、その子は簡単に裸になってしまい、オナニーやセックスを披露して、観ている俺のことを誘惑したのだ。

こんなエッチなＤＶＤを観ながら、俺は一発ヌキ終えた。しかし、シコっている最中は気持ちいいのだが、こうして射精してしまうと、一気に虚しい気持ちにと襲われてしまうのであった。

俺には妻はいない。それ以前に、結婚する予定もなく、カノジョができそうな気配もなかった。俺は、このまま、一生独身で、生産性もなく、自分の精子をセンズリでだけ消耗して終わってしまうのだろうか。

その時だった。

「お前の願い、オレが叶えてあげようか」そんな怪しい声が聞こえてきた。

俺がハッとして、天井の方に目を向けると、そこには不気味な影のような人間が漂っていた。

「誰だ、貴様は？願いを聞き届けてくれるって、もしかして、悪魔か？」俺は、その影むけて、怒鳴った。

「まあ、そのようなものだ。どうだい、お前は自分の希望を叶えてほしいのかい？」影はニヤリと笑った。

「俺の希望が分かるのか？」

「お前は、自分の生きていた証しとして、自分の子種で、ガキを作りたいのだ。でも、好きでもない女と無理やり結婚したくもないし、子育てに時間を割きたいとも思わない」

「なるほど。本当に、俺の考えが分かっているみたいだな」
「どうだ。その望み通りの形で実現してあげようか？」
「どうやって？」
「なあに、簡単な話だ。お前の出した精液を、オレの方で回収させてもらう。それを、どこかの知らない女の子宮の中に、こっそりと注入してしまうんだ。すると、その女はひとりでに孕んで、お前の子を産む、と言う手はずさ。ちっとも難しい話じゃない。オレには、そんな事のできる力があるんだ」
「それで、俺も、無事に、自分の血を後世に残せるって訳かい。でも、見返りが必要なんだろう？やっぱり、オレの魂と交換なのか？」
「そんなもの、要らないよ。報酬は、この国の政府の方から、すでに貰っている。お前は、新鮮な精子だけを、オレに提供してくれたらいいのさ」
それだけ言うと、怪しい影は、笑いながら、消えてしまったのだった。
よく見ると、それだけではなく、床の上に吐精したはずの俺のスペルマも、そっくり丸ごと、消えてしまっていたのであった。俺は、確かに、たった今、射精したばかりだったのだ。それなのに、出した精液が無いなんて、ありえない話なのである。だとすれば、今の影との対話は、全て、現実だったのだろうか？
そして、その後も、センズリした直後に、放出したばかりのスペルマが消失してしまう出来事が何度も続いたのであった。
あるいは、あの影のような悪魔だか宇宙人だか分からぬ奴が、本当に、俺の精液を勝手に盗んでいったのかもしれない。それから、俺のその精子は、きっと、どこかの見知らぬ女の子宮の中へと送り込まれて、受精し、立派な胎児にとなったのだ。俺には、この奇妙な現象は、そのように信じる以外になかったのだった。
あの影に精子を盗まれた男は、俺一人ではなかったのかもしれない。実際には、もっと沢山の独身男性が、優秀な精子を奪われて、子供を作る気のなかった女性を妊娠させる道具に使われていたのか

もしれないのだ。もちろん、そんな突然の予期せぬ妊娠を知ったら、堕胎する女もいたかもしれないが、でも、多くの場合は、観念して、きちんと子供を産む気にもなったのであろう。

今年の我が国の出産率なのだが、前年の出産率と比較すると、1.7倍に増加したのだった。

了

重労働の報酬

コロナによる行動制限が解除されたのに伴い、我が国の経済活動もいよいよ本格的に再開しました。特に、観光業は、コロナ以前よりも大いに賑わったのであり、どの観光地も急激な人手不足にと陥ったのです。

そこで、僕も、学校の長期の休暇を利用して、小遣い稼ぎのために、地方の旅館の泊まり込みのバイトにと応募してみたのでした。一発採用です。それほどまでにも、今は、どこの職場も人材確保で熱くなっていたのでした。

ところが、僕を雇ってくれた老舗の温泉旅館は、とんだハズレだったようです。その旅館では、体力のある人材ばかりを採用する事で、雇用人数を減らし、人件費の節約を図ったらしいのでした。

その旅館で雇われたのは、僕も含めて、全員、若い男の子ばかりで、5、6人ほどです。女性のバイトは一人もいません。どうやら、こうした若者たちに力仕事を目一杯にやらせて、人数不足を補うつもりだったみたいなのです。

僕の予想は当たりました。

僕たち住み込みバイトは、雇われた日から、さっそく、過度な肉体労働ばかりをやらされたのです。例えば、大量の布団を一度に運ばされたり、荷物の移動を短時間でやらされたり、といった風にです。呆れたブラック職場だったのであります。

こうした僕たちを指揮していたのは、この旅館に以前から勤めていた古株の女中頭さんでした。下働きの従業員の中では、唯一の女性です。女中頭とは言っても、まだまだ歳は若かったらしくて、なかなかの綺麗な人だったのであります。ただ、性格はたいへんキツくて、そうとう厳格な人だったのでした。

彼女は、お客や旅館の主人の前では穏やかでしたが、部下である

僕たちに対しては、ガラリと態度が変わりました。仕事に妥協を許さないと言うか、本当にテキパキと厳しく命令を下してきたのです。僕たちが、ダラダラしていたり、ドジったりしようものなら、当然、すぐに怒られます。でも、彼女の方が正しいのですから、僕たちには言い返す事も逆らう事もできなかったのであります。

そんな訳で、このバイト期間は、僕は、ずっと、彼女のことが怖かったです。僕たちは、少しでも彼女にどやされないようにと、必死に働き続けるしかなかったのであります。そんな感じで、毎日、早朝から深夜まで、ずうっと働かされ続けたのです。

仕事終了後の時間もまた、この旅館での生活は、たいへんにブラックでした。食事も就寝も、バイトは全員、同じ時間、同じ場所で取らされて、例外は認めてもらえなかったのです。そして、特にヒドいのが、入浴なのでした。この旅館は、温泉風呂があったにも関わらず、その使用は常に宿泊客が優先であり、僕たちバイトが入れるのは、真夜中遅くの僅かな時間にと限られたのです。

僕たちバイトは、夜も更けた頃に、いつも、クタクタになってから、全員でまとまって、このお風呂にと浸からせてもらいました。もう、性も根も尽きていて、湯を浴びるのがやっとのような有様です。

そんな僕たちの入浴の最中に、実は、あの女中頭さんも、体を洗いに入ってきたのでした。僕たちが居たのは男風呂だったのにです。もちろん、湯に浸かる以上は、彼女も全裸なのです。

最初の日に、彼女が、僕たちのいる浴場へと平気で入ってきた時は、僕たちも、とても驚かされました。でも、何かがあった訳でもなく、彼女も普通に自分の体を洗い始めたのでした。どうやら、仕事第一の彼女は、同じ従業員仲間の僕たちと一緒に入浴を済ませる事で、余計な仕事や手間を減らしたかっただけなのであります。

そんな次第ですから、彼女と混浴したところで、何か色っぽい事が起きた訳でもありません。そもそも、僕たちの方がすでに疲労しきっていましたので、欲情する余裕すらもなかったのです。

それどころか、彼女は、こんなお風呂の中ですら、大変にうるさかったのでした。彼女は、自分の体をさっさと洗う一方で、僕たちへも、ガミガミと、急いで入浴を済ますように指図してきました。これじゃあ、僕たちだって、まるで仕事の延長のようにビクついてしまい、慌てて、自分の入浴を終わらすしかなかったのです。

こんな感じで、僕の旅館バイトの日々は過ぎていきました。とにかく辛い事ばかりで、早くバイト期間が終わる事だけを待ち望んで、その最終日が訪れた時には、本当に、心の底からホッとしたのでした。

そして、だいぶ時間が経ち、今になって、この地獄のようなバイトの日々を振り返ってみた時、僕には、なぜか、今さらになって、あの女中頭さんと一緒に混浴した事が一番よく思い出されるのでした。

そう。あの時は、この女中頭さんの事がひたすら怖かっただけで、全く、手を出す事すら思い付かなかったのですが、最近では、それが凄い残念な事に思えて仕方なくなっているのです。

思い起こせば、あの女中頭さんは、確かに、気の強い女性だったかも知れませんが、かなりの美人だったのも間違いではないのです。風呂場で見た彼女の裸体（ボディ）も、ぼんやりと思い出すと、なかなかのものでした。肉体労働している女性の筋肉美とでも言いましょうか、とてもカッコよく引き締まっていた気がするのです。

あんな素晴らしい美人の肉体美を間近で見る機会に恵まれながら、ただ漠然と見流すだけで終わってしまったのかと思うと、今頃になって、僕はひどく後悔もしてきたのでした。たとえ、それが苦手な女性であったとしても、美とは、やはり、不変で共通なものなのです。そのせいか、最近の僕は、「きついタイプの女性も案外イケるかも知れない」などとも思い出している次第なのであります。

了

透視カメラ

博士が新しい道具を発明した。その博士と仲の良かった少年は、さっそく、その新発明を貸してもらったのだった。実験もかねて、いきなり使ってみるのである。

その新発明の道具は、一見、カメラのような形をしていた。でも、性能は、本物のカメラとはだいぶ違う。このカメラで写した被写体のことは、レントゲンで撮ったように、内部を透かして見る事ができたのだ。しかも、レントゲンよりも、かなり細かい透過の調節も可能で、本の中身を1ページずつズラして写すような行為でさえ朝飯前なのだった。

少年は、このカメラを自分の学校へと持ち込んだ。それから、自分のクラスの女生徒たちに、「カメラで写してあげる」と持ちかけたのだった。まだ携帯電話も普及していなかった時代の話である。たちまち、少年は、自分を素敵に写してほしいクラスメートたちに取り囲まれたのだった。

さっそく、少年は、クラスの女生徒たちを、このカメラで写してあげた。一人ずつ、順番にである。女の子たちは、正面を向いた構図で、軽く気取ったポーズを取って、次々に、少年に自分の姿を撮ってもらった。あとは、写真の現像を待つのみなのだ。

ところがである。後日、少年は、写真の現像は失敗したと言って、女生徒たち全員に深々と頭を下げて、謝ったのだった。もちろん、これには、女生徒たちもプンプンなのだ。しかし、実質的に自分が何かを損した訳でもない。いつしか、彼女たちも、この件はすっかり忘れ去ってしまったのであった。

さて、カメラの撮影は本当に失敗したのだろうか。いや、実は、少しも失敗などしていなかった。この透視カメラの学校でのテストは、見事に成功していて、全ての写真の現像も完了していたのであ

る。しかし、その写真は、全部、少年の手元に残されていた。と言うのも、それらは、彼女たち全員を透視した写真だったからである。

写真に写った彼女たちと言うのは、誰もが服だけを透過された状態になっていた。つまり、皆が素っ裸で写っていたのだ。クラスで一番のカワイ子ちゃんも、眼鏡をかけた秀才も、スタイルのいい運動部の女子もである。しかも、記念写真のように正面から撮ったものだから、彼女たちは、なおさら、オッパイもおヘソも股間も、堂々と見せてしまっていたのだった。こんな写真は、確かに、本人には、とても渡せそうにはないのだ。

だから、少年は、これらの写真を自分のものにしてしまったのだった。そして、今は、このクラスメートのヌードの写真を、全部、自分の部屋の壁一面にと並べて貼り付けてしまって、普段は、それを眺めながらニヤつく日々を送っていたのであった。

了

三軍ばんざい

今も昔も、学校では、生徒たちの間で、自分たちに勝手に順位をつけたりするものだ。すなわち、かっこいい男女は一軍と呼ばれるし、以下、少し見劣りする男女は二軍などと呼ばれたりする訳である。

ちなみに、当時の僕は、その二軍にすら入れず、皆からは三軍扱いを受けていた。三軍の男子に対しての、女子の態度なんて、そりゃあ酷いものなのだ。まるで男としても意識せず、すっかり恋愛対象からも外してしまっているのである。

だからこそ、僕は、僕の方でも、最初っから一軍、二軍の女子に憧れるのはやめて、同じような三軍の女子に目を向ける事にしたのだった。つまり、だいぶ冴えない、パッとしない女子にである。

でも、僕が選んだ三軍の女子は、けっこうマシな方だったのではないかと思う。見た目は確かに美人ではなかったが、だけど、性格は大人しくて、かなり従順そうだった。そして、そんな子だったものだから、彼女の方でも、僕から急に交際を申し込まれると、ひどく驚いていたのであった。

とは言え、同じ三軍どうしの生徒だったせいか、彼女の方も、なんとなく、僕と同じ事を考えていたようである。彼女は、三軍のレッテルの僕を嫌がる事もなく、僕からの申し入れをあっさり了解してくれたのだった。

こうして、僕と彼女の三軍どうしの生徒のお付き合いが始まったのである。

何しろ、お互いに三軍だった訳だから、僕たちが交際を始めたところで、それをやっかむような他の生徒も、一人も現れなかった。むしろ、皆からは、身の程を知るカップルとして迎合されたぐらいだったのだ。

と、他人からは、そんな扱いを受けていた次第であるが、だからと言って、僕たちは、それを特に気に病んだりもしていなかった。なにせ、連中の言っている事は、十分に当たっていたからだ。さんざん、三軍扱いされてきた僕たちにとって、今さら、そんな事を気にするようなプライドはなかったのである。それよりも、僕たちにしてみれば、学校生活の中で、きちんと人なみの青春や恋愛を送れる事の方が大切なのだった。

と言うのも、実は、うちのクラスでもそうだったのだが、一軍の美男美女に惚れている二軍、三軍の奴らときたら、いまだに、異性との交際をしていなかったからなのである。そんな高望みをしているから、彼らには、なかなか恋人ができないのだ。そして、それが嫌だったからこそ、僕は、早々に、同じ三軍の女子で妥協したのであった。

僕と三軍の彼女の交際は、なかなか順調に進んでいるようにも見えた。最初こそ、お互いに、見栄で付き合っていたような部分もあったのだが、相手のことが徐々に分かってくると、さほど嫌な相手だとも思えなくなってきたのである。多分、彼女の方も、そんな風に思っていたのかも知れない。

何よりも、彼女は、三軍の自分に引け目を感じていたのか、僕に対しても従順だったし、一方で、三軍の僕を軽く見る事もあったのか、時には、ひどく自分の意思を押し通したりもしたのである。つまりは、僕たちは、互いに、大事な決定の時には、きちんと本音でも話し合える、良好な関係を築いていく事ができたのだった。

そのせいか、僕は、次第に、彼女と、もっと恋人らしい事もしたくなってきた。彼女の方も、どうやら、同じみたいであった。その結果、僕たちは、それからは、手を繋いだり、キスしたりなどのカップルの課題を、トントン拍子でクリアしていってしまったのである。それは、相手が好きと言うより、恋愛への好奇心を満たしたいと言う理由の方が強かったようだ。だとしても、そもそも、恋人との戯れは、相手がいなければ出来ない行為だったのだし、それが出

来たと言うだけでも、僕たち学生にとっては十分な快挙だったのである。

僕と彼女の好奇心は、ますますエスカレートしていった。ついには、家族のいない日に、僕は、彼女を自分の家へと招いてみたのだった。彼女は、ほとんど拒否する事もなく、それに応じてくれたのである。こうして、僕の部屋で、僕と彼女は二人っきりになったのだった。

「ねえ、セックスしてみない？」ついに、僕は、その一言を口にしてしまった。

でも、彼女の方も、僕が期待した通りに、おとなしく頷いてくれたのである。

かくて、僕たちは、とうとう、セックスもしてしまったのだった。もちろん、僕も彼女も、これが初体験だ。「初体験は一番好きな人としたい」なんて事も考えたりはしなかった。とにかく、お互いに裸になり、異性の体をたっぷりと拝む事ができただけでも、十分な収穫なのであった。

このようにして、最初こそ、なんとなく、残り物で我慢したかのようなお付き合いであったのだが、気が付くと、僕たちは、クラスの他の誰よりも早く、恋人同士の最終目標に到達してしまったのである。そう言う点では、未練がましく、一軍の子と付き合う事をまだ夢見ている連中よりは、ずっと充実した青春を送れた訳だ。

そして、僕と彼女の交際は、その後もずっと続いていて、今、僕と生活を共にしている妻というのも、実は、この彼女なのである。

了

疑惑の美人教師

うちの高校には、吉川先生という女の教師がいた。

これが、実年齢こそ５０歳近かったようなのだが、かなりの美人先生だったのだ。しかも、彼女はまだ独り身であった。美人なだけではなく、どの生徒にも優しくて、インテリで、年長者ならではの大人の色香も漂わせた彼女に、我々学生たちは、誰もが愛慕の気持ちを抱いて、憧れた。まさに、彼女は、理想の女教師だったのだ。

当然、オレたち不良男子のグループも、吉川先生の存在は、ひどく気になっていた訳である。オレたちは、すでに、同世代のアバズレ女子相手のセックスには飽き飽きしていた。こんな青っぽい娘たちとチャチなセックスをするよりは、大人のセックスをしたいと考え始めていたのだ。そこで、オレたちが目をつけたのが、吉川先生なのだった。オレたちは、この憧れの先生と性的に交わる事を望んだ。彼女が人妻じゃなかったと言う点も、セックスできる対象としては、好都合だったのである。

そして、オレたちは、この企みを、ついに実行に移してしまったのだった。

ある日の放課後、オレは、吉川先生を、相談事があると言って、体育館の道具置き場へと呼び出した。真面目で、生徒思いだった彼女は、疑う事もなく、簡単に、この罠にハマってくれたのだ。

道具置き場へやって来た吉川先生のことを、オレたちは、集団で襲った。オレたちグループは、全員で、彼女が来るのを待ち構えていたのである。それから、皆で、この場所で彼女をマワすつもりだったのだ。

「君たち、何をするの？」と言って、吉川先生は、驚きながら、最初は激しく抵抗した。

しかし、多勢に無勢なのだ。いくら大人だと言っても、女の吉川

先生では、男のオレたちに一斉に襲われたら、とても敵うはずもなかったのである。たちまち、彼女は、道具置き場の床の上に、大の字にされて、仰向けで押さえつけられてしまった。ここで悲鳴をあげたとしても、放課後のこの時間帯では、誰の耳にも届かないであろう事も、オレたちは十分に計算済みであった。

「あたし、もう、こんな、おばさんなのよ。それでも良いの？」吉川先生は、最後のあがきで、半泣きで、そう訴えてきた。

「オレは、熟女はぜんぜん好きだぜ。それも、先生みたいな美人が相手だったら、歳なんて、まるで気にしないよ」

俺がそう言ってやったら、先生は完全に諦めがついたらしく、いっさい歯向かわなくなったのだった。悲しそうな表情を浮かべたまま、その身をオレたちに開放してしまったのである。

だから、オレも、さっそく、先生の服を脱がしにかかったのだ。こんな大人の女性の服、それも、大好きな女の先生の服を自分の手で剥いでしまうなんて、それだけでも興奮してしまうのである。

ついには、オレは、彼女の服を、下着の一枚に至るまで、引っ剥がしてしまった。つまり、先生は、オレたちの目の前で、完全な裸になってしまったのだ。それこそは、オレたちがずっと憧れていた大人の女性の肉体なのだった。

「先生。やっぱり、あんたは最高だぜ。オレたちは、こんな体を求めてたんだよ」

オレは、早くも、先生の乳房を揉みながら、そう絶賛した。

全く、先生の裸体（ボディ）は、発育途上の女生徒の体とは大違いなのだ。この乳房からして、膨らみ具合も、触り心地も、アバズレ女子のそれとは段違いの素晴らしさなのだった。それだけではなく、腰のくびれも、性毛の生えっぷりも、全てにおいて、彼女の体は、熟した大人ならではの艶かしい作りだったのだ。

だが、そんな矢先に、吉川先生は、こっそりと、とんでもない事をカミングアウトしたのだった。

「あたし、まだ処女なの。お願い、優しくやってね」と、彼女はさ

さやいた。
その小さな呟きを聞いて、オレもハッとしたのだった。
オレは、急いで、先生の陰部（ワレメ）へと、手を突っ込んでみた。そして、彼女の穴（ヴァギナ）に指を入れてみたのである。
「ま、まさかだろ？この先公、ほんとに、バージンだぞ！」思わず、オレは叫んだ。
「う、うそ？だって、先生って、もうすぐ５０歳だろ。この歳で、まだ処女なんて、ありえねえ」
「処女膜があるって事はよ、オナって、モノを突っ込んだ事すらもないのか。この先公、どこまで潔癖なんだよ」
オレたちは、ただただ、がく然としてしまったのだった。
しかし、吉川先生の穴（ヴァギナ）の内側を確認した限りでは、明らかに、処女膜らしきデコボコが見つかったのである。それも、ほぼ完全な形のものがだ。
「なあ、先生。あんた、結婚もしないで、このまま、死ぬまで、バージンを通すつもりだったのかい？女として、それって、すごくキモいぞ」オレは、吉川先生に、意地悪く言ってみた。
彼女は、恥ずかしそうに顔を赤らめて、何も答えようとはしなかったのだった。
先生が、なぜ、今まで、こんなに大事に操を守っていたのかは、その真の理由は分からなかった。あるいは、教師職と言うのは大変に忙しいとも聞くから、彼女のように、あまりに仕事熱心になり過ぎたら、すっかり私生活の方が疎かになってしまい、恋愛する暇もなく、気付くと、こんな歳になってしまった、と言う事だったのかも知れない。
ともあれ、オレの目の前にいる女性が、これほど全体的には成熟した肉体をしていながらも、肝心の部分は、子供のままだったと言う事だけは、紛れもない事実だったのである。
オレたちは、あらためて、代わり番こに、先生の処女膜を触らせてもらった。これを俗に高齢処女と言うらしいのだが、この歳で処

女膜が無傷だなんて、やっぱり、どこか照れ臭いのである。この処女膜は、例えるならば、女の乳歯なのだ。本来なら、早い段階で捨てておくべきものだったのである。そんな場違いな処女膜だったくせに、こうしてイジリ続けていると、一人前に湿ってきたのだった。

「そっかあ。吉川先生って、教え子に女にしてもらえるんだな」仲間の一人が、笑いながら、ふと、そんな事を口にした。

しかし、その何げない一言が、突如として、オレたちを現実にと引き戻して、その熱を一気に醒ましてしまったのだった。

「おい、そろそろ、先生をヤっちまおうぜ。誰か、先にヤりたい奴、いるか？」オレは、さりげなく聞いてみた。

ところが、ここにきて、一番手を名乗り出る奴が、誰も現れなかったのである。

「やい、どうしたんだよ、皆。先生とヤりたかったのと違うのか？」

「オレはいいよ。お前、先にヤれよ」と、仲間がオレへと振ってきた。

いやいや、それはオレもお断りなのだ。

と言うのも、もし、ここで、先生と最初に交わったら、オレが先生の骨董品のバージンを頂戴する事になってしまうからだ。「アラフィフ女の残りものの処女を始末してやった男」なんて、今後、呼ばれるようになってしまったら、さすがに、それはダサい。思いっきり、カッコ悪いのである。

そして、どうやら、仲間たちも同じ事を考えていたみたいなのだった。オレたちにだって、不良として、それなりのプライドや見栄はある。やっぱり、熟女の古くさくなったバージンは、全員、敬遠したいのだ。

こうやって、オレたちが、ダラダラと譲り合っていると、そのうち、吉川先生の方がグズグズと泣き出してしまったのだった。きっと、自分の天然記念物なみのバージンをようやく捧げる決心をした彼女にしてみれば、それなのに、オレたちにこのような態度をとられてしまったのが、かなりの屈辱だったのであろう。

この先生の涙によって、場の雰囲気は、ますます気まずくなってしまった。その結果、オレたちは、これ以上は何もできなくなってしまい、何となくお開きとなってしまったのだった。すなわち、しおれていた先生のことも、そのまま、道具置き場にほっておいて、自分たちだけが、先に帰ってしまったのである。

この後、先生は、オレたちに襲われた事は誰にも話さなかったようだった。よって、オレたちも、この件では、いっさい、お咎めを受けはしなかったのである。

そして、吉川先生の方はと言えば、ついには５０歳を過ぎてしまっても、恐らくは、今なおバージンのままで、しれっとした顔で、うちの高校の教壇に立ち続けていたのであった。

了

あべこべ修学旅行

ねえ、みんなー。ちょっと聞いてよお。

これってさあ、あたしが高校の修学旅行に行った時の話なんだ。あたしの学校はさ、修学旅行で南国に行ってきたんだよ。もちろん、すっごい楽しかったよ。お昼は観光地を巡って、夜は大きな旅館にと泊まったんだ。そして、これは夜の旅館でのお話さ。

あたしはさ、何人もの友達といっしょに、旅館の大浴場へ入りに行く事にしたんだ。すっごい立派なお風呂だと教えられていたから、ワクワクしながらね。

ところがね、いっしょに入りに行こうとした友達は、どいつもこいつも、浴衣の下にコッソリと水着を着てやがるの。あたし、それを見て、ビックリしちゃったよ。

で、あたしは皆に、なぜ水着なんかを着てるのかを聞いてみたんだ。そしたら、こいつら、裸を他の知らない人に見られるのが恥ずかしいんだとさ。あたし、呆れちゃったよ。

でも、その子たちは、頑として、自分の態度を曲げようとしないし、そんなんだから、彼女らは本当に水着を着たまま、お風呂に入っちゃった。実際は、これって、マナー違反だったんだけどね。

え、あたし？あたしは、そんな水着なんか着てはいないよ。お風呂は、やっぱり、素っ裸になって、堂々と浸からなくちゃ、リラックスできないからね。

で、その時には、大浴場には、たまたま、あたしたちしか入りに来てなかったんだ。だから、お風呂の中には、水着を着た友達の中に、まっ裸のあたしがポツンと一人だけなのさ。

ねえ、これ、とってもヘンな話だと思わない？ほんとは正しいはずのあたしの方が、このお風呂では、浮いちゃってるんだ。裸でいるあたしの方が、なんだか、恥ずかしい事をしているような気分に

もなってきたよ。
　でさあ、この話にはまだ、続きがあるんだ。
　修学旅行の最後の日にはね、このメンバーといっしょに、今度は、南国の海べに行ってきたんだ。そう、自由時間を利用して、海水浴を楽しみにね。
　この時は、あたしも、きちんと水着を着ていたよ。他の子たちもね。だから、最初は、そんなおかしな事もなかったんだ。でもさ、友達らは、少し調子に乗っちゃってさ、どんどん、人の少ない砂浜へと移動しだしたんだ。
　気が付くと、あたしたちは、周りに全く誰もいない海岸にとやって来ていた。もしかしたら、そこは、遊泳区域から外れていたから、人がいなかったのかも知れないんだけれど。とにかく、そこには、ほんとに、あたしたち以外は誰もいなくて、まるで、あたしたちだけのシークレットビーチみたいな状態だったんだよ。
　すると、ここで、友達らは、急に、笑いながら、水着を脱ぎだしちゃったんだ。そう、皆、何もつけてない全裸になっちゃったのさ。そして、その格好で、はしゃいで、海に入ったり、砂浜に寝そべったりしたんだ。
　これには、あたしもキョトンとしたよ。だから、あたしさあ、皆に注意したんだ。こんな場所で裸になっちゃダメだよ、って。
　ところが、彼女たちと来たら、全然、あたしの言う事を聞こうとしないのさ。なぜだと思う?彼女たちが言うには、水着をつけていたら、ヘンな模様に日焼けしちゃうから、裸の方がいいんだってさ。
　しかし、そうは言われてもねえ。いくら、周りに人がいなかったとは言っても、ここは野外には違いなかったんだよ。うっかり誰かに見られたら、騒ぎになってたかも知れないぞ。
　え、あたしは、どうしたかって?あたしは、脱いだりなんかしないよ。だって、それが当たり前なんだからね。
　だけどさあ、周りの友達らは、まぶしい海の日差しを浴びながら、皆、丸裸なんだ。何もかも見えちゃっているのに、気にしないで、

楽しそうに遊んでいるのさ。なんか、あたしの方が恥ずかしくなってきちゃったよ。この時、運よく、誰にも会わなくて、ほんとに良かったと思っている。

でさあ、この海岸でも、あたし一人が水着をつけていて、なんだか浮いてる感じになっちゃったんだ。実際は、あたしの方が正しかったはずなのにさ。あたし、こんな事が続いたもんだから、このあと、しばらくの間は、ひどく考え込んじゃった。

これ、あたしの修学旅行で起きた、本当の出来事なんだ。

了

ヤンキー女子とボク

ボクの住んでいるアパートの真向かいには小さな一軒家があったのだが、そこの家族の一人娘はヤンキーだった。彼女はまだ高校生だったが、たびたび目にした彼女の様子から、それが次第に分かってきたのだ。

かく言うボクは、しがない貧乏大学生だった。だから、つくづく、こんなヤンキー娘とは関わり合いたくないな、と思っていたのである。ところが、世の中はそう上手くはいかないもので、いつからか、彼女の方がボクの存在にと気付いてしまったのだった。

向かいのアパートに住んでいる貧弱な青年なんて、ヤンキーにしてみれば、絶好のカモだったのだろう。何となく、彼女の方から、よく、ボクへと声を掛けるようになりだした。そうなったら、ご近所のことだし、ボクの方でも、あからさまに彼女を避ける訳にもいかなくなってきたのである。

でも、最初は挨拶をかわす程度だった彼女は、じょじょに、図々しくなってきた。なんか、ボクに気軽にモノを頼むようにもなってきたのだ。もちろん、相手はヤンキーなのだから、まともな頼み事ではない。

ボクは彼女に、小銭を事実上カツアゲされたり、近所へのパシリをやらされたり、しまいには、彼女はボクの部屋へと隠れ場所代わりに逃げ込むようにもなりだしたのだ。ボクは、すっかり、彼女の使い勝手の良い子分にされてしまったみたいなのであった。

相手は高校生の女の子なのだから、もっと男の威厳を持って、シャンとして突っぱねたら、どうなのだ?と皆さんは言われるかも知れない。しかし、ヤンチャな彼女に対して、こちらは貧弱なモヤシ学生なのである。いくら高校生相手とは言っても、ボクには、とても彼女に勝てそうな気がしなかったのだった。

それに、しょぼくれた人生を送ってきたボクは、これまで、あんまり女の子と話した事がなかった。そのせいか、こんなヤンキー娘であっても、向こうから懐いてきてくれると、意外と悪い気はしなくなってきたのだった。

そんな訳で、ボクと隣の家のヤンキー娘の奇妙な交流は、そのまま、ずるずると続いたのである。

さて、ある日のことだった。いつものように、ボクの部屋に押しかけてきた彼女が、いつになく、真面目な表情で、ボクに話し掛けてきた。

「おい、お前。あたいとセックスしてくれない？」

彼女が、突然、そんな事を言ったものだから、ボクも驚いてしまったのだった。言うまでもなく、ボクはまだ童貞なのだ。

最初こそ、彼女がボクをからかっているだけなのかと思ったのだが、事情を伺うと、どうも、彼女は本気だったらしい。要するに、ヤンキーの社会で生きていくのも、なかなか大変みたいなのだ。いつまでもバージンのままでいると、仲間からバカにされてしまうらしいのである。で、彼女はまだ処女なのだった。ヤンキー仲間の男子にバージンを捧げれば、今、処女喪失した事が、すぐに皆にも知れ渡ってしまう。こっそりとバージンを捨てて、前から経験済みだったように皆に思わせたかった彼女としては、考えた末に、ボクを利用する事にしたようなのだった。

今まで、何でも彼女の言いなりとなってきたボクとしては、当然、この命令だって黙って受け入れるしかないのである。ボクは、渋々と、いや、本当はドキドキしながら、彼女とベッドインしたのだった。そして、彼女のバージンをまんまと戴いちゃったのだ。

たとえ外見はヤンキーでも、彼女だって、中身は普通の女子高生である。布団の中で裸で抱き合った彼女のことは、ごくごく並みの女の子として、愛する事ができたのだった。ボクの方も、こんな情けない男だったくせに、無事に童貞を卒業できたのだし、全く、こんな良い事づくめの話はないのである。

ヤンキー娘と知り合いだと、時には、こんなラッキーな事もあるのだ。

了

レオタードの秘密

我が校の新体操部の顧問が、部内のお気に入りの女生徒に、特製のレオタードをプレゼントした。顧問は、常時、そのレオタードを着用するようにと、その女性部員に指示を出した。そして、その子は、その命令に素直に従ったのである。

この日から、顧問は、なぜか、変わった形のメガネをかけるようになりだした。新体操部の練習を指導している時は、必ず、そのメガネをかけているのである。特に、例のお気に入りの女子が練習している時は、顧問は、ずうっと彼女の姿ばかりを追っていたのだった。

実は、彼女がプレゼントされたレオタードに秘密があった。このレオタードは特殊な生地で出来ていて、ある種のレンズを通して見ると、完全に透けてしまったのだ。つまり、存在しないかのように、透明になってしまったのである。そして、顧問のかけていたメガネに入っていたレンズこそが、その特別なレンズなのだった。

だから、この顧問の前では、かの女性部員は、いつも、素っ裸になって、見えていた。彼女は、ヌードで体操していた事になるのだ。その事は、本人にも、顧問以外の周りの部員にも気付かれていない。よって、この女生徒は、そんな事とは露とも知らずに、実に堂々と美しく演技し続けていたのだった。

そうやって、他の部員はきちんとレオタードを着ているのに、その子だけは全裸で演技をしている光景を、顧問は、実に満足そうに、いつも眺めていた。それは、練習の時ばかりではない。やがては、大会の選手に選ばれて、正式な競技で演技した時すらも、彼女はこのレオタードを身につけたのである。大会の最中、何百人もの観客に見守られている中で、彼女は華麗に演技をしてみせたが、顧問の目にだけは、彼女の姿は、あられもない素っ裸で舞っているように

見えていたのだった。

了

アイニー鑑賞会

合法のアイニー鑑賞会が開かれると言うので、参加してみる事にした。

開催場所は、郊外の温泉旅館だそうだ。鑑賞希望者は、全員、主催者の用意した観光バスに乗って、その開催場へ移動する事になった。ざっと３０人ぐらいの参加者がいた。驚いた事に、半分近くの参加者は女性であり、その中には、セーラー服を着た女学生まで混ざっていたのだった。

アイニーとは、無垢な少女がおこなうピュアなオナニーの事だ。これが、卑猥などころか、芸術的に美しいと言うので、昨今では、ひそかに話題となっていたのだった。（拙作「脱衣ゲーム」の「美少女オナニー講座」参照）

我々を乗せたバスは、目的地にと到着した。まだ真昼であった。我々は、日中の間は、普通の観光客を装って、この旅館の周辺で、温泉や行楽などを楽しんだのだった。やはり、大っぴらに、アイニー鑑賞会をしに来たなどとは見られたくなかったのである。

やがて、夜が来た。旅館内の貸切にした宴会場で、ついにメインのアイニー鑑賞会が始まる事となったのだ。

宴会場の中央には、一組の布団が敷かれていた。ここで、主催の女性がアイニーをするのである。我々観客一同は、この布団の周りをグルリと取り囲んでいた。

そして、ビックリした事に、この中央の布団の上に立ったアイニー担当の女性というのが、我々のバスに一緒に乗っていた、あのセーラー服の女学生なのであった。なんて事ない。彼女は、正体を隠して、我々鑑賞希望者の中に紛れ込んでいたのである。そうやって、事前に親しくなっておいた方が、顔見知りの子のアイニーという事で、もっとゾクゾクして鑑賞できるだろうという、小粋な計らいな

のであった。

女学生姿の彼女は、はじめに、簡単な説明をおこなった。彼女が、実際には、二十歳を過ぎた年齢である事。まだ処女で、男と寝た経験がない事。このアイニーの実演中に、処女喪失も披露してくれる事、などである。

彼女は、童顔だったらしく、確かに、本物の女学生っぽくも見えた。しかし、未成年のオナニーを見世物にするのは違法なのである。実際の彼女が成人だと言うのであれば、その点でも、安心して、この鑑賞会に参加できる訳だ。なあに、風俗店の覗き部屋みたいなものだと考えればよいのである。

さて、いよいよ、彼女が、お待ちかねのアイニーを開始した。彼女は、自分の着ていたセーラー服を丁寧に脱ぎ始めたのである。その段階では、本物の女学生が脱衣しているようにしか見えなかった。しかし、こうやって、全裸になってしまうと、彼女は、なかなか、子供らしくない、見事な体つきをしていたのだった。

とは言え、肌も白く、肉付きも良くて、彼女の体は、十分に、１０代のような鮮度を保っていた。がぜん、アイニーへの期待も高まってきたのだ。

こうして、全裸になって、布団の上に寝そべった彼女は、ついにオナニーをやり始めた。最初は、自分の手だけを使って、自身の体のあちこちを愛撫し、頃合いを見て、一本のディルドを取り出した。かなり太めの赤いディルドである。彼女は、そのディルドを、まずは口でしゃぶり、続いて、ゆっくりと、それを自分の股間へと押し当てたのだった。

まさに、素晴らしいアイニーなのである。彼女の体がきれいで、清潔だったものだから、こんなイケナイ遊びをしていても、ぜんぜん汚らしくは見えなかった。これこそが、アイニーの真髄なのである。

最後に、彼女は、この大きなディルドを自分の膣の穴へと挿入した。本当にまだ処女だったらしくて、彼女は、わずかに痙攣しなが

らでも、頑張って、ディルドを自分の中へと押し込んでいった。その痛々しげな様子が、またもや愛らしくて、実に可憐だったのだ。

「ほら、見て。破れる。ほんとに破れちゃう」

皆の視線が、彼女の股間にと集中していた。すでに、かなり奥までディルドは食い込んでいる。出血は確認できなかったものの、これで破瓜したのは間違いなかった。ついに彼女はバージンではなくなってしまったのだ。でも、男を介入しない形での処女喪失は、本当に清らかであった。彼女のこの女性としての通過儀礼の瞬間を、この場で共有させてもらえたなんて、それこそ、最高のエンターテインメントなのである。

このあと、ディルドが、根元まで、彼女の膣内に入ってしまったところで、このアイニーも、大いに盛り上がりつつも、すみやかに幕引きとなったのであった。

了

生成オマンコ

おいらは、とうとう、待望の自分専用の生成ＡＩソフトを手にいれた。生成ＡＩとは、ご存知のように、命令すれば、何でも望みどおりの文章や画像などを作ってくれる人工知能のことである。おいらは、この生成ＡＩを使って、どうしても作ってみたい画像があったのだ。

「よし。生成ＡＩよ、命令するぞ。おいらが理想とする女性の画像を作成しなさい。どんな特徴の女の子にするかは、これから詳しく説明する」

そして、おいらは、生成ＡＩへと、細かい指示を与えたのだった。

そうなのだ。おいらが作りたかったのは、おいらが最も美しいと思える女性のイメージ画像だったのである。現実（リアル）の女性にも二次元（アニメ）の女にも興味を持てなかったおいらとしては、もはや、こんな方法を使うしか、愛せる女性を得る事ができなかったのだ。

で、さすがは、生成ＡＩなのである。おいらが、たくさん注文をつけると、本当に、それらの条件を全て満たした女の子の画像を、わずかな数分で完成させたのだった。おいらのパソコンのスクリーンには、ぱあっと、女学校の制服を着た可愛らしい女の子が映しだされた。

それは、まさしく、おいらが求めていた、完璧なイメージの女の子なのだった。この世には実在しない、まさに、おいらのパソコンの中だけで生きる、素晴らしい理想的美少女なのである。

しかし、おいらは、これだけでは満足しなかった。実際の本番はこれからなのだ。

「よし。生成ＡＩよ。今度は、この女の子のオールヌードの画像を作成しなさい」

おいらは、再び、さまざまな女体の特徴を、生成ＡＩにとインプ

ットした。
　すると、パソコンのスクリーンには、ばあんと、今の美少女の全裸の画像が現れたのだった。眩しいほどに美しい裸体なのだ。おいら好みの、ちょうどいいプロポーションなのである。顔も肉体も、完全においらの眼鏡にかなった女の子だなんて、やっぱり、他の場所では絶対に見つからないのである。
　おいらは、いよいよ、最後の目的にも挑む事にした。
「おい、生成ＡＩ。この女の子が持つのにふさわしい、最高に素敵なオマンコの画像を見せてくれ」
　おいらは、ゴクリと息を飲んだ。
　次の瞬間、パソコンのスクリーンには、見るもおぞましいものが映しだされたのだった。
「な、なんだ、これは！これが、女の子の美しいオマンコだと言うのか？ふ、ふざけるな！」おいらは怒鳴った。
　実は、実物の女性に興味が持てなかったおいらは、今まで、オマンコを見た事がなかった。恐らく、生成ＡＩが作り出した、このオマンコ画像は、ネットのエロサイトから探し出してきたリアルなオマンコだったのだろう。こんなもの、初めて見たものだから、おいらは、つい、激しい拒絶反応を示してしまったのだった。
「とにかく、こんなオマンコはいかん！気持ち悪いだけだ！作り直せ！そうだな、このへんの形はグロいから、もっと滑らかにしろ。あと、このへんの色も、もっと綺麗な色に変更するんだ」
　おいらは、思ったままのイメージを、がんがんと、生成ＡＩに指示していった。
　そうしたら、最終的には、はじめに映し出されたオマンコ画像とは、まるで別物のような、全く、似ても似つかぬ画像が出来上がったのだった。
「うんうん、これだよ、これ！」おいらは、ニコニコしながら、たいへんに満足した。
　こうして、世界で一番美しいオマンコが完成したのであった。で

も、もしかすると、この画像って、すでに、オマンコとは言えないような代物だったのかも知れないが。

ともあれ、その後のおいらはと言えば、このオマンコ画像によってしか、欲情はしなくなったのだった。

了

狂った現実

私は、都内に住む女子高生です。これから紹介するお話は、私が実際に体験した出来事なのです。

その日は、私は、学校から帰宅する為に、普段使っている電車に乗っていました。その電車の中で、私は痴漢に遭ってしまったのです。

ほとんど混んでいない時間帯でした。それなのに、痴漢は、大胆にも、一人でいた私のそばに擦り寄ってきて、私の体にイタズラを始めたのです。

混んでいなかったものだから、私が痴漢されていた様子は、他の乗客たちからも、はっきりと見えていました。ところが、彼らは、少しも、私を助けてくれなかったし、むしろ、横目で興味深げに眺め続けていたのです。

なぜなのか、皆さん、分かりますか。

実は、この痴漢には、仲間がいたのです。その仲間が、「これはビデオの撮影です。邪魔をしないでください」と言うカンペを、他の乗客に見せ回っていたのでした。これを本気で信じてしまったものだから、他の乗客たちは、痴漢されている私に、誰も干渉してこなかったのです。

まさに、現代社会の盲点とも言えましょう。撮影のふりをすれば、それが本物の犯罪であったとしても、誰も妨害しなくなってしまうものなのです。

私自身も、痴漢に襲われた恐怖で、抵抗する事も、大声を出す事もできなくなっていました。それをいい事に、痴漢は思う存分に私を辱しめたのです。

その屈辱を、私は、グスグスと泣きながら、受け続けました。しかし、周囲の乗客たちには、それすらも、たいへんにリアルな演技

だとしか思っていなかったのでありましょう。彼らは、私が犯される様子を、貴重な撮影現場を見物できたとばかりに、満足げに拝見していたのでした。

痴漢の暴行はエスカレートしていく一方です。ついには、私は制服も脱がされてしまい、裸になって、電車内で本番行為の相手までやらされてしまいました。そこまでやっても、とうとう、私がレイプされるのを止めてくれる第三者は現れなかったのです。

その後、私は、ようやく、痴漢から解放されましたが、この出来事を、とても、人に話したりとか、警察に訴えたりする事はできませんでした。こんな酷い性犯罪の被害者になったなんて、とうてい、身内には知られたくないのです。どうせ、誰にも信じてもらえなかったのならば、このまま、私自身も、この出来事を忘れて、無かった事にしてしまおうと言う気持ちになったのでした。

結果として、この痴漢事件は、本当に闇に葬られてしまったのです。恐らく、あの現場に立ち会っていた乗客たちも、最後まで、あの痴漢は撮影だったのだと信じていた事でしょう。

でも、実は、この話には、まだ続きがあります。

のちに、私は、クラスの友人から、驚くような話を聞かされました。なんと、私そっくりの女優が出ているアダルトビデオがあると言われたのです。

ビックリした私は、すぐに、そのアダルトビデオの事を調べてみました。すると、そのビデオの中身とは、まさに、私が痴漢された時の映像だったのです。ビデオのパッケージを見ると、「これはフィクションです」と書かれてあり、映倫すらも問題なく通過していました。

恐ろしい事に、私の痴漢事件は、表沙汰にしなかったばかりに、本物のアダルトビデオ撮影の作品として、世の中にも出回ってしまったのでした。こうなったら、ますます恥ずかしくて、絶対に、この痴漢事件のことは、私の体験した事実だとは言えなくなってしまったのです。

世間では、ひょっとすると、同じような性被害を受けた女性がいっぱい居て、彼女らの被害映像もまた、まるで何事もなく、誰にも気付かれずに、作り物のアダルトビデオのように、沢山、出回っているものなのかも知れません。

進みすぎた現代社会は、やはり、どこか狂っているのです。

了

アブダクト　パート2

気が付くと、僕は、何もない真っ白な空間にいた。本当に何もないのだ。空白の無のような場所に立っていたのである。

いや、よく見ると、そこにいたのは、僕だけではなかった。もう一人、佇んでいたのである。それは、まだ若い女子高生だった。制服を着た、凛とした感じの、かなりの美少女なのだ。

その子に話し掛けてみようとした時、どこからか声が聞こえてきた。

「我々ハ、宇宙人デス。アナタ方ノコトハ、地球人ノさんぷるトシテ、コノ円盤ノ中ニ捕獲サセテモライマシタ」

つまり、僕たちは、いつの間にか、宇宙人に誘拐されてしまったらしいのである。いわゆる、アブダクトと呼ばれるやつだ。

僕が宇宙人に聞き返そうとしたら、女子高生の方が先に質問した。

「私たちを、どうするつもり？解剖でもしようと言うの？」

この子は、なかなかハキハキしていて、肝っ玉も座っていたようなのである。

「イエイエ、ソンナ野蛮ナ事ハシマセン。タダ、研究ノ為、地球人ノ生殖行為ヲ見セテイタダキタイノデス。ソレダケ拝見サセテモラエタラ、アナタ方ハ、スグニ地球ニオ返シシマス」

宇宙人の声は、そのように言うのであった。

僕は、困惑しながら、女子高生と顔を見合わせた。

「そう言う事なら、さっさと終わらせて、帰らせてもらいましょう」

彼女は、実にあっけらかんと、そう告げたのだった。

「え、でも・・・」

僕がまごついている間に、彼女は早くも制服を脱ぎ始めた。あっという間に、彼女は、裸になってしまったのである。男の僕が目の前にいたと言うのに、まるで恥ずかしがっていない。これが今どき

の女の子なのだろうか。それとも、この子が特にサバンサバしていたのか。

彼女は、美少女の上に、素晴らしい裸体であった。僕みたいな引き篭もりのオタク男が見せてもらうのは、勿体ないぐらいなのだ。僕が戸惑っていると、彼女は、さらに僕に話し掛けてきたのだった。

「ほら、早く、あなたも脱ぎなさいよ。すぐ、済ましちゃうわよ」

「しかし・・・」

「いいから、早く!」

せかされて、僕もオロオロしながら、自分の服を脱ぎ始めたのだった。こんな抜群の美少女の前に、自分の貧弱な裸を見せてしまって、むしろ、僕の方が照れてしまったのである。

「じゃあ、始めましょう。さあ、私のことを抱いて」

彼女は言うのだが、僕は、まだ困惑して、モタモタしていた。

「どうしたのよ?ほら、いいのよ」

「それが・・・」

「もしかして、あなた、童貞?今まで、やった事がないの?」

彼女が大きな声で驚いたので、僕は、ますます情けない気持ちになって、真っ赤な顔で頷いたのだった。

「ああ、もう!ほんと、面倒くさいわね。分かったわ。私がリードしてあげるから、その通りにやって。さあ、こっちに来て」

こうして、僕たちは、彼女の手ほどきのもとで、セックスを試みる事になったのである。

未経験の僕のことを呆れていた彼女だったが、実際にセックスを始めると、彼女は、とても上手に僕を引っ張ってくれた。彼女は、まだ高校生だったのに、十分にセックスに手慣れていたのである。当然、処女でもなかった。

だけど、そんな彼女のおかげで、初めてでありながらも、僕は、大変に気持ちよく、セックスを楽しむ事ができたのである。彼女の方も、こんなサイテーな僕が相手でも、嫌がる事なく、素直に感じてくれていた。ただでさえ、初のセックスだったのに、このような

キレイな子をヨガらせられるなんて、まさに、最高の歓びなのである。

そして、最後に、僕はガチで射精してしまったのだった。しかも、宇宙人の条件が「生殖行為」である以上、彼女の中で出しちゃったのだ。この美しい少女の肉体に、僕なんかの精子を受け止めさせちゃったのである。

次の瞬間、僕は、ＤＶＤとゲームソフトだらけの自分の部屋にと戻っていた。部屋のど真ん中で、恍惚した状態で突っ立っていたのだ。何もかもが、普段のままであった。

果たして、今の出来事は現実だったのだろうか。それとも、単なる白昼夢だったのか。しかし、幻にしては、僕の手の先や性器には、美少女の肉体の心地よい感触がはっきりと残っていたのだった。僕は、その淫靡な余韻に浸りながら、深いため息をついてしまったのである。

もし、どこかの女子高生が、男と寝た事実がないはずなのに、いきなり妊娠してしまったとすれば、その子を孕ませたのは僕かも知れない。

了

朝会のイジメ

A子さんは、クラスの女子にいじめられていました。

ただし、鈍くて、極端におとなしかったA子さんは、毎日、いじめられているうちに、だんだん、いじめに対して、耐性がついてきたようなのでした。つまり、どんないじめを受けても、さほど嫌がらないし、まるで抵抗しなくなったのです。

A子さんを個室に連れ込んで、裸にしてみたり、オナニーをやらせてみても、ほとんど動じませんでした。陰毛を剃っちゃったり、恥ずかしい裸の写真を写して、「この写真、ばらまいてやる」と脅してみても、彼女は、ぶすっとした表情で、ずっと無口なのです。さながら、「別に構わないよ。好きにやって」みたいな感じなのでした。

あまりに酷いいじめを受けすぎて、A子さんも、開き直ってしまったのでしょうか。そうなったら、もう怖いもの無しなのです。それどころか、こんなに反応がないと、いじめっ子の方も張り合いがなくて、自然といじめをヤメてくれるかも、と考えたのかも知れません。

しかし、それだと、いじめっ子の方が面白くないのです。こんな対抗手段で、いじめをヤメたりしたら、それこそ、いじめていたはずのA子さんに負けてしまったようで、とてもシャクなのでした。そこで、いじめっ子は、どうすれば、今のA子さんでも困らせる事ができるかを、一生懸命に考えたのです。

次の日は、学校の全校朝会がありました。いじめっ子は、さっそく、A子さんをやっつける新しいいじめの作戦を実行したのでした。

晴れた校庭に、生徒は全員、集合しました。そして、秩序正しく、きれいに整列したのです。A子さんの後ろには、いじめっ子が並んでいました。元から、そのような順番だったのです。そして、いじ

めっ子は、朝会が始まるなり、いきなり、A子さんに仕掛けたのでした。

いじめっ子は、前にいたA子さんのスカートのウエスト部分をぐいっと掴みました。それから、内側のパンティごと、思いっきり、そのスカートをずり下ろしてしまったのでした。

なんたる事か、こんな朝会の真っ最中に、A子さんはお尻を丸出しにされてしまったのです。でも、すごく恥ずかしい事をしているようでも、それが注目される事もありませんでした。いじめが放置されているような学校ですから、先生たちも生徒のやる事には無関心でしたし、このA子さんの被害を見つけた生徒たちも見て見ぬフリをしていたのです。それどころか、A子さんのお尻を見て、笑っている生徒もいるぐらいでした。

もちろん、もっと酷いいじめも耐えてきたA子さんならば、この程度のイタズラでしたら、ぜんぜん堪えていないのです。一方、いじめっ子の方も、本番はこれからなのでした。

いじめっ子は、ポケットから、イチジク浣腸を取り出しました。あの腹をくだす為のお薬です。彼女は、A子さんのむき出しの肛門に、いきなり、それを突っ込んだのでした。

最初は、その冷たくて鋭い感触に、A子さんもギョッとしたようです。でも、彼女は、すぐ平静を装いました。すると、いじめっ子は、すぐに浣腸液の注入を開始したのです。

A子さんも、自分の肛門に刺さったものが何なのかを、はっきりと認識したみたいでした。彼女の腸の中に、下の方から、冷たい液体が、じわっと広がっていくのです。思わず、彼女もお尻をよじらせたのでした。

でも、いじめっ子は、浣腸液の注入をやめようとしません。A子さんを逃さないようにして、瞬く間に、イチジク浣腸一本分の浣腸液を、A子さんの肛門の中に注いでしまったのでした。

さあ、A子さんはどうなるのでしょうか。彼女も浣腸液を入れられたのは気付いたようでしたが、その効果が出るまでは、まだ時間

がありそうなので、朝会の間は我慢する事に決めたみたいなのでした。彼女は、腰をモジモジさせながらも、そのまま、ずっと立っているのです。

ところが、いじめっ子は、まだ他にも浣腸を持ってきていたのでした。彼女は、二つ目のイチジク浣腸を取り出しました。それを、またもや、A子さんの肛門に突っ込んだのです。

ビクッと引きつったA子さん。何をされたのかは、すぐ分かったようでしたが、ここで慌てたら、いじめっ子の思う壺です。A子さんは、二回目の浣腸液を注入されても、じっと我慢したのでした。

しかし、それで終わりではなかったのです。いじめっ子は、さらに、何本ものイチジク浣腸を持ってきていたのでした。彼女は、それらを取り出すと、次々に、A子さんのお尻に差し込み、中身を全部、流し込んでいったのです。

かわいそうなA子さん。最後のイチジク浣腸まで注入されちゃった後では、彼女の下腹は、ぷくんと膨らんでいたように見えました。これって、きっと、腸の中が浣腸液でいっぱいになっているのです。

A子さんの体に、露骨な反応が現れました。彼女は、内股になって、ガクガクとしきりに震えているのです。さすがに、これだけ大量の浣腸をされたら、効果てきめんで、すぐに下しちゃいそうなのであります。

でも、今度は、いじめっ子の方が、そんなA子さんのことを、無理に堪えさせたのでした。後ろから、A子さんをガッシリ押さえつけて、逃がしてくれないのです。A子さんを、あくまで、最後まで朝会に出席させようとしたのでした。

いよいよ、A子さんはピンチなのです。顔は青ざめ、体の震えも激しくなりました。もはや、いつものような、落ち着いた態度ではないのです。

意地悪ないじめっ子は、面白がって、A子さんのお尻を揉んで、排便をうながしました。気の毒にも、A子さんったら、必死に我慢していて、お尻の筋肉もガッチリ強張らせているのです。肛門の穴

も恐ろしいほど強く引き締めていて、いじめっ子が指を当ててみても、とても中に挿入できないのでした。ここまで真剣に脱糞を我慢するなんて、果たして、どれだけの人が経験するものなのでしょうか。

と、ようやく、長かった朝会が終わったのです。A子さんは、後ろで押さえていたいじめっ子の手を振り切って、急いで、走り出したのでした。失禁を堪えながら走っていたので、かなり変なフォームでの走り方なのです。

いじめっ子は、校庭に、何となく、くさい臭いが漂っていたような気がしました。もしかしたら、A子さんは、寸前で間に合わずに、朝会の終わる前に、少し漏らしたのかも知れません。ましてや、それだけ切迫した状態ならば、この校庭から遠くのトイレまで走ったところで、本当に、途中で全くの無事で済んだのでしょうか。

何にせよ、今回のいじめの結末は、あとで、A子さんの事をとっ捕まえて、そのパンティを見せてもらえば、分かる事です。

いじめっ子は、笑いがとまりませんでした。彼女は、久々に、満足の行くいじめが出来たようなのでした。

了

入れかわり？

登校時、遅刻しそうだったので、慌てて通学路を走っていると、曲がり角で、いきなり、誰かと正面衝突してしまった。よろよろしながら起き上がると、ぶつかった相手というのも、まだ学生だった。その子の制服を見た限りでは、近所の女子高の生徒だったらしい。

時間も無かった事だし、俺は、その子と互いに軽く謝り合って、すぐにまた、道を急いだのだった。

ところが、走っている最中に、何となく、体に違和感を感じた。急に胸もとがキツくなったような気がするし、股間もひどくスカスカな感じなのだ。

おかしいと思った俺は、こっそりと人気のない路地裏に引っ込んで、自分の体を確認してみた。すると、恐ろしい事実が分かってしまったのだ。

なんと、俺の体は女性になっていたのである。それも、首から下だけが。顔は、いつもの俺のままだった。全くもって、奇妙な現象なのである。

もしかしたら、これが、最近のアニメや漫画でよく見かける「男女の入れかわり」ってヤツなのだろうか。もっとも、俺の場合は、かなり不完全な入れかわり現象だったらしいのだが。

そうなると、入れかわった相手というのは、恐らく、先ほど、ぶつかった女子校生という事になるのであろう。多分、今ごろ、俺の体の首から下は、彼女の首から下に繋がっているのだ。

とにかく、そうと気付けば、少しは安心できたのだった。何よりも、入れかわったのが、首から下だけだったと言うのが幸いであった。これならば、今日一日ぐらいならば、周囲にもバレないように、ごまかせそうなのである。今後の対策については、ひとまず、今日一日を乗り越えてから、じっくり考えてみる事にしてもいいのだ。

ともあれ、こうして、その日は、俺は、首から下だけが女性という奇妙な状態で、学校生活を送ったのだった。その秘密がバレかけて、ヒヤヒヤする展開もあったが、それでも、どうにか乗り切る事ができたのだ。

帰宅して、自分の部屋に閉じ籠ってからは、あらためて、自分の今の体を研究する時間となった。

悪いが、俺だって、思春期まっ最中の高校生だったのだ。こんなオカシイ事態ではあるが、女の体が見放題だとなると、それはそれで気になってしまうのである。俺は、自分の体で、女の体の仕組みというものをタップリ観察させてもらったのだった。

そのうち、もっと大胆な事も試したくなってきた。この体の反応は自分で感じる事ができるのだから、いわゆる、女の快感というものを自分で味わってみたくなったのである。実際には、この体は、あの女子校生のものだったのかも知れないが、でも、いいではないか。今は、この体は俺のものなのだから。

かくて、俺は、人知れず、オナニーをしてみたのだった。すると、それは男の自慰とも違う、素晴らしい悦楽だった事を知ったのだ。思わず、俺は、夜遅くまで、何度も何度もイってしまったのだった。

翌朝、起きてみると、俺の体は元に戻っていた。つまり、首から下が、以前のような自分のもの、男の体になっていたのである。なんとも、あっさりした事態の解決であったが、まあ、これでメデタシメデタシと言う事にしても良かったのではなかろうか。

俺は、学校に行く為、何事もなかったかのように、家を出た。すると、昨日のあの曲がり角で、例の女子校生が俺の事を待ち伏せしていたのであった。

俺は、少しドキリとした。さては、彼女の体でさんざんエッチな事をしたのが、バレてしまったのだろうか。でも、彼女の態度は、思っていたものとは違ったのだった。

彼女は、微妙な表情で、こんな事を俺に話し掛けてきた。

「あなた、私の体でオナニーしたでしょう?でも、別にいいのよ。

私だって、あなたの体でオナニーに挑戦したんだから。だけどね、いくら頑張っても、うまく射精までいかなかったのよ。ねえ、どうしてなのかしら」彼女の口調は、なんとも悔しげなのであった。

そうなのだ。よく考えたら、俺は、その前日に、いつもより回数を多めにセンズリしたばかりだったのである。男の体って言うのは、いつでもどこでも、何回でもヌケるってモノでもないのだ。それに、初めての射精だと、その噴き出てくる感覚がうまく分からなかった、と言う部分もあったのだろう。

「そうか。それは残念だったね」俺は、彼女を、優しく慰めた。

彼女は、沈んだ表情で、小さく頷いたのだった。それから、彼女はボソリと言った。

「私、自分の体が射精するところを見たかったな。ねえ、今からでも、あなたが見せてくれる？」

俺も、彼女のことが、まんざら、他人のようには思えなくなってきていたし、断る理由はなかった。

こうして、俺と彼女は付き合うようになったのだった。

了

女子の甘い罠

男子のDには、女生徒たちも、ほとほと、頭にきていた。

Dは、好かれていた訳でもないのに、やたらと、学校の女子たちをナンパしてきたのだ。それも、見境なしに、誰かれ構わずである。もちろん、そのナンパ成功率は0パーセントだった。しかし、それでもDは女子を口説くのをやめようとはしなかったのだ。あまりにしつこいので、泣きそうなほど、嫌な思いをした子も少なくなかった。

さらに、Dのナンパは、体目当てだった事が、あからさまにミエミエだったのだ。ストレートに「俺と寝ない？」と口説かれた子も、何人もいた。そんなのでは、ますます、引っかかるような女子もいないのである。

とにかく、こんな迷惑ナンパ野郎のDを、一度、徹底的に懲らしめてやろう、と女子たちは一同に集まって、相談し合った。彼女たちの復讐計画は、着々と進められて、すみやかに決行される事となったのだ。

ある日の放課後である。Dは、同じクラスの蛙里いずみから、こっそりと連絡をもらった。彼女に「放課後遅く、教室で二人っきりで会いたい」と申し込まれたのだ。この誘いには、Dも、すっかり浮かれてしまったのだった。だって、蛙里いずみと言えば、本校一の美少女生徒だったからである。

Dは、他の生徒が帰ってしまった教室の中で、一人、ひっそりと待ち続けた。すると、ようやく、蛙里いずみも、この教室にやって来たのである。

「ごめんなさい。待った？」わざとらしい笑みを浮かべながら、いずみはDに話し掛けた。

「俺も、今来たばかりさ。それより、何の用事だよ？」

「私さあ、あなたと付き合ってもいいかなあ、と思って」
「おお、やっぱりな！お前も、やっと、俺の魅力に気付いてくれたか」
　Dの方は、すっかり、デレデレの状態なのである。そんなDに向かって、いずみは思いっきり抱きついていったのだった。これには、Dも、さすがにビックリした。
「私、もう待てないわ。早く、愛を確かめ合いましょう」いずみの大胆な一言なのだ。
「おいおい。さすがに、ここではダメだろ。教室だぜ。誰か来たら、どうするんだよ」嬉しさのあまり、顔はニヤつきながら、Dが返した。
「こんな時間だったら、誰も来ないわよ。今日は職員会議が開かれているし、生徒も皆、帰っちゃったし」
　言われてみれば、確かに、その通りなのである。それに、教室の中でイケナイ行為をしたら、よけい興奮できそうな感じもするのだ。
「さあ、あなた、早く脱ぎなさいよ」いずみが、Dをせかした。
「でもなあ、やっぱり・・・」
「私、気が変わっちゃうかもよ」
　いずみにそんな事を言われたら、もう迷ってはいられないのである。Dは、ヘラヘラしながら、あっという間に、制服を脱いでしまったのだ。
「ほら、ブリーフも脱いで。あなたの立派なものを見せて」いずみが、さらに大胆な事を言ってきたのだった。
　Dはと言えば、もはや、いずみに気に入られたい一心なのである。彼は、思い切って、ブリーフも脱いでしまい、完全に裸になってしまったのだ。いずみの前で、Dの男性自身も、すっかり丸出しなのである。
「わあ、やっぱりだ。あなたのアソコって、素敵！まるで、ヒッポ○ト大王みたい！」いずみが、大げさに喜んだ。
「ヒッポ○ト大王って、何だよ？」

「怪獣よ。ウルトラマンだって倒した、すごい怪獣なんだから！あなたのアソコって、まるで、ヒッポ○ト大王の自慢の長い鼻みたいだわ」

「へへ。そうかよ。俺のアレって、ウルトラマンよりも強いのか」

よく意味が分からなくても、こんな風に褒められると、まんざら悪い気もしないのである。

「ああ、そうだ。もっと、ヒッポ○ト大王っぽくしましょう。こうやって、目もつけるよ」

突如、いずみはマジックを取り出した。そして、彼女は、そのマジックで、ささささっと、Dの性器の真上あたりに、二つの目玉の絵を書いたのである。

「すごーい！本物のヒッポ○ト大王だわ！」いずみは、笑って、大はしゃぎしたのだった。

何とも、ヘンな事をされているのは理解していても、これほどまでに美少女のいずみに喜んでもらえると、Dの方も、それとなく嬉しくなってきたのであった。

「ウオーーッ。俺は、宇宙で一番強いヒッポ○ト大王だぞお。お前のことを食べちゃうぞお」

Dも調子に乗って、そんな事を言いながら、いずみに迫ろうとした。

「ああ！待って、待って！そんなに勃てたら、ダメじゃない！皮が剥けちゃって、ヒッポ○ト大王の鼻に見えなくなっちゃったわ」Dから逃げながら、いずみが叫んだ。

「え、え、え！でも、ヤルんだったら、ボッキさせないと・・・」

Dは戸惑った。

「う～ん。だけどね、そうやって亀頭が出てきたら、今度は、モグ○男の顔っぽく見えてきたわ」

「え、なに？モ、モグ○男？」

「そうよ、モグ○男よ。モグ○男は、仮面ライダーを助けて戦った、優しくて、かっこいい正義の怪人なのよ」いずみは、ニコニコ笑い

ながら、そう言ったのだった。
「俺のアソコって、優しくて、かっこいい？正義の味方？」Dは、またまた、ニヤニヤが止まらなくなってしまったのである。
「だけど、本物のモグ○男とは、ちょっと見た目が違うんだよなあ。モグ○男はね、ホシバナモグラの怪人なのよ。あ、そうだ。これを先っちゃに付けてみましょうよ！」
いずみは、どこからか、赤い造花を取り出すと、その茎をDの尿道口に差し込んだのだった。Dのペニスの先端には、ぱあっと赤い花が咲いた形になったのだ。
いずみは、腹を抱えて、大笑いした。
「やったあ。これなら、モグ○男で間違いないわ。かっこいい！」
「じゃあ、俺って、ヒッポ○ト大王で、モグ○男なんだな。最高にイカす男じゃねえか」Dも、一緒になって、いやらしい笑い声を出した。
「そうよ。あなたのコレと交われる女の人って、唯一無二の果報者よ。私、もう、これに印を付けちゃおうかしら」
「印って？」
「こうするのよ」
いずみは、またもや、どこからか取り出したリボンを、素早く、Dのペニスの根元に巻きつけたのだった。ド派手で、キラキラしたリボンなのである。こんなものを結びつけたら、まるで、プレゼントみたいなのだ。まさに、いずみへのプレゼントって感じなのである。
「おい、満足したか。これでもう、俺はお前だけのもんだぜ。さあ、そろそろ楽しもうぜ。お前も、早く、服を脱げよ」ニタニタしながら、Dは訴えた。
いずみの方は、制服を脱ぐ気配もなく、まだ、クスクスと笑っているのである。Dの方は、すっかり舞い上がっていた。何もかもが、セックスする前のオフザケだと思っていたようである。
「ほら、待てよ。逃さないぞお」だらしなく笑いながら、素っ裸の

Dは、絶妙にDから距離を置き続けているいずみの事を追い掛けた。彼の方は、本気で、楽しく遊んでいるつもりらしかった。

その時だった。教室のドアが、ガラリと開いたのである。そこからは、いっせいに、何十人もの女生徒たちが入ってきたのだ。彼女たちは、裸のDを見て、全員、蔑んだ顔で笑っていた。

この事によって、Dはハッとして、正気に戻ったのだった。

蛙里いずみは、保護してもらうかのように、女生徒の群れの中に紛れ込んでしまった。そして、この女生徒の集団は、今のDの姿を見物して、誰もが腹を抱えて笑っていたのだ。

それもそのはずである。Dは、ただ裸なのではなくて、大事なイチモツを、すっかりオモチャにされていたのだ。イタズラ書きされたり、ペニスの先に花を突っ込まれたり、ド派手なリボンをつけられたり。こんなカッコ悪い性器を女子に見られてしまうなんて、男にとっては、一生の恥なのである。

Dは、いっぺんに恥ずかしくなって、かあーっと体じゅうが真っ赤になってしまったのだった。

「ごめんなさい。あなたのアソコは立派すぎて、私には勿体ないみたいだから、遠慮するわ」女子の中に混ざった蛙里いずみが、残酷な笑顔で、舌を出した。「誰か、私の代わりに、このペニスが欲しい人、いるぅ？」

「いませーん！」笑っている女子たちは、声を揃えて、そう叫んだのであった。

その後、女子たちの思惑どおり、Dは、すっかり、ナンパをしなくなってしまった。彼は、女子から、顔を合わすたびに、「ヒッポ○ト大王」だの「モグ○男」だのと冷やかされるようになった次第なのである。

了

ＡＶ女優

いきなり失業してしまった僕は、次の仕事がすぐに見つからなかったので、ひとまずは、ツテを頼って、ＡＶ撮影の手伝いをやる事にした。ＡＶといっても、オーディオ・ビジュアルのことではない。アダルトビデオのことだ。

はじめ、僕は、撮影チームの裏方として雇われたのだが、実際に撮影現場に顔を出すと、監督のその場の思い付きで、急に、ＡＶ男優として出演する事が決まってしまったのだった。

と言っても、僕は、役者としてはズブの素人だったし、ルックスが良かった訳でもない。セックスだって、若い頃に一度やったきりなのだ。僕は、そのへんの事情を監督にも伝えてみたのだが、監督は、むしろ、それがいいと言うのであった。僕に任された役というのが、早熟の女子高生に弄ばれる童貞男の役だったからである。

そのうち、ヒロイン役の女優が、現場入りした。

「リノです。皆さん、今日はよろしくお願いします」

彼女は、すでに女学校の制服を着ていた。童顔で、小柄な女性だった。あどけなくて、確かに、本物の女子高生のようにも見えるのだ。困った事に、考えていた以上にかわいい子なのだった。

やがて、本番の時間がやって来た。いよいよ、僕は、このリノという子とベッドで絡む事になったのだ。

場所は、セットでもロケ先でもなかった。撮影スタッフの一人の家の寝室を、そのまま使わせてもらったのである。全く、ＡＶというのは、安上がりなものなのだ。

僕と彼女の絡みのシーンは始まった。彼女は、大胆に、自分の服を脱ぎ出した。すると、制服の下からは、その小さな体には似合わないほどの見事な裸体（ボディ）が現れたのだった。やっぱり、この子は発育途上の女子高生などではないのである。立派な成人女性なのだ。こ

の顔でこの肉体なら、もう文句のつけようがないのである。
「さあ、来て。遠慮しなくていいのよ」可愛い顔で、彼女は、僕にソッとささやいた。
おお。なんて事を言う子なのであろうか。どんなに美しくても、この子は、やはり、プロのＡＶ女優なのである。だから、あまりにも綺麗だからと言って、彼女の体に触れなかったりするのは、むしろ、彼女に対する失礼となるのだ。
僕は、気持ちを切り替えて、思いっきり、彼女を抱いたのだった。彼女も、嫌がらないどころか、積極的に、僕に絡んできた。仕事とはいえ、僕は彼女と本格的に寝ちゃったのである。
ベッドシーンが撮り終わって、その日の撮影は終了となった。僕の撮影の手伝いも、これで終わりなのである。
僕が撤収しようとした時、同じく、帰るところだったのか、このリノという女優が、僕のそばにと寄って来た。彼女は、陽気な性格で、とても人懐っこいのだった。彼女は、僕を、二人っきりの食事に誘ってきたのである。
はっきり言って、彼女は、僕とはまるで別世界の住民のように思われた。だから、僕も、最初は、彼女の誘いを断ったのだ。でも、彼女は、しつこくて、なかなか引きさがろうとしないのだった。
もしかしたら、この子は、仕事で寝た男性とは、二人っきりで打ち上げをする、というジンクスでも持っていたのかも知れない。だとすれば、彼女のために、ここは付き合ってあげた方が良さそうなのである。
こうして、僕と彼女は、近くにあった小さな食堂で夜食を取ったのだった。この時の彼女は、もう私服に着替えていた。けっこう地味な服装である。あどけなさこそ、そのままであったが、少なくても、女子高生のフリをするＡＶ女優などには見えなくなっていた。普通にキレイなお嬢さん、と言った感じなのだ。
僕の方は、この食事が済めば、彼女との関係も完全に切れるだろうと思っていた。ところが、彼女の方は、そのようには考えていな

かったみたいなのである。

「ねえ。カメラに写されながらで、十分に楽しめた?私は、まだ少し、物足りなかったな。どうかしら。私の家で、今度は二人っきりで試してみない?」彼女は、僕にそんな事を提案してきたのだった。

彼女の無邪気な笑顔を見ていると、とても、からかっているとは思えなかった。僕も、何となく、彼女に未練があったのは事実であった。だから、僕は、つい、彼女の話に乗ってしまったのである。

そして、それから、半年が経つ。実は、あの後、僕とリノは、何度も会い、その度にセックスするような関係となっていた。そんな状況がズルズルと続いて、今では、僕は、すっかり、彼女の家に入り浸ってしまっていたのだった。僕はまだ無職だったので、要は、ヒモなのである。

なぜ、彼女が、僕なんかを気に入ってくれたのか、その理由はよく分からなかった。でも、彼女は、職場では、その美貌を皆からチヤホヤされて、イケメンや絶倫のセックス相手にも困らない人気のＡＶ女優だったのだ。だからこそ、私生活では、僕みたいなサエない男で質素なセックスをしたいと言う気持ちもあったのかも知れない。つまりは、一流の料理人が、自宅では、安い家庭料理を食べているような感覚である。

ＡＶ女優の恋人というのも、まんざら悪いものでもないのだ。何にせよ、僕の方も、今の彼女との生活は大変に満足している次第なのである。

了

一番風呂の少女

僕んちは、親が銭湯をやっていた。僕も、たまに、お手伝いする事があるのだ。

と言っても、うちは近代化された銭湯だったので、すでに番頭なんてものは存在しなかった。代わりに、施設の各所にはカメラが設置されており、そのカメラを通して、脱衣場や浴場などを監視する事ができたのだ。

僕も、この監視の仕事を任される事があった。当然、女湯を覗く事だって出来るのだ。僕は、これを役得だと思って、度々、なまの女性の裸も拝ませてもらっていたのだった。

さて、僕は、ある時から、銭湯を開けるなり、すぐに入りに来る女学生がいる事に気が付いた。彼女は、まだ他の入浴客がいないうちに、いつも、一人で入りに来ていたのである。

これには、何か、深い事情があるのかも知れない。僕は、がぜん、その子に興味を持ち始めたのだった。

彼女は、どこか影のある、無口で無表情で、しかし、かなりの美少女であった。彼女のことが、あまりにも気になりすぎて、とうとう、僕は、監視カメラで、彼女の入浴を覗いてみる事にしたのである。

すると、驚くべき事が分かったのだった。

その子の体は、一面が傷だらけだったのである。その傷も、銭湯に入りに来るたびに、増えていたり、場所が変わっていたようだった。彼女が、誰もいないうちに湯に浸かりに来ていたのも、この傷を他人に見られたくなかったからなのかも知れない。

僕は、彼女の秘密を知った途端、いろいろな事を想像してしまったのだった。

もしかしたら、彼女は、学校でいじめを受けていて、それで怪我

が絶えなかったのかも知れない。あるいは、親に虐待を受けていた可能性も考えられるだろう。どちらにしろ、彼女が可哀想な少女である事には違いないのだ。

そう思うと、僕は、たまらなく、彼女への同情心が溢れてきて、彼女をどうにか救ってあげたくて、仕方なくなってきたのだった。

ある日、彼女が、うちの銭湯に入りに来たあと、ついに、僕は、居ても立ってもいられなくなり、それを行動に移してしまった。つまり、風呂を入り終えて、うちから出ていった彼女の後を、すぐに追い掛けてしまったのである。

僕は、走って、彼女のそばまで寄って行き、道の半ばで追いついた。僕は、彼女に声をかけた。言うまでもなく、知らない男の子に呼び掛けられたものだから、彼女は、不審そうな表情をしていた。

「僕はね、君の秘密を知っているんだ。君は体じゅうに傷があるだろう。それは、誰につけられたものなんだい？ぜひ、詳しいことを話してごらんよ。もしかしたら、こんな僕でも、君の助けになれるかも知れないから」

僕は、素直に、自分の思った事を彼女に打ち明けてみたのだった。

すると、彼女は、あからさまに顔をしかめた。同時に、彼女のお供のものだったらしく、黒服の男たちがズラリと現れて、彼女の背後に並んだのだった。

「こいつ。なんで、うちのお嬢さんの傷のことを知っているんだ？さては、どこかで、お嬢さんの裸を覗いたな？」黒服のリーダーらしき男が、どすの利いた声で言った。

僕は、さあっと、顔から血の気が引いてしまったのだった。

いじめや虐待を受けていなくたって、体に生傷ができる理由は、いくらでも考えられる。この少女の場合は、日々、ケンカに明け暮れていたから、体じゅうに傷があったのだ。彼女は、実はヤクザの親分の娘だったのである。

了

アヘ顔

あたしには、級友（クラスメート）の彼氏がいたんだけど、こいつがマジでサイテーの男だったんだ。

あたしと付き合い始めた時から、こいつは、あたしの体が目当てだったらしくて、いつも、あたしの裸の写真が欲しいとか、あたしの色っぽい顔が見たいとか、そんな事ばかりを言っていた。その度に、あたしは、こいつの事をぶん殴ってやったんだ。

もちろん、あたしの方では、こいつに貞操を捧げる気なんて、サラサラなかった。あたしは、たまたまフリーの状態だったものだから、なんとなく、惰性で彼と付き合っていただけだったんだ。

ある時から、彼が、ピタリと、スケベなことを言わなくなった。あたしに対して、エッチな要求も持ちかけなくなったのである。それはそれでホッとする話だったのだが、でも、どこか何となく怪しい。

あたしは、彼に、何があったのかを、しつこく問い詰めてみた。すると、彼は、理由をすんなりと白状してしまったのだった。

彼は、自分のスマホに保存していた動画を見せてくれた。それは、こないだ、彼と野外でデートをした時のあたしを映した動画だった。

「あっ」と、思わず、あたしは顔をしかめた。

この時のデートでは、あたしは途中でトイレに行きたくなって、ほんとにヒドい思いをしたのだ。道中で、なかなかトイレが見つからなくて、あたしは、ずっと、用を足したいのを我慢していたのである。今にも漏らしそうになって、それはそれは、つらい体験をしたのだった。

そして、彼のスマホに保存されていた動画というのが、その時の、必死に堪えていた時のあたしの姿だったのだ。そこには、身悶えして、青ざめた顔をしたあたしが映っていた。可哀想に、この時のあ

たしは、失禁する直前で、意識も朦朧になっていたのだ。
「お前のこの表情、たまんないだろ。まるで、アヘ顔みたいで。俺さ、毎日、これを見ながら、ヌかせてもらってるんだ」彼は、ニコニコしながら、そんな事を言ったのだった。
あたしは、即座に彼を殴り飛ばした後、彼のスマホの中のあたしの動画も全部消してしまって、それっきり、彼とは完全に別れたのであった。

了

正義の制裁

ある高校に、とんだセクハラ男性教諭がいた。彼は、毎年のように、自分の教え子の女生徒にチョッカイをかけて、猥褻なイタズラをしていたのだ。この男は、それが教師の特権だとすら考えていた。

襲われた女子の方は、内申書や成績のことなどで脅されていたので、なかなか、この教師に対して、逆らう事ができなかったのだ。それに、担任の教師にイヤラシイ事をされただなんて、恥ずかしくて、親にも友達にも相談できなかったのだった。

それでも、勇気をふるった被害者の一人が、思い切って、この教師のことを告発した事があった。しかし、それは不発に終わってしまったのだった。学校側が、自校の保身に回って、この教師を全面的に庇ったのだ。これで、告発した生徒の方が、まるでウソをついたかのような形になってしまったのだった。

結果として、この悪徳教師は、ますます、つけあがる事になってしまったのだ。そして、被害者たちの方は、もっと辛い立場になってしまったのである。

だが、この世に悪が栄えるべきではない。ついに、この悪の教師を成敗すべく、立ち上がった者が現れたのだ。

ある日、学校からの帰り道の途中で、このセクハラ教師は、何者かによって襲撃され、その場で眠らされて、拉致されてしまった。

次に目覚めた時、彼は、どこか、暗い、倉庫の中のような場所にいたのである。驚いた事に、彼は、服を全部脱がされて、手足を縛られていたのだ。

彼の周りには、不気味な仮面を被った怪しい人物たちが、ズラリと並んでいた。

「お目覚めになりましたか。私たちは、真理（メフィ）の使徒、メフィｉｓｔです。これより、悪行三昧のあなたの事を、真理（メフィ）のもと、我々の手

によって、裁かせていただきます」仮面の人物の一人が言った。
明らかに女の声だった。もしかしたら、この者たちは、このセクハラ教師の被害者自身か、あるいは、その母親たちなのかも知れなかった。
「ふざけるな！俺をここから出せ！俺の拘束を解いて、服を返せ！」
男性教師は怒鳴ったが、相手はまるで聞く耳を持たないのだった。そして、男性教師の方も、この状態では、いっさい抗う事ができなかったのだ。
「では、この男の裁判を始めます」メフィｉｓｔを名乗る賊たちのリーダー格が言った。
すると、彼女たちは、順に、この男性教師の罪状を読み上げ始めたのだ。
その内容は、あらためて、言葉で聞かされても、おぞましいものであった。この男は、相手の女生徒が逆らえないのをいい事に、レイプまがいの事までやらかしていたのである。
「そんな話、ウソだ！俺は、そんな事はやっていないぞ！全部、デタラメだ！」男子教師は、必死で訴えたが、はなっから、彼の弁明は無視されていたのだった。
「では、判決に移ります。裁判官、どうぞ」メフィｉｓｔの一人が言った。
続いて、裁判官役のメフィｉｓｔが、おごそかに告げたのである。
「判決。この者には、去勢の罰を命じます」
次の瞬間、メフィｉｓｔたちは、バアッと男性教師の体を押さえつけて、ピンと立させた。一人のメフィｉｓｔが、何やら、奇妙な小道具を持ってきた。それは、まるで小型のギロチンのような形をしていたのだ。
これから何をされるのかを悟った男性教師は、ゾオッと震え上がったのだった。
「お、お願いだ、やめてくれ。皆に謝るから！もう、生徒にフザけた事はしない！教師の仕事だって、やめるから！だから、ペニスを

切り落とすのだけは、よしてくれ！」彼は、必死に頼み込んだ。
だが、周りのメフィｉｓｔたちの反応は、どこまでも冷ややかなのであった。
「安心なさい。古代でも、高貴な女性に仕える指南役の男は、宦官と言って、性器を除去していたのよ。あなたも、これで、ようやく、人を教えるのにふさわしい、立派な先生になれるのよ」
メフィｉｓｔのリーダーは、そう告げながら、小型のギロチンを男性教師の男根にはめたのだった。

了

スケベなお口

うちのクラスには、とんだ奔放な女子がいた。

その子は、顔はまあまあ可愛かったのだが、オムツはあまり良い方ではなくて、何よりも、エッチが大好きだった。もちろん、すでにバージンではなかったし、普段から、彼氏ともヤリまくっていたのだ。

そして、一番困った点は、彼女が、そうした彼氏とのやり取りを、教室の中でも、平気で喋りまくっていた事なのであった。

彼女は、休み時間とかに、仲良しの女友達らを相手に、まるで周囲の目も気にせず、ペラペラと、彼氏相手のベッドでの奮闘を報告していた。その内容は、彼氏と裸で抱き合ったとか、何回もイっちゃったとか、かなり際どいものばかりだったのである。

だから、彼女の友達らも、その子に対しては、そういう話は教室でしないようにと、さりげなく注意し続けたし、せめて、小声で話すようにも勧めてはいたのだ。しかし、彼女の方は、そんな忠告は気にしなかったし、そもそもの彼女の地声が大きくて、なかなか、ヒソヒソと喋る事もできなかったのである。

その日の昼休みも、彼女は、窓際の席で、夢中になって、友達相手に、彼氏との昨夜の熱いバトルのことを伝えていた。この日のメインの話題は、フェラチオだった。彼女は、彼氏のペニスをいかに巧みにしゃぶったかを、実に細部まで詳しく、友達へと語り聞かせていたのである。

友達の方も、それがたいへん猥褻な話である事は十分に承知していたものの、全く興味がなかった訳でもなかったので、つい、彼女が勝手に喋るのを、そのまま放置していたのだった。

ただし、この時は、たまたま、彼女たちの近くの席に、一人のマジメな男子生徒が座っていた。彼は彼なりに、本を読んだりして、

今の時間を潰していたのだが、一方で、彼女の大きなコソコソ話は、すっかり丸聞こえになっていたのである。

彼も、こんな女子の秘密の会話は聞いてはいけないとは思ったのだが、彼女のデカすぎる声は、嫌でも聞こえてきてしまった。彼だって、内心は、少なからず、この手のエッチな話にも関心はあったのだ。その為、彼も、聞こえぬフリをしながらも、実は彼女の話に耳をそばだて続けてしまったのである。

彼女の話は、どんどん、エスカレートしていく一方だった。その内容が、かなり過激になったところで、とうとう、この男子生徒はむせてしまい、ゴホゴホと咳をしてしまったのであった。

こうして、それ以来なのだ。この哀れなマジメ男子は、例のエッチな女子の姿を見ただけでもイヤラシイ妄想が目に浮かぶようになってしまったのである。中でも、彼女が物を食べたりしていると、彼女の赤く濡れた唇がひどく卑猥にと感じられてきて、特にドキドキしてしまったのだった。

了

どっちを選ぶ?

A子さんは、学校でいじめられていました。より正確に言うと、同じクラスの不良女子たちのパシリをやらされていたのです。かわいそうに、彼女は、学校では、ずっと、辛い日々を送っていたのでした。

ある日、A子さんは、不良女子が命令した事を、思いっきり、ミスってしまいました。これには、不良女子たちもカンカンなのです。「てめえ、許さねえぞ。オトシマエをつけろ!」不良女子は、A子さんのことを、怖い顔で怒鳴りつけました。

今いる場所は、不良女子たちの溜まり場です。A子さんと不良女子たち以外は、誰もいません。A子さんは、逃げる事もできなかったし、誰にも助けてもらえそうになかったのでした。絶体絶命なのです。

「ど、どうしたらいいの?」観念したA子さんは、オドオドしながら、制裁を受ける事にしました。

「教室に戻ってから、皆のいる前で服を脱げ。クラスの皆に、お前の裸を見せるんだ」

不良女子の提案に、A子さんはギョッとしました。そんな事、とても恥ずかしくて、できそうにないのです。

A子さんが、戸惑って、沈黙していると、不良女子は、A子さんの気持ちを察したようでした。

「嫌か?じゃあ、別のオトシマエを考えてやる。ここで、あたいらの前で、オナニーしている姿を見せてくれると言うのは、どうだ?」

不良女子は、意地悪く笑いながら、そう言いましたが、でも、これだって、かなりキツい罰なのです。

「さあ、どうする?どっちにするかは、お前が選んでいいぞ」不良女子は、A子さんに詰め寄りました。

A子さんは、すっかり、思いあぐねてしまったのです。
「じゃあ、ここでオナニーをするわ」やっと、彼女は、そう答えたのでした。
どっちのオトシマエも嫌だったのですが、少なくても、クラスの皆の前で恥ずかしい思いをしないで済む分、オナニーの方がまだマシかと思ったのです。
こうして、A子さんは、さっそく、今すぐ、オナニーをやらされる事になりました。よく見えるように、全裸になる事を強要され、その状態でオナったのです。命令されて、アソコに指も入れました。もはや、真似事ではなく、本気のオナニーなのです。
不良女子たちは、そんなA子さんの周りを囲んで、楽しそうに、彼女のオナニーを見物しました。中には、A子さんのことを、スマホで写していた子もいます。もしかすると、今後は、このオナニー写真を道具にして、脅されるような事にもなるかも知れません。
でも、今のA子さんは、そこまで心配している余裕はなかったのでした。とにかく、今を乗り切る事だけで、精一杯だったのです。やがて、彼女のオナニーショーも終了し、彼女は、ようやく許されて、この場から帰る事ができたのでした。
翌日のことです。A子さんが登校して、自分の教室に向かいますと、何やら、ざわついています。
どうしたのかと覗いてみると、教室の中では、不良女子たちが、教壇の上に大きなモニターを置いて、何かの上映を行なっていたのでした。その映されていた映像というのが、なんと、昨日のA子さんのオナニーしている様子だったのです。
A子さんは、ギョッとして立ちすくみ、顔も真っ赤になり、体じゅうがカッと熱くなってしまいました。
不良女子たちは、A子さんのオナニーを、写真どころか、動画で記録していたのでした。そして、その動画を、今、皆のいる教室の中で公開する事で、A子さんにさらなる辱めを与え、真のオトシマエとしたのです。

結果的に、A子さんは、裸だけではなく、オナニーまで、クラスの皆に見られてしまうハメになって、もっと恥ずかしい思いをしてしまったのでした。

了

おへそフェチ

「なんで、あんな女子と付き合っているんだ?」と、俺の友達は、誰もが、首を傾げて、そう言った。

確かに、今、俺が交際しているカノジョは、かなり個性的な顔立ちをしていた。それだけではない。プロポーションだって、ものすごく貧相なのだ。さらには、何か特別な才能の持ち主だった訳でもなかった。勉強もできなかったし、スポーツも苦手な子だったのである。では、親が金持ちか権力者だったのかと言うと、それも違った。これで、せめて性格がよければ、まだ救いがあったのかも知れないが、現実には、彼女は、暗くて、ノロマで、無気力で、ひどくジメジメしていた。つまり、彼女は、ほんとうに全く取り柄のない女の子だったのである。

だが、俺だけは、彼女のたった一つの美点を知っていたのだった。それが、彼女のへそが抜群に美しかったと言うものなのだ。彼女のへそほど、美しいへそは、今まで見た事がなかった。いや、これほどの美へそには、多分、二度とお目にかかれないだろう。

そもそも、女の容姿を評価する際に、おへその形と言うものは、かなり重要ではないかと思われる。実際に、どんな美人のモデルやアイドルであっても、ビキニ姿になった時、その体の中心にあるおへそがイビツだったりすると、それだけで、いっぺんに興ざめてしまうものなのだ。ある意味、女を選ぶにあたって、おへそとは、そこまで重要なファクターだとも言えるのである。

俺は、付き合う相手を決める時には、いつだって、この「おへそ」と言う部分にこだわってきた。そして、今、交際しているカノジョに関して言えば、もう、この「おへそ」だけで、文句なく、決めてしまったのだった。他の部分はどうでもいいぐらい、彼女のへそには、それほどの価値があったのである。

もともと、誰からも好かれていなかった女子だったから、彼女を口説くのは簡単だった。いや、なかば強引に、彼女を俺の女にしてしまったのである。気の弱かった彼女は、俺に迫られても、まるで拒めなかった。そのへん、非常に扱いやすくもあったのだ。

こうして、俺は、彼女と恋人関係となったのだった。彼女は、完全に、俺だけの女なのである。彼女の愛らしいへそも、すっかり、俺一人のものなのだ。

俺は、早々に、彼女とは、裸で抱き合うような間柄となった。もちろん、俺の方から、一方的に、そこまで、二人の仲を進めてしまったのである。彼女に拒否権はなかった。それ以前に、感情表現のヘタな彼女からは、どう思っていたのか自体が、読み取れなかったのである。

全裸になった彼女は、想像していた以上に酷い体型をしていた。だけど、いいのだ。彼女の体の中央にあるおへそだけは、相変わらず、神秘的なまでに美しかったからである。むしろ、他の部分が全部ひどかった分、ますます、彼女のへそだけが余計に光って見えたのだ。

とにかく、俺は、裸の彼女をすぐに抱かせてもらったのだった。と言っても、セックスする気はさらさらなかった。あくまで、行為はペッティングまでだ。俺としては、彼女のへそだけを堪能させてもらえれば、それで十分だったのである。彼女のオッパイや性器なんかは、まるで見る気にもならなかったのだ。

そして、俺は、彼女の気持ちなどは無視して、彼女のへそだけを楽しませてもらったのだった。形のいいおへそは、その触り心地も絶品なのである。俺は、彼女のへそを愛撫しただけでも、何だか、名器のオマンコでも触っているような気分になってきて、激しく欲情してしまったのだった。

しかし、俺は、あえて、そんな本心は隠して、彼女にこう告げたのである。

「お前の体はどこも最高なのに、このヘソだけは戴けないよな。お

前の体の素晴らしい見栄えを、全て、ダメにしている。どうだろう？いっその事、こんなヘソ、取っちゃわないか?手術して、切除しちゃうんだ。腹の真ん中のえぐれた痕は、整形手術で直せばいい。肌の上すべてに、皮膚を貼り付けちゃうのさ。そしたら、お前のこの下腹部も、カエルみたいに、ツルツルのまっ平らになって、断然にカッコいいぜ」

俺にそう言われて、表情の乏しかった彼女も、さすがに、不安そうな顔つきになったのだった。

そりゃあ、そうだろう。へそを切り取られて、除去されるなんて、想像もしていなかった恐怖なのだ。俺は、そんな恐ろしさを、わざと彼女に与えてみたのだった。

彼女は、目を潤ませて、怯えていた。だが、それだけじゃなくて、彼女の肝心のおへそ自体も、怖くて、小さく震えていたのだった。美しいへそが、必死に助けを請うように、ピクピクと脈打っていたのである。

ああ。なんて、けなげで、可憐なおへそなのだろう。その持ち主なんかよりも、ずっと表現豊かなのである。ただでさえ魅力的だったおへそが、少し脅かしただけで、こんなにも印象が変わってしまったのだ。果たして、本当にさまざまな呵責を加えてみたら、この素敵なおへそは、どれだけ愛らしい姿も見せてくれるのだろうか。

俺は、あらためて、彼女の愛おしいおへそを、優しく、愛でてやったのだった。

了

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n9172he/

ハイスクール全裸　2

2024年8月23日12時42分発行